THE CENTRAL REVIEW

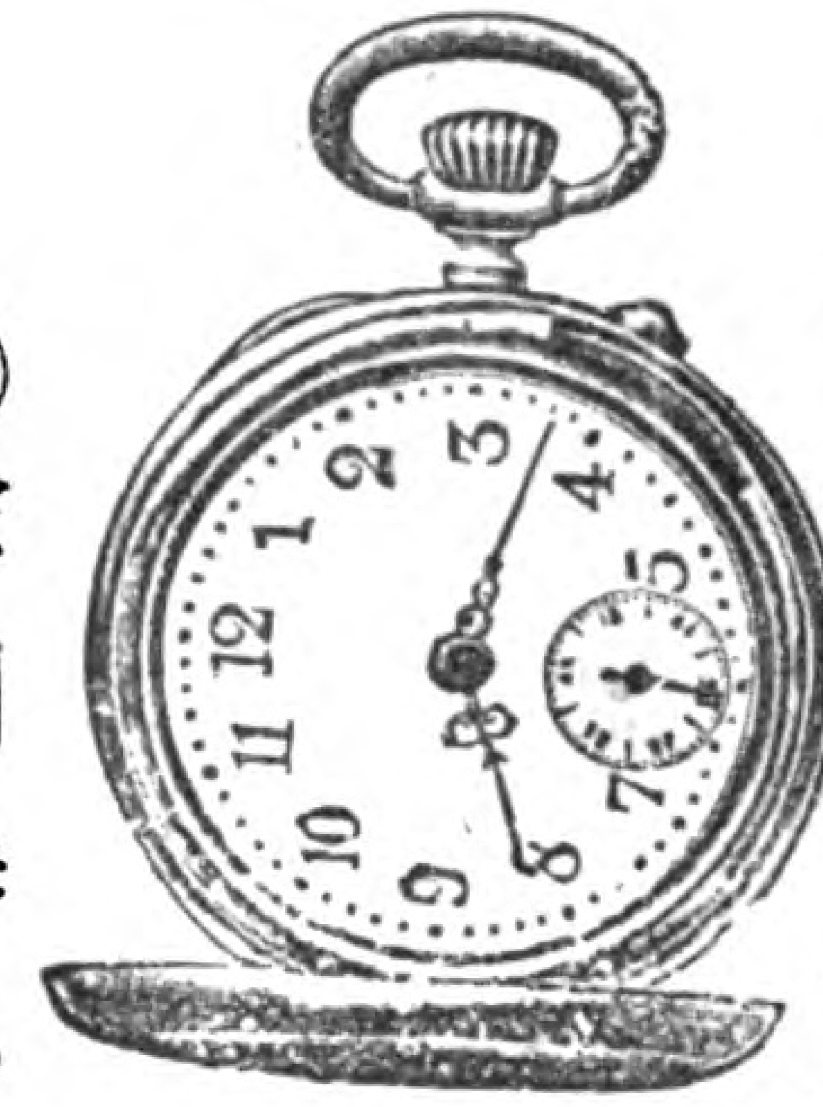
# 中央公論

新 [illegible]

[illegible]

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

# 天賞堂監製實用懷中時計發賣



本堂は每に世界時計の製產地に店員を特派し彼國近時の流行と我國の好尚とを參酌し體裁優美なるが上に機械堅牢にして時報精確なるを目的とし專心監製せしめて之を輸入し汎く東洋諸國の需求に應じつゝありしが今回米瑞諸國よりの新着品は頗る時好に適するもの多數なるを以て此際特に大方各位に便利を謀り就中精良の品類數十種を選擇し其種類に從て十ヶ年より三十ヶ年迄の保存請合證を添付し左の非常廉價を爲すべし冀くは愛顧諸君此好機を逸せず現品盡きざるの中速に尊需の榮を給はらんことを

## ●金側時計

十八金側無雙18形（十三サイズ）中蓋付器械ニツケル19石入切天府アンクル龍頭卷（米國製）
乙種：價百九十五圓
甲種：價貳百拾圓

十八金側無雙14形（零サイズ）中蓋付器械ニツケル7石入アンクル龍頭卷（米國製）
乙種 價六十五圓
甲種 價七十圓

十八金側ダイヤモンド六個入月星梨子地無雙14形（零サイズ）器械ニツケル15石入天府アンクル龍頭卷（米國製）
乙種（貴婦人用）價百五十圓
甲種（貴婦人用）價百七十圓

十四金側斜子無雙13形器械ニツケルシリンドル龍頭卷（瑞西製）
丙種（貴婦人用）價廿五圓
乙種（貴婦人用）價廿七圓
甲種（貴婦人用）價三十圓

十八金側斜子無雙13形器械ニツケルシリンドル龍頭卷（瑞西製）
丙種（貴婦人用）價卅五圓
乙種（貴婦人用）價四十圓
甲種（貴婦人用）價四十五圓

十八金側斜子無雙13形器械ニツケル石入アンクル龍頭卷（瑞西製）
丙種（貴婦人用）價四十五圓
乙種（貴婦人用）價五十圓
甲種（貴婦人用）價六十圓
以下略ス

## ●銀側時計

銀側斜子16 17形片硝子器械流金及ニツケルアンクル龍頭卷（瑞西製）
戊種：：：價八圓半
丁種：：：價九圓
丙種：：：價十圓半
乙種：：：價十一圓半
甲種：：：價十二圓半

銀側斜子13形片硝子器械ニツケルシリンドル龍頭卷（瑞西製）
丙種（御婦人用）價六圓
乙種（御婦人用）價七圓
甲種（御婦人用）價七圓半

銀側斜子無雙13形器械ニツケレーシリンドル龍頭卷（瑞西製）
丙種（御婦人用）價七圓
乙種（御婦人用）價八圓
甲種（御婦人用）價八圓半

銀側斜子無雙3形ニツケレーアンクル龍頭卷（瑞西製）
乙種（御婦人用）價十二円
（甲種御婦人用）價十三円半

銀側無雙14形（零サイズ）中蓋付器械ニツケル7石入アンクル切天府瓜石入龍頭卷（米國製）梨子地側斜子側共同價
丁種（御婦人用）價十七圓
丙種（御婦人用）價十八圓
乙種（御婦人用）價十九圓
甲種（御婦人用）價二十圓
以下略ス

## ●鐵及白銅側時計

白銅側1形片硝子器械ニツケルシリンドル龍頭卷（瑞西製）
乙種：：價三圓八十錢
甲種：：價四圓半

鐵側14形片硝子中蓋付器械ニツケレー本傳ニ枚車シリンドル龍頭卷（瑞西製）
甲種：：：價五圓

白銅側16 17形片硝子器械流金アンクル龍頭卷（瑞西製）
丙種：：：價五圓
乙種：：：價五圓半
甲種：：：價七圓

鐵側16形片硝子器械流金二枚車クンクル龍頭卷（瑞西製）
乙種：：：價九圓廿錢
甲種：：：價七圓廿錢

鐵側13形片硝子器械ニツケレーシリンドル龍頭卷（瑞西製）
甲種（御婦人用）價四圓

白銅側無地無雙13形器械ニツケーレシリンドル龍頭卷（瑞西製）
甲（御婦人用）價四圓八十錢

鐵側無地無雙1,形器械ニツケレーシリンドル龍頭卷（瑞西製）
甲種（御婦人用）價五圓
以下略ス

時計及寶玉類內外雜貨貴金屬美術品商

東京市京橋區尾張町二丁目
【電話新橋特二三三、三一五三】

# 天賞堂本店

天賞堂神田出張所
神田區表神保町
（電話本局二六〇）

天賞堂横濱出張所
横濱市尾上町
（電話八七六）

天賞堂大阪出張所
大阪心齋橋北詰
（電話東七二二）

天賞堂長崎出張所
長崎市鍛冶屋町
（電話一一二九）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

# 恭賀新年

讀書界第五卷　富山房總目錄　入無代進呈

東京神田　合資會社　富山房　電話本局一〇三六番　振替貯金五〇一一番

東京帝國大學文科教授　文學博士　芳賀矢一先生新著

## 新刊　國民性十論

本書は日本國民特有の性質を神話、文學、語學、法律、美術、風俗等の各方面より縱横に論斷せるものにして、着想奇警、引證的確、よく我國體の精華を發揮し、よく我國民の眞相を暴露す。森嚴莊重の論あり、滑稽諧謔の談あり何人に向ても一讀卷を措く能はざらしむる快味を與ふ。**青年必讀**の書也、疑もなく**國民必購の書也**。眞に是れ

中判洋裝本　全壹冊紙數　二百六十頁　定價七拾錢　郵稅金六錢

饗庭篁村先生　上田萬年先生　幸田露伴先生　關根正直先生　芳賀矢一先生　藤岡作太郎先生　宮崎三昧先生　校訂編輯

## 袖珍　名著文庫

全部百册　每月發行

▲每編寸珍美裝紙數約二百頁每號讀切口繪挿入正價每號廿錢郵稅四錢上製八錢增

**既刊**自第一篇至第廿九篇**目次**　芭蕉翁繪詞傳附句集◎近松淨瑠璃三種◎雨月物語◎假名文章娘節用◎今昔物語選◎近江縣物語◎狂言二十番◎西行山家集◎風流志道軒傳◎脚本春花五大力◎俳諧水滸傳◎よものあか◎國性爺合戰◎謠曲二十番◎世間娘氣質◎日本永代藏◎日本新永代藏◎萬載集才藏集選◎花月草紙◎鳩翁道話◎緑手摺昔木偶◎夢想兵衛胡蝶物語前後二冊◎假名手本忠臣藏◎慶長見聞集◎源氏物語忍草◎松の葉◎春雨物語◎

新刊　**世間用心記**　第廿九篇饗庭篁村先生の校訂にかゝる今絶えて傳はらず之を本文庫中に收む

# THE PRINCESS

By LORD TENNYSON

英國桂冠詩宗テニソン卿原著
文學士 深江種明譯 橋本五葉挿畫

# 女子大學

全一冊 定價六十錢 郵稅六錢

是非共此珍書を讀まねばならぬ人々

英文學研究者▲面白き小說を好む人▲女士文學者▲女子高等敎育を贊成する人▲これに反對する人▲女子敎育に從事する人▲女權擴張論者▲其反對論者▲女學生

南の國に才貌絶倫の皇女あり、婦人の獨立と女權擴張とを唱へ獨身主義を主張して、一の宮殿を以て女子大學となし、之に數百名の女學生を集めて、嚴に男子の出入を禁じ、盛に其主義を敎ゆ、北の國の一皇子、此皇女を戀ひ、刎頸の親友二人と共に女裝して、萬死を冒して、大學に忍び入る、やがて事露現して、南北の兩國はあはや戰端を開かんとするばかりになり、遂に兩國選拔の勇士各々五十騎華々しき決鬪を爲して勝負を爭ひしに、あはれや彼の皇子は彼の皇女の兄なる一皇子の爲めに重傷を負はされて萬死に頻す、こゝにさしもに木石の如かりし皇女も戀の暖き情を知りて、春風始めて吹き渡るといふが此珍書の梗概なり、小說として如何に面白きかは此梗概によりて略々察すべし、況して此書は男女同權及び婦人の高等敎育に關する新舊思想の衝突が如何に調和さるべきかを解說したるものにして、原著者は英國近代の大詩人テニソン卿、譯者は英文學に造詣深き深江種明氏なれば、前に掲げたる種類の人々は是非とも一讀せざるべからず、殊に英文學研究者は譯者が一字一句と雖も原文を忽にせざりし上、古事典故には詳密なる解を附したれば多大の趣味と利益とを受くるならん、我社は此珍書を發行することを得たるを一大光榮とする者なり

東京市神田區表神保町十番地
發行所 東西社

# 人性の研究

文學博士 元良勇次郎先生序
文學士 森卷吉先生序
神田尤京先生著

全一冊 定價金七拾錢 郵稅八錢

由來人性の研究は大問題なり、社會百般の活動と經國濟家の妙諦とは一に此研究を待つて知られざる可らざるは勿論、如斯は曲學阿世の徒輩が到底企求し得ざる所なり、著者元來乾坤一布衣、自ら終世を賭して此種の研究に從事せんとし今や遠く海外にあり。此に其一着歩として男女兩性に關する思索の結果を發表す即ち著者が抱懷せる**戀愛哲學**の概況なり、ショーペンハウエル、プラトーを品騭し、生物學心理學進化論社會學等に立脚して自家の戀愛觀を說き男女青年學生に對する現代教育法を闡說せり、その如何に**忌憚なく臆面なく**無位無官の著者が人の謂ひ得ざる所も說破し斷乎學者の體面を維持主張せるかは、思ふに讀者諸君が意想の外ならん。

發行所
東京市本郷六丁目廿三番地
振替貯金口座番號三八六二號
岡崎屋書店

本廣告によりて申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

# 中央公論の讀者に

國民新聞は政治、文學、社會上の問題に就ても、其の出來事を報道する點に就ても、其の記事の機敏にして、今や日本全國の新聞社中、有數のものたりとせられ、其の論調の穩健にして、勢[illegible]確實なる、今更詳述する迄もなし。

國民新聞は明治四十年の下半期に於て、驚くべき膨張、發展をなしたり、一躍して十万以上の紙數を刷出するの機運に向ひ、今や社會の各方面に行渉らさる處無きに至れり、之れ實に驚くべき大發展なり、大膨張なり。

## 理想的[illegible]の新聞

國民新聞は、政治に志有る者は、讀まざるべからず、文學に志有るものも、讀まざるべからず、主筆德富蘇峯、客員山路愛山、志賀矧川、長井金風、薄田泣菫、高濱虛子、其他俊秀雲の如く紙面を彩る、特に之れを中央公論の讀者に提供す。

國民新聞は、又社會的方面に於て、最も活動せり、社會部に在る、有力の記者十五名が、日夜墨の[illegible]を流し[illegible]解[illegible]なは火を發[illegible]底の大奮鬪をなせる事は、東京の同業記者間にも中々數[illegible]大問題となれるほどなり……

東京市京橋區日吉町發行……

## 國民新聞を提供す

中央公論第二十三年第[illegible]號目次



# 明治四十一年の新春を迎て

歳月の推移は實に流水の如し、我が中央公論も創刊以來玆に廿有三年、號を重ぬると二百廿有六、世上多數の雜誌に比するに、聊か生命の永からざるにあらず、然るも顧みれば昨猶ほ今の如きのみ吾人の敢て斯く信ずる所以は他なし、耿たる吾人一片の衷情に於て、未だ曾て渝る所あらざれば也、吾人は唯だ至公平正の見を以て總ての事物を觀察し批判し、以て讀者の純良なる衷情に訴へ、聰明にして常識に富み、而して有力なる讀者の德に依て、汎く一代の思潮を堅實穩健なる方向に流注せしめんを希ふのみ、然り、吾人の微衷は是のみ、我が中央公論が近時著るしく世上に觀迎せらるゝに視れば、我が思潮は正さしく賢實穩健なる方針に向ひつゝあるや明か也、素より各方面の間、自から悲觀すべきもの亦少からざらんと雖も、高處より大局を通觀すれば、我が日本は向上し發展しつゝあり、吾人は之を思ふて私かに皇上のため國民のため祝福す、更らに希くば皇天の冥助の總てに在らんとを、今筆を洗ふて明治四十一年の文壇に上らんと欲するに方つて、謹みて讀者諸君の淸福を祝すると共に、吾人亦駑才を盡して公に奉ぜんとを念ふ、讀者諸君亦吾人の微衷を憐みて多く同情を惜まるゝとなかるべし

反省社同人謹記




第二十三年
第一號
(第二百二十六號)

# 増税の由來及び前途

(一)

西園寺内閣は、明治四十一年度豫算の編成に際して、幾んど其の運命を危うくするまでに押寄せたりき、所謂元老大臣會議を開くこと屢々なるも竟に要領を得ず、幸ひに井上、桂の兩侯――殊に桂侯の斡旋によりて、辛ふじて其の難關を通過し得るに至れるが如し

此の前後の顛末を略叙し、間々之に批評を加ふるを本篇の主眼とす、若し少しにても政界に注目する士君子の參考たるを得ば、吾人の願ひ乃ち定る

(二)

桂侯が苦心慘憺して戰局を收拾したりし衷心世の多數者に諒知せられず、意想外なる誤解よりして痛く反感を招き、兼て侯自身また局に當るに倦みて退隱せんとするや、其の後繼者を得るにも少からず困

厄を感じたりき、侯の後を繼承すべきものは、能く侯の苦心を知りて而して多く其の經綸の範疇を出づる能はざるも、而かも人心の激する所、意外の方向に趨れるが故に、苟くも利害を顧慮するもの、到底此の地位に立つを欲せざれば也、随つて其の結果、一種の武斷政治を現出する掛念あり、之を極端に推想すれば、所謂憲政の危機をも生ずる無きを保せずといふと、當時實に西園寺侯及び其の四邊を圍繞する人々の感想なりき

西園寺侯は夙に桂侯の苦衷を諒とし、殊に其の戰局收拾に對しては、毅然として俗論の外に立て以て桂侯に同情したりき、蓋し伊藤公に依て一切の情僞を知悉し、また俗論俗情に陥らざるを得たるなるべし、而して桂侯が其の心腹を披きて後繼を内議するや、西園寺侯は快く之を諾したりき、蓋し西園寺侯は當時に於て内閣を引受くる準備ありしにあらず、又引受けて而して施すべき經綸ありしにも非ず、唯だ專ら桂侯に同情すると共に所謂武斷政治の出現によりて憲政の危機を生ぜんことを恐るゝがために、勉强して桂侯の勸誘に應ぜしに過ぎざらん、故に桂侯は當時頗ぶる西園寺侯を德とし、誼飽まで之を援助せざる可らずと做せしが如し

且つ日露戰役の開始より、其の戰局の收拾に當り、元老會議なるもの開かれ、殊に戰局收拾後、列國に對する方針を大定し、毫も動搖することなくして擧國一致之を遂行するがため、殊に元老と内閣と協力して、所謂廟議を決することとなれり、而して戰後經營なるもの亦實に此の方針を實行する所以のものたるに於て、元老會議の決定に俟つとあるの多き素より言を俟たずとす、即ち西園寺内閣が對韓問題に於て

も、日佛、日露の協約に於ても、常に獨斷專決せずして、元老會議に出るの形式に出でたる此のため也故に西園寺內閣は、其の成立の由來に於て既に尋常ならざるものあり、大事の多くは元老の決定に仰ぎて、獨自一個の經綸を施すとなきが如き畢竟此のため也、語を換ていへば、西園寺內閣必らずしも無定見なるにあらず、所謂廟議の決定なるものを元老と共にするを條件とし、此の廟議に遵由して違はざるを期し、而して成立したる也、西園寺侯が政友會總裁として僅かに原、松田の兩氏を任用したるに止まり、他は多く前內閣以來の吏僚より採りて而して內閣を組織したる、また又此が爲めなるのみ

（三）

事情斯の如くなるが故に、西園寺內閣が其の財政上の難關に遭逢して、決を元老會議に仰げると、必らずしも失體とす可らず、四十一年度の豫算も、畢竟するに廟議乃ち元老等の與かり決定したる戰後の經營を遂行する所以に外ならざれば也、豫算に變更を生ずるは、取も直さず廟議たる戰後の經營を異動する所以にして、少くも元老等の同意を得ざる可らざると素より言を俟たざれば也

但し四十年度豫算の編成に際して、一二の閣臣が當分非募債非增稅を主義とすといへるが如きは、素より的確なる意味あるにはあらず、小なる政治運動を爲すものが動もすれば旗幟と唱へて呼號する主張の約言か、新聞記者が記事の標題を選ぶと齊しきのみ、四十年度、四十一年度は兎も角、四十二年度以降に於て、財政上の難關に遭逢すべきとは、全く數字の智惡なくば知らず、苟くも常識ある者の齊しく認めし所、閣臣にして獨り知らざるの理なし、知らずして高く非募債非增稅を主義とすと呼號するが如

き理あること莫ければ也

蓋し三十九、四十の兩年度に於ては、姑息ながらも現狀を維持し、財政の變更によりて經濟界の動搖を來すことなきを期するがため、例令彌縫糊塗といふも之を忍ぶの外なかりき、四十一年度と雖も出來得べくんば則ち然りし、四十二年度以降に於て始めて根本的に財政の整理を斷行し、若し歳計に缺陷あらば乃ち斷じて增税を行ふ亦妨げざるのみ、吾人は超群絕倫の技能あるに非ざる限り斯くするの外なきを察し、西園寺内閣も亦其の方針を執るものと信じて、格別之を非難する所なかりき

然るに四十一年度の豫算の略ぼ定まるや、端なくも元老の一部に異議を生じたり、貴族院内にも亦反抗論漸く熾んならんとする兆候現然たりき、四十年度の豫算討議に際して、未來記は今語るの要なしと放言したる閣臣等も、四十一年度の豫算に就ては、四十二年度以降の方針をも明確にせざるを得ざる場合に迫れり、然る所以は他なし、其の公債の借替をば兌換劵增發に由らんとしたる一事、主として元老の一部の反對を招きたる也、兌換劵增發は、物價騰貴を促がす所以なるに止まらず、又我が正貨を驅逐して兌換制度を危くするものなりとして、井上松方の兩侯先づ激烈に之を非難し、而して民間實業家の重もなるもの亦二侯と見を同じくして政府を難ずるあり、更らに四十二年度以降の財政方針を定めず、四十一年度も亦依然彌縫糊塗を事とせば、中外の市場齊しく日本の財政に安心せず、其の弊害や測る可らずといふの議論また有力にして、貴族院の一部の之に呼應するさへあり、玆に於て政府と元老との間に議合はず、否、閣臣の間にすら意見區々として定まらざるものありしが如し

（四）

吾人の聞く所によれば、陸海軍當局は頗ぶる强硬に軍事費の繰延に反對し、政友會出身の大臣は、四十二年度の總選擧に對する黨略よりして、極力增税を排斥したりき、盖し增税の多少を論ぜず、苟くも增税黨といはるゝが如きは、政友會が其の黨勢擴張上最大禁物とする所なるが故に、政友會出身の原、松田の二相は、黨略上極力增税に反對したりし也

玆に於て大藏當局は、兌換券增發により、日本銀行をして政府公債を引受けしめ、之に由て兎も角歲計上の數字を吻合せしめんと企てたりき、原氏松田氏も亦之を賛し、閣議は一時幾んど之に決したるが如く大藏當局は信じたりき

然るに兌換券增發は、井上松方兩侯の極力反對する所となれり、軍事費の繰延は陸海軍當局之を拒み、增税は政黨出身の大臣肯ぜず、玆に於て出入全く平衡を得る能はず、四十二年以降は勿論、折角纏まりたる四十一年度豫算すら編成する能はざる狀態に陷ゐれり

十一月を終るまでの元老大臣會議の形勢は、斯の如くにして何等發展する所あらざりき、西園寺首相は竟に十二月二日桂侯の病床を訪ふて此の顚末を告げ、敢て其の救解を求めたりき、吾人の推想する所によれば、西園寺侯は此の難局の疏通するを見るに非ずんば、將さに伊藤公の韓國より歸るを俟つて、斷然現地位を去るべきことを決心し、隱約の間に此の決心を桂侯に暗示したりしが如し、西園寺侯の此の決心は實に至當のものなり、侯此の決心を爲して而して後、形勢は始めて推移すべきのみ

思ふに西園寺内閣を悦ばざるもの、此の如き機會に乘じて取て代らんとを企つるなきを保せず、現に桂侯の側に屬する人々と雖も、密かに斯の如き計略に肝膽を碎けるものありしが如し、然るに桂侯其の人は、自から政局に立つと健康の許さゞる所たり、且つ新たに韓國を視察して、深く滿韓の經營に擧國一致の力を致さゞる可らざるを感知し、公平に國のために努力せんことを期し、之がため頗ぶる伊藤公ともアンダアスタスヂングする所ありしが如し、乃ち輕々しく内閣を更替せしむるが如きは、侯の甚だ欲せざる所たるや明か也、西園寺内閣を憎惡する人々は、侯の此の態度に慊焉たらずと雖も、而かも理の以て之に抗すべき者あらず、而して是れ桂侯が能く大に、且つ汎く一般の人望を收むる所以たるに於て、幾んど奈何ともする能はず

桂侯は西園寺侯の愁訴に少からず同情を表したりしが如く、現に其の翌三日寺内陸相を招きて軍事費の繰延を納得せしめ、其の五日自から井上侯を訪ふて此の意を致し、同時に其の席にありし原、寺内の二相に對し、侯と共に繰延と增税とに由るの外なきを懇示し、殊に井上侯の口に由て、專ら原内相に增税の已む可らざるを懇說せしめたりき

原氏は井上侯に負く能はざるの誼あるも、而かも執拗にして容易に人言を聽かず、井上侯と雖も往々之を奈何ともすると能はずといふ、故に心よりして增税の非なるを信ぜば侯の千言萬語を以て絮說するも、毛頭心を動かす可らず、已むとを得ずんば立憲大臣の本義によりて、冠を挂くるも亦其の分とする所なるべし。然れども非增税說に然く堅確なる信念あるに非ず、單に黨勢擴張といふが如き黨略上の黨

情を兼ぬるに過ぎざるが故に、竟に增税を納得し、軍事費其の他の繰延を條件として之に賛成するに至りしと聞く

（五）

此の繰延と增税とは、四十二年度以降に於てせず、直ちに四十一年度より實行せんと欲するが如し、現に大藏省に於て、煙草價格の引上げを第一とし、次に酒造税率の增加及び、砂糖消費税の引上、其の他二三の間接税を新設若くは增率して以て歳入增加を期するが如く、其の調査の終るを俟つて更らに正式の元老大臣會議の決定を經べき順序なりといふ

吾人は本篇を草する時（十二月九日）まで、未だ繰延ぶべき費目の大要と、增加すべき税目の何たるを確聞せざりしが故に、隨つて可否の論評を加ふべき資料を有せず、唯だ此の繰延と增税とが、今期議會に於て果して如何の結果を來すべきかを觀測するにだめんとす

何等の政黨と雖も今日增税を主張する勇氣あるなし、殊に四十二年の總選擧を眼前に控へて、公然增税黨たるが如きは、今の政黨の斷じて能くせざる所たりとす、隨つて西園寺内閣に隷屬する政友會と雖も、頗ぶる之に懊惱せざるを得ざるべく、多少の紛擾動搖は其の免かれ得ざる所なるべし

然れども增税や竟に免がる可からず、とすれば、四十二年度の議會の宿題として之を存するよりも、寧ろ四十一年度に於て早く之を決定するに如かず、同じく增税のために非難せらるゝ以上、之を決定して然る後總選擧に臨むの利便なると、素より多言を要せざれば也、由來斯の如き懸引に長じたる政友會の

幹部は此の事情を以て黨情を鎭撫すべく、政友會は兎も角も極力增稅案を支持すと見て過失なかるべし

大同俱樂部は桂侯との關係上、到底增稅に反對する能はず、內閣を攻擊するがため、或は別途の奇策を用ゆるとは或は之あらん、正面より增稅に反對すとは信ず可らず

進步黨の態度は依然として疑問也、然り、疑問なりと雖も竟に大勢を動かすには足らず、即ち疑問のまゝとして存するを可とす

眞に增稅に反對するは猶興會のみ、或は新聞雜誌記者の一部、增稅反對運動を開始せりと雖も、亦甚だ大局を動かし得ざらん乎、彼等と雖も素より絕對に增稅を非とするに非ず、多くは政府を憎むがために、乃ち反對するに過ぎざれば也、甚だしきは非增稅の遂行を期せず、單に一種の牽制運動と做すに過ぎざるも亦之あれば也

貴族院に在ては、土曜會既に繰延と增稅とを主張すといへり、比較的に西園寺內閣に好意を有するもの素より多く然かすべし、假令西園寺內閣に反對するものと雖も、元老との關係上、甚だしく增稅を攻擊せざるべき乎、貴族院に於て內閣攻擊の氣勢熾んなるべきは吾人之を豫想す、然るも增稅に反對するが如きとは恐らくは之なし

斯くして增稅案は兎も角議會を通過すべし、若し夫れ之を以て西園寺內閣の安全を保證したるものと做すに至ては、餘りに短見に過ぐ

（六）

西園寺内閣は、四十年度の豫算編成に於て、殆んど新聞の包圍攻擊を蒙むりたりき、其の結果少くも內外市場に於て信用を減少したりしと爭ふ可らず

今や四十一年度に至つて、又非募債非增稅の宣言を取消さゞるを得さるに於て、少からず世間より攻擊さるべし、斯かる宣言は思慮あるものゝ漫りにせざる所にして、實質よりいへば素より内閣の生命たるにも非ず、重要なる標幟たるにも非ず、唯だ殆んど無意味に、輕卒に之を口外したりしに過ぎざるも、議會及び新聞紙等盛んに之を攻擊せば、西園寺内閣は多く民心を失はざるを得ざるべし、少くも前内閣に比較して技倆と重量とに於て及ばざるものと判斷せらるゝことを免がれざらん

西園寺内閣の成立に視て、多く元老會議の決定を待つの甚だ怪むに足らざるは、識者の認むる所なりと雖も、世人は此の事情に重きを措かずして、却つて西園寺内閣の責任を負はざるを非難し、甚だしきは則ち非立憲として之を攻擊するにも至らん、情實を無視すれば其の說實に堂々として理あり力あり、政黨を基礎とし立憲の大義を標榜したる西園寺内閣に取ては、是れ實に手痛き攻擊ならざる可らず、西園寺内閣は總選擧に於て政友會に多數を占めしむるを望みて、暫らくは隱忍して垢を被り辱を吞むの外なかるべし、吾人は頗ぶる西園寺内閣の苦境に同情するを禁ぜず、而して最も其の境遇を憐れむ、嗚呼政府に立つまた難い哉

# 演劇論

（一）

演劇の改良せざる可らざる、天下何人も異議あると莫し、故に演劇改良の要は、其の方法如何に在り、少くも方法の大綱を擧げて以て其の是非當否を別たざる可らず

吾人の見を以てすれば、演劇改良の手段に二樣あり、一は劇其のものを改むる也、二は觀者の便を計る也、此の二者並び行はれて演劇改良の實始めて擧る

（二）

今の演劇は稍々時代と遠ざかれるもの也、流行語を以ていへば頗ぶる寫實に遠きもの也、彼の謠曲の甚だしく詩歌的にして而して其の舞曲の古雅素樸なる、幾んど現時代のものに非ざるの感あり、謠曲の時代に接近したるものは即ち淨瑠璃（義太夫）にして、舞曲の著るしく時代的とされるものは演劇也、歴史的に視るも演劇は畢竟能樂の進歩したるものに外ならず、少しく適切にいへば能樂の時代人情に接近して著るしく寫實的となれるもの即ち演劇なりとす、今や此の演劇も、既に幾分か時代人情に遠ざかれり、其の科白は言語の精美を盡したりといふよりも幾んど一種の詩歌也、其の動作は能く情緒を表現すといふよりも、寧ろ幾んど一種の舞踏也、能樂の甚だしく古雅素樸なるを愛すると能はざるもの、或は此の演劇を悦ぶなるべし、然るも現時の人心を擧げて此の演劇に滿足せしむべしといふは餘りに時代を無視

したる說なり

試みに之を西洋劇と比較せよ、彼れの態度科白共に甚だしく現時的寫實的にして、其の精細なる、觀者聽者の感興を惹くと最も深し、彼れにも勿論樂劇あり、又シエクスピア物の如き所謂時代物もあれど、其の世話物は全然現時的寫實的にして、我が世話物といふも其の實著るしく時代人情に遠き非現時的非寫實的なると同日に視る可らず

之を譬ふれば能樂は日本流の墨繪の如く、日本劇は日本畫の如く、西洋劇は油繪の如し、墨繪の輕淡にして而して氣韻ある、自から捨つ可らずと雖も、而かも傳彩の優麗なる日本畫の畫として遙かに尚ぶべきに如かず、今や日本畫も其の古傳の線描法のみを株守する能はず寫實にして且つ精細なる油繪の長所をも模倣して、畫格自から一變せんとする傾向あり、少くも日本畫も他の多くの文物と齊しく、大に西洋趣味を挿入して、所謂和洋折衷の新局面を開かんとする也。我が演劇のみ豈また洋風を加味して一種の和洋折衷を實行せざるを得んや

（三）

有體にいへば、今の壯士劇は西洋劇を摸して而して未だ至らざるもの也、勿論十年前數年前に比すれば、進歩の著るしき幾んど隔世の觀ありと雖も、尚ほ全く生硬なる風氣を擺脫するに至らず、但だ其世に悦ばるゝと漸く舊劇に劣らざらんとするは、是れ社會人心の明らかに舊劇の甚だしく時代人情に遠ざかれるを忌む兆證に非ずして何ぞ

即ち演劇改良の方法は他なし、我が所謂世話物を改良して、更に時代人情に近接せしむる也、著るしく現時的寫實的ならしむる也、然るも其の態度と科白との如きは、能く情緒を表顯して言語の精妙を示さゞる可らずざるや言を俟たず、徒らに寫實と稱へて粗野冗漫なる可らざる也

吾人は此の主義よりして、脚本作者に舊式の人物を用ゐず、而して今の文士なるもの亦自から舞臺に上つて俳優たるが如き野心を一擲して、主として脚本の製作に其の精力を致さんとを望む、文士と稱するものが今にして熊谷たり辨天小僧たり石川五右衛門たるが如きは、寧ろ不心得の極ならずや、否、演劇の改良には寸分の効果なき無用の技のみ

現代的寫實的脚本を製作するには、好資料甚だ多し、西洋の作を換骨奪胎するも可なり、日露戰役中に現出したる我が國民の長所短所の如き、敎訓たり鑑戒たるべきもの甚だ豊か也、苟くも脚本作者の目に觸れ手を透さば、實に好個の演劇を視るを得るに非ずや、而して是れ演劇改良を實行する所以ならずや

（四）

脚本の改良と共に、忘るべからざるは演劇の時間を短縮すると也、我が現在の演劇は、十時間甚だしきは十二時間餘に渉つて興行せらるゝが故に、觀覽者は飢渴を防ぐため必らず飲食せざるを得ざるに止まらず、全然一日の業務を廢せざる可らず、時としては疲勞のため翌一日も亦休業せざる可らざる虞あり、隨つて觀劇費用の嵩むと亦免がれず、觀劇なるもの竟に容易にす可らざるに至る

故に演劇を改良せんとせば、劇とすべき事實の要領を盡して首尾一串せしめ、之を四五時間若くば三時間位に終らしむるを要す、随つて觀劇中飲食するが如き不體裁なからしめ、又一日の業務を廢するが如き掛念なからしむるを要す、其の價を廉にすべき亦論なし

斯の如くなれば、觀劇甚だ容易にして、觀者常に多かるべし、是れ豈演劇の盛運を致す所以ならずや

吾人は又所謂「芝居茶屋」なるものを廢止せんことを求む、總ての商賣に多くのブローカアを置くは、徒らに價を高くする所以にして、賣買兩者の損失に歸す、「芝居茶屋」なるものは客の損にして又演劇場の寄生蟲なり、速かに廢すべし、入場者のために入場劵を賣るの法の如きは、一切西洋の風習を直譯し來りて實施すれば可也、必らずしも別段の工夫考案を要することなし

（五）

更らに望ましきは、背景其の他の道具立に多くの新事物を利用するにあり、所謂長谷川の大道具なるものゝ、其の精好なる二十年四十年前の其れに比すれば天地の懸隔あり、作るもの觀るもの共に相誇り相嘆じて其の美を稱すると雖も、奚ぞ知らん、是れ井蛙の見のみ、之を歐米に比すれば幾んど一笑にだも價せざることを、今や我が國また電氣あり、瓦斯あり、歐米より新器械を輸入し、電氣と瓦斯とを利用せば演劇に數段の美觀を添ふる甚だ易し

今の演劇者（芝居者）は餘りに鎖國主義也、否、井底の小蛙也、廉價に、無造作に、採て用ゆべき器械あることを知らず、又之を知らんともせず、僅かに長谷川の大道具といふものに滿足して其の壯大を誇る、斯の如くにして演劇の進歩發達せざる、而して又演劇の繁昌せざる、何ぞ必らずしも怪むに足らんや、何ぞ甚だ怪むに足らんや




# 日米兩國の關係

池邊吉太郎

移民問題一度持上りてより日米兩國の關係兎角に面白からず、世上種々の浮說をなす者さへあり。此時に當つて予輩の私見を述べて、浮說の浮說たる所以を概論する亦可ならんか。

移民問題は世間にて隨分矢釜しくいふ者もある樣子なれども余輩は左程六つかしき事とも思はず、又之れが爲めに米國と喧嘩をなすが如き事は萬々なかるべきを信ず。兩國政府間の談判は如何樣の成行になり居るものか、余輩は知らず。されど米國にては日本に對して前の大使ライト氏によつて移民をレシプロカルに（相互的に）制限せんことを提案したるものゝ如し。これ表面上は對等條約なるも事實上に於ては不對等條約也。何んとなれば我より彼に移民するものは極めて多きも彼より我にするものは殆んど無ければ也。夫れ故に彼の提案の結果は只日本移民が不道理に不公平に排斥せらるゝことゝなるのみなれば我政府も之を贊同せず、其話は其儘になり居ることゝ余輩は信ず。之に次いでタフト卿の來遊せし時も又此話ありしに相違なし。然れど我政府は復た同樣の挨拶をなしたるならん。されば此話は一應段落が附きたるかの如き觀あり。日本の好まざる所を强てどうせねばならぬと言ひ張ることはなかるべく、彼も多分斷念したる事ならん。斯く言へば此事はなんでもなき樣に聞ゆれども、玆に一つ困つた事あり。といふは即ち現行條約は其第二條か第三條に我移民に制限を加へ得るやうになり居る事

也。獨り米國中央政府のみならず、各州の法律にても、又は警察の命令にても場合によつては日本移民を制限し得るフリーハンド(自由權限)を有す。只道義上より排斥するを敢てせぬのみにて、排斥せんとすれば何時にても排斥し得る狀態にあり。困つた事也。今日にても太平洋岸の米人は之を振廻して排斥を實行したく、扨こそ先般來の紛擾も持上りし次第なれ。

我政府が彼の提案に對して應へし所は、「日本は自ら移民に向て制限を加へつゝあり、米國にて嫌がる如きものは我自ら之を抑止して其渡米を許さず、されば事實を見られよ、米國の迷惑となるが如き事は我はせぬ答也。今日にては布哇よりの轉航もなく、移民の數も亦著しく減じたり。されば最早法律を作る必要もなかるべし。作る必要ある事實の生じたる曉には又改めて相談すべし。先づ夫れ迄は待たれよ」との意味なりしなるべし。ヘエス氏の如き盛んに排斥説を唱導し、議案を提出したる模様なるも、ルーズヴエルト氏は之を抑へ、提案は議會を通過せずとの電報も見ゆ。されど今後如何様になるべきか、隨分小面倒な事になるべしと信ず。といふは外にもあらず、實際ルーズヴエルト氏は日本移民を辯護したる爲めに、氣の毒にも米人の同情を失ひたり。此前の教書には同國人を罵棄したるが、これが大統領の選擧に關しレパブリカンが不人望となれり。如何にエラき政治家にても——正義と人道によつて立て周圍の事情などを念頭に置かぬといふ政治家にても——ルーズヴエルト先生にても同國人の感情を全く無視することも能はざるに相違なし。今度の教書に於ては一言も移民問題に及べるを見ず。來年の選擧に於てレパブリカンの勝利を希望する以上はさもあるべき筈也。尤も從來の行掛上、又日本に對する情誼上、ルーズヴエルト氏は幾分か日本に向て加勢することならん。而かも大體の形勢如何になるべきかは容易に推定し得られざる也。一方のブライアン氏にても理屈の上よりいへば日本移民の排斥を攻撃せざるべからざる事は百も承知也。彼は日本移民の狀態を視察する爲め態々カリフホルニア州まで赴けり。而かも彼は遂

に一言も移民問題を口にせざりき。口にせば不人望となるを恐るゝ也。夫れ故に從來日本の肩を持ちしレバブリカンのルーズヴエルト氏も、デモクラットのブライアン氏も今日の所にては此問題に向て大なる助力を與へ得べしとも思はれず。隨分便りなき有樣也。ひよッとすれば六つかしき法律案の出でゝ、之が通過を見るが如きことなきを保すべからず。

扨、かゝる曉には我日本が如何なる態度を取るべきか。無論我は徹頭徹尾、道義上より立論すべし、又國際法の法理上よりも立論すべし。又時には基督教の教理より立論するも可也。あらゆる方面より立論して、彼の全く不道理、不徳義、不人情なることを責むべし。此點に於ては我一歩も負けず、彼一言も辯ずること能はざらん。然れども只かゝる議論のみにて此問題を落着せしめ得べきか、是れ亦疑問也。此問題の人種上の偏見より出でたるものにあらざること余輩之を了す。矢張り經濟上より起りたるものなること毫末の疑なし。外國の商品を排斥すると同じ理由を以て、外國の勞働を排斥するに過ぎざるのみ。されば實をいへば之に對する報復手段の範圍甚だ狹隘也。戰爭を以て報復することも一寸し惡し。故に左樣なる六つかしき法律が出でゝは餘程困つた事也。動もすれば、ある場合には米國との國際關係餘程クリチカル(危急)となり、奈何とも手を下し難きに至るなしとも保すべからず。然れども余輩は此關係は必らず双方の側より自ら解け初めて次第に消え失すべきものなるを確信す。そは他にあらず。米人は日露戰爭以後日本人を餘程誤解せり、明かに誤解せり。日本人は戰爭好き也、又戰爭に强し。彼等は非律賓、布哇に對して禍心を包藏すと、ともすれば佛人が東京、印度支那に對して有したると同じ惡感と恐怖心とを抱く。已に彼の經濟上の理由あり、而して又此の政治上の理由あり。今日、日米兩國の關係を云々するものある、又之が爲め也。然れども政治上の理由の如きは全く根據なき幻想にして、ルーズヴエルト氏の如きは明かに此政治上の理由なきを知れり。人民は未だ之を知らずして幻想に惑はされ經濟上

の理由と共に日本移民排斥の一動機となりつゝあるも、幻想は幻想也。今暫らくにして消滅せん。事實然らざるものは然らずと決するの外、道なき也。されば所謂政治上の理由の如きは早晩消え失せて日米兩國の關係を危うするに足らざるものといふべし。

然らば經濟上の理由は徹頭徹尾消え失するものに非るかといふに、余輩は然らずと信ず。勞働派の主張の誤謬なること明かとなれば直ちに消え失すべきを信ず。而して勞働派の主張の誤謬なるは遠からずして明かとならん。何となれば如何に多く日本より移民するも決して米人の勞働を奪ふに至らず、現に事實としても今日彼等の勞働を侵食し居らざる也。否な却て米國に利益を與へつゝあり。資本家の如きも此事に心着きて今や諸方に日本移民の排斥すべからざるを演說しつゝありといふ。依て思ふに我移民の將來は米國に於ける資本家と勞働者との爭の如何に繫る。前者の勝に歸すれば日本移民著しく渡米すべく、後者の勝に歸すれば排斥の否運を免れじ。然れども予輩は此兩者は必ず折合ふべきものと信ず。資本家のみ權力を振廻はすが厄介なると同時に、彼の桑港の如く勞働者のみ跋扈して政治も社會も彼等の蹂躙に任せらるゝ如くにしても困却すべし。矢張り資本家の力を以て適當に勞働者を動かすにあらざれば社會は平靜に進步する能はず。されば兩者は必らず調和すべく、又調和せざるべからず。此兩者の折合ひたる時、調和したる時は、折合と調和とのに日本移民の入るべき餘地を見出すべし、間斯くして此移民問題も眞の落着を見るべき也。

要するに政治上の誤解は必らず消え、經濟上の誤解も亦早晩消え去るべし。而してそは米國の側より也。

然らば日本の側は如何といふに、實際今日は眼に一丁字なしといふが如き者は渡米せず、移民の狀態著しく良好となれり。今日に於てはクーリー、トレード（屆人賣買）による契約勞働者は全く跡を絕てり、豚か羊の如く人間一疋價幾何といひて實際奴隷の如く賣らるる勞働者は現在米國に行き居らず。契約勞働者は日本の品位を害し、又彼方に渡つても政治經濟上のみならず、

風俗上にも習慣上にも害あるものなり、之れは必らず禁止せざるべからず。今日は次第〳〵に此風止み、殊に外務省の方針にては中學卒業生――少くとも高等小學卒業の學力あるものゝ外は渡米を許さず、桑港に上陸するも東西の方角も分らず、街頭に彷徨して巡査に迷惑をかくるが如き者漸滅すべし。少くも地方人の東京に出でゝ新橋、上野の停車場に打上げられたるが如き狀態にはなるべし。されば米人と雖も此等の移民者を厭はず、寧ろ歡迎するにも至らん。又彼等移民も勞働に從事して金も溜むべく、家も持つべく、地面も買ふべし。而して農業にいそしみ、工業に勵み、又資本ある者は商業をも營むべし。又歸化するもあるべく、雜婚するもあるべく、永住者も漸く多からん。斯くの如くなれば今日歐洲より渡米するものに優るとも劣るなく、又米國の爲めにこそなれ、不爲にはならじ。而して斯くの如き時代は遠からず來るべし。存外近く來るべし。されば今日の如き面白からざる關係は米國の側にも消滅し、日本の側にも消滅し、四方八方圓く治まることは期して待つべし。只、過般の如き矢釜しき件の後なれば未だ感情も沈靜せず又大統領の選擧も眼前に控へ居る事なれば、今暫らくが面倒、氣を寬ろげて焦らざる工夫肝要也。日本に於てさへ移民問題に對する當局者の遣り口を攻擊し、軟弱又は無能と罵る程也。況してカリフォルニア州などの動搖は甚しきものにてルーズヴェルト氏州民を訓戒すれば彼奴(アイツ)は仕樣のない奴也。駄目也とてレパブリカンの信用に關することと尠少ならず。さればルーズヴェルト氏も今は口を噤まざるを得ざる次第也。されど事情は上來述べ來りたる如き譯合なれば、大した事とはならず、圓滑に結了すべし。只、今暫らくが餘程困難なるのみ。

又實際移民問題なるものが米國にとつて左程大なる問題にあらず、一生懸命になつて顏を赤むる問題にあらず。大事の問題は外に幾らもあり。其問題あらはるれば移民問題の如きは忘却せられん。

然らば一歩進んで移民問題を外にして日米衝突の原因となるべきもの他にあるやと問はゞ、なしと答ふる

の外なし。予輩は日米互に衝突するが如き時機は必らず來らざるべきを信ず。今日、米國にても帝國主義などを唱へ、日本に對して從來と一寸變はりたる顔付をなすに至りたるもこれは當然の事也。今迄諸外國のやりたる事を米國もやり出した丈けの事也。未だせざりし故したる迄也。恰かも青年が或時期に達すれば女が戀しくなると同様、國家も或階段に達すれば何かして見たくなるもの也。海軍擴張の如きも實は物好きにやつて見たくなりしのみにて、役に立つか立たぬかは問ふ所にあらざるべし。米國のは元來戰爭する爲めの海軍にあらずして戰爭せぬ爲めの海軍也。所謂平和の保險とかいふものなるべし。されば米國にてかくするは當然の事なれども世間は之について何も囂々する必要なからん。

且つ米國人は結局餘程よい人民也。平和の人民也。商工業の人民也。若し戰爭するも道義上の戰爭をする人民也。此理南北戰爭を見るも瞭々たり。固より該戰爭には種々の理由ありしならん、經濟上の利害の如きは大關係ありしならん。されど表面上は何處までゝ道義上の戰爭なりき。流石にピユーリタン(清教徒)の子孫たるに愧ぢざるの人民也。矢張り手を握るべき人民なりと信ず。

要するに余輩は上述の理由を綜合して日米兩國の關係は終に良好、圓滿に歸すべきものにして、世上種々の浮説の如き、一時の事相に惑はされて、恒久の眞關係を見得ざるもの、なす所たるを斷言せんと欲す。

# 時勢の推移

金子筑水

變遷推移が世態の常規である限り、時勢が動き時代思潮が變ずるは別に不思議は無い。夫れにも係らず、我が現狀の如く迅速激烈を極めた時勢の變遷に接しては、何人も驚き且異まざるを得まい。所謂新時代の潮流は、暗々裡にすさまじい勢を以て前進し、世人の多

數を其の後へに殘して、彼等をして空しく時勢後れの嘆を深からしめる。我が國思想界の前途果たして如何とは、何人も氣づかはしげに發する疑問であらう。或者は恐怖の念にかられ、或者は疑惑の念に滿ちて、又或者は多少の希望を懷いて、此の疑問を發するのである。

試に過去數年間の我が思想界の趨勢を顧るに、見かたによつては壞亂、破滅、衰退、デカダン、すべて時尙の病的狀態の反映とも評されやう。現に思想界の危機といふ語は屢々此の間に繰返へされた。最もきはだつて吾人の耳に響いた第一は、倫理道德等一切社會的規律排斥の聲である。人性の自然を矯めて、冷酷非道の覊絆を强ゆるものが倫理道德と解された。多少にても倫理的意義ある事柄は、すべて天眞を損ふ不自然な沙汰と解された。「道學者流」といふ語は、道德家又は道德學者を痛罵する常套語と成り了つた。之れと並んで一方には排學術的傾向が現れた。科學的知識は人生の本質を語るものにあらず、哲學的眞理とても人生の神秘には觸れず、すべて學術上の分析的知識は、吾人が至情の要求を滿たすものにあらず、却つて吾人を無益な論理的遊戲に陷れるものとさへ嘲笑された。「學究先生」は學者を冷笑する常語となつた。此等の思潮と連關して、更に實際上又たは空想的の苦悶煩悶の淋しい音調が際だつて聞こえた。文壇は一時煩悶者と其の救濟者との立合ひたる觀があつた。傳來一切の主義、理想、人生觀、宗敎觀は、ひとへに無力無効なものとして怨ぜられ嘲けられ擯斥され了つたのである。斯くて文壇には昨年來の自然主義又は自然主義的傾向が現れた。自然主義は、之れを一方より解釋すれば、一切の主義、理想、人生觀の束縛より脫せんとするもの、あらゆる主觀的態度を杜絕せんとする者とも見られやう。純粹の自然主義的傾向に一定の倫理なく將た理想なきは無論である。

深く其の本質をたださず、漫然として之れに蒞めば、斯ゝる思潮は、一概に倫理道德を破壞するもの、科學哲學を擯斥するもの、あらゆる意義に於て主義、理想、人

生觀、宇宙觀を打破するものとも見られやう。斯かる思潮は、歴代文化の賜物なる道德と理想とを敵視するものとも見られやう。道德又は理想といふが如きは、一種無用な禁欲主義にあらずんば、幼稚な過去の人類の空想夢幻に過ぎず、將來に於ては、吾人は斯かる無用の長物に支配される要なしとの主張にも取られやう。現に上の如き思潮の雷同者中には、如何なる形に於ても、道德や主義や理想は、人生の本然を損ふもの必や將來次第に滅亡すべきものと解釋する者さへある。甚しいかな、世人の誤解や。甚しいかな、輕佻浮游な俗論の世を誤る事や。眞實な意義に於て、道德や主義や理想の滅亡する時は、すなはち人類の滅亡する時、人類の生存するかぎり、理想や道德の根據は盤石ならざるを得ないのである。况や上に記せる輓近の思潮は、其の純粹なるものに於ては、必しも然かく輕佻浮游なるにあらざるをや。

所謂新代の新主張を絶叫しつゝある者の中には、多數の浮游な雷同者が含まれてゐる。彼等は深く新主張の流れてた源を尋ねず、空しく流行の渦に翻弄されて、時勢變遷の全局を達觀する明が無い。彼等は僅に時勢の後へに從つて轉々するのみにして、別に時勢に先んずること一歩、其の歸趨を達觀する底の眼識を缺いてゐる。排理想論又は排道德論は、畢竟斯かる徒輩の謬見に過ぎない。若し夫れ過去數年間の一見病的と觀ぜられる思想界の趨勢は、其の本來に於ては、むしろ深い同情を價ひする事情が多い。其の矛盾に滿ちた排道德論又は排理想的傾向は、むしろ倒に眞の道德又は眞の理想の切實な要求である。排學術論や、排道德論や、排理想論や、煩悶的傾向や、自然主義や、卒然として其の表面に現れた波瀾のみを窺へば、全體相互の間に何等の連鎖もない混沌としたデカダンの現象とも見られやう。されど更に深く其の奥底を窺へば、一道の急激なる暗流が迸つてゐる。此の暗流が一切輓近思潮の源にして、此の思潮の源頭に竿さす者は、時勢に先んじて、而して時勢を率ゆる者、然らざる者は、徒に一時の流行に率ゐられるのである。一道の暗流とは他に

あらず、一斑の人心が空理空論を避けて實際に傾き、全人格の要求を滿たすが如き、より豐富にして、より完全な人生觀、道德觀、宗教觀を得んと欲する質實沈痛な苦悶其のものである。四圍の境遇は次第に複雜に進み、一斑の時尙は次第に現實的に傾く。必しも哲學全斑を呪はんとにはあらねど、スペンサーの哲學や、ヘーゲルの哲學は、現代人士の要求を滿たすには、最早餘りに單純なものと感ぜられたのである。哲學が全人格の要求に應ずべきものならざるは言ふまでもない。複雜な境遇に圍まれた現代人士は、一層豐富にして、又一層現實的な哲學を要求する。故に所謂排學術論は、單純幼稚な學術を排斥して、時勢に適切な眞理を獲得せんと欲する苦悶に外ならない。又彼の排道德論と雖も、同じ暗流の餘波たるは明瞭であらう。所謂排道德論は、必しも一切道德の排斥を意味せず、傳來陳腐な道德律を擯斥して、時勢に適切な眞の道德を要求する苦悶の聲に外ならない。倫理道德が人心自然の要求なるかぎり、假令形式は時代と共に推移るとも、倫理道德其のものは人生と共に無窮なるべき筈である。故に排道德論は、むしろ思想界の一段の進歩を證明するものとも判ぜられやう。若し夫れ新自然主義に至つては、其の本質に於ては、一切主觀の色を帶びた主義、理想、人生觀、道德觀を排斥せんとするもの、さながらに理想と道德との敵であるかにも觀ぜられる。世の排道德論又は排理想論は、主として此の意味自然主義に立脚してゐる。されど斯かる見解は、未だ自然主義の根據を明らかにせざるもの、深く其の根據をさぐれば、自然主義とても、同じくより豐富にして、より完全な理想と道德とを要求しつゝある一斑の暗流に源を發してゐる。自然主義は、何等の動機にも基かずして、一概に一切の理想と主義とを排斥せんとするものではない。自然主義者が排斥せんとする理想や主義は、最早現代の複雜深奧な世態を解釋する能はざる、彼の傳來の單純幼稚な主義理想に過ぎない。彼等は傳來一切の主義、理想、道德觀、人生觀に疲れ果てたのである。傳來一切の理想と道德との不自然な强迫と束縛とに疲れ果て

たのである。彼等が傳來一切の理想と道德とを放擲して、更に新しい態度を取つて、周密に自然の眞相を會得せんと努むるは、やがてこれ彼等が眞實な理想と道德とを要求しつゝある所以であらう。彼等は徒に自然の皮相を寫すを能事とするものに非ず。眞の意義に於て自然主義者であるかぎり、彼等は自然の奧妙神秘に驚嘆の念を禁じ得ない。其の奧妙神秘な實相を窺はんとするが新しい自然主義の特色ではあるまいか。さすれば彼等とても徒に一切の主義理想を破壞せんとするものにあらずして、むしろ自然と人生との眞意義を捕へんとする者、在來の人生觀宇宙觀の捕ふる能はざりし眞意義に到達せんと努むる者である。新しい生命の宿つた眞の理想と道德との要求は、自然主義の出現に至つて、ます〳〵其の高調に達したとも評されやう。

排學術論、排道德論、煩悶主義、自然主義は要するに現代人士の要求を滿たし得る底の、新しい眞の主義、理想、道德、人生觀等の追求から起こつた自然の現象である。時勢は次第に單純から複雜に、空想から實際的に進みつゝある。過去數年間の病的とも見ゆる新思潮は、一見支離滅裂、而も一切理想と道德との破壞を目標としたるに似て、而も更に其の眞相を觀破すれば、其の純なるものに至つては、悉く一貫の向上的暗流に源を發し、此の過渡期に於て、新しい生命の宿つた理想と道德とを追求しつゝある、苦悶其のものである事が認められる。時勢は次第に進歩しつゝあるのである。

今の過渡期に於ては、現代人士の全人格の要求を滿たすべき新理想、新道德、新人生觀現れず、而して他の一面に於ては、傳來一切の主義理想が無遠慮に排斥される有樣を見て、大早計にも、將來に於ては、一切道德と理想とは衰滅するものと速斷するは、其の愚むしろ及ぶべからずである。彼等は一切定形を具へた主義、理想、人生觀を蛇蝎視して、無主義、無理想、無道德が將來の新世界なるかの如く考へる。從つて彼等は今の時勢の推移が、新理想と新人生觀との追求に立脚せる事を夢想だにしない。理想、道德、人生觀の建設は、到底人性に自然にして必至な大事なるを理解し

得ないのである。今の過渡期に於てこそ、傳來の主義理想は無益視さるれど、一定の理想にあこがれ、一定の人生觀に安立し、而して一定の道德に頼るが人類の常道なるは、到底破壞すべからざる眞理である。人生は畢竟然かあらざるを得ないのである。すべての主觀的理想と人生觀とは、早晩破壞さるべきものといふか。將來建設さるべき新人生觀又は新理想も、やがては再び破滅の運命を避けがたしといふか。げに新理想が舊理想に代ればこそ、理想其のものにも進歩あり、時勢と時代精神も進歩する所以、すべての主義理想は、破滅するにあらずして、實は次第に進化し行くのである。故に主義理想は無意義な空想にあらずして、全人格を盡して發見し得る人類生存の目標である。人類の生存の續かんかぎり、主義、理想、人生觀は、とこしへに消滅すべきものではない。若し夫れ道德の本質は、人心の至情に根ざして、徒に外より加へたものにあらざるを知らば、これ將た人類の生存せんかぎり無窮なるべきは言ふまでもない。道德は畢竟人類生存の必然的形式にして、道德の消長は、やがて生存其のもの丶消長とも言はれやう。

されば我が思想界の暗流として認められる、彼の新理想、新人生觀、新道德の追求は、むしろ時勢の進歩又は新代の徵候とも見做さるべきもの、ひとへに無意義な破壞的現象とのみ難ぜらるべきものではない。懸むべきは、一時の流行思潮の波にゆられて、遂に其の本源なる大潮流の行くへを察し得ざる徒輩である。彼等が徒に時の小波瀾の中に輾轉反側しつ丶ある間に、時勢は間斷なく無限の旅路を進み行くのである。

## 讀稿本石田三成

松井柏軒

石田三成が關ヶ原戰役を起したるは、果して豊臣氏の爲めにしたるものなりや否や、換言すれば、三成は果して豊臣氏に取て誠忠又は孤忠といふべき人物なりや否や、此の問題輕々に斷定すべからず。

三井家の理事朝吹英二氏（號柴庵）は、三成の心事を憐れむの餘、其の墓を舊塚古墳の間より搜出し、且つ爲めに篤き法要を營めるに止まらず、學士渡邊世祐氏に托して三成を傳せしめたり、稿本石田三成是れ也。

朝吹氏の意氣に感じたるか將た然らざるかは余未だ之を知ること能はざるも、近時三成を賞揚すること幾んど一の流行となれるが如し、多くの人は德川家康に冠するに陰險佞姦を以てして而して三成を呼ぶに誠忠又は孤忠の士を以てす、多くは曰ふ、三成を以て佞姦の如くに觀るは、德川氏の盛時に於ける歷史家の曲評のみ、德川氏に媚びて故らに三成を誣ゆるのみと、稿本石田三成の趣意また又之に外ならず。

余は德川時代の史家を以て斯の如く卑怯なるものとは考ふる能はず、現に三成等の發表したる家康の罪狀なるものは、史家皆之を列擧して隱す所なきに非ずや、史家多くは三成を以て自家の野心のために關ヶ原戰役を起したりとし、其の爲す所の却つて豐臣氏の不利なるを稱するのみ。

試みに稿本石田三成を通讀するに、一も其の誠忠孤忠の證左と做すべきものあらず、强ひていへば、其の捕はれて家康より小袖を贈られし時、傍人に『何に德川殿を上樣といふべきや、上樣は秀賴公の外にはなき筈なりと云ひあざ笑ひしたりと傳ふといふ』の一事のみ、稿本の編者は屢々三成の誠忠孤忠をいふも、史家の徵すべきは此の一節の外あらず。

余は素より三成を佞姦とは斷ぜず、又誠忠孤忠の士とも信ずる能はず、加藤清正は世間豐臣氏に忠節なりし人とし、吉田松陰先生の如きは、所謂六尺の孤を托すべき人なりと嘆稱したりき、稿本の編者は却つて清正を貶して三成を揚げたり、清正の如き假令忠悃と雖も武功一偏の士のみ、愚戇にして幾んど智惠才覺あることなし、隨つてその行事を後より視れば、非議すべきもの少からざること恠むに足らず、然れども三成の如く智惠才覺の逞しくして、形勢を測るに敏明なりしものが、聵々乎として淸正正則等と擇ぶ所なかりしの理はある可らず、而かも其の行事の結果よりいへば、三成の

豐臣氏に不利なりしと遙かに清正以上なるは何ぞや。

試みに政所派と淀君派との抗爭に視よ、關白秀次謫死の一條に視よ。

秀次は獰猛なる剛將なり、其の臣木村常陸之介の如きは秀賴の忠臣重成の父にして、氣幹ある剛邁の士なり、若し能く此の君臣を輔導せば、豐臣の一家に取て實に有力なる支柱たるべかりき、三成の智にして而して眞に豐臣家に忠誠ならば、何が故に百方之を諫めて正順ならしめざりしや、何が故に苦心之を救解せざりしや、三成眞に家康を豐臣家の仇とし、成敗を量らずして之を除かんとしたる程の忠誠あらば、何故にまた其の力を秀次の擁護に用いざりしや、余は此の一事に於て先づ三成の心術を疑はざるを得ず、素より淀君に媚び、淀君の意を迎へて秀次を構陷したりしとは想定せざるも、然るも其の心事は疑はざらんと欲するも得ざる也。

秀吉の勢威は、雷霆の如く中外を震懾せしめたるが如きも、是れ後世の想像のみ、勿論之を雷霆の如く恐れたるものも當時多少は之あらん、秀吉麾下の諸將に至ては、互ひに相敵視し紛爭して、往々秀吉の制令にすら遵はざりき、其の協力して豐臣氏に忠誠を攄んずるか如きは、極端にいへば到底望む可からざりし事也、現に秀吉の病重りて、諸將に諭すに協同して秀賴に奉仕せんとを以てするや、諸將多くは曰へり『若君（秀賴）のために粉骨して奉公すべきは仰せまでもなし、但し宿怨に至ては各々由緒あり、親睦すべくも覺へず』と、彼等が病める秀吉に對して忌憚なき實に斯の如し、秀吉は家康に托して辛うじて諸將を屈服せしめたるも、諸將は秀吉の饗應を受くるに方つて、更に席次の高下を爭ふて紛擾を極め、家康の威壓に依て辛ふじて鎭まりたりき、而して秀吉は之を悅びて泣けりといはずや。

秀吉の麾下の士の斯の如くなりしは、三成等が平生專恣なりしとも確かに其の一個の原因なり、秀吉の閨閤頗ぶる正しからず、女權女謁また稍々盛んなりしが故に、麾下の士多く援引して比周し朋黨し抗爭したり、

現に淺野、加藤、福島等は秀吉の正妻北政所の威族なりしがために、專ら政所のためにし、而して三成は小西增田等と秀吉の愛妾淀君に黨して之と對抗し、殊に秀吉の沒後は、嗣君たる秀賴の母たるがためか、最も淀君に仕ふる心篤く、五奉行を率ひて專ら淀君に盡して却つて政所を疎外し、竟に政所黨を驅りて家康の味方たらしめたりき、愚直なる淺野福島加藤の徒ならば知らず、識度三成の如きものにして、眞に豐臣家に誠忠ならば、何が故に斯く紛々として相抗爭したりしや、三成の智にして豈諸將の相反目し抗爭するの豐臣家に取て最大不利なるとを知らずと謂ふべけんや、知つて而して尙ほ斯くす、果して豐臣家に忠誠なりと做すべき乎。

　三成は秀吉の執事にして又秘書官たりき、其の智辯才力は實に秀吉をして悅ばしめたりしならん、然るも三成が秀吉に信用せらるゝに乘じて、往々我意の振舞ありしと蔽ふ可らず、當時武勳の重んぜられて文勳の賤められたると言を俟たずと雖も、愚直なる淺野加藤福島等が三成を憎惡するの深かりしこと、必らずしも尋常の偏執のみには非ず、三成眞に誠忠の士ならば、彼等如何ぞ之に感孚せざるあらんや、彼等假令頑迷執拗にして感ずる所なしとするも、三成の才智を以てして、而かも豐臣氏のために誠悃の至情あらば、一身を犧牲にしても尙ほ調和し協力して豐臣氏のためにするとを謀るべきにあらずや。

　且つ三成が往々にして威福を張り、征韓の役にも、事を以て淺野長政、黑田孝高等と隙を生ぜしが如きは、果して誠忠なる人物の擧措と稱すべき乎

　詮ずるに、三成の人格を以て誠忠又は孤忠と做すと、少くも疑問たり、其の反對の心證とすべき資料は多きも、之を是認すべき史實は余不幸にして未だ多く認むると能はず、稿本石田三成に於て、獨り三成を豐臣のために誠忠又は孤忠なりしとし、甚だしきは武士道の骨髓を得たるが如く言做すに至ては、寧ろ辯護に過ぐ、法廷に於て姦賊凶徒だも尙ほ尋常士人の如く言做す辯論ならば知らず、苟くも一種の歷史として、眞實

に三成の心胸面目を明瞭ならしめんと期せば、斷じて輕卒なる判定を下す可らず、稿本石田三成は、朝吹氏が少からざる義心を以て、少からざる資を投じたりと思はるゝに拘らず、憑據すべき史實の淺薄にして而して批判の輕卒なるは頗ぶる惜むべしとす

若し其れ之に由て、俄かに三成を揚げんとするが如きは寧ろ思はざるの甚だしき也、余は未だ三成を以て野心のみ大なる佞姦とは斷定せざるも、之を以て豐臣氏の忠臣と做すべき資料を有するに至らず、否、稿本石田三成を讀みて竟に斯る資料を發見し得ざる也

# 獨逸の社會に於ける日本及日本人

藤井健治郎

此處には一般に獨逸の社會と言つたけれど、實は南北兩獨によつて、大にその間に差異のあることを言はねばならぬ。又南北兩獨と言つても、それは學者若くは政治家、軍人といふ方面に就いて言ふてはなく、一般人民に就いて言ふ考である。大體からいへば、南獨の方では日本及日本人が大に持てゝ居るので、北獨の方は少々勝手が違ふやうです。南獨では、私共が學校へ行きましても、集會へ行きましても、乃至一定の料理屋へ行きましても、日本人とさへ見れば忽ち多くの人がその身邊に集り來り、日本に關する談を聽きたしとか、或は日本の切手を欲しいとか言ひて、日本及び日本人を非常に歡待する傾があります。のみならず私がミユンヘンに居りました一年間に於ても、同市發行の諸新聞紙上て、未だ曾て一度だに「黃禍」なる語を見なかつたのてした。特に私の讀んて居た「ミユンヘンナー、ナハリヒテン」といふ新聞の如きは、殆んど每日の樣に日本からの電報、或は日本に關する倫敦、巴里其他からの電報、尙ほ又論文、記事て日本の舞踏、庭園、或は日本の新聞或は日本の木版等、殆んど有らゆる有形無形の文明に亘つて、時には批評し時には敍述

をして居つた、が斯程迄に注意して居るに拘らず、而も一度も「黄禍」といふ文字を見たことは無かつたのです。それから見ても南獨に於ける日本及び日本人の位置の如何なる者かは略ぼ想見出來る譯です。然るに北獨の方は少々違ひます。昨年の十月になつて私は伯林へ參りましたが、其處で新聞を讀んで見ると感觸が非常に變る、即ち「黄禍」なる文字が度々見えるのです、「黄禍」なる文字が見えたとてそれだけなら何でもない、黄禍といふは謬見なりとか僻見なりとかいふことならば、左樣な文字が續出したとて何でもない。然るに殘念なことには、その「黄禍」なる文字は駁論に用ひられては居らぬ。之は我々日本人に取つては甚だ不快のものであつた。私の讀んで居ました新聞は、ベルリーナー、ロカール、アルンツアイガアと言ふのでしたが、それは伯林市の猶太人の機關新聞です。猶太人といへば誰も知る如く、社會上に於て、政治上に於て、常に他の白人種から迫害を蒙つて居るから、從つて彼等の財政及び經濟に關する意見でも、將た政治上に於ける意見でも、何時も時の政府及び時の思想界に反對して居るのです。而かも猶ほ彼等は、我々外國人に對する時には、敢て「黄禍」なる語を用ひて意とせぬ有樣であります。のみならず更に南獨とは奇怪な對照だと感ぜしめたのは、彼等の直接我々に對する態度であります。前に御話申したやうに、學校へ行きますと、南獨では常に身邊に話敵を見出したのが、伯林大學に於ては殆んどそれが無かつたのです。尤も伯林大學には昔から多くの日本人が在學して居るから、從つて彼等の眼には南獨程に日本人が珍くないといふ、之も確に一原因をなしては居らうが、一つは又彼等の思想内に於ける日本なるものが、そも如何樣な位置を占めて居るかは略ぼ推定出來る。

加之北獨に於て特に見逭すべからざる點は、彼等が日本人といふと、或は軍隊の事でも、或は工業の事でも、著しく秘密主義を取つて居るとてす。この日本の工業家などが遙々工業視察に出掛けて行つても、彼等は容易に見せることを欲せないのです。私の知人に或る

工場の技師がある、其人が自分の從事して居るのと同種の工場の視察や、器械の買入やの用務で參りました、その器械は專賣特許であつたのですが、技師は先づ器械を買ひ入れる前に、實際の使用法が見たいといふので、その意味で專賣權所有者に賴み込んだ、處が彼方では應じない、日本人は何時も買ふ〳〵といつて見せて貰ひ、見て了へば、何の彼のと故障を付けて買はずに濟ます、それだけならば未だしもだが、國に歸ると自分の見て來たものを少し變形して別に製作する、即ち彼等は巧に法律の網目を潜つて他人の專賣權を犯すとをする、それ故に絕つて御斷りをするといふのであつた。又之も或る友人に就いての話だがその人はシレジア地方へ工場視察に出掛けたのだ、勿論凡ての禮法に於て缺くることのない樣に、然るべき人から然るべき紹介を得て行つたのだが、其處でも矢張り斷られて了た、自分の工場は自分の爲に建てたので、他人に見せ樣とてではない、それ故御覽に入れることは堅くお斷り申すと、先づ此樣な挨拶ぶりで、中々木で鼻を括るといふ風であつたといふ事だ。此等で見るも北獨に於ては一般に中流以上の人々の頭には、如何に日本人が解せられて居るかが知れる。

軍隊に於ては此秘密主義は一層甚い、以前までは斯うでも無かつたそうである、隨分彼地に居る日本の陸軍士官などに、容易に彼等の軍隊內に入り研究することを許したとも聞いて居たが、今では出來ぬ、彼等は交換問題を持出して、一人の獨逸の陸軍士官を日本の軍隊內に入れることを許すならば、我獨逸でも亦一人の日本の陸軍士官を軍隊內に入れてやらう、二名ならば二名、三名ならば三名といふ樣に、日本と獨逸と互に頭數の平均を保つて行かうといふ。此樣な鹽梅である。

が、之は只日本軍人だけであつて、支那軍人に對しては全然反對である、昨今の處では、支那軍人は獨逸の軍隊內に於て大もての姿である、支那軍人なら幾人でも來い、來ただけは殘らず敎育してやらうといふ有樣でもあり、又實際に於ても支那軍人は全然獨逸の軍

隊内に居つて獨逸の士官と同樣にされて教育を受けて居る。之に關して面白い事實も多いが、時が言ふを許さぬと思ふから止す。

以上は兎に角南北兩獨の相違を、大體に亘つて語つたのだが、以下少しく一般に亘つて彼等の社會に於ける我々の位置を述べて見やう。ざつと言ふなら先づ斯う言へやう、一面に於ては日本人を買ひ被つて居るものがあると同時に、他面に於ては日本を依然東洋の一未開國と見て居るといふ風に、究竟二種類ある。此二種類の間に立つて、能く中正の見解を有つて居るものは極めて稀な樣である。日本を買ひ被つて居る方の側では、何でも日本の事とさへ言へば可いもの〻樣に思つて、我々日本人の耳には餘り御上手過ぎはせぬか、阿諛ではないかと思はれる程だ。日本の教育、日本の歷史、日本の美術工藝といふ樣に凡てを褒め廻る、が之に反して日本を見下げて居る側では日露戰爭に於て偉ひ彼等は奇勝を占めたとはいふもの〻、何も偉ひ國民では無いなど〻、所有る方面に此流義で、猶だ未開野蠻の域を脱せぬと見て居る。唯學者の一團があつて能く兩者の間に立つて中正の見解を下さんとして居る。て又日本に就いての研究が彼等の間には始められて居る。それ故學者の思想界に於ける日本及日本人の位置が、一番先づ正しい意見と見て宜からうと思ふ。近來は日本に關する書籍の多いこと。英米のそれには劣るかは知らぬが、隨分多い。彼等の間には、或は日本の歷史を專ら研究したり、或は日本の教育制度を調べる人があり、又或は日本の道德宗教に於ける特種の研究に從事したり、或は工藝美術を調べたりして居る人もある。

私の最近に讀んだものでは、曾て東京帝國大學の法科に經濟學の教授として來て居たことのある、ラートゲンの書物で、一冊は「日本の經濟生活」一冊は只「日本」と題するものだ、ラートゲンの書物は我々日本人から見たら寧ろ公平であらう。日本の弊所を擧げては居るが。同時に日本の長所をも認めて居る。又ナホッドといふ人がある、富有の一紳士である、此人も亦日

本に就いての研究を始めて、つい昨年の春である、「日本歴史」といふものを著した、猶だ此書は完結にはなつては居らぬ、その第一卷には大化の御一新までを書いてある。ナホッドといふ人は、日本語も出來ず、又日本にも來たことのない人であるが、彼等の使用し得る、有らん限りの材料を使つて居るので、非常に勤勉なる研究たることは明かで、彼は誓つてその歴史を大成するといつて居ります。又ライプチッヒ大學の歴史學教授ラムプレヒト博士の研究室では、今度大仕掛の日本歴史の研究に着手せられ、日本から約二千圓の書物を取り寄せたのである。その他一場の講演、一片の論文として、新聞、雜誌に見ゆる日本の問題は隨分尠くない。而かも啻に現在のみではなく、遠く既往に遡つてまで研究をして居る。であるから今日の處では未だ日本に關する立派な研究が出來て居ぬとはいへ、これから幾數年の後には今日の研究の結果は必ず生れて來やうと思ふ。

彼等の爲す研究の範圍は頗る廣い、唯經濟とは限らぬ、道德、宗敎とは限らぬ。日本の美術、工藝に就いても色々の研究をして居る上に、更に日本の昔の壁書とか聽書とか、或は古の名著で修身道德に關するもの、或は武家の心得、德川百ヶ條といふ樣なものをまで翻譯に就いて研究して居る。

彼等は如何に我々を見て居るか、試にラートゲンの日本人の性格に對する批評の一節を引用しやう。

「日本人は武士的の精神或は、忠實或は奉公といふ精神に於ては非常に强い、即ち國民的意識に於ては非常に强い此點では殆んど諸列强の間に比肩すべきものを見ぬも知れぬ、それと同時に弱點をいへば、個人性に乏しい國民である、何も創意あり、新機軸を出し得るといふ國民ではない」

といつてある、之は奇警な議論ではない、凡人の凡見でもあらうけれど、然し暫く日本に居た、ラートゲンその人の口から之を聽いたとすれば頗る意味あることと思ふ。

南北兩獨で多少の違あるには相違ないが、推しなべ

て獨逸人は個人としていへば、それ程嫉妬心の深い民族とも思へぬ。寧ろその方からいへば、餘程親み易い親切心のある民族であるにも拘らず、斯かる民族が國家として働く時には、兎角或は猜疑心、或は嫉妬心じやなからうかとまで、我々をして思はしめる樣な多くの點の見えるのは奇怪な事である何等から誤解が其身に潜在して居るのであらう。近次の米獨の關係は如何か獨逸のローズヴエルト大統領に對する態度は、目醒ましい程その意を迎へるやうである。伯林の大學にはローズヴエルト圖書堂あり、又今年教授交換の爲めに來獨されたハーゼス教授の就職式の際などは、皇帝自ら音頭を取つて學生一同之に和して、ローズヴエルト大統領の萬歲を唱られたこともあつた。

兎に角日本といふことは獨逸の到る處にもて〻居る何處の集會に行つても日本は花形役者である、或る學會に於ける講演の題目が、日本の事であつたらそれは非常の聽衆を集める。」

(終)

右は藤井氏の談話を筆記し且つ同氏の訂正を經たるもなり(編者識す)

# 桂、西園寺時代(下)

無名氏

戰時中に於ける桂内閣の功罪は今之を論定するには少しく早きに失するの感がある。然しながら其首相たる桂侯爵は如何に其間に處して功勞あるかといふことは何人も之を認めぬものはない。假令熱心なる反對黨て、其功を認めない者までも、少くとも其勞は認めて居る。余は此際に於て只一言いはねばならぬ事がある。それは例の媾和問題である。素人に於ては媾和は桂内閣の一大失敗である。然し黑人の眼に於ては之が一大成功である。戰爭を初むる事もよき潮合を計つて初むるは容易の業ではないが、之を終る事によき潮合を計つて終ることは最も六づかしくある、凡そ敵の怒を招ぐは易けれども味方の怒を招ぐは難くある。然るに日本の多數の意見—といふとは或は正確を缺くかも知れぬが、其感情を相手として媾和の大計を定め、且つ萬障

を排して之を實行したるは非常なる勇氣、非常なる見識といはねばならぬ。桂はこういふ事を言て居つた。自分は軍職を帶びて居る身であるから陛下の命であれば何時でも戰鬪線に出なければならぬ義務がある。かゝる場合には豫め一命を覺悟してかゝらねばならぬ。今日は其決心を轉用する迄の事である。假令之が爲めに如何なる禍害を引受けても己れ一身の上にならば國家の爲めには斷じて行はねばならぬ。之れは正しく彼の覺悟であつて必ずしも多くデスカウントする、割引する必要はなからう。此媾和の時に於て獨り超然として贊成の演説をしたのが西園寺である。是れが即ち西園寺が桂の後を引受けたる主もなる動機である。當時西園寺の政友は隨分其總裁が向ふ見ずの演説をしたとて批難したものあり、或は愁訴して之を取消さしめんとしたものもあつた。然し西園寺は男らしく其所信を公言した。之れは桂と豫め打合せのあつたからであらうか、若くは期せずして一致したものであらうか、夫れは他の推量に任せ置くとして、兎も角も西園寺に於て多しとすべきである。只彼が之を世間の耳に徹底すが如く強く高く之を繰り返さゞりしは些か遺憾であるけれども、彼の性格として先づ致し方もなからう。それから桂の內閣を讓り渡したる手際は寧ろ其自ら受取つた時の手際に比して幾層も上手である。何れの內閣も其辭職の手際は之れといふ程のものは絕えて無くして僅かに有る程である。伊藤內閣や松方內閣は殆んど大人の姿も碌に整ふて居らなかつた。大隈內閣の瓦解に至ては禽奔獸散であつた。處が桂內閣に至ては大石藏之助が赤穗城を渡した時でも之れ程整頓した事はなかつた。殊に渡す人と受取る人と手を握て別れたるは殆んど我立憲政治主義に例のなき例であつた。之れは何處迄も桂式に渡し、西園寺式に受取つたといつてよからう。

桂にせよ、西園寺にせよ、今尙未來を有する政治家である。だから彼等に對する論評は今日に於て終審といふ事は出來ん。然し彼等は何れも成熟したる政治家であるが故に彼等が今後の遣り口も略ぼ之を推察する

ことが出來る。一言にしていへば西園寺は天品を頼み、桂は勤勉を頼む、西園寺は殆んど豫定の準備なくして當局の事を受け流し切り抜けて行くが、桂は出來得る程度に於て準備もする、計畫もする。西園寺は餘り物に執着せない風であるが、桂はなか／＼執着する。只行はれない事を強て行はんとする程の冒險家ではない。桂は近人に於ては恐らくは山縣と伊藤に私淑して居るのであらう。或は其骨を山縣にして其肉を伊藤にして居るかも知れん。彼は創造の天才ではないけれども、他人のよい考を吸收するに於ては非凡の能力を有して居る。世間では彼を才子といつて居るが彼は或點に於ては寧ろ遲鈍である。而して其遲鈍が彼の强點であらう。彼の歌に（彼は西園寺の如く文雅の心得はなけれども）「一日に十里の道を行くよりも十日に十里行くぞ樂しき」といふて居る。之れは如何にも桂式の歌で彼の一切の本領が之れに活躍して居る。彼れは進歩的保守黨といつてもよく、又保守的進歩黨といつてもよい。彼はよく進歩の味を解して居る。然し如何なる場合ても一日に十里の道を行くよりも十日に十里を行く政治家である。又一つ彼の特色といふは如何なる面倒なる問題でも一度び彼の手に觸るれば忽ち角を生ずといふが如く彼は如何に四角なものでも之を丸くし、若くは丸く見えしむる魔力を持て居る。之れは彼のタクト（手練）である。西園寺は寧ろ謙讓して他人に働かせて其上前をはぬる事を得意して居る。それで桂内閣では總ての事を桂一人でする傾があり、西園寺内閣では自分がせなければならん事も之を放任して置く傾があるのである。（完）

# 海舟論

文學博士　三宅雪嶺

維新の變は他國に例無きことなり、名と實といはんか王者と覇者といはんか、兎に角二人の主權者並び存せしが、外國と交通の開くるに及び、時勢は之を促して天皇の下に國家を統一するの避くべからざること、

はなしぬ。將軍に從へるものより觀ば、見す々々權力を奪はるゝの嫌なきにあらずされど大體よりすれば、萬乘の天子を奉ずるは斧鉞の爭ひ難きところ、稍々達觀の明あるものは概ね之れに傾けり。特に最後の將軍慶喜公は尊王の本家ともいふべき水戸より出て、初より之れに傾きしは言ふ迄もなく、海舟翁を始め、大久保、山岡等の諸氏亦之を助けにき。これ固より事の然るべき所なりしかど、以前の習慣よりせば、幕臣は將軍を無二の君主として奉じ、新に異なる君主を戴くは如何に道理とはいへ少くも情の上にて面白からず、まして實際の經過には薩長等の大藩に脅迫せられし跡あれば、尙ほ一層面白からず覺えつらん。單に勢の已むを得ざる所に從ふとせば、他國に打ち負けて之に屈する場合も亦同じ、恭順說を排斥したるの論據は實に此處に在りしなり。斯る苦境（ヂイレンマ）に臨みては人多く惑ふべし、或る程度まで恭順を是認し、而して或る程度まで之を否認せん。

普通の順序にては、恭順して凡てを朝廷に歸し、斯

くて干戈の禍を避け、全力を擧げて外國に對するを得しめたる後自らは全く官職に就かず、別に宜きを求めて動くを可なりとすべし、栗本鋤雲の如きは恐らく斯かる意向なりしならん。彼は幕府の滅亡を悲みて已まず、飽く迄之が爲めに盡さんと欲したりき、されど彼れ世亂の最中佛國巴里に駐在し居りしが、當時佛國政府は幕府に貸すに軍艦七隻及び陸軍若干隊を以てせんことを申出でしも、外國の兵を借れば後難測るべからずとし、遂に斷然謝絕し了り、歸國の後は心を世紛に絕ち、文墨を友として餘生を終りたり、實に前代の遺臣として終を全うせしなり。此類は他にも尙ほ在り、福澤氏が瘠我慢說を書き、勝、榎本二氏に贈りしも、斯かる態度を取らん事を望みしならん。瘠我慢說や誠に一理あり、而も海舟翁には別に見るところありしに相違なし、さる瘠我慢說を事とすべきか、將た別に國家の爲に我が才能を伸ばすべきか、必ず此邊に慮かる所あり、德川氏に盡すには、自ら道の取るべきあり、我が才能を以てして尙ほ別に大に國家の經綸に從ふべしと

爲したるが如し。

或る人翁を訪ひし折、翁は、當代誰か尤も豪傑なるかと問ふ。先づ西郷、大久保、の諸公ならんと答へしに、翁は何の故に爾か思ぞふといふ。さればなり、維新の際に彼の如き大事を成したればと答ふ、翁は乃ち、そは皆予が彼等に教へしところぞと言へり。此教へしといふ語は必ずしも一々策を與へしといふ意味にあらず、當時國家を如何に處するが最も善きかに就いて、翁の眼識の他に一歩を先んじ居りしは確實なり、南洲と雖も翁に接して始めて敬服したりと云ふ、大勢は翁の豫想せし如くに轉じ來れるもの、從つて維新の變を以て、全く勝、西郷の兩雄の、談笑の間に成れりといふも妨げず。されど事の比較的容易に進捗せしが爲めに、翁は稍々自ら許すの大なるものあらんとしたり、天下の大人物と稱せられし南洲が己の意見を容れ能く大任を托して疑はざりしより、二人手を携へて事に當らば如何なる經綸も立ろに成ると信ずるに至れり、夫の木下川の南洲祠堂に、先生を知るは我に如くはなく、我を知るは先生に如くはなしと書けるも此の信念より出でたるべし。而も翁は時勢よりも餘りに重きを人物に置き、西郷と結託しさへせば事濟しと思ひしこと、その平素の驚くべき烱眼に比し、少しく怪むべからずとせず。南洲の師となりて事を爲さば、頗る爲し得べきの多きに相違なけれど、之を助くるは決して容易の事にあらず。政治を如何にすべきか、陸海軍を如何にすべきかといふに於て一々聽從せしめ得るも、南洲關係の事は是れのみにあらず、薩摩より附き纏ひ來たるもの多し、子分とも爲り參謀とも爲れるあり、南洲は子分と與に進み、子分と與に退くもの、南洲の爲めに計るに此等子分の爲めに計らざるべからず、此等子分の始末を附けざる限り、到底永く南洲の黑幕たる能はず。故に翁は一たび海軍卿として廟堂に入りしも、征韓論の破裂してより事意の如くならず、續いて十年の亂あり、南洲を初め一味徒黨のもの盡く亡失し、復た爲すべき無き有樣となれり。翁は實に之を未然に防ぐを得ず、之を防ぐを得ずんば從つて經綸の才の伸び

ん機もなく、爾來已むなく徒然に過ぎぬ、翁は斯くして明治政府に顯著なる功を立つる能はざりしなり。かゝる結果に終るとせば、始めより明治政府に仕へざるの可なりしやも知るべからず。

されど翁とても一個の江戸ッ兒なり、能く時勢に通じ居るとはいへ、他より至誠を以て依賴し來れば乘氣になりて何事をも爲さんとする狀あり。南洲が始め翁に大事を計りし時、實に此人ならば大に力を致さんと思ひし上に、幕府既に瓦解して凡てを朝廷に歸したる後、身幕臣にして大事を爲すには、必ず朝廷側の最も勢力あるものと提携するの要ありと考へたるべし。されど長洲人は赤心を推して人に依賴するものにあらず、薩摩人は此と違ひ、智慮の足らざる點は能く他人の力を以て補はんとする大度らしき處あり。即ち薩摩人は俠氣ある江戸ッ兒の心を得るに適せりと爲すべきにや、自然の勢として、幕臣にして朝廷に立つものは薩人と事を共にする傾向ありき、翁の南洲に於けるは、その最好例とす。

榎本子も黑田伯の下に相應の働きを現はし、伯が晩年振はざりしとともに、自らの活動も止まりたるが、これ亦江戸ッ兒が薩人を信じたる好例なるべし。松隈內閣の破れんとする頃、島田三郎氏は時の內務大臣樺山伯に說き、當時の趨勢よりして、斯く〳〵の人物を入れ斯く〳〵の政治を施すが宜しからんといひしが、その際伯は一々之を首肯せり、島田氏は伯の誠實を以て承諾したる以上、事必す成らんと思ひしに、豈圖んやその後伯は全然忘れたるものゝ如かりき、爾後島田氏は大に伯に快からずといふも、これ亦江戸っ子の薩人と事を共にせんとしたるものゝして、唯樺山伯が聊か西鄉、黑田と徑路を異にしたるあるのみ、

兎に角薩人の態度は往々江戸ッ兒の心を得るところあり、翁の南洲に於ける如きは、その最も大なるところを得たるもの、唯事が所期と違ひしのみ。南洲が征韓論にて野に退き、十年に城山にて斃れしなど、翁に於ては寧ろ豫想外なりしならん、智慮に富めること彼の如くして、尙ほ此處まで透見し得ざりしの怪まれん

も、如何なる人も智力に限りあり、何事をも豫定せんは得て能くすべからず。當世第一の智者を以て居れる翁も自ら之を知らざるにあらず、或る人が翁を訪ひて、今より十年の後は如何と問ひしに、翁は、十年の後を言ひ得んには、人は勝伯といはず勝大明神と言ふべしと答へたりき。これ眞に實際の事なり、能く將來を透見して果してその如くなることあるもそは倖にして然るもの多きに居る、豫想の齟齬せしとて直に智力の足らざるを咎むるは謬れり。翁が南洲と國家經綸の任に當らんとし、事全く心と違ひたる事實より推し、初より官職に就かず、瘠我慢を通すを可なりとすべきに似たれど、その官職に就ける志は頗る諒とすべき點なきにあらず、但だ兩雄共に一代に傑出せる人物ながら、個人の力に限あるの證據立てられたるを如何ともすべからず。

さりながら翁は天下唯だ我と南洲となりといふ意氣にて、南洲在世の間こそ之と事を謀れるにせよ、その死後は共にするに足るものなしと決定せり。その後政府の事に與かり關せること少し、寧ろ瘠我慢を張り通して時の權勢家を小兒視することゝ爲りぬ。翁は事を謀ること極めて綿密にして他の依賴を受くれば孜々奔走する方なりしかど、抱負は尋常にあらず、小丈夫能く何事をか爲さんといふ意氣込にて、南洲以下の人物と事を共にせざりしは、飽くまで瘠せ我慢を張り通したるなり。福澤氏は瘠我慢說を作り、之を翁に贈りしも、翁は決して瘠我慢の無き人物にあらず、南洲以下の人物と事を共にせずといふ點に於て、頗る強き瘠我慢あり、福澤氏の或る依賴を受けて意見を陳ぜしに比し、層一層瘠我慢なりしと謂ふべし。

後に政府に對し全く貢獻する所なしとせざれど、却て海軍省の爲めに舊幕海軍の調査をなしたるの効益多きを稱せざる能はざるべし。而もこれ海軍關係の人に益するのみとせんか、さらば世間一般の爲めに晩年放言を恣にしたるを稱すべし。放言を以て益ありと爲し得ずんば、少くも興味を添へたりと爲すべし。彼の如き放言は他人の口よりして聽くを得ず、句々盡く瘠我慢

より出でにき、其の點に於て全く榎本子等と選を異にせるなり。さあれ、翁の功業といへば維新の際に於て絶頂に達し、その後の事は餘波たるに過ぎず。大隈伯は開國五十年史に元老の寫眞を收めず、獨り慶喜公一人を入れて曰ふ、公は維新前と維新後との二人あり、此處には即ち前者を入るゝのみと。翁に在りても亦然り、維新後政界に働かんとしたりしは、翁に取りての思ひ損ひたりしのみ、若し維新後南洲が政府の中心となり、永く活動し居たりしならんには、翁の功績も大に顯れ得たるべかりしも、かゝるは一時の夢想に止まり、その手腕の何處まで伸ぶべきやは遂に事實の上より判斷し難く、いはば餘音嫋々たる姿にて終はれり。若し露國に生れて意志堅固なる皇帝の信認を得たりしならば、必ず大なる働を爲したるべく、恐らくはウイッテ等の及ぶところに非ざるべし、將た瑞西に生れしならば、ブロッホの非軍備説よりも更に有効なる説を傳へ、世界の平和の爲に斡旋したらんとも思はる。翁は中心平和を望みたり、三百年來の都城を明け渡したるも、漫に人命を損するを痛みし所なしとせず、その後戰といふ戰には愉快を感ぜず、眞に平和の意味を解し居たりしものゝ如し。されど重ねていふ、海舟獨得の事業は維新に始まり維新に終はり、他は準備若くは餘波なりと、此の如きは成功といふべきか、又は不成功といふべきか。

記者一日三宅博士を訪うて勝海舟翁に對する論評を聞かんことを求む。右は博士が其乞を容れて談話せられたるを筆記し、博士の訂正を經たる者也　（編者しるす）

# 出でよ新靖献遺言

山路愛山

（一）

今の世は克己論のさかさまが流行す。己を獻ずるとか己を棄てるとか申すとは野暮の骨頂なりとありて己を肥し、己を富まし、己の領分を廣くし、成るべく世間より己の餌養分を吸收して肥へふとりたる男を成功したる人物なりとて珍重す。然るに古人に對する褒貶

に至つては現在の實行とは裏表にて一生貧乏して暮らしたるものに贈位などの沙汰あり。己を献じ、己を棄てゝ世の爲めにするが善きか、己を肥し、己を太くし世間を己の喰物にするが善き乎。少年などは分別に惑ふべし。我等近頃此問題が氣になりてたまらず。頭を割つて思案したる結果、殆んど昨非を悟りたるの感あり。遼東の豚なるべけれども少々懺悔すべし。明治の時代に教育せられたる我等は時代の癖にかぶれて氣隨に育ち、功名は仕勝ちなり。人間は面白く樂なるもののみと心得、靖献遺言などを讀めば馬鹿馬鹿しきことなり。あの樣に生命の安賣をするは常識に外れたることなり。自由の天地に自由の働をして安樂にくらすが人間と生れたる德なり。それも自分のみ安樂にせんとならば何やら氣の濟まぬことなれども、國民の安樂、天下一統の泰平を目安に働きたらば誰れか何と非難すべきぞ。我等は人生の幸福が目的なり。聖賢の意も畢竟これに外ならずなどゝ、自分免許の道德論を立て、實は功利教に滿足して、廣い世の中を狹く送りたる古人を内心にて輕蔑したり、さりながら深く思ふに是れは眞に恥づべきことなり。左樣の功利論に滿足して別に眼を開かねば人生の眞相は闇黑なり。つら〳〵人間の進步發達したる蹟を尋ぬるに何れも義人の血の痕に非るはなし。人間は道理を說き聞せたりとて素直に其通りになるものに非ず。人を動かすには身を以て摸範を示さねばならぬことなり。吉田虎次郎にても、久阪義助にても、近くは大久保甲東にても、利口に世を渡りたらば戰死するにも、刺客の刃にかゝるにも及ぶべからず。さりながら諸君若し身を以て其道を證せずして一身の安全を計りたらば天下の事、果して今日の如くなり得べきや否や。我等斷じて其不可なるを信ずるものなり。常識の說教者に言はせたらば死んで花が咲くものかとも云ふべし。命有つての物種とも云ふべし。人間の一大功なるものは生命なり。其生命を失ひては萬物を失ひたるも同然なり。生命だけは如何にしても取止めねばならぬと卑怯なる振舞するもののみならば天下は遂に腐敗すべし。されば犧牲、克己、時としては沒我の

精神と事業とは社會進歩の根底なることは疑ふべからず。然るに此精神は果して功利教にて養ひ得べきや否や。功利教は人をして身を殺して仁を爲さしむる有力なる動機を人間に與ふるものなるや否やと反問するに否と答へざるを得ず。我等も此まで考込んでは今まで輕蔑したりし靖献遺言に降參せざるを得ず。靖献遺言は馬鹿者の福音書なりと思ひし我等も今は靖献遺言の信者とならざるを得ず。三十年の讀書も、漸く只今になりて靖献遺言の難有味を知りたりとありては識者の笑ひも耻かしけれど實情を告白するものなり。

（二）

亞米利加にて出版し日本の書生の間にも行はれし「プッシング、ツー、ゼ、フロント」と云ふ書は所謂成功論者の金科玉條とも云ふべきものにて亞米利加魂を遺憾なく發揮したるものなり。功名は手に唾して取るべし。勇奮せよ。突進せよ　健鬪せよと青年を煽動するは亞米利加魂なり。自己中心論の具體的に現はれたるものが亞米利加なり。さりながら其亞米利加を築きたる土臺は草の根を嚙み、水を飲み、國の獨立、自由の權利の爲めに生命を棄てたる犧牲の精神なり。人生五十。苦んで血を流すは野暮なりとて戰爭に赴く勇士なかりしならば何ぞ今日の米國あるを得んや。此魂は則ち靖献遺言の魂なり。世の中を自身の肥料とするに反し、自身を世の中の肥料とする精神なり。成功を尊ばず辛苦を甘んずる精神なり。我等は此精神が無ければ其社會は基礎なきものなりと思ふ。自身のみ肥へたる富兒俗漢を尊崇し、新聞雜誌にて提灯を持ち、氣耻かしき偉人傑士の稱を與へ、御履歷を承りて後學の爲めに仕らん、致富の要訣を御傳授願ひ奉るなど、平身低頭して彼等の鼻息を窺ひ、其咳唾を拾つて難有そうに紙上に載せ、少年の我利心、慾心を煽動する人の心こそ心得ね。所謂社會の基礎は己を肥やす魂に非ず。己を以て社會の肥とする魂なり。此世の成功、此世の榮華を棄て、天下萬世の利益を計らんとする野暮なる心なり。此心が衰弱しては社會は繁昌せぬものなり。然るに今日にては此心の教養全く衰へたる樣なり。左樣の說教をす

れば氣違か馬鹿なりと思はるゝなり。我等はかゝる氣運に反抗せざるを得ず。

（三）

今の小説家なども此點に注意し、犧牲の精神の美しき所を寫して貰ひたく存ずるなり。江上の漁翁、毎日善き景色を見れども一句なし。詩題は在らざる所なけれども詩人なければ無益なり。たとへば肥前國高來郡の半島に溫泉嶽とてあり。賴山陽の西遊稿に一岳突出壓大洋。全國提封皆其腰とあるもの是なり又溫山遙面阿蘇山ともあり、指點溫岳巓。黑氣如蓋笠ともあるもの是なり。此溫泉嶽は名高き火山なると共に寛永三年以來數回、天主教信者を其溫泉の熱湯にて殺したるとにも名高き處なり、湧きかへる熱湯を背中よりそゝぎ掛けられ、その湯のかゝる處忽ち爛れて傷を爲し、或は背の上に熱湯を盛りし釣瓶を負はされ、汝の信仰を改めよ。さらば汝の生命を助け汝の榮華元の如くして得さ せんずとて官吏の苛責に逢ひながら毫も屈せず。否我は信仰を易へずとて死を熱湯に埋めて死たりし人の中には十八歳の少女もありしとぞ。其信仰の是非は兎も角も死に至りて其所信を枉げざりし犧牲の精神は萬世の鑑とすべし。日本人にもかゝる精神ありと思へば我骨も鳴る心地す。小説家若し取つて題となさば一篇の新靖献遺言たるべき乎。佐倉の木内宗五郎などは研究すれば研究する程人間の神らしき所を發見すべき歟。先日或所にて宗五郎子分れの淨瑠璃を聞きしに感に迫りて一大説教を聞きたるが如く覺えたり。かゝる問題を上手の小説家が捉へ得たらば日本人の成功論、我利論に狂氣せんとする今の人心を靜め得べしと存じ、誰れか書けば善いと思ひたり。我等は功利論、成功論、利口なる常識。天下泰平の奮闘主義の武蔵野のにげ水の如きものなるを知りたり。新靖献遺言の出づるをむや切なり。

（完）

▲前號に豫告したる中、德富蘆花氏のは都合ありて本號に掲載するを得ず。志賀矧川氏のは時日間にあはずして評論欄に載することゝなれり

（記者しるす）



# 獨逸上流社會の腐敗

山縣五十雄

近着の海外電報は獨逸首相ビューローウ公が議會に於て反對黨の攻撃に對し、獨逸上流社會の爲に辯駁する所ありしを傳へたり。反對黨の攻撃は頗る激烈なりしと見え ビューローウ公 は憤然たる態度を以て聲を勵まし獨逸今日の狀態を以て羅馬の末日に比する者あれど虛妄これより甚しきは無し、獨逸皇室の風儀は健全にして良家庭の模範たるものなりとの意味を喝破したりといふ。歷史を讀める人は羅馬の末日に於て如何に淫猥の風が盛なりしか、男女間の關係が如何に甚しく弛みたるかを知る。此亂倫の世の狀態を以て今日の獨逸に擬する者ある程に獨逸上流社會の道德は亂れ居れりや。火無き所に煙は擧らず、彼の如き不祥なる。攻擊が起りしにつきては必ず何等かの根據なき能はず。抑も其攻擊の因りて起りし所以は海外電報によりて屢々傳へられたるハルデン氏對モルトケ伯誹毀事件即ちこれ也。

　此有名なる事件の成行は詳細に近日の倫敦タイムスに由りて報ぜらる。これに據りて聊か知る所あらん。先づハルデン氏は何者ぞ。氏は伯林に於て發行せらるゝツークンスト新聞の主筆記者にして、其名をマキシミリエンといひ、頗る老巧の記者なりといふ、タイムスは氏の過去の經歷につき記して曰く、

　ハルデン氏の初めて名を擧げたるは十七年許り前のことにして、ビスマルクの信用を得たるに因れり。ビスマルクは嘗て氏を賞揚して「靜肅にして飾りなく、頗る世故に長けたる人なり」といへりといふ。ハルデン氏は鐵血宰相の知遇は感激すること深く、公が晩年に當り、全力を擧げて公の政策に味方し、公薨去の後は公の後を襲ひし政治家及び公の敵と思はれたる人々に向ひて絕え間なく攻擊を續け、其間二回不敬罪に問はれ、又誹毀罪の爲め罰金を課せられたることあり。

ハルデン氏の如何に忌憚なき言論家なるかは之によ

りて察知すべし。タイムスは更に記して曰く、

一昨年九月より昨年四月に至るの間にハルデン氏は八篇の論文をツハクンンスト紙上に掲げ、獨逸帝が親近の人々に向ひて、痛撃を加へたり。氏の攻撃の焼點となりしはフイリップ、オイレンブルグ公及び其友人の一群にして、ハルデン氏は此等上流の人々が男色に溺れ亂倫非行至らざるなく、常に皇帝を誘惑して帝の聰明を掩ふこと多しとの旨を巧妙なる筆を以て記述したり、然るに嘗て近衛の一聯隊に同樣の醜聞の傳はりし事ありしに由り、此記事は近衛將校の間に盛に論議されしに、偶々皇太子の聞く所となり。皇太子には捨ておき難しと思召されて直に其論文を閲讀せられたる後、皇帝に奏上せられたり。其結果としてオイレンブルグ公及び其朋輩は或は職を免ぜられ、或は位地を褫はれしが、此等の耻辱を受けたる人のうちに伯林市の司令長官クーノー、フオン、モルトケ伯あり、伯は自己の名譽を保護する爲め直にハルデン氏に對し決闘を申込みしも氏は之に應ぜざりしかば、伯は遂に個人の資格を以て誹毀の訴訟を提起したり。

此裁判は大に世人の視聽を聳動したりしが、昨年十月下旬に至り、公判結了してハルデン氏は無罪の宣告を受けたり、モルトケ伯は之に服せず、直に上告したれば、今後の成行きは如何なるべきか、豫め測り難しと雖も、此事件に由り獨逸上流社會の一部に道德の腐敗あることは明白にして、然も獨逸皇室は猶ほ超然として濁流の外に立ち、皇帝も皇太子も共に道德を維持するに熱心なることを知り得べく、殊に皇太子の聲望はこれが爲めに頸に上りしといふは誠に賀すべし。

## 神經過敏の米國民と空乏なる其陸軍

今の時米國人ほど神經過敏にして然も好戰の國民はあらじと思はる。彼等の頭腦は戰爭熱の爲めに混亂したりと見え、敵なき所に敵の幻影を見て狼狽惶惑する樣、他目に見るも氣の毒の至なり。青木大使の召喚は我々日本人の見て少しも異とせざる所、然るに米國人は之を以て日米開戰の前提の如く解し、彼等の言論界はこれが爲めに沸騰の光景を呈したるが如し。其如何に亂調子なるかは今の所僅に外國電報の傳ふる梗概によりて察知するを得るのみなれば、詳細の論評は後日の講究に讓り、こゝに大西洋艦隊の太平洋回航に對する紐育サン新聞の驚くべき論評を見ん。サン新聞曰く

ルーズヴエルト氏は更めて、我大西洋艦隊の全部を太平洋に移動する意志を發表し、同時に將官會議は海軍擴張案を可決したり。此時二つの事實は互に密接なる關係を有するものにして、當局者は頻りに大西洋艦隊の回航を以て練習の爲めなりと辯解すれど、吾人は日本人と共に此説明を以て虚僞なりと信ぜざるを得ざるを遺憾とす。其實我艦

隊は日本と戰はんが爲めに太平洋に向はんとするものにして、日本はよく之を察し、鋭意熱心これに對し準備を爲しつゝあり。蓋し艦隊の移動結了したる曉には戰爭は到底避くべからず。實にこれ狂氣の企なり。米國人は日本人若くは其他いづれの國人とも戰ふを欲せず、然れども今や米國人は大統領の企を中止せしむべき方法も亦望をも有せざるが如く、國會が之に反對すべき見込はなし。これ實に我國が今迄に際會したる最も重大なる形勢の一といふべし、此際僅に吾人が慰むるは我陸海軍の當局者が將に來らんとする危機の重大なるを知り。盛に活動しつゝあることこれなり。

米國人が如何に疑心に暗鬼を生じて、恐懼しつゝあるかを察知すべし。時も時、折りも折り、彼等の陸軍が誠に哀れなる狀態にあること笑止至極なれ。陸軍省は總ての手段を盡して兵卒の再服役を奬勵し、且つ新兵を得ることに努めつゝあるにも拘はらず、米國の陸軍は規定の兵力よりも兵數の少きこと三割五分の多きに及ぶとぞ。昨年米國の國會は海岸砲兵隊に五千の兵を增加するの議を協贊したるに『只に此等五千の增加兵を得ること能はざりしのみか、前に有したる兵のうちより二千人を失ひたり』とは砲兵隊本部の報告中にある一句にして、更に又米國人にとり患ふべきは、將校を得るの困難が同樣に大なることこれなり。同報告中に又曰く、『兵士は水の洩れ入る船を立去る鼠の如く或は脫營し、或は償金を拂つて、續々軍隊より立去りつゝあり』と。紐育のトリビユーン新聞は實例を擧げて曰く、

七年前の一月海岸砲兵隊の第十中隊が操練を行ひし時に其中隊の在せし兵數は百一名なりし、然るに昨年十月同中隊が練兵場に現はるゝや其兵數は僅に十四名に過ぎざりし　又先日故マツキンレー大統領の紀念祭がカントン市に擧行せられし時、これに參列を命ぜられたる步兵第七聯隊は、總て一千二百名の兵を有すべき筈なるに、實際に參列したるは四百六名にして、其中の或中隊の如きは僅に十名より成る者りなき。

何が故に米國の陸軍は斯の如く窮乏なるや。其原因につきてトリビユーン新聞は答へていふ、國內一般の繁榮、勞働者の受くる賃金の騰貴、及び勞働者の乏しきこと即ちこれなりと。蓋し米國の兵士が受くる給金は一ヶ月十三弗に過ぎず、然るに普通の勞働者は食と住との他に三十弗乃至五十弗を得ること容易なり、米國の若者が軍隊を去りて勞働者となり、商館の書記となり、掌車となり、賣子となり、火夫となり、其他同樣の職業に從事するは怪むに足らず。

此事實に對し、米國の識者は憂へざらんとするも豈に得んや、諸新聞雜誌はこの狀態の救濟につき種々の策を提起し、或は兵士の給金を上ぐるべしといひ、或

は進級の途を容易にすべしと說き、或は徵兵制度を實施すべしと論ず。獨り紐育のアメリカン新聞は樂天的なり、論じて曰く。

此形勢は決して悲むに足らず否大に喜ぶべし。これ實に米國の繁榮が頗る大なるを證するもの。我壯者は他に高き賃金を得る機會あるの際、僅に十三弗の給金を得て軍隊に入るを好まんや。然も軍隊の空乏は彼等が愛國的精神の缺乏を意味するものに非ず、一朝事あらば彼等は野を蔽して旗下に集り來るべし。

アメリカン新聞の希望が空望に了らずんば誠に米國の爲めに幸なり。

## 日本に對する反動

日露戰爭前及び戰爭中日本は世界殊に英米國人の寵兒なりき。殆ど總ての論客は競ふて我國及び我國人は賞揚し、我國は世界の樂園にして我國人は天使なるかの如く言て囃し、吾人をして一種の愉快を感ぜしむると同時に、あまりの過賞に屢々赧顏汗背せしめたり。今や其反動は來れり。曩に吾人を賞揚したるの聲は嘲罵と變じ、吾人は今や、英米の記者によりて、恰も惡魔の如く描寫されつゝあり中につきて最も甚く我國及び我國人を罵るは米國の文士ミラード、英國の著述家ダクラス、ストーリー、英國の新聞記者マッケンヂー等の諸氏にして、此等の諸紳士は極筆吾人に對して惡口を並べ、一より十迄吾人を非難せざることなしミラード氏は曩に來朝したる米國陸軍軍大臣タフト氏に隨從し來り、マッケンヂー氏も亦先日來遊したる由なれば、彼等は遠からずして、再び吾人に對し毒筆を揮ふべしと豫期せらる。然れども彼等の攻擊はあまりに無法亂暴にして、吾人はこれに對し憤激するの價値なし。唯如何に一部の英米人の我國に對する感想が急變せしかを見るの資料としては頗る興味あり

昨年十月發行の『北米評論』に現はれたるウイリヤム、チー、エリス氏の日本に關する論文も亦此種に屬するものなり。氏は劈頭日本人が如何なる性格を有するかを證せんとて、我國に在留する一外人の言を引用して曰く、「冷血にして勘定高く、私慾の強き點に於て日本人は世界に冠たり」曰く、「日本の小兒が樂みとする所は昆虫及び小動物を苦むに在り日本人は牛馬を虐待して快とす」曰く、「殘忍は日本人の共通性なり、一人の兵卒出陣に當り停車場に於て其妹に告別するに夢中となりて隊長の集れなる號令を聞かざりしに、隊長は

直に劍を拔きて即座に此兵士を刺殺せり、斯の如きものは常に日本の軍隊に行はるゝ所にして、辯ずる者はいふ、これ規律を正しくする所以なり」

エリス氏は、我國人を以て淫蕩亂倫の最も甚しき者となし、絶叫して曰く「吉原は亞非利加以外に如何なる國にも見るを得ず」と、氏は我軍が日露戰爭中に示したる人道をも疑ひて曰く「彼等が露兵に義足を與へ、其他の方法を以て示したる人道は畢竟西洋諸國民の眼を眩惑せんが爲めにして、決して眞實の日本を示す者に非ず、彼等が日清戰爭中に行ひたる旅順の虐殺に對し西洋諸國民が一齊に烈しき非難を加へたるに懲りて、彼等は世界の人が環視せる時のみ人道の模倣を爲す者なり」

エリス氏が吾人に對する攻擊の調子大抵斯の如し、氏は更に韓國に於ける我國人の行動を非難して曰く、

日本の兵士及び移住民が韓國に於て爲しつゝある行動は言語同斷なり。街道に於て韓人を打倒すは日常の事にして、一文の代金をも拂はずして韓人を其家屋より追ひ出し、代りて家に住居するは當然の事と考へらる。數千の韓人を强ひて勞役に服せしめ、彼等に賃金の影をも與へざるは「力はこれ權利」の一實例ならん。然れども彼等が力弱き韓人を打ち何の害をも爲さゞる外國人を侮辱し、其財產を奪はるゝに對して抗議する韓人を捕へ來りて之を捧抗に縛し、銃殺するに至りては野蠻に近しといふべし

エリス氏はかく憤慨して後、希望を述べて曰く「願はくはいづれの國民が起ちて彼等を打懲らし、彼等が高慢の鼻を打挫がんことを」と。吾人豈に戰慄せざらんとするも得んや

## 社會主義は戰爭を防止すべきか

社會主義を信奉する人はいふ、國に常備軍あるは資本主義の存在するに因り、戰爭の起るは財產私有制度行はるゝ爲なり、社會主義實行されなば戰爭は廢止さるべし、少なくも其起ること稀となるべしと。佛國學士會院の一員にして、經濟學の大家なるポール、ルロアボーリユ氏は此議論に服せずして佛國經濟雜誌(えこのみすと、ふらんすーず)に一文を掲げ、戰爭は財產私有及び資本主義に何等の關係なしと公言せり。曰く、

財產私有制度が戰爭を起し、且つ之を可とすといふは愚なり。戰爭の大多數が人種的嫌惡心及び民衆の感情に基く事は歷史の證する所にして、所謂資本家の利益なるものは戰爭よりも平和によりて多く增進せらる。商人、製造者、地主、資本家、一言にして所有者といふべき

者は實戰爭を懼るべきもの秩序を妨害して彼等にいつ滅亡を齎らすべきか計りがたきものと考ふ。彼等は軍備に反對する者に非らざれど、又飽く迄も平和を冀ふ者たるなり

ルロアボーリユ氏は南阿戰爭が實際南阿の金鑛所有者に由りて起されし事を承認すれど、然も他に一の動機あることを忘るべからず、即ち英國民の思想を浸染せる帝國主義これなりと述べ、進んで社會主義は却て戰爭の危險を大ならしむと論ぜり。曰く、

社會主義は戰爭の原因を殲滅せしめ若くは減少せしめざるのみか、却て大に之を増加すべし。若し社會主義行はれて諸國民の經濟的關係が國家の事に變ぜられなば、諸政府間の接觸衝突の點は非常に多くなるべく、現今個人の間に行はれつゝある衝突は悉く國際問題となるべし。試に商品の交易及び人民の移住のみにつきて見んに、もし諸政府が其國に產する總ての商品を取扱ひ、互に其輸出を司るとせば、葛藤衝突は頻々として起るべし。移民問題に至りては一層重大にして、現在の制度の下に於てすら、移民の待遇其人數の制限等につき諸政府の間に衝突の起ること甚だ多し。今若し移民事業が國家事業となさるゝに於ては、衝突の起る場合は更に増加し、國民的嫉妬が下級人民の間に烈しく勃發すべきは、北米に於ける日清兩國の移民攻擊、濠洲に於ける總ての移民拒絕の實例によりて推知すべし。社會主義の政治行はれなば、戰爭は今よりも多く、今よりも長引き今よりも、殘酷となること疑ひなし

## 富を作るは罪惡なり

小學校教師より身を起して一代の間に世界第一の豪富となりたるジョン、デー、ロックフエラー氏は氏の富の勢力を以てするも寄る年波を防ぐ能はずして、もはや死期遠からざる老翁となれり。中夜靜かに其過去を回省すれば、彼れが富を作るの踏石となりて埋沒したる者幾人ぞ、彼れが爲めに錢の神の祭壇に捧げられたる犧牲は幾人ぞ。彼れと雖も木石に非ず、過去の罪障は彼れが良心を石臼の如く壓し、未來を思へば悚然として恐れざるを得んや。こゝに於てか彼れは學校を起こし、病院を立て、慈善事業に義捐する等の事に其富を使用して死出の旅路に光明を得んと焦心しつゝあり。此頃彼れは書を露國の哲人トルストイ伯に寄せ、如何にせば人間最大の利益の爲めに其富を使用し得べきかと敎へを請ふ所ありしに、伯はこれに對し一書を作りて答ふる所ありしといふ。其書巴里のマタン新聞に掲げらる。曰く、

足下が余に問ふ所は富は如何なる程度迄足下の信奉する基督教の教と兩立すべきかと云に在り、余はこれに對し左の如く答ふる者なり聖書の謂ゆる所を全く離るゝも、富は絕對的善良なる生涯と兩立し

難きものなることは平凡の常識を以て見るも明白なり……人が其懷に若くは銀行に有する金錢は疑ひもなく之を有せざる人即ち貧人に對する一種の武器なり今かゝる武器を有し、必要の場合に之を使用し、若くは之を以て威脅することは善に非ずして惡なるなり……基督敎の見地より考ふれば事は愈々明白なるべし。此敎の全部聖書の全精神は人が此世に於ける未來の安心の爲めに金錢を貯蓄するの愚を敎へ、富を作るの愚を說き、人が彼の譬喩談中の穀物を以て其倉を充たしたる富人の如き所行を爲すべからずして、貧人ザラスの如く行動すべき所以を訓へ居れり。

聖書にいふ、貧しき者は幸にして富める者は不幸なり、人は同時に神と黃金とに奉仕する能はず、人は物を乞ふ者あればこれに與へて、與へたる物を取戻すべからずと。此他同樣の事を說きたる敎訓甚だ多くして、基督敎の敎訓は總て此精神を以て貫通せり。

トルストイ伯は進んで基督の「爾若し完全とならんと欲せば、爾の有する總ての物を賣り、悉く之を貧しき者に與へ、而して後我れに服從せよ」なる言を引用し來り、世には「爾若し完全とならんと欲せばなる一句の中に逃路を發見して、完全は此世に於てあるべきものに非らざれば、絕對に基督の敎訓は實行し難しと辯解する者もあれど、基督の此等の言は「爾若し我弟子とならんと欲せば」を意味するものなりと說き、猶ほ富に對する世人の考の聖書の敎訓と矛盾する旨を論じて基督敎信者は富を有すべからずと斷言せり

# アイヌの文學

文學士　金田一花明

（一）アイヌ村のこと――（二）アイヌ乙女と哀歌――（三）「哀歌」解說――（四）アイヌ古老と古謠――（五）「古謠」解說――（六）アイヌ歌謠の形式――（七）哀歌「別離の曲」五章――（八）古謠「峽中記」梗槪――（九）結論

## 一

日高の山間、沙流川の水上、寒煙斷霞椴松帶の曠野を縫うて、異樣の草屋、二三五五、形ばかりの人里がある。道は徇、名も知らぬ草花の間をうねつて、一度びは木深き森に入り、再び開くる處、桃の花咲く山懷に、唯見る件の異樣の草屋、累々軒を連ねて、白晝、物のけはひも無き寂寞たる壺中の別天地がある。

或時は、野兎の物に怖ぢたるまなざしゝて、戶に隱るゝ異裝の乙女を見る。或時は、徒跣蓬頭、沙上に甸

嘗して、小犬のむれと日光を浴る天童の一群に、いよかしげなる眸を擧げて目送せらるゝことがある。

一度北海の地を踏んで、偶々この郷を横ぎる旅びとは、恐らく、終生忘れがた無き或る悲痛の印象をとゞめて立去るであらう。此處は、聖代の逸民——曾ては、この大八洲の全土に住みひろごつて、豐芽原の大中津國をば、我が物顔に跋扈して居た大民族アイヌが末路、平取村の古郷である。

村は、今日凡そ四五十戸、一郷の住人皆同性、同族相依り、故舊相援け、一村熊を祭れば同族擧げて來り歌ひ、一家訃を悲めば全村來り哭して聲屋外に達す。神を信じ天を畏れ、俗篤く民順に、門戸鑰を須ゐずに路遺ちたるを拾はず、霜露降つて秋の深さを知り、芳草蘚に萠えて春のかへるをトす、暦日素より知らず、開闢以來文字が無い。百年無爲にして化し來る「自然」の寵兒宛として淵明が詩中の國を想はしむ。

遮莫、居ながらにして豐饒無盡の天惠を享樂した卅年以往の昇平は、恍として、一夢果敢なく古老の語り草に空しき名殘を止むるのみ、憐むべし黄鷄、白雉、血を吸り骨を嚙む生存競爭の慘劇に、今や天然利潤の磯濱は、盡く内地人の蠶食する所となり、禽の如く隱れ、獸の如く走り、僅に此の磽确不毛の荒莽に潛みて稗を炊ぎ、蕗を煮、渺として隴畝の頭りに縷の如き烟を立てゝ居る。身、已に智力の以つて抗するに足るなきを觀じては、久しく健鬪奮起の志を挫き、心すでに既往の追ふべからざるを傷みては、又來者の甚頼むべからざるを恐る。汲々焉として形影相追ひ、あしたに食を求めて夕べに之を盡して其の日を終ふ。財を得れば乃ち飲み、財盡くれば乃ち止む。唯々刻々の微安を買ふに急にして、一念明日の焦眉を惟んみるのひまも無し——小舟千日方剏得、換却山丹一斗鍋、刻苦三年の業、一擲晩酌に易へて悔いぬに至つては、悲むべき極端な快樂主義に落ちかゝつて居る。况んや又、邊陬醫藥を缺き、赤貧一斗の蓄無し、天寒く歳饑えむか、餓莩僵ち、野に充ち、一村の人畜殆んど盡く、一朝悪疫郷に入らむか、蒙族夕べに跡を斷ち、骨肉明日地を拂

よ。滄浪萬古の月、人生薤露の命、よるべ無き心の與にしみ〴〵と、身に迫る天地の悲愁をかんじては、孤懐昔いたまざらんや、傷らざらむや、愍むべき敗殘の良民は、斯くて滔々として歩々益々悲境に沈淪しつゝある。若夫れ、偶々沿海漁利の地に踏止り、夙に内地浮浪の徒に化せらるゝ者に至りては、久しく奸詐に馴れ、欺罔に居し、不義不信、約して履まず、誨へて發せず、恥なく智なく放逸懶怠、痛ましい哉宛然として目のあたり見る『亡國の民』。一度親しくこの狀を目睹するもの、誰か涙無しにこの民族を忘れ去ることが出來るであらう。

あゝ、言質、に行ひ義に篤きは、由來この民族の最愛すべき特質の一つであつた。舊藩時代、その忠孝信義の廉を以つて、特に松前家より表彰せらるゝアイヌ、續々擧げて數ふべからざる村を出した。

蠻風蜑雨の裡に、猶美術工藝詩歌を樂む美性に至りては、亦更に欣すべき他の一特質たるを失はぬ。男の兒は少にしてよく小刀を執つて彫刻をまねび、女の兒は幼にしてすでに沙上指頭を以つて刺繡の形をならふ。其の異趣奇工は、夙に傳へて人の嘖傳する所。唯それ、その詩歌、文學的製作物に至つては、由來世間に多くは知られて居ない。

二

アイヌは總じて、歌を嗜む民族だ。絶海の外、窮地の涯、行くとして部落に歌ごゑの聞えぬ所は無い。

アイヌに歌曲は色々ある。中に Yaishamane の一曲、此は、絹を裂く樣な若い乙女の歌だ。さなきだに悲しさ迫る胡濱の浦風、一揚一抑、その聲咽び、その調せまり、悽惋哀切、言ひ知らぬ悲痛の韻が罩る。三五夜中新月の窓、郎が歸るを戸に待つ少女の低唱微吟する仄かな調べを聞くともあるが、叉屢々アイヌのうら若い乙女の儕が、聲を絞つて、きほうて之を行る。明眸皓齒、さながら内地の人とも見かへられつべき其の黒髮、其の面ざし、つく〴〵と哀を催し居る間程なく、一歌ひと度唇を發するや、「胡人」「胡歌」の感じが、しみ〴〵と今更新らたに身にしみて、みじめな、徒まし

い樣な、あはれな悲しい實に聞くに堪へない哀音哀調にせまられて、我ゝなく胸塞り、涙が墜つる。

ヤイシヤマネは實に、アイヌが哀詩の絶唱てあるが更に哀れな、これが歌ひ手、アイヌ少女自身が已に「詩」中のものてある。

玉化遺き絶海の涯、なまぐさき荒磯濱の岩かげに、一輪咲きなよぶはまなすの花、たとへば可憐アイヌ少女が天賦の面影はこれてあらうか。巧笑倩兮、眉目盼兮、黒目がち睫毛長う世に生れ、人羞しき前髮に、草たかき片山蔭のつどれの裡(うち)にも、春なれやおのづから開く胸裏の丹花。かくて俺女(マツカチ)が少女(メノコ)となる。雙親それと見てとるや、上脣ほのかに一點の黥を施さしむ。種族の目には新裝あらたに成りて正にこれ畫龍の點睛と生きて映つるのだ。新婦十三能執事、傍姑爐畔繡鰐度——て、蕾の如き少女は、春風一過、すぐにもう少婦となるのてある。今度は、妾がこの脣は、天が下唯々郎(きみ)が爲めに向つて開かれと、紫色あざやかに上下の緣より掛けて、黥、全く丹花の脣を封じて了ふ。

是に至つては、少婦亦たやすくは人に向つて其の脣を解かぬ。道ゆく旅人が屢々路傍の少婦を捕へて物を尋ねる。彼等は面をそむけて一語も發しないてあらう。但其の郎に對する全力の貞節に至つては、殆んど有らゆる人種に向つて其匹儔を求め得ぬてあらう。夫が客人と夜おそく飲む。何がな肴は？と婦に問ふ。婦(をんな)は「有ん可い(アンナンコロー)」と云つて起つ。苟も「無い(イサーム)」てふ返事は遂聞かぬ。その筈だ、厨に無ければ夜てもかまはず川へ下りて尋ねて居る。不幸にして雨が降る、風が吹く、肴が其處ても得られぬと、夜を徹しても漁(あさ)つて居るやつと魚が獲られて夜がほのぼのと明け渡る。もう主客の酒に間に合はぬ、乃ち以つて翌朝わが夫の珍客をもなしてやる。

玉の肌、寸膚をだにも露はすはアイヌ少女の所辱とする所だ。川を渡る、海に漁る、剰へ沐浴する時だにも、衣裳は着のみ着のまゝて、端折ることだにしない。乳房は「少女のいのち」の宮、衣紋の上からだに他をして手を觸れしめぬ。天にも地にも、唯一人わが夫

と定めん男にそれを聽すのみ。

これは、石狩のさるわたりに起つた實話である――

電信局のある無邪氣なる役員が、始めて同僚からその話を聞いた、果してそんなことが有るか知らむと、談笑の果てから、いつか、醉興にもある少女の胸に、袖口より手をさし入れた。

をとめは、嬌羞しさ、滿面の潮もみち、耳朶まで紅う染めて、春のうしほと湧き返る胸の若血、小指(をゆび)もわな〱とうつむき俯した。

何思ひけむ彼の一指をだにも、乙女は敢えて拂ひ除けなんだのである。

これ見玉へ、うそだ、と彼は罵り消ちつゝ快活に、翌日、局の服役に、例のカチ〱カチ〱と電文を刻んで居る硝子窓の外に、ぢつと立つて自分を見入つて居る件の乙女を見た。

默然として唯立つて、夕日の影の移らふ頃まで去らなんだ。

翌くる日も亦乙女は來て立つた。依然ぢつと彼を硝子窓の外より見つめて暮まで立つた。翌日も。その日も又その翌日も。

彼はさすがに蒼くなつた。けれど、七日が間每日每日乙女は、來ては戶外にぢつと立つのであつた。「君は求婚の形式を敢えてしたんだから、もう仕樣が有るまい。メノコを妻君にもらひ玉へ」と同僚も最初はからがつて居たが、彼は今は、泣き出さん許りに困じ果て、殆んど泣かん許りに、どう仕樣〱と憂ひ惑ふ氣の毒さに皆で兎角して彼を田舍の局へ轉任さした。

どうして知つたか、どう尋ねたか、數日を經て、乙女は又そこにあらはれて、ぢつと硝子窓から見入つたのである――彼は身震ひして驚き怖れた。

けれど翌日も、又その翌日も乙女は戶外に來て立つた。さすがにアイヌを妻にとは、世間の手前、國許へも濟まぬ。二度意を決して小樽の局へ逃げた。かくて、青息吐息からく少女の觸から免れて、ほつと、始めて安心の息つくと、一月許程へて忘れる頃に、ある日又、どこをどうして來たものか、乙女は小樽局にあらはれ

た。恨めし相な、なつかし相な、悲し相な、泣きたいやうな、云ひ様の無い目して、ぢつと彼を見入つては、だまつて例の窓越しに立つて居た。

彼は小椅にも身を置きかねて、三度遂に踪跡をくらました。

——物語はこれ丈であつた。

この事あつて數年の後、偶然、友から復、「彼」の消息を聞くことが出來た。「彼」は今は、貞操寡言な夫人を迎へて、已に玉のやうな娘子を擧げて居ると。

## 三

貞操な、寡言な温順恭謙なアイヌの少女も、萬古のくせもの——戀の毒手には屢々無殘な捕虜となる。かよわき路傍の花が、徒らに手折られ、徒らに弄ばれ、徒らに棄てられ踏みにじられて、痛ましく泥土に委せられた哀れな戀物語が、倘屢々古くから和人の若者との間にかゝつらひて、あはれを歌謠にとゞめて居る。

これは、平取の古老に聞いた物語りである——下場所あたりの漁場に、昔、年若き和人の帳場が居つた。

何れ、瀟洒たる才子か、おとなしい若者でゞもあつたらう。年期あけて、愈々内地へ向けて舟出した夕であつた。平素見知り合つて居た一人のメノコが、佐保の山べに領布振りけむ昔語りにも似通ふ——濱の汀にあと慕ひ、浪の寄る〳〵浦の荒磯を行き返り、たもとほり、戀ひ泣き、歎き死にけるそのなげき——

Yaishamane na!
かなしや 哉
Yaishamane na!
かなしや 哉
Kukoro pon Kampi.
妻が うら若き カンピ
Yaichamane na!
かなしや 哉
Natta arara?!
いづら 行きし
Yaishamane na!
かなしや 哉

若き情人を載せた舟は、乙女の歎やつもりけむ、海上に覆沒した。

これが、アイヌが敍情詩の一體「ヤイシヤマネ」(哀歌)の濫觴(?)である——と。

斯くて、アイヌの哀歌は、この Yaishamane na の句

を以て起り、この句を以て終り、尙隨處に、何遍もく／＼この句を繰返して、そして調子をとつて行く。遂に、「ヤイシヤマネ」は、この種のすべての歌の稱呼となつて居る

哀歌(ヤイシヤマネ)の起源に關して(?)、今一つ變つた歌を、有珠(ウス)のアイヌに聞いたことがある。この物語りも亦、年若い帳場(カンピ)、はん次郞と呼ばるゝ和人と、獨身のアイヌ婦人との間に起つた戀語りである。歌は、この女が怨死の最期(いまは)の述懷的情敍から出來て居る。て事はやつぱり帳場(カンピ)の歸國から起る。曲中の主人公なるアイヌの婦は、それを送つて、彼の追分で有名な磯谷(いそや)まで行つた、磯谷の一夜、若いカンピは、お別れに、一所に寐ようと云つた。婦は流石に操を守つて聽さなんだ。カンピは盃を啣んで、浪に恨みの詞の數々、メノコが後生を呪つて、慘として別をなした。メノコ鄕へ歸りて重く病む。明け暮れをとこの呪を氣にやみては怖れおのゝいて、怨嗟悶絕、病はいよ／＼重る、遂に自ら最期(いまは)の近きをあきらめた。そこで、一人の娘を枕頭に呼んで、泣く／＼苦しき胸の思を且つは打明け且つは戒める。この母を手本に、ゆめ／＼和人と近づいてはならぬ。若し和人と近いて、分れ際に互に心よう、氣を打晴らして分れずば、こんなに咀はれて、人の恨みに死んで了ふてあらう妾が心根をいとしと思はゞ妾が死んだら、手向けには妾が歌、長くとも、短くとも、有りとあるアイヌの口々に、國土(モシリ)の濱の廻(めぐ)れる極み、皆歌ふて呉れ！云つて女は自ら自分の挽歌をうたひ、歌ひ畢るゝ共に息絕えた「それだからアイヌは、何處へ行つても、きつとこの哀歌(ヤイシヤマネ)をば歌うて居るのだそうです。」と、附け加へて、この歌を自分に敎へたアイヌが曰つた、

* * * * *

かくて、「ヤイシヤマネ」の稱は、今日では一の歌曲の名となつて居るのであるが、殆んど又、一方彼のユーカラ（後に曰ふ古謠——神曲）に對して、歌(ソング)、短歌(リーヅ)といふ樣な意味にも使はれて居る。されば、「哀歌」といふ譯は今は或限られたものにしか當らない位て、事實今日は最早その原義も失はれて來て、悲くも哀れて

も何んても無い歌までが、ヤイシヤマネナーと云つて調子附けられて歌はれる。例へば酒をすゝめて歌を所望す——口を開けば則、ヤイシヤマネナー！　てあるが、どんな歌をうたふかと聞いて居ると、「殿から御酒を賜はつた。あなかしこ、此の御酒は吾のみならず、吾が捧げて吾が家神迄もたべらるゝのである。それ故、旅ゆく此の殿が、これから、どの山越えて、どの郷行かるゝとも、吾が家神、御怪我の無い様、煩ひの無い様守らせ玉へ。あな有難、あな尊。ヤイシヤマネナー」などゝ歌ひ收める。是に至つては、「ヤイシヤマネナー」はたゞ歌の調子の文句と化して居るので、その語源は全く忘れられて了つて居る。現に今日のリビング・ラングンエジには Yaishamane（ヤイシヤマネ）と云ふ語が外に話さるゝことは無い。恐らく、バチエラー先生の字典にこの語の見えぬのも、その爲てあらう。

併し、之を古老に尋ねると、yaishamane（ヤイシヤマネ）といふ語自身は、矢張、かなしや、つらや、困つたなあといふことだ、と云つて居る。

## 四

併乍ら、哀歌（ヤイシヤマネ）は、まだ以て十分アイヌ民族が行樂する所の詩歌的天地を思議し、以てその審美的空想、藝術的創作力を餘蘊なく品隲するに足るものでは無い。アイヌ文學の精彩は、實に、冬日田園に閑を得て、雪深く夜の凍る時、爐畔、榾火を圍んで、老弱男女、東天の白むを覺えぬ迄、陶然として相樂むその團欒の間に遺憾なく發揮するあのてる。

アイヌが冬の夜がたりの語り物には、Ponitaki あり、Uwebekeri（ウエベケリ）あり、Yukara（ユーカラ）前者二つは、吾々の所謂お伽噺、昔譚て、今日の口語を以つて綴つた普通散武勇談教訓談などてある。此等も他日機を得て、共に研究したいと思ふのであるが、今こゝに吾々イヌの文學と標榜して特に縷述せんとする所のもは、第三のユーカラ——古語を以て成り、口づからこの民族に語り傳へられて來た律語の古謠——神曲てある、

惜しい事に、今日アイヌが一日も早く日本人化しや

うと、自分の舊習古俗は弊履の如くすてゝゆく矢先、哀歌(アイシヤニ)は、追分、都々逸と替つて了ひ、この古謠の如きも、今に於いて之を採錄せぬと、もう地を拂つて不知界の晦闇に葬り去られんとして居る。

今日之を語り得るものは、固より、多く皆古老――白髮童顏、銀髯胸を超え、矍鑠たる老軀百年浮き世の潮かぜに曝らされておのづから幾戰場の生死をくゞつた老雄の面影、冠を戴いて一たび此の神曲をかなで出づるや、木析爐椽を撃つて聲々發止、句々躍動、熱狂四邊を忘れてみづから全く曲中の英雄と化して了ふ。その聲や森嚴、その節や莊重、聽くもの片唾を呑んで四壁聲なく、暗澹たる滿座水をうつたるけはひ。爐(ゐろり)の榾火がひとりどん／＼燃えて居る。夜が次第に更けて來る、兒ども(ヘカツタラ)はいつか聞き飽ひて老婆(ハツコ)の膝に眠つて了ふ。母(ホンナ)は乳兒(ヘボ)を抱いて立つのを忘る。佳境に迫ると、一座、目輝き、頰照り、悲喜こも／＼、女は涙をしぼり、そちこち嘘唏の聲起る。かなしめばゐろりの榾火も低く這ふ。男(を)の子は齒を嚙み腕を扼し、拳を固めて危坐――明けゆかば雪とやならむ一紙隔つ窓外滿天の大風雪も、此處にはさ／＼千さとの空吹く別天地。若夫れ、曲、高潮に達して、一瀉千里、順風に帆をあげて物語の展開するや、滿場の歡呼、我を失つて、ヹ一ヹ一ヹ一(行(や)れ、行(や)れ、行(や)れ!)勇みに勇んで冬の夜寒を衣胆(かたぬ)く若者もある。

*　*　*　*　*

この蒙味未開の民族が、由つて以つて長夜の明け易きをかこつまで、心を奪はれ、魂をとばす所の詩歌の空想は、抑々どんなものであらうか。之を尋ねて見ることは、已に好箇の一逸興たるを失はぬ。加之、彼等が彫琢鏤心の餘に成る所の律文、修辭、彼等が飾りなく詐り無き心鏡に映じた天然、人世、及びその豪壯怪異反復委曲を盡せる事實的、歷史的、說話的、神話的內容は、之を形成せる原質(マテリー)由つて以つて彼等が精神的發達をたどり得べく、由つて以つて文献以前の彼等か史的事實を窺ふを得べく、創古この方、邈として世界に消えたる彼等の祖先が此の土に止めた唯一のレムナン

ト、而も何等の文字を以つても其の隻影をだに傳へられざりし――アイヌの古語それ自然の保存と相俟つて「古謠」や、實に我が諸分科學の上に、どれ丈の珍貴な新材料を提供するであらうか、まだ容易に測り知るべからざるものがある。

## 五

若し大陸東端のアイヌに行つたらどうであらうか、吾々の知る全種族を通じては、各處のアイヌ、皆一樣に、彼等が唯一祖先傳來の精神的紀念の古寶「神曲」を各々口づからに配け傳へてもつて居る。

但、此の古謠を、Yukara と呼ぶのは、北海道アイヌの「沙流」を中心とする一大方言の稱呼である。千島アイヌ及び、根室、釧路、その他の方言にありては之を、Sakorobe と稱す。カラプト・アイヌに至りては、之を、Hauki と稱へて居る。

三者、全くその稱呼を異にして居るが、其の名は皆、「謠ひ物」を意味して居る所は一致して居る。

勿論、三者已にその稱呼を異にして居る丈け、亦各々曲中の人名をも異にして居る相異はある。

第一に「ユーカラ」の主人公は、常に必、Poiyaunbe である。ヤウンペ(Ya-un-be)は三語より成りて、ya は自國の本土の義、un は「の」の義、be は「者」の義、即、島嶼では無しに、本土產なる自國の者を意味する語だ。それに冠らする Poi は「小」、「少」を意味する Pon と同一語で、ヤ・イ・ユ・エ・ヨの前に連接する時の變形に過ぎぬ。即、「ポイヤウンペ」は、「少き、本土人」だ。要するに「ユーカラ」は凡て、年少なる自國本土の產なる一英雄を賛美し謳歌して居るものだ。

第二に「サコロベ」の主人公は、必、常に、ポノタシツンペである。この名は二語、Pon-Otashi-un-be より成る。ポンは「小」、「少」の義だがオタシツンペは更に分解すると三語より成り、Otashiunbe だ。「ウン・ベ」は、「ポイ・ヤウンペ」のウンベと同じだが、こゝに、オタシツといふのは、この英雄の出た村の名だと云ふ。要するに「サコロベ」は、「若き、オタシツ人」を歌つたものである。

オタシツといふ名は、現在の北海道の地名にもある。追分に有名な「歌棄(ウタシツ)」は、原名アイヌては、Otashit(オタシツ)てある。

第三に「ハウキ」の主人公は、必、常に、Otashitunku(オタシツンク)又は Ponotashitunku(ポノタシツンク) の名て出て來る。矢張「オタシツ人」だと云つて居る。サコロペに於ける主人公「ポノタシツンペ」と殆んど同一だが、「ペ」と「ク」との語尾の差がある。然るにアイヌては「ウン・ペと同じに使はる、所の「ウン・クル」と云ふ語がある。どちらも「の人」といふ義だ。樺太のこの ku は、「ひと」の意味て、北海道アイヌの語の Kuru（人）といふ語と的確に對當す。

| 北海道アイヌ語 | 樺太アイヌ語 |
| --- | --- |
| Yaunkuru(本土・の・人) | Yaunku,(本土・の・人) |
| moshiriu kuru(島・の・人) | moshiriunku,(島・の・人) |
| Sarunkuru(沙流・の・人) | sarunku,(沙流・の・人) |
| raikuru（死・人） | raiku,（死・人） |
| haitakuru(足らぬ・人)(馬鹿) | haita-ku,(足らぬ人)(馬鹿) |

之を要するに、此等あらゆる古謠にうたはれて、樺太千島の果まて、全アイヌ・ランドの崇拜讃美景仰欣慕の的となつて謳はれて居る半人半神の英雄は、一見外貌を異にしたる衣裝を解けば、必ずしも別人てはない一に皆或る若年の獅子王てあつた。此は最面白い一致の第二てある。

尙これ等種々なる古謠の內容に、その一貫する所の大綱を抽象すると、若年の獅子王は皆、剛健なる父と、烈婦人なる母との血を承け、幼にして孤となり、必ず他人の手に養育せられて居ることてある（一致の第三）。よく空を飛び、又變身の術を知る猛者て（一致の第四）、一旦風雲の來り際會するや、捲土重來、親の讎を鏖殺し、全アイヌ國はおろか、異國の域まて勇名を輝かすこと（一致の第五）てある。

因に曰。この多くの物語中には、往々金太郎の足柄山、又桃太郎の鬼ケ島行に似たものがある。又右の大綱をよむ人は何人も一寸、よく我が牛若丸乃至義經の一生に似て居ることを思ひ至るてあら

う。不完全なる日本語をもて最初、この話を土人に聞いたH本人は、慾いて之を再興記の義經だと速斷したらしい。牢として拔くべからざる勢力を作つた所の「アイヌは義經を崇拜云々」の虛誕は斯くして、こんな處に胚胎したものかも知れぬ。アイヌは只一人も義經を崇拜して居はしない。(未完)

# 社頭の松と曲玉

理學博士　坪井正五郎

明治四十一年の初刊の爲め寄稿をとの望を受け、御歌題にても因んで何か書く事が有りさうなものと考へて直に心に浮んだのは雲根志に出て居る一つの話し。之を拔き書きすれば左の通り。

むかし或人伊勢にまうでゝ神前なる松樹の多くはゆがみたるを見てたはふれに神は直なるをこそ好み玉ふに此松どもはゆがみたりといふをきゝて出口一之丞といふ十一歳の童子歌を詠す

八阪瓊の曲れる玉も有ものを
何とて君は松のみを問ふ

とよみたり此童子生長して後に渡會(わたらえ)の神官延佳(のぶよし)とて其名世に高し

即ち神代に持て囃されたと云ふ玉にも曲玉とて曲がつた物が有る位であるから社頭の松の曲がつて居る抔は何も不審する程の事でも有るまいと云ふので有ります。併しこれは曲がつて居るものは松のみて無い他にも有ると云ふ丈の事て何故て有らうとの答へには成つて居りません。昔の人殊に少さな者を捕へて理屈を云ふにも當らぬ事ては有りますが、若し松が曲がり、玉が曲がつて居る其兩方を一時に疑つたら何と答へる積りでしたらう。松を問ひにすれば玉て答へ、玉を問ひにされば松て答へるのも好からうが、一緒にして問はれたら一寸差支へたかも知れません。松の曲がるのは松自身の生理上の理由に基くので人の前でも神の前でも無頓着故言ひ開きの仕樣が有りませんが、引き合ひに出

された曲玉に付いては述ぶ可き事が有ります。曲玉は生物て無いから延び樣で曲がつて來る抔と云ふ事は有りません。其質には稀に金屬や硝子も有りますが通例は瑪瑙とか出雲石とか云ふ石の類て有りまして、製造者が故意に彼樣な形に仕上げたので有ります。出雲の某地からは曲玉にする原料の石缺け、凸に成る方を磨く砥石、凹に成る方を擦る石片も發見されて居ります。曲玉の形は偶然の結果ては無く細工の困難を忍んてもと云ふ意氣組みて態々拵へた出來榮えなので有ります。丸玉や管玉の方が作り易いに違ひ無いのに何故其樣な面倒なことを仕たのて有りませうか。曲玉の事を考へ樣と云ふには當時の社會の有樣から推測して掛からなければ成りません。大人の考へては小兒の事が解からない通り、今日の考へては昔の事は明かにし難い。文明國と雖も太古に在つては未開て有つたに相違有りません。我々祖先の曲玉を作り出した頃の事を知らうと云ふには現存未開種族の事からして調べるのが必要て有ります。未開社會に於ては猛い鳥や獸を殺すと自ら其事の紀念とし、他に向つて其手際を誇り、且つは飾とせんが爲めに、獲物の嘴とか牙とか爪とかに孔を穿ち糸を以て連續させて身に帶びる事が行はれて居ります。これは南洋諸島に於ても、アフリカに於ても、アメリカに於ても、近くは我が臺灣に於ても見るを得る事て有りますが、是等自然物の形は誠に好く曲玉に似て居ります。所に由ると不足を補ふ爲め、又は一層美しく見せる爲め、金屬や石を以て是等の模造品を作り彼れ此れ混じて用ゐる事も有ります。其模造品のとを見れば慥に曲玉の類似品て有ります。韓國には今尚ほ虎の爪や牙を猛獸避けのお守りとして肌に帶びる事が行はれるとの事て有りますが其數は七とか九とか云ふ奇數が好いとして有つて實物の數の都合ては石て拵へた模造品を加へる事も有ると聞きました。思ふに我々の祖先も諸動物の牙爪嘴等を身に帶びたので後に夫れを石て模する事が起こり段々に發達して美しい曲玉が作られる樣に成つたので有りませう。私はこれが曲玉形狀の起源と考へます。元日や神代の事もしのばるゝ。

新年の話題としても出玉の事は緣が無いても有りますまい。

## 文藝雜考 非寫實小說

醒雪

一擲十千萬兩忽ち成金黨の旗頭となつて、貴衆兩院を瞬く間に操縱し、總理大臣大勳位公爵の榮位を得るといふことも、確に一部の青年の希望に相違ない。某學士の發明術や化粧品の廣告が實現せられて、生來の山猿忽然として明治の業平光源氏と化し、時事新報の日本一の美形が、數億の持參金を負ひ込むといふのも、コスメチック好の白晝夢であらう。

世にはかういふ風のことを、其儘に書き列ねた小說がある、否々、最も幼稚な小說といふのは、常にかゝる妄想或は希望の實現を描いたものである。

御伽草紙の物草太郎などがその適例である。彼は天下の無精者、落ちてゐる物を拾つて喰ふのも面倒なといふ厄介な乞食で猿とも人間とも知れぬ者であつた。一年信州の片田舍から京都に賦役に上つて、天下第一の美人豐前守の姬君を見染めたのである。その執念くつき纏はるゝに困じ果て、且つは不思議に歌道に明るいのに感じて、姬君は終にこれを夫にすることを許された、さて、幾年か着古した襤褸を脫がせて、七日間湯風呂に入れると、直に玉の樣な美男となつた。更に其先祖を日代を以つて詮索させると、深草天皇の皇子二位の中將が、左遷中に、善光寺に祈りて儲けた申し兒とわかつて、甲斐信濃兩國の大守近衛の中將となつたといふのである。

平安朝の寫實小說が亡びて後は、かういふ風のお伽草紙が、專ら中流以下に流行したもので、その讀者は自ら物草太郎になつた思ひをして、事實に於ては到底近附くべからざる幸福の夢幻に醉うてゐたのである。蓋し、何人でも當初の物草太郎よりも劣等な境遇にあるものはない、それさへも、天下の美人を得て、榮爵

に誇ることが出來るといふことを、假令一時なりとも感ぜさせるのは、憐むべき動物に對しては、無上の慰安である。理性に乏しい足利期の細民は、かゝるはかない慰安をも歡迎してゐたのであつた。

明治の初期の佳人才子小説も、矢張りこれに似た傾向がないではなかつた。其の愛讀者は、いづれも青年男女で自ら、篇中の主人公になり濟して、微笑んだり、顔を皺めたりしながら讀み耽つて其芽出度き結婚とともに安心の胸をさすつたのである。

これ等の小説は、社會が「かくある」といふことを描くのではない、「かくあれかし」と思ふ通りに仕組むものであつて、寫實といふことの正反對は即ちこれてある、實社會は多く金に苦んでゐる、故に忽にして大福長者になつたことを敍する、實社會には失戀が多い、故に圓漸幸福な結婚を敍する、實社會は箇人の理想（希望といふ意味の）實現し難いものである、故に稚き者の希望通りに成つた社會を示してやる。これが即ち非寫實小説である。

徳川初期の假名草紙古淨瑠璃にも、矢張りこの種のものが多く見える。但し、この時代になると、稍趣きが變つて來て、御伽草子では、專ら讀者の利己的希望を主題として、讀者と同じ境遇のものゝ僥倖を仕組むものが多かつたのに對して、更に讀者の利他的希望、即ち讀者が可哀相てある不憫であると感ずる者に幸福を下す、といふ種類のものが多くなつた。

お家騷動て、御臺若君が惡奸の爲に苦しめられてゐる、讀者は可哀相てしかたがない、見物人は、自分に舞臺へ飛び出してゞも、救つてやりたい様な心持になる、既にかく感じた上は、これを救濟する方法が、觀音の靈驗てあらうが、金平の怪勇てあらうが、如何に奇怪な不自然な順序てあつても、讀者や見物人は、ほつと息を吐いて安心するのみて、決して其の構造の不自然を咎める遑はないのである。

これも矢張り、社會が「かくある」方てはなくて、「かくあれかし」の小説てある。

今一つは、例の教訓草子、佛法の因果論や、儒教の

「天定つて人に勝つ」主義の小說で、これも亦、現在の社會の實際は、これ等の主義の通りに出來てゐないと感ずるか、尠くとも、その主義の說明に剴切でないと信じて、それ等の主張の明白に行はれた架空談を創作したものである。孝子が地を掘ると寶物が出て來る、觀音經を讀むと利刄が折れる、といふ類の社會は、作者の希望であつて、現實ではないのである。これは希望者が讀者でないのみで、矢張り「あれかし」の小說といふべきであらう。

唯一人の西鶴を除いて見れば、元祿期までの小說戲曲は、皆かゝる意味の非寫實的小說であるといふことが出來る。近松門左も勿論これには洩れないのである。其の時代物はいふまでもない、其の奇々怪々な出來事は皆讀者が救つてやりたいと思ふ人を救ふ爲に描かれてゐるので讀者の希望に添ふ爲の不自然である。世話物に於ても、近松自身は、「今世に多い心中は金と不孝で名を流す、戀で死ぬのは一人もない」(女腹切)と信じてゐたと思はれる、しかし、可哀相な小春治兵衞の有樣には、哥屋ならぬ見物人も「五兩十兩は用に立てゝも助けたし」と思つてゐるのである、近松はこの希望を容れて、二人を九品蓮臺に往生させたので、一體ならば、奈落の底に沈むべき罪人であるのだらう。更に甚しいのは九死の夕霧が立つて舞つたり、切腹した源五兵衞が南蠻外科に助けられたりするが如きもので、皆見物人が「かくあれかし」と欲する所に從つたのである。これに就いて想ひ起すのは、リチャードソンがクラリサの物語を書いてゐた時に、其の主人公を殺すなといふ讀者からの投書が極めて多かつたに拘らず、終にこれを殺したといふことや、ホーソーンも「ブリセデール、ロマンス」を書き終つた後に、その結局は讀者を恐怖せしむるものであることは承知してはゐるが、どうしてもこれを避けることが出來なかつたと自ら書いてゐることとである。「見物の慰」を本位としてゐた近松と、社會を寫さうとした作家とは、自ら識見が異つてゐる。

かゝる意味からいふと、門左も亦新時代の作者では

ない、だが、かゝる意味の非寫實或は不自然は、若し讀者を魅して、暫く自然不自然といふ樣な理性を離しむる筆力さへあれば、必ず面白いものとして歡迎せられる。我等がなほ名優の舊劇に殊特興味を感ずるのは、その技藝が、吾等の理性を魅するのである。

　そはともあれ、西鶴以外の元祿頃までの小說は、多く、以上の樣な性質のものであつた。その不自然なのも讀者の感情が、作者の主義から來つた希望に添ふが爲のものであつた。ところが、享保期になると、その不自然な構造を以つて、讀者の好奇心に投じようと企てることゝなつた。低い讀者はその變幻出沒測り知るべからざるを歡んでゐる、やゝ頭のあるものはその不自然な變化に飜弄せられるのを厭ふのである。

　忠臣が、千辛萬苦して、紛失した寶刀を手に入れようとする、唯一刻の差で他の惡者に奪ひ去られる、更に幾多の艱難を重ねて、漸くこれを贖ひ得て、さて本國に歸るまでに、又僞物とすり替へられる、こんな行き違ひや失策が、幾度か反復せられて、殆んど切腹と覺悟してからでなくては、作者はなか〳〵助けて呉れないのである。しかも、それ等の失策が、皆實際上あり得べからざる、不自然極まる事のみであつて、その間には善人が惡人に化したり、惡人が改心したり、目まぐるしい變化の中に、神佛の靈驗もある、怪勇譚もある、妖魔も出て來る。少し事理を解するものは、頭からそんな馬鹿々々しいことがあるものかと一笑し去るから、同情も興味も失はれるのであらう。馬琴種彥などもこの流義である。

　西鶴物や黃表紙や蒟蒻本のある種のものや、化政度の三馬が、とにかくにこの潮流を離れてゐるのは、頗る偉とすべきではあるが、これ等も未だ當代の缺陷を見つけるといふ方にばかり骨を折つて、滑稽的な外皮は描いてゐるが眞面目な尊いものとして人間の生命を見てゐるものがない。新らしい小說は、必ず Life is real life is earnest といふ信仰の上に立つたものでなくてはならぬと思ふ。

# 文藝上に於ける陶庵侯と早稻田伯

## はしがき

本社は左に掲ぐる如き書信を以て、弘く海内名士の本題に對する解答を乞ひたり。乞を容れて返信を賜はりたる人實に五十有餘名。悉く之を集録して世上の清覽に供し、併せて深き感謝を此等の諸名士に呈す。（編者しるす）

謹啓。寒冷の候益々御多祥奉慶賀候。扨本社發行の『中央公論』新年號に「文藝上に於ける陶庵侯と早稻田伯」と題し、文士及び俳優と清宴を張れる侯と、文藝協會々頭たり又開國五十年史の選者たる伯との明治の文藝上に於ける關渉を論及致したく、書を諸名士に寄せて其解答を蒐集しつゝ有之候へば、御多忙の處恐縮に奉存候へ共、本月十五日迄に何卒右に對する御高見を御洩らし被下度伏して御願申上候也。敬具頓首。反省社。

○

山路愛山

陶庵侯は將來の人なり未製品也、早稻田伯は寧ろ過去の人也。既製品也。早稻田伯は學校を有す。陶庵侯は夫子自ら詩人也。二人棺を覆ふて然る後始めて優劣を說くべきのみ。今は其時に非る也。

○

幸田露伴

陶庵侯に就ては眞に其の文藝を愛惜せらるゝこと淺からざるを看取し、早稻田伯に就ては能く人言を容れて文藝の爲にせらるゝを傳聞し、今深く知るところなし、詳しく言ふを得ず候。

○

大谷繞石

拜復、「文藝上に於ける陶庵侯と早稻田伯と題して文士及び俳優と清宴を張れる侯と文藝協會々頭たり又開國五十年史の選者たる伯との明治の文藝上に於ける關渉を論究致したし」との御事。拜承仕り候。小生は陶庵侯が至つて多方面の趣味を有せられ、なかなかに風流韻事を解せらるゝ由豫て耳に致し、今の廟堂に立たるゝ人にしては感心なと思ひ居るのみにて、明治の文藝上に何の交渉も無き方と存じ候。俳優を招いて洋食の御講釋ありしとか聞き及び候が、其御講釋を恭しく拜聽させられし俳優はそれだけの智識を增したるとに候べく、また昔時ならば關白大政大臣樣といふべき御方にぢきぢき御目通り叶ひ、同席にて御馳走に預りたりとて極樂へでも參つたやうの氣持になりも致した

かと思ひ候へど、その結果としては、自惚が増した位に候べく、貴紳の邸宅に出入して彼等獨得の婦女誘惑の機會多かるべくなりしに過ぎぬことゝ存じ候。文士の御招待も、その爲め文士の品位が上りも下りも致さず、たゞあの爲め寄せ書きが二幅出來たといふまでのことゝ存じ候。當時ほとゝぎすとは存じながら厠なかばに出かねし漱石子の方が、明治の文藝には招待したる陶庵侯よりも多大の關渉あることゝ信じ候。大隈伯とても同じ事に有之、直接明治の文藝には何の交渉も無き方と存じ候。政治上に於てこそ伯は一家の主義なり主張なりを有せられ、之に信服して伯の幕下に走せ集りし者共の首長と仰がれ給ふ理由はあれ、文藝協會が推して會頭と崇め奉る理由は一向に無きやう小生には存ぜられ候。伊勢の山田には何々敬神會といふが多くありていづれも伯とか子とかいふ人を會長に推し居るやうに候が、文藝協會の會頭はまさかあれとは選を異にせるものと信じ居り候。開國五十年史は未だ讀まねば能くは存知致さず候へども結構な著述といふことに候。あれには莫大の費用を要したる由にて伯がその費用を負擔されしといふことなれば、伯が明治の文藝に於る關係は、此の五十年史の出資者としてのみのことゝ存じ候。而して此の大冊子の明治の文藝に於る地位は、外山博士等の著作になりし新體詩集といふ小冊子よりも遙かに低きことゝ信じ候。尤も伯の經營に成れる早稻田大學が所謂早稻田の文士を產出して明治の文藝に大貢獻を爲し居るは言はでもの事に有之、坪内博士初め幾多の先覺ありとも、伯の盛名の全國幾百千の英才を吸收するに、非ずば斯の如くなる能はざることを思へば間接に伯の明治の文藝に於る關係は甚大のものたる勿論の儀に候。あまりに子供らしき議論にてお笑草にもなりかねることかと存じ候へども右御返事申上候。草々

野口米次郎

○

小生は質問に對して好返答をなし得る適當なるものに無御座今回は御許しの程を願たく候西園寺侯が文士及俳優などゝ清宴とかを張れるは至極結構の御事、又大隈伯の開國五十年史は其時を得たものと存候。

○陶庵侯の文藝に於けるは直に是れ趣味なり。早稲田伯の文藝に於けるは經世的見地に立てり。二人共に多少の批評眼を有せざるに非るも、是れ決して其の得意とする所に非ず。唯た陶庵侯は稍々文藝の獨立的價値を領解する所あるに似たるも、早稲田伯に至ては常識以外一歩を出づる能はざるとの差あるのみ。

鳥谷部春汀

○アレキサンドル大王とダイオゼニスとかフレデリック大王とヴォルテールの關係とか何とかなれば隨分論究も致兼間敷候へども西園寺の和尚樣早稲田の檀那樣と文士と俳優と藝者とお酌杯の關係は些閉口仕候何れ多少は關係も御座ある可く候頓首

福本日南

○文藝上に於ける早稲田伯の事業と功績とは後世に傳はるべきものなるも、陶庵侯の文士俳優招待會の如きは比較にならず、西園寺侯も最少し奮發して文藝上に盡すところあるにあらずんば、兎ても世に傳ふべき人とはなるべからず。

松村介石

○西侯憺懷にして瀟洒、春の如く、隈伯豪宕にして勁健、秋に似たり、美術と軟文學とに對するや、侯素より花神を以て自任すべし、而して伯の修史を企つ、又鶯鳥冲天の慨ありと謂はざるべからず、一は現に當世に優游し、他は暗に後昆に期待す、彼れ羨むべくんば、此れ將た敬すべし、畢竟各々其の性情の天に禀くる所を縦に發揮する者、敢て軒輊し難し、若し兩者兼備するあらば、始めて眞個第一人たらん乎。

谷本梨庵

○縉紳の徒は、多少趣味を解すべき筈にして、二公の所爲は、當り前の事なり。これをしも褒めねばならぬといふは、我が邦上流社會の沒趣味を表顯したるものにして、まことに情なき始末なり。二公にして、藝術の保護者たらむとせば、爲すべきことは、まだ〳〵いくらもあり。明治の文藝上に於ける關係などいふは、間、すでに間を失するの感なくむばあらず。若し、吾

久保天隨

をして、彼等と地を易へしめばと思ふものから、愈よ其身になれば、さうも出來ぬものにや。

○　岩野泡鳴

現代人物中、僕の最も敬服して居るのは伊藤公で、その才能博識、雄辯は、その地位と相待つて、うらやましい程活用されて居る。之に次いでは、大隈伯の能辯と寛大な度量とであらう。西園寺侯は、故光妙寺三郎氏と共に、わが國ハイカラ黨の祖とも云ふべく、僕は幼時その風を聽いて一種の趣味を得たことがある。侯は今や伊公隈伯の如き活動家でなく、寧ろ自己の身邊を心のまゝに整へて行く人てあるらしい。然し、侯の文士俳優招待の如きは、伯の文藝協會の會頭並に五十年史の選者たると同樣餘り問題とする程のことてなからう。その人に負ふところ何程かある?

○　島崎藤村

西園寺侯は舟に乘るが如し、詞海に掉して自ら恣にす。大隈伯は馬に乘るが如し、行くところ必ず鞭韃と愛撫と努力とを伴ふ。

○　志賀重昻

拜復「年始人情價半錢」とは石井南橋の句に有之、成程東京府內葉書税五厘の當時、人々が年始狀に葉書を用ゐ始めたるを見て、嚴格重厚なる昔の人々は人情の萬事に輕く薄くなりたるを慨殺したるならんと存候然るに今日の如く堂々たる大問題を輕々往復葉書を以て長者（小生は固より長者に非ずと雖も）に向ひ問合すなどを見れば南橋は地下に何と諷詠可致や聞かま欲き感有之候、況や問合せ來りたる問題にして少しく自己に不利益なる應答を送附すれば三田商業界記者は自ら來り何卒掲載丈は御用捨被下たしと申し、東洋大學は辯解の書簡と共に原稿を返附し來りたるなどの事あるをや、依て御高示の問題には應答不致候

○　戸川殘花

拜誦仕候小生は陶庵侯にもをり〳〵拜顏し早稻田伯にも知遇を辱ふす陶侯百年の後に稻伯百二拾五歲の後に貴答申上候間如露如電の時間を御猶豫奉願候敬具

○　坂井久良岐

小子理屈は大の下手にて又甚だ理屈を好まず、されど物質の前に文學の權威の無き事今日より甚きは無之を不平とするものにて、德川時代の都市の樣を見ても、もう少し文學藝術を尊重したとが、歷々として證據立つるとを得るものに候、此間に於ける隻脚伯の文藝に助力せられし點は、サスガ他のオイドン一流に勝さるものあるを信じ申候、月並發句の宗匠なる陶庵侯は一寸乙な事をせられて評判を取られ候もマダ／＼コンナ事にては承知が成乘申候

○　吉野臥城

文藝上に於ける陶庵侯と早稻田伯との御尋ね。――一は新體詩、一は俳句にてよろしかるべく候。

早稻田伯

早稻田日和の高き木に
囀る百舌は、かしましく
囀りやめば、幽かなる
こだま返して飛び去りぬ、
向ひの丘の松林。

陶庵侯

雨の日や蒼の燕の思へくら

○　石川半山

西園寺侯爵が文士と俳優を招待して宴を張り、大隈伯爵が文藝協會々頭たり又開國五十年史編纂の總裁たりし事に付て、何等か所見申上候樣御申越承知仕候

元來卑俗なる一政治家が急に思ひ立ち候て文士と俳優とを御馳走したりとて別にそれが文藝上に何等の關係あるべしとも存じ不申候へども、陶庵侯は本來文藝を嗜まれ、文章も上手なり俳句和歌漢詩も出來、然も風韻あり、園藝に通じ、其の耳目は能く美術音樂を解せらるゝ所の至極聰明なる人なれば、其の性格より之を見れば政治家と謂ふよりは寧ろ文藝界の人と申すべく候、左れば此の文藝に趣味を有する貴公子が政局に當て暗に之を獎勵し、少くもサアベル內閣の爲したる如き野蠻なる迫害を試みざる時間に於て我邦文藝の發展を見るべきは期して待つべき事にて若し之れなくんばソハ文藝に從事する人士の責任ならんかと存申候

早稻田伯爵は一種非凡の頭腦を有せらるゝ人に候、殆んど萬能力とも可申候、僕等新聞記者の目より之を觀れば理想的新聞記者なり、夫れ新聞記者は內閣總理大臣と其資格を同ふす、蓋し天下百般の事に涉る趣味を有し意見を有し判斷を要すればなり、左れば曾て內閣總理大臣たり進步黨總理たりし伯爵が文藝協會々頭たり開國五十年史編纂總裁たるは現に早稻田大學總長、日印協會々頭同仁會々頭たるが如く往く所として可ならざるなきの能力を示せしに過ぎず、之を以て伯爵を單に文藝界の人とするは大なる誤りなり、又特に文藝に忠實なるの證とすべきに非ず、唯夫れ萬能力を有する伯爵は文藝にも亦趣味を有し意見を有し且つ之を奬勵するの力を與ふるを惜しまざる者と見るべきが適當かと存候敬具

○ 柏軒生

文士及び俳優と淸宴(?)を張れる西園寺侯は、聊か街氣の嫌ひなきに非ず、其の俳優なるものが貴夫人を辱しめて風俗を壞亂する依然たる河原乞食たるに於て、侯の街氣の頗ぶる警醒すべきを覺へざる能はず

西園寺侯が文雅の嗜好あるに比して、殺伐なるは大隈伯也、珍重すべき書畫幅を往々にして虐待せる早稻田邸の室內を觀て、眉をひそめざる人は少からざらん、然るも開國五十年史を成したる伯の文藝上の効蹟は、到底侯の及ばざる所たり、と小生は愚考仕候

○ 建部遯吾

陶庵侯の淸宴を張れるや文士を後にして俳優を先にしたるは文藝の中心を如何に見たるか、儻くは文藝奬勵などいふ四角張ッたる儀には御座無くして唯道樂の爲なりしか、この二擧だけにて「陶庵侯と文藝」呼ばりもすさまじかりなむ

早稻田伯が文藝協會の演劇を本鄉座に見物せられたるは善哉々々、但しその節帽子を着けたるまゝに居られしは文士の演藝を見るに尙吾輩の演說を聽くだけの敬意を表せられざる次第か少々情無し、開國五十年史に吾輩風情の忠言を容れて、開國以前日本國民文明の造詣に關する二大雄篇の自述を序篇として加へられた

るは、此事業にこそ伯の文藝上の活躍家として細流を捨てず以て河海の大を致す襟度も見えてゆかし

○　薄田泣菫

拜復。折角の御言葉には候へども唯文藝の士を招きて清宴を張れりといひ文藝協會の會頭たりといふ程の事藝術の上において如何ばかりの關渉か候はむや。若しありとするも貴社自らなされ候如く往復はがきの一片にて足り候程の事なるべし。この意味にて貴社の企は適當の評價に候べし。小生は斯る題目について未だ曾て考へ及びし事も無ければまた考へ及ばんとも存ぜず候。このやうなる折にこそ自らの多忙をかへすぐ\も有り難きものに思ひ候なり。匆々。

○　塚原澁柿

陶庵侯が文士及び俳優を招かれたるは別に明治の文藝上に關渉ありとも思はれず、又た侯の意も其樣なる深き冀望をかの會に繋げられたるには非ざるべし。早稻田伯の會頭たる文藝協會は後來多大の發展はあるべきも今日の處にては此ぞと取り立てゝ申す程の事も無し、唯だ開國五十年史の發刊は結構なり此れは確かに昭代文藝の花として後世に誇るに足る右愚考のまゝ

○　大町桂月

御雑誌毎號難有候御尋の件はかくべつ世に出すほどの考も無之候右何卒御許し下されたく候

○　眞山青果

僕は小説家として陶庵侯に招待されないから何う云ふ人だか知らない。又大隈伯も知りません。夕ゞ二人とも今の政治家中では多少文藝の事を解する人とか、或は解しやうとして居る人とか聞いて居る。無論惡るい事ではないでせう、然しそれに狃れすがるのは見ッとも無い、藝術家の心に權勢が干渉するやうでは困るぢやないか。

○　楚人冠、杉村廣太郎

御尋につき拜答仕り候

ゝ西園寺大隈兩名とも明治の文藝など申すことに何等關渉する所無之候

政治家としての技倆に至つては則ち知らず、僕は陶

庵侯を下手な俳諧師、早稻田伯を植木屋の親方位に心得居り候

○　　　　　緒方流水

どちらも今一層眞面目に肩を入られ候樣望ましき外に意見無之候

○　　　　　區　書

賓口の書生が批評なども鳴呼がましく候へども、感じ居候ことを忌憚なく申せば大隈伯は直接に文藝が好きなといふ方にはこれあるまじく候伯は盆栽がお好きに候へども盆栽の面白味は其の發育して行く所の面白味にて、出來上つた盆栽の美といふものは却つて第二次のものと竊かに存じ居候されば此の御嗜好は伯が教育好きと同一の傾向と心得て或は然るべきかと存ぜられ候伯は又意想外なるばかり日本の文學史などにも通じ居られ候これは嘗て「家庭文藝」の爲に伯の意見を乞ひ候時に驚嘆致し候ことにて候しかしその文藝に對する御見解はやはり講談や芝居や草双紙が日本兵をして露國に勝たしめたりと説かれ候と同一論法にて文藝の間にも功利を求め居られ候ことと申すまでもこれなく世道人心に及ぼす感化力として文藝を重要視せらるゝものと存候伯はどこまでも政事家にこれあるべく候

陶侯の文藝好は全く別種のものにはこれなくや侯は政事家として總理大臣としてにてはこれなく單に個人として紳士として文藝に嗜好のある人と承り及び居候侯の文士引宴は太平の宰相の道樂と見做すべきものに候但しその道樂は最も結構なる道樂にて若し文藝の爲の文藝に同情する人を求めばそは陶侯なるべく大隈伯は唯社會教育としての文藝のみに參同せらるゝことゝ存じ候陶侯の文藝に精通せらるゝことは恐くは汎々たる文士連の比に非るべく嘗て金港堂より出し居り候ひし「婦人世界」などにも往々文藝に關する驚くべき學殖や識見を洩らされ候ことを記憶いたし居候

○　　　　　青柳有美

陶庵侯もし御馳走だけで文藝の進歩が出來るものと思はゞ大なる自惚なり。早稻田伯も會長になり編輯總裁にさへなれば、それで文藝が進歩するものと思はゞ、

是又大なる自惚なり。兎角當節は現ナマの世の中にて候。一侯一伯にも、是と眼星をつけられたる役者あり文士あらば、ドンと現ナマを注ぎ込んで御抱の役者とし文士とし劇場や書肆の世話にならずに濟むやうしてやるがよし。然らざる限りは一侯一伯とも明治の文藝には何の關渉なきものとなりて死すべし。然し、早稻田伯には麾下に陣笠多きだけドウやら景氣佳きも陶庵侯には山氣なく芝居氣多くして第三者に快感を與ふ。

○　山縣五十雄

拜答小生は常に早稻田伯が多趣味なるに敬服し文藝の進歩に貢献されたること多きを信ずる者に候陶庵侯の文藝に於ける寄與は文士及び俳優を招きて御馳走されたることの他いまだ聞く所なきを遺憾と致し候匆々頓首

○　正宗白鳥

御質問の不思議なのに答へに窮します強いて申上れば大隈伯は早稻田大學創立の外文藝協會に力を盡せしこと間接に文藝上保護者の地位にありと云つても差支なけれど侯爵の方は只一度小説家に御馳走した位て文藝上云々するは寧ろ滑稽と思はれます。

○　紅綠

文士及俳優と宴を張れる陶庵侯は一場のシャレの積りなりしならん、眞面目に藝術家を尊重する意ならば壹飯の御馳走位てなく他にいくらも方法ありしならんと存じ候洒脱なる侯の爲人を想見するのみにて文藝上何の關渉を認めず候大隈伯の文藝協會々頭たるも早稻田の大地主たるが故にて候べし文藝の眞價を知れる人らしくも思はれず候、文藝協會と御庭園の菊とは御道樂にていらせらるゝやも知れず、これも本當に文藝に忠實な人ならば他に方法もあらんと存じ候、但し伯は學校といふ大なる功績あり此點は侯の道樂と比ぶべくもあらず、要するに御兩人とも今日までの處にては小説に脚本に詩歌に何の御手柄も無きかと存じ候右返事まで

○　島文次郎

拜復面白き御計畫にて生等も諸先進の御評論拜見致

度候而し御申越の段卑見開陳致候義は御免蒙り度く現代人物の批評は斷じて難申上義御承知被下度候甚乍勝手右御斷まで匆々

○ 三上參次

拜啓貴社各位益御清祥欣賀之至りに存じ上げますさて小生こゝ三四日來病中にて遺憾ながら十五日までに御返答申上げ得る見込が立ちませんから此段御諒恕下さいませ以上

○ 德田秋聲

貴問に對して小生など門外漢は何とも申上ぐべき資格無之候へども小生の觸れたるだけの陶庵侯は矢張一個の風流宰相にて別に是と云ふ文藝上の交渉も無之やう愚考致候。早稻田伯は早稻田と云ふ大なる學校を經營し多くの文學者を養成致され候。事功の上より觀れば、素より文藝には大なる功勞を有せられ候が、是れ將た學校經營者としての伯の政治的手腕及地位勢力に待つ處にて、文藝の内容に直接關渉ありとは言ひがたかるべきか。開國五十年史は未拜見致さず候へども、素より學者、歴史家としての仕事とは異り候やう被相考候ゆゑ、是を以て直に文藝に關したりとは言難かるべくやに存じ候。然し侯伯共に政治家にして、深く文藝の趣味は解せられざる迄も、少くとも文藝を扶掖し、若くは文藝に向つて注意を拂はるゝ點に至ては他の政治家と較選を異にしたる處有之、若し其意味に於て孰が大なる關渉ありといへば、無論大隈伯と存候。

○ 正岡藝陽

侯伯共に金持に付文藝上に盡すには他に相當の方法ありさうなと思ふだけにて意見なし

○ 小川未明

拜復斯る問題に關しては未だ考究致せしこと無之候らへ共一寸思惟せしだけにては陶庵侯及び早稻田伯共に消極的の意味に於ける文藝保護者といふを得れど畢竟一種の道樂たり虚榮たるに過ぎずと愚考仕り候先は御答まで匆々

○ 小笠原長生

御書面拜讀仕候然るに近來公務多忙之爲文藝等と相

違かり頓と様子相知れ不申從て意見等も無之候間乍不本意御斷申上候敬具

○　德田秋江

拜復斯る大問題を御あてがひのハガキ面にて論究致すこと誠に手品を遣うよりも六ヶ敷存じ候へども堂々たる一國の首相と文藝協會の會頭とが壹錢五厘文學の題目にせられ候を覺えなば平民文學の時到れり我等が時到れりと興感の湧き來るを禁じがたく存候陶庵侯の御道樂は面白く存候開國五十年史は仰山なる廣告文の他は其の書籍を見ず候へどもあんな方法に依りて生きたる歷史が編めるものか小生共には疑ひなき能はず候文藝協會の事は能く存ぜず候へどもウント保護金を出さぬ保護の名は單に保護の美名を空うするものかとも存候草々

○　孤島

陶庵侯を野に下らしめ、隈伯を朝に立たしめて、兩者の文藝に對する態度の如何に樣ずるかを見たきもの也、今の處にては何も坐興なり、文藝との關涉などは

まだ〳〵遠き未來のことゝ存候

○　與謝野寬

拜復小生は西園寺大隈二氏に接近せし事無之候間二氏が文藝に對する趣味の程度を知る能はず候へどもその小説家を招待して會飲し又文藝協會の會頭たる事に依つて直接わが文界に交涉ある人物なりとは斷じがたく存じ候草々

○　永井一孝

拜答過般陶庵侯が文士及び俳優と一夕の淸宴を張れることが直ちに明治の文藝史上に何等かの關係あるべしとは予輩の毫も思念せざりしところ實は御尋に接して始めてさることもあるものかとさへ一驚いたし候程に御座候又早稻田伯が五十年史の選者としては兎も角文藝協會々頭としていかばかり明治の文藝史に交涉するところあるべきかは同協會發起人の一人たる予輩之を論ずる資格なきものかと存ぜられ候まゝこれはた御答いたしかね候惡しからず御諒察下されたく候不宜

○　小杉天外

藝術史を飾る物は單に藝術品自身のみ、而して藝術品は亂髪蓬々たる作家の頭腦に生じたる幻想の成形せしものたるに過ぎず、此の作家の頭腦たるや神聖また玄妙妻妾の愛も骨肉の親も一毫の援を之に加ふるに足らざるものとす、されど現代藝術界の趨勢は我がこの所信と異なるもの多からんとす、惟ふに陶庵侯と早稻田伯との文藝上に於ける關渉の如き我に於ては更に數段の研究を重ねて而して後に云ふべきの問題ならんか

○

木村鷹太郎

「大理評事陳舜封、事を奏して口捷かに、擧止倡優に類す。問ふ、誰氏の子ぞと。對ふるに父伶官たるを以てす。上（宋王晃）曰く、汝眞の雑類なり。豈清望の官に任ずるを得んやと。改めて殿直を授く。」

「文藝上に於ける陶庵侯」とか。あゝ侯や目下日本内閣の總理大臣たるのみ、何等文藝上に功あることなし。俳優と酒宴し、女優を奬勵し、小説家の贅辭を受け——以て何等明治の文藝上に於ける關渉なるものありとせば、あゝ文藝とは如何に價値なきものなるかな。政客は侯之れを招かん、是れ自己の政策上爲めにする所あればなり、新聞記者は侯又た之れを招かん、是れ歡心を得んが爲めなればなり。然りと雖侯が精神家敎育家等を招きたりとのことは、余未だ之れを聽かず、余は侯の果して物の輕重、上下、前後を辨ぜる者なるかを疑はざるを得ざるなり。

然りと雖人ありて余の袖を控へて云はん、君請ふ爾かく力む勿れ、侯や敢て敎育及び精神上の事を輕んじ俳倡、戯作等を重んずるに非ざるなり、これ侯一時の娯樂なるのみ、一國を保つの首相西園寺侯と、文藝趣味の陶庵侯とは資格を別にす、君、請ふ力み論ずる勿れと。然り、余は力まざらん。然りと雖事本末あり、物輕重あり、「人格」なるものは之れを二三に別つ可からず。「其以つてする所を視、其由る所を觀、其安んずる所を察す、人焉んぞ廋さんや、人焉んぞ廋さんや」人格こゝに見るべし。

社會を以つてすれば上流に在り、位階を以つてすれ

ば上位にあり、職責を以つてすれば天子の補佐たり。而も其以つてする所を視、其由る所を觀れば、俳優を親むなり、戯作を貴ぶなり、女優を奬勵するなり。果してこれ天下を善導するの方たるべきか。余惑なき能はず。詩に曰く

節彼南山、維石巖々、赫々師尹、
民具爾瞻、憂心如惔、不敢戯談。

＊　＊　＊　＊

尹氏大師、維周之氐、秉國之均、
四方是維、天子是毗、俾民不迷。

次に――「文藝上に於ける早稻田伯」とか。余は文藝上に於ける早稻田伯を謳歌するの言辯を有せざるを悲しむ者なり。伯や宜しく理想的政治家を以つて居るべし、大言壯語は、小言弱語に優れり――伯や、徒黨を組みて政界に志を暢ばさんとするよりも、寧ろ宜しく天下の英才を得て、之れを敎育するを大となすべし。是れ吾人の大隈伯を頌美せんとする所なり。かの文藝協會、是れ果して何物ぞ――俳倡的文學を奬勵し、俳優の餘唾を甞めんことを主旨とし、毫も「人物」及び「文化」其物を目的とするに非ずして、人物及び文化の眞似事の技藝を目的と爲せるものにあらずや。伯の早稻田に育英の校舍を設くるは、其意果して何處にかある、眞の人物を作らんとするにあるかはた又た眞似事師、俳優、藝倡を作らんとするにあるか。伯や早稻田敎育の世評を聞くか曰く『早稻田は淺薄なり、輕浮なり、米瘦せて稗茂げり、秀材枯れて雜木繁れり』と。意ふに伯や晏如として、俳倡を奬勵し、眞似事術を貴ぶ所の文藝協會等の會長となり居るべきの時に非ざらん。

今や時勢滔々として浮華、輕薄、虛飾、淫靡に流向し、剛健着實の氣風地を拂つて去らんとし、人は眞似事を悦びて眞實を好まず、娯樂に耽りて實務を省みず、藝術に偏して經綸を知らず、人才の枯死を思はずして文藝協會の會長等に擔ぎ揚げらるゝを喜べり。

余は現下の時勢を察して、其新聞政治（Newspaper-cracy）の世なるを患ひしが、今や日本は又たプラトー

ンの所謂演劇政治(Theatrocracy)の世となり、眞似事を以つて能事を爲し、眞理淺薄、卑近にして、只管外觀皮と、快樂的趣味とを以つて事物の標準と爲さんとするに至れり。

陶庵侯や、早稻田伯や、此くの如きの惡時勢に於て、其惡勢を增長するの事物を奬勵するは、果して識者の稱賛に値すと思へるか。侯や、倡優を奬勵し、伯や雜類雜誌を作らんとす。あゝ余は蕪辭を以つて罪を侯伯に獲ると雖、時勢の腐敗を助長するの罪は、侯伯之れを天に獲べし。

早稻田伯が開國五十年史を監修したるは、世を益せざるに非ずと雖、伯の功とすべきに非ず、伯、たゞ聊か其位置と聲望とを利用し、又た微細なる(余は之れを微細と言ふ)資金を之れに投じたるに過ぎざるなり。此くの如きは堂々伯の力を以てせずとも「博文館」編輯局なりとも能くすべきのことなりと信ず。利便は之れを謂ふも伯の功は之れを認むるに足らざるなり。

余は侯と伯とが、明治の文藝上に於ける關涉の如何なるやを知らずと雖、寧ろ侯伯の所謂文藝なるものが、時勢の惡風助長に關渉あるは、之れを認めざるを得ざるを悲しむ。

○　足立北鷗

拜復小生の了解する所によれば、花を愛するの人は皆文藝を愛するの人也。少くとも愛し得るの素質ある人也。隈伯が文藝に盡すと、猶彼が園藝に盡すが如きものあるは、畢竟之れが爲めのみ。單に大風呂敷の故のみとは解すべからず。陶庵相公亦常に解語の花を愛して風流の何物たるを解す。其文藝を嗜みて自ら俳句を唸る蓋し故無きにあらず。侯伯の性行既に如斯、文士と俳優の招宴も、文藝協會の組織も皆玆に基くよ固より論無かるべしと雖も、特に明治の文藝との關涉を論ずる程のドヱラキ事ありや否やは小生存じ不申候。

○　紀星峰

拜復折角の御下問には候へども小生は未だ陶庵侯が一夕「文士及び俳優と讌宴を張れる」其事が如何なる關

涉ゝ明治の文藝上に有するに至りしか、又文藝協會の會頭として早稻田伯が明治の文藝上に致しゝ事など承知仕らず、開國五十年史をも未だ一覽仕らず候へば單に御下問の點よりのみにては未だ御答申し難く御容赦のほど希望仕候但し文部省にて美術奬勵の爲め一萬圓を支出し其の第一回展覽會を開くやうに相成候に就いては文部大臣は勿論首相の侯にも御盡力ありたる事と存候、現に侯にも出品のあるものを買求めたるやに承知致候、侯と文士俳優などゝの一夕の宴が明治の文藝上に何等かの關涉ありと申さるれば此の事もさ申されざるや一言附記仕候敬具

○ 畔柳芥舟

拜復特に研究致したる問題ならざる故に即答し得る腹案も無之候得共日本に於ては文藝の世間的地位を一歩進め得たるならんと存じ候しかし西洋のやうになるにはマダ〲駄目に候匆々不備

○ 土井晩翠

一夕の宴會文藝に多少の關涉ありとせば余は陶庵侯の偉なるに驚かざるを得ず文藝家の神經過敏に呆れざるを得ず○文藝協會々頭としての早稻田伯に何等文藝上の貢献ありやは知らず開國五十年史は未讀なれど後世に對して好箇の史的參考書たるを疑はず

○ 町田柳塘

貴翰拜誦御申越の問題に對しては實に結構の事と申すより外に愚見無之候間左記の拙句二首にて御勘辨被下度候

陶庵侯

梅咲いて厠の隅も風薫る

早稻田伯

何處までも蔓の延び行く南瓜かな

○ 長谷川天溪

西園寺侯爵が首相として政治をやる積りにて文藝界に活動するが大隈伯にして、大隈伯が園藝を樂む積りにて文士と交際するが西園寺侯なるべしと存じ候

○ 林田春潮

陶庵候か俳優文士を延き一夕の宴を開けるは、その

一國の宰相たる地位よりして世人の好奇心を惹くと雖も、早稻田伯が野にあつて私財を抛ち、不具の身を挺げて四方に説き、以て誠意、文藝の奬勵保護に努力せらるゝことは、日を同うして語るべきにあらずと存候。

附記　早稻田伯は文藝協會の會頭たり、開國五十年史の選者たるの外、全國の有力なる美術工藝家に依りて組織せられたる日本成美會の擁護者に御座候。

○　兒玉花外

陶庵侯が文士及び俳優と淸宴を張られしは、予の如き浪人の窺知る所に非ずと雖も、これは寡聞一夕風月の縁を結ばれしのみ。敢て明治文藝上に何等の印跡を留むるものにあらざるべし。

大隈伯の開國五十年史の選者たるは、之れ大隈氏の地位と平生の豪氣とを最も善く利用し得たるもの。其結果より見て、勿論日本文學史面に特筆すべき事たるを信ず。

○　田能村秋皐

拜啓學術上の研究、考證、發明又は大編纂と云ふが如き篤學的事業は長き年月、多くの勞力、大なる費用を費せば成功し得べく隨つて之に對して或勢力が誘掖し保護することは最も必要有益なるべく候へども文藝の如き天才的事業は誘掖保護によりて成功を博し得べきものに非ずと信じ候故に一侯一伯の行動も文藝上全く利益なしとは申し難く候はんも畢竟其傳記に一の逸話を添へ、又明治文藝史に「こんなこともあつたつけ」と申候一話柄を加ふに止まり取立てゝ論議するには足らぬことゝ存候早々

○　幸德秋水

文藝は或意味に於ては、萬人理想の反映、一代風尚の顯現也、今の萬人の理想が富貴權勢に向つて狂し、一代の風尚が華奢風流に向つて趨るの時に當つて、一部の文藝が專ら貴族的趣味を鼓吹し、若くは盛んに兩性的慾情を挑撥して、以て貴族富豪の眷顧を得んことを求め、貴婦人令孃の嗜好に投ぜんことを力むるは、洵に自然の勢に非ずや、是に於て乎即ち陶庵君の雅宴が隨

喜感泣賛歎せられ、大隈君は推されて文藝協會會頭となる、毫も怪しむに足るなき也

陶庵君は華族中の才子、大隈君は政治家中の英雄なりと聞けり、然れども文藝に關する趣味と智識と技巧と手腕とに於ては、陶庵君位ひの才子、大隈君位ひの英雄は、我等平民中には澤山ゾコラに轉がり居れるを信ず、夫れ猿芝居の喝采せらるゝは、其藝術の巧なるが爲めにあらずして、唯だ其猿にして之ヶ能くするの奇なるが爲め也、陶庵君の賛歎せられ、大隈君の推戴せらるゝ、亦た唯だ華族にして如此く、政治家にして如此きの奇なるが爲めのみ、唯だ其侯爵たり伯爵たり富貴權勢を有して華奢風流を恣まにするの、現代潮流に乘するの人なるが爲めのみ、豈に特に其文藝の趣味、智識、技巧、手腕の秀抜なりと言はん哉

故に予は陶庵君の饗宴と、大隈君の文藝協會會頭たりてふことが、明治文藝の眞價に對して、何等見る可きの影響關渉なからんことを望む、何となれば若し多少の影響關渉之れ有りとせば、是れ明治の文藝が漸く富貴權勢の幇間たり、人爵門閥の奴隷たらんとするの兆なれば也、俗化の門を開くものなれば也、墮落の第一歩なれば也、若し今の俳優文士にして上流貴族の玩弄慰樂たるを以て誇りとするに至らば、是れ往時徳川の奥女中に買はれし河原乞食、吉原の大盡に奉仕せし戯作者と何の異なる所なければ也

予は今の文藝が、貴婦人令孃の劣情に投ずるの者たらんよりも、工女賣淫婦の血涙を拭ふの者たることの更に高尚なるべきを感ず、富豪貴族の娯樂の爲めにせんよりも、多數國民の趣味感情を向上せしむるの更に尊敬すべきことを感ず、滔々たる腐敗墮落の潮流に反抗して、燦爛たる新光明、新時代の出現を助成すべき高遠の使命を有する者なることを感ず、是れ唯だツルグネフ、ユーゴー、トルストイ、ゴルキー、ゾーラの如き人にして初めて能くすべし、豈に一時の權勢豪華を誇る侯爵伯爵の能くする所ならんや

若し夫れ開國五十年史てふ大著述に關しては、未だ之を拜讀するの光榮に浴せず、陋僻の地に蟄居するの、

流行に後るゝが如き者あり、慚愧に堪へず

○　孤村生

拜復この二氏は申すまでもなく明治文藝のパトローンに御座候、併しパトローンなるものはその人が亦文藝上の偉人ならざる限りは、文藝の實質に大なる影響を及ぼすものには無之候されば一侯一伯の明治文藝に於ける價値は、十部乃至百部位も買つて與れる顧客のそれと見れば大過なかるべきかと愚考仕候、先は要件のみ御返事まで草々

○　後藤宙外

拜復お尋ねの問題はなかなか趣味あるものと考へ候へども何分陶庵侯も早稲田伯も文藝に對しては、やッと關渉を始めたばかりのところ故、今日は未だ論ずべき時期ではあるまいと存じ候、今後に於ける侯伯の活動を拜見して後靜かに論ずるが穩當かと存じ候。匆々

○　三宅雄次郎

一は贅六の如く、一は野武士の如し。

○　樗陰生

文藝は非俗的のものと稱せらる。浮世の榮華虚名の外にありて、悠々自適の快樂を與ふるものと稱せらる。此事頗る道理あり。而かも文藝も人間の産物也、社會の産物也。人間を支配し、社會を支配する法則は、容赦なく又文藝の世界をも支配す。唐の世、詩を以て士を採れば、一世の才人悉く作詩に熱中し、宋の世、文を以てすれば一代の俊髦亦皆作文に腐心す。蓋し權勢と富貴と榮華と名聲とは、所謂理想家の思考するよりも遙かに大いなる原動力を有し、吸引力を有す。社會が文藝を重んずるの程度、文人を尊ぶの程度は、間接に而かも甚深に文藝の盛衰に關す。

顧て我明治の文藝を見る。其進歩發展實に驚くべし又文藝の士の社會的地位を占むるに至りたることも著しき事實也。之を以て彼の近松、馬琴の如き作家すら自ら卑うせざるを得ざりし時代と考較すれば、殆んど同じ國に起りし事とは思はれず。さりながら之を泰西文明諸國の文藝に對する態度と比較し見れば、遺憾な

がら未だ其及ばざること遠きを歎ぜざるを得ず。固より文士自身及び文學を愛好する青年の如きは、文學を以て地上最高のものとなし、文士を以て社會最高の位置にあるものと信じ居るならん。されど其以外の社會大多數の人は未だ文藝の貴きと文士の重んずべきことを知らざるにあらざるか。其結果、詩を作るより田を作れど子を戒むる父はなきか、文才ある弟の筆を折りて、銀行の算盤をはじかしむる兄はなきか。確かにあり、夥しくあり、殆んど然り、悉く然り。學校は小説を讀むを禁ず、家庭も亦之を禁ず。罪は一半文藝にもあるべく、文士にもあるべし。然れども一半の罪は社會の文藝と文士とに對する正當の見解を得ざるにあり。社會悉く之を解せざる尚忍ぶべし。而かも親も解せず、妻も解せず、親族故舊悉く解せずといはゞ、情に脆きは文士の常、如何に文藝を非俗的なりと思ふも、時に不滿の感なきを得ざるべし。事の眞僞は之を保せざるも西侯の招待を被れる一文士が、遙々書を故郷に寄せて宰相と盃を交はせるを自負したりと傳ふるもの、吾人は其文士の自ら輕んずるを罵り、其無邪氣なるを笑ふの前、須らく社會の文士を見ることの如何に低かりしかを嘆ずべき也。

此點よりして西侯の招待會なるものを見る。我明治の文藝と淺からざる關渉を有し來る。西侯の俳句の價値は吾人之を知らず。世或は月並調也と罵るものあり。或は然らん。又西侯の文藝上の素養も吾人之を知らず。世或は只珍本奇書を渉る道樂文藝家（アマアリダンテ）なりと笑ふものあり。或は然らん。又西侯が如何なる意味に於て文士を招待したるかも吾人之を知らず。世或は一種の物好きに出でたるのみと嘲るものあり。是れ亦或は然らん。然れども此等の事の然るや然らざるやは吾人の問ふ所にあらず。「明治の文藝に如何なる關渉を有するか」を論及するには、西侯の作句の手腕、文藝の素養、招待の動機を問ふの要なし。只招待其の事が如何なる結果を文藝上に齎らすべきかを研究すれば足る。當時の新聞紙が悉く數欄の紙面を割いて侯と文士との一言一話、一擧一動を報導し、天下の耳目亦一時悉く之に聚

れるかの觀ありしより推せば、總理大臣侯爵西園寺公望が文士廿名を招きつ、招かれつ。宴席を共にし、肱を把て清談し、盃を擧げて嬉笑したる事實は新聞紙の至る所は至らざる限なく聞知せられ、文士なるものゝ存在を知らず、若しくは知るも重んずるを知らざりしものは、文士とはなかゝゝエライもの哉、日本一のエライお方と同等の交際をなすとはすばらしきもの也。そんなエライものとは今日まで夢知らざりしと、從來より廣き範圍に文士の世間的地位、社會的地位を重んぜしむることゝなり。年少氣鋭功名の念熾んなる青年も手に唾して起つに至るべく、又頑固なる老爺が文學志望を排斥するに對して、文士の尊嚴を證するの一材料とも用ゐらるべし。此事文藝の清興、文士の尊貴を熟知するものにとつては、俗情淺見當さに唾棄すべき事の如きも、社會進化、事務發展の動機は往々かゝる俗情淺見の裏に潜むものたるを奈何せん。人又或は難しといはん。浮世の富貴榮華功名利達を望んで起ち、宰相の知遇を得るを自的として出づる文士の如きは、其人物も作品も略ぼ推知し得べきのみ。豪傑の士は文王なしと雖も起る。天才の人は社會の好尙趨勢と沒交渉に出づ。汝の言の如きは偶々小文士、俗文士、三文文士の出現を盛ならしむるのみと。此言も亦一理なきにあらず。されど文王なしと雖も起るの士は文王あれば益々起り、文王なければ起らざるの士も文士あれば又共に起らんとす。天才の士は社會の好尙趨勢と沒交渉に出づることあるべし。然れども社會の好尙趨勢にして天才の出現を促すの狀態にあれば、天才の出て易くして又數多く出づること疑ひあるべからず。春風吹き來て梅花綻び、梅花綻び初むれば黃鳥枝上に鳴く、物の推移の氣運に待つあること決して尠少にあらず、又土地豐饒なれば禾穀實ると共に雜草も亦茂る。雜草の茂るを厭ふて土地の瘦瘠を希ふが如きは智者の爲さゞる所也。雜草茂らば利鎌を揮つて撫切りにすべし。小文士、俗文士、三文々士出でなば批評の鋭刄を礪して打つべし、懲らすべし。然れども吾人は禾穀の實らんが爲めに土地の豐饒を欲するが如く、文藝の繁昌せんが爲

めに、一般社會の文藝を尊重せんことを欲せざる能はず。而して西侯の招待なるもの、實に一般社會をして文藝を尊重せしむるの一動機、一暗示、一諷諫を與へたるもの也。吾人は此意味に於て西侯の明治文藝上に於ける關渉の決して淺からざるを見る也。俳優の招待も亦同様の立場より見得べきを以て略していはず。

然らば次に、隈伯の明治文藝上に於ける關渉は如何。世上の熱心なる期待を受けつゝある「開國五十年史」なるものは天下後世に誇るべき大事業、大著述なるか。出版の上ならては兎角の評を下し難きも、稍々其内情に通ずる人より傳聞する處にして大過なからしめば、執筆の士、數十名の中、眞に其最善の力を盡して寄稿したる人は極めて寥々、多くはさら／＼と書き流したるものか、又は他人をして代筆せしめたるもの也といひ、又其費用の如きも決して伯一人の自腹を切りしものにてはなく、隨分政府などよりも助力を仰ぎたるものなるやに傳ふ。勿論各自、其局に當りし事か、又は其專修の事を記述するを以て、局外の人の關知すべからざる好材料も多々なるべきを疑はざるも、眞に後世に傳ふべき大著は矢張り只寄り合の力のみにては出來ざる事と思はる。さりながら、こは望蜀の念より生じたる註文にて、開國五十年史が他の歴史に比して一種の特色あるべきこと、及び其一種の特色は隈伯の如き、交際も廣く、勢力もあり、趣味も乏しからず、且つ活動を好む人の手によるにあらざれば出來ざることを知らば吾人は又伯に感謝すべき理由を有せざるにあらず。然れども伯の明治の文藝上に於ける關渉は即ち別に之れ有り。そは即ち伯の文藝協會々頭たること也。思ふに世上文士程團結の力に乏しく、動もすれば輙ち孤立し易きものはあらじ。其結果衆力を合して社會的運動をなすが如きは文士の最も不手際とする所にして、文士の社會的地位の容易に認められざるが如きも、其幾分の理由を又茲に存せり。而かも此多忙にして雜駁なる世の中に於て、一種の目覺ましき運動を起さんとすれば必らず或團體を組織して團體運動を開始し、團體の力によつて之を遂行するの得策なるに若かず。我が今後

の文藝の發展—文藝の普及の如きも明かに此團體の力に待つあること決して皆無とすべからず。而して文藝協會なるものは、此團體の嚆矢といふべきものにして、伯は實に此協會の會頭なり。固より文藝協會なるものは伯を俟たざるも必らず成立したるものにして、正直にいへば協會は隈伯を以て一種の飾り物として祭り上げたるに過ぎざるやも知るべからず。然れども祭り上げられたるものを以て、一概に無能無力なるものとするは大いなる誤解也。南都の坊主は法皇を惱まし奉るに常に春日の神輿を擔ぎたりき。擔ぐべき物なければ有力なる運動をなす能はざる場合に、擔がるゝ物は常に或物に打算せられざるべからず。假令伯の協會に於ける只祭り上げられ、擔ぎ上げられたるものに過ぎずとするも、伯あるが爲めに統一も出來、基礎も固まり、發展も容易に、勢力も大いなり。若し伯なければ之に反する結果を來すの恐なきにしもあらずといはゞ、伯たるもの飾り物、祭られ物、擔がれ者なりといふも、是れ亦南都の坊主に於ける春日の神輿の如く、充分に其位置に於ける尊敬に値し又功績を謳し居るものといはざるべからず。近來松本道別氏等が文藝講演會なるものを組織し、多數の文士を集めて講演を開始し、多少の社會的注意を惹起し、團體的文藝普及の一勢力たるを失はざるも、まだ基礎も弱く、又小仕掛なるが如し。基礎も固く稍ゝ大仕掛なるものは今日の所、先づ文藝協會を推さゞるを得ず。而して伯は實に此協會の會頭たり。且つ世上幾多の勢力家あり、素封家あり、政治家あるも、かゝる會の會頭として伯と並ぶ適當なる人物なきを思へば、伯若し一種の擔がれ者、祭られ者、お飾り者とするも、文藝協會は勿論、一般文藝界も亦伯に對して多少の感謝を表するの至當なるべきを思ふ。吾人は此意味に於て伯と我明治文藝界との關渉を見る。(完)



## 豫算問題の趨向

四十一年度豫算案の査定問題は、内には、閣臣元老間に意見の扞格あり。政黨出身の大臣は、來るべき對總選擧策の掛け引きより、黨略上の注文あり。外には前内閣派策士間に仕組れつゝある巧妙なる術數の隱見あり。憲政本黨は、如何にして積極主義の政綱に矛盾せざる態度を定むべきかに惱み。大同倶樂部も亦如何にして桂侯の増税説と總選擧に對する黨略上の利害とを調和せしむべきかに窮し諸新聞、諸雜誌は渠等の後ろに在る背景の農民たり、商工民たると、はた元老たり富豪たると、紳士たり書生たるとに據りて正義、俗論、直言、曲筆、愈々出てゝ愈々錯雜を極はめ、實に近來になき面白き政事問題と成りつゝあり。吾輩は今姑く可否正邪の辯判を離れて、此處に少しく言論界一般の趨勢を、有りの儘に窺ふ所あらんと欲す。反對派の急先鋒東京毎日紙は前後數回に亘れる『増税否認説』に、内閣の『無責任』を詰りて曰く

歳計足らざるが故に、増税は已むべからずと、嗚呼何等無責任の放言ぞや。六億二千萬の豫算案を二十三議會に提出せる當時、此の豫算を以てせば二年以後、少くとも一億の不足を生ぜんとは、全國多數の新聞紙も、議會の少數黨も、之を明言して其の無謀の妄擧を止めんと努めたり。然るに政府の當局は無氣力なるの議會を倒用して、强て之を通過せしめたり。當局は曰く、別に新税を課せず、更に新債を募らず、と(中略)何ぞ計らん、僅に數月を經たるの今日、忽ち増税の説を聞かんとは。特に増税せずと放言せし藏相の側より、此の説を聞くに到ては、吾人の尤も驚く所なり。

と。又増税問題其の物に對しては、未だ反對の態度を採らざるやまと新聞の局外生は、『民信問題』と題して論じて

増税を決する以前に於て先づ決定せざるべからざるものは、現内閣財政方針の對態問題なりと信ず、

と云ひ、更らに『議會劈頭の大問題』に於て

第二十四議會劈頭の大問題は何ぞやと問はゞ、余輩の推論する迄もなく現内閣に對する信任問題なるべきは、天下の俱に、張膽刮目する處なり、

と斷じ、『虎の嘯く音より嫌なるは増税の聲なり』と云へる増税嫌ひの大阪朝日も亦、『増税は斷じて非なり』の一文に於て、

四十一に於て財源に窮し、今や事業繰り延と、一部増税とを遂行せんとの議起り、否實際に今期議會に向て、此の議を提出せんとす。抑々斯の如きは政治家の徳義なりや、(中略)戰後非常税を其儘に永久税に引き返せしのみか、無謀の繼續事業を起し、財政の未來記は語らずと放言し、未來記どころか現在に於て乃ち窮し、政友會か十分に審査して贊成明從すべしと云ふに拘らず、政府自身が自然に事業を繰延べ、又非増税非募債を標榜したるに拘らず、本年直ちに増税を議せんとするに非ずや。斯の如き無責任極まる當局者の言を信ずるに足らず。

と痛論したりき。政府の食言は明白なる事實にして、増税案の提出は、則ち遺憾なく當局者の不明を裏書きするものたるべしと雖も、抑々爲政の途は機に應じ宜きを制すべきもの、机上一片の放言快語とは自ら撰を異にするもの有るが故に、若し今日の場合増税以外他の途なしとせば乃ち如何。國民新聞の『東京だより』は

今日に於ては此の方策の外に、他に手段なければ也。千思萬考し來るも當今の難局を切り拔くる途は只だ増税にあり、

と論じ。更らに他の場所に於て

吾人は我が當局者が此の際に於て、克く中外の情勢を察し、敢て執一の見に拘泥せざるを寧ろ嘉みせんとするものに候。豹變は則ち豹變なれども、君子豹變を成したりと申すの外なかるべく候。世人が之を苛責するは聊か過酷と申すべきに似たり。

と云へり。内閣責任問題の可否は、姑らく之を讀者諸君の冷明なる判斷に讓り、吾輩は直ちに進て増税案そのもの丶討論を擧げざるべからず。松山君の如き有力なる財政通を有する東京朝日は、反對派の飛將軍として前後四回に亘りし大論文『増税は不必要』に於て、論じて曰く

吾人は更に増税不必要の理由を繰返さざる可らざる位地にあり。蓋し目下吾が財政の困難なるは、戰後經營の過大なるよりも、寧ろ其の順序の當を得ざるに基因すと謂ふを得べし。即ち繼續數年度割の偏重偏輕に出づと謂ふを得べし。此點さへ匡正すれば決して増税に及ばざるな

り、本年度以後に於て支出すべき新艦製造費の總額は、六億五千万圓、無論巨額ならざるにあらずと雖も、今後十五年間に亘るものなれば、之を平均すれば一年僅に四千三百万圓の割合に過ぎず。されば政府が若しも之を十五年間に平均して支出するの計劃を立てたらんには、本年度以後數年間の歳出は實に六千万圓を減じ、財政は毫も困難を感ぜざりしなり。否歳入は今後次第に増加すべきにより、繼續費も亦初年度に於て其額を少くし次第に増加するの方針を取りたらんには、縱へ戰後經營をして更に大ならしむるも、之を負擔し得て餘りあらんと思はるゝなり。

と云ひ、更に渠等の本店たる大阪朝日は「血液原料税」と題して、消費税増課の弊害を論じて曰く

蓋し政府が増徴せんとする税目は、公然官廳の名簿に納税者として署名する者のみに課する直接税にあらずして、恰もペストの病菌の如く正體を露はさずして、國民の生活力を滅殺する恐るべき消費税なり。而も酒、砂糖、酢、醤油等、生息て働きつゝある國民の「血液の原料」に増税を爲さんとするものなればなり。(中略)吾人は曾ても論ぜし如く、消費税は中流以下に重くして、富者に輕きものなり、而て國家構成の生産的分子は中流以下の勤勞者にあり、從て國力の増進國勢の發展は中流以下の健全なる心身の發達に依らざるべからず

と云ひ、轉じて税目そのものゝが、増税の目的を達するに甚だ不適當なることを指摘して、

税制調査會の報告に據るも「酒類の消費高は、税金四圓より七圓を経て、十二圓に至る迄は、増税の影響左程迄なくして、其税額も亦經濟の發達と共に、彈力性を帶ぶることを示したり。然るに一躍十五圓となるや、俄に消費高を減じ、非常特別税の増徴と共に其傾向著るしく、收税額は税率増加の割合丈け増加せず。斯の如き統計を示すに拘らず。今日更に増税せんか、再び消費高を減じ、増税の目的を達する能はざるや必せり云々」とあり、其の他砂糖醤油等亦概ね斯の如し

と論じ、有力なる東京經濟雜誌も、亦全く同一の理由を以て「抵抗力の最も微弱なる線路に向て、増税の目的を達せんとする消費税の増徴」を難ぜり、更らに事業繰り延の鋒尖を軍事費の方面に向けて論ずるものに、神戸クロンックル、東京毎日、日本、等あり、東京毎日紙は

日本は英露佛と保安の條約を締結したり。故に今日諸國と共に此利益を享く可き時期に際して、大に勞したる日本は尤も休息を要することは個人の大に活動して疲勞せる狀態に等し。(中略)日英同盟の海軍力は世界何の國も一指を加ふる能はざるなり。陸軍は初めより問題とならず、(中略)見渡す限り東洋の平和、否世界平和の晴望を現じ、又片の眼に遮るなければ、陸軍の擴張設計、海軍の増加計劃を急ぐの必要を見ざるなり。

と論じたり。以上擧げたる多くの非增税說に對して、言論界の少數黨を代表したる國民新聞の「東京だより」は、極めて冷靜なる態度を持して

我國民は松方、井上兩元老の財政意見に就ては、十分感謝す可き理由有之と存候。兩元老の斷々然たる掲議微りせば、吾人は增税せず、募債せずの甘口上の下に、飛んだ迷惑を被るやも未可知事に候。然も桂侯の此間に於ける斡旋の最も多大の効果を發したるは、吾人が贊辯を要せざる所と存候。桂侯は決して難きを人に望む政治家にあらず、決して自ら能はさる所を他に行はしめんとする政治家にあらず、（中略）其の一方に繰延べ節減の必要を認め他方に增税の已むべからさるを識り、之を併行して其の財政の基礎を健全にすると同時に、政治機關の運用を圓滑ならしめんと欲したるは、實に良好の態度と可申候。

と云ひ、又

されど各省が其の注文通りに分取りをなしたる後にて單り陸海軍のみ其の繼續費を繰り延べればならぬ理由無之候

と斷ぜり。更に日本紙が連載したる「增税と實業家」中波多野承五郎氏は論じて曰く

今日の場合、財政の安固を計るの道、增税を決行する外良計なきを信ず（中略 所謂事業繰延などは以ての外の議論にして、殊に陸海軍の繰延に至りては、尙更賛意を表する能はず。

と喝破せり。要するに問題そのものさへ未だ公にはせられざる增税問題が、甲論乙駁、今日何等の歸一點をも示さゞるは固より其の處なりとす。吾輩が此の文を草しつゝあるの時、言論界に於ける財政通三傑の一人と許せられたる園城寺君の如き豪傑を有する萬朝報は「戰後の財政方針」と題して、滔々八回に亘りて未だ決せざるの大論文を連載しつゝあり、他の一人本田君を有する東京日々新聞は『財政上の疑點』第一回を掲げ始めたりき。大關の角力は之れよりと云ふ處か、吾人は刮目して、今後の趨勢を觀ざるべからず。（烏山人）

## 言はんとする心

東亞の光誌上における福來友吉氏の所說は頗る注目を値す、其大要に曰く人には誰にも言はんと欲する心あり、此心妨げられて言語に發する能はざれば必ず伴ふに不快感を以てす、言はんとすとて、別にそれには

明に意識せられたる目的の存するにあらねと妨げらるれば、唯何となく心地善からざること、猶ほ噴嚏の出てんとして遂に出てざる時の如し、吾人が人と語りて對手の言により、偶と話材を暗示せらるゝことあり、あはや言語に出さんとする刹那、如何なる機にか忽ち意識下に沒して再び考へ浮べんとするも得ざることあり、その折の心地の如き正に然り、故に何人も此言はんとする心の滿足を欲して妨害を喜ばず、世に寡默の人あるも之れ言はんとする心の無きにあらず、之に伴ふに制止思想のあればなり、醉ひどれ、お饒舌婆の冗辯多きは正に此制止思想の乏しきを證す、人誰か秘密なからん、秘密を秘密として語り得る對手を得まほしと望むは、如上の己み難き衝動あればなり、故に恩誼の人と語るよりも秘密を告げ得る友と語る方最も樂く、從つて其情も最も厚しとし、更に自惚惚氣にも論及して次の如く言ひぬ、

自惚惚氣なるものも、強き感情を伴ふたる思想であつて、自巳を言葉に表はさんとする衝動の强いものである、而して此も前の秘密と同様で來人胸裏の中に於て、公々然と言ひ表はすことの出來難い性質のものとなつて居る丈け、夫れ丈言葉に表はさんとする衝動の切實に感ぜらるゝものとなつてゐる、古から惚氣を聞かさる人は、御茶菓子でも驕りなさいと言つて、惚氣を言ふ人に請求することゝなつて居る。實際惚氣のある人は、之を言はずに胸中に秘して居ることがつらいのである、と言つて、之れを公衆の前で演説する事も出來ぬ、彼は誰か自分の惚氣を聞いて與れる所の人がないかと内心で大に惚氣の聞き手を切望して居るのである。所が、元來惚氣と言ふものは、之を語つて居る人は左程にも思ふまいが、之を聞かされる身になつて見ると、餘程と馬鹿馬鹿しいものである。佛の樣な質の善い人でなくては、他人の惚氣などを、だまつて、聞いて居れるものでない。惚氣の語り手と聞き手との間には、餘程部割の相違がある、何んとも言はずに惚氣を聞いて與れる樣な人は、惚氣手に對つては餘程の恩人である。御茶菓子を驕つても宜い、少し位財布を叩いても、惚氣を聞いてもらつた方が、惚氣手に取つて結局の得である。(松邃子)

## 丁未文壇に對する世評

日露戰爭後、漸く勃興し來れる文壇の新機運は、歲、丁未に入て、更らに目覺ましき、更らに花々しき活動

を初め、創作に、論議に明治文壇殆んど未曾有ともいひつべき有様を呈し、殊に所謂「自然主義」に對する贊否褒貶の聲に至ては、すべての文士、すべての論客の口より發せられ、文學に緣遠き人までも該問題に喙を挾みし程の盛況を呈したりき。今、十二月發行の主もなる雜誌について、丁未文壇に對する主もなる評論を概見せんに、風葉氏は「文章世界」に於て「覺醒せる明治四十年」といふ題下に、

明治四十年の文壇を概括して見れば、自然派の勃興、その作家の華やかなる運動、それは前にも云つたやうに、恐らく明治文壇あつて以來未だ曾て無き盛なる現象を呈した。これは最も研究すべき傾向、注目すべき運動だと思ふ。

と云ひ、更らに自然派に反對するものを、歷史を無視するもの也と論じ、再び從來の傾向に復歸すべしといふ說を否定して、

昔のものが復活すると云ふ理由は斷じて無いではないか。若し假りに斯ることが現實されるならばそれは、歷史か逆行することである、即ち文壇の退步であるのだ。よし又一步を讓り、今日の自然派が飽かれ棄てられて、文壇が他の方面に推移して行かれればならぬものとするにもせよそれは退化ではなくて、進步した推步でなければならぬと思ふ、そこでこの進步した推移を欲するならば、自然派の價値なり、意義なりを作家自身がどこ迄も消化して、それに何等かの新意義を加へて行くべき必要があるのである。

といひて、彼は自然派の價値と意義とを認むと雖も、同時に、此派の「進步した推移」をなすことあるべきを拒まず。而して此「進步した推移」をなすことあるべきのみならず、更らに其望ましきを唱へたるは德富蘆花氏にして、單に望ましきのみならず、其必要なることを論じたるは後藤宙外氏也。蘆花氏は趣味の「蘆花庵一夕話」に於て「自然主義をどう思ふ」と問はれたるに答へて

私は善いと思ひます。少なくとも更に一步進むべきものとして善いと思ひます。自然――無論人事をも含めた意味の自然――を眞面目な態度で研究する樣になつたのは進步である、更に一步進ましむべきではあらうが、決してこれを後へ引戻すべきではないと思ふ。成程世には辟易すべき事も多からう。然しながら臭い物に蓋をして置いたのではいけぬ。汚泥でも何でも、根こそげ掘り上げて暴露して、顯微鏡的檢査を施されねばならぬのである。

唯玆に注意すべきは作家其人の態度である。これが臭き物考へ物であ

らうと思ふ。作家はいかなる意味を認めて其事象を描いてゐるのであるか。いかなる觀念の眼でそれを見てゐるのであるか。或は單にさういふ事實を寫す、卽ち單に自然の相を模寫するといふだけの事かどうか。若し果して然うならば、こゝが一歩進むべき處ではなからうかと思ふ。又私がよく言ふ兩脚の譬、今の作家はその一方の脚ばかりを描いてゐる傾は無いか。人生の全體を觀て居ての事ならば、一方の足を描くもよい。細小の一部分を描くもよい。暗黑の方面のみを寫すもよいさういふものなら必ずその局部の上に全體を思ひ浮べさせ、暗黑の裏の何處かに何等かの微光を點じてゐるに違ひない。が、唯だ無意味なる模寫、若しくば一面に眼を塗いて一面をのみ見ての描寫ならば、まだ不滿足なものであらうと思ふ。單に其の表を見て其の奥を觀ず、或は右をのみ見て左を見ぬやうではならぬ。そこが死活の分れ目。同じく裸體でもゾラ――私は嘗てゾラを愛讀した――の裸體は解剖臺上の裸體であるが、春水の裸體は單に遊治郎の見た裸體に過ぎない。かういふ處に止まつてはならぬと思ふ。

と論じ、宙外氏は新小說の「歲末偶言」に於て、自然派の善良なる影響を認めざるにあらざるも、而かも

兎も角近い將來に於いて自然派の主張には或修正を要することにならうし、其作に臨む態度にも幾分の變化を來たすは自然の勢であらうと信ずる

といへたり。生田長江氏の如きは趣味に於て、批評家中餘りに自然派的傾向にのみ盲從するものあるに慨し、「傾向の價値を偏重する今日の如く太しきに至れば吾人またや丶言論の態度を更めてかゝらなければならぬ」といひて

卽ち、田山花袋氏の『蒲團』を打棄てゝ置いて、夏目漱石氏の『虞美人草』を推獎しなければならぬやうになる。正宗白鳥氏や、水野葉舟氏や、吉江孤雁氏の新作をかれ是れ云ふ前に、泉鏡花氏や、小杉天外氏や、廣津柳浪氏などの天分を、今更のやうにとりたてゝ嘆稱せざるを得なくなる。

と說きたるは、假令自然主義一點張りの評家に下したる批評なりと雖も、其裏面には、又自然派以外にも取るべきもの、見るべきものあるを暗示したるものとも見れば見らるべし。要するに或一方には自然派一點張自然派最高觀の論者もなきにあらざるも、大體に於ては自然派を以て進歩の階段にあるもの、何物かを附加すべき餘地あるもの、多少の修正を要するもの、極端に擔ぎ上ぐれば、一種の反動を來すべきものと見るに於て一致すべき傾向を有するが如し。而して丁未文壇にあらはれたる作物夫自身については宙外氏は前に舉

げたる同じ文に於て「多くの傑作を得ざりしとて少しも失望するには當らぬ。兎も角、

「其面影」や「虞美人草」や「コブシ」や「並木」や「愛火」や「蒲團」や「大晝」や「紅塵」や其他諸名流の作が盛んに出た。却々賑やかな花やかな活氣のある年であつた。

といひ、田山花袋氏は「文章世界」の「多事なりし明治四十年」に於て

四十年の文壇で、小說の方面では國木田獨步氏の「都の友へB生より」「節操」小栗風葉氏の「弟㜑」德田秋聲氏の「駈れもの」島崎藤村氏の「並木」「黃昏」小山內薰氏の「色の褪めた女」二葉亭四迷氏の「其面影」正宗白鳥氏の「好人物」眞山青果氏の「茗荷畑」等をすぐれた作品だと思つた風葉氏の「解脫」は長篇で未完であるが、これが立派に出來上つたら頗る傑作になるであらうと思ふ日本に出て居る「戀ㄍ」も愛讀して居る。

房州の料理屋のカラーの出て居のはうれしい。佐藤紅綠氏の內慾に對する態度は多少飽足らぬ處があるが、『鴨』は私は好い作だと思ふ。

と述べたり、即ち丁未文壇に對する世評一般は殆んどすべて樂觀的色彩を帶べりといふも不可なき也。（あふち生）

「海內思潮」と「評論」とは社同人の擔當となしたるを以て、爾後及はずながら、大に努力して活動せんと欲す

今年の「ホトヽギス」の新年號は百二十頁許りの

附錄をつけた此附錄のうち、

一番長いのが左千夫の「隣の嫁」でこれは「野菊の墓」以來の同氏の傑作である。

一番短いのが藪柑子の「障子の落書」で此作者が誰であるかは讀者が此文章を御覽になつたらすぐわかる。

一番をかしいのが鼠骨の「島」で作者は眞面目だけれど讀者は笑はずには置かぬ

一番眞面目なのが四方太の「長靴」で、此は寫生文が小説になつたら斯んなものだと一新機軸を出して居る。

一番不思議なのが八重子の「柿羊羹」で、これは女の丸髷を切つたのを虎溪山の和尚サンが預つてゐるといふ話。

一番氣の毒なのが虚子の「病兒」で、これは病身な子供に制せられて活動の出來ぬおいさんを書いたもの。

一番勇ましいものは天弦の「文壇最近の趨勢」で、これは四十年の文壇を品隲せる長論文也。

委細は前頁の廣告を御覽あれ

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

# 天下踐望の書新粧茲に成る

◀◀四十一年元旦發行▶▶

夏目漱石氏著

# 小說 鶉籠草

橋口五葉氏意匠

全壹冊帙入大冊
本文六百頁
美裝最上紙印刷
實價金壹圓五拾錢
小包料十五錢

高濱虛子氏著

# 小說 鷄頭

石井柏亭氏意匠

夏目漱石氏序

純說にして而も淡く淺きところに著者の趣味あり、世俗派に對してこれをいへば俳詩派の小說也自然派に對してこれをいへば寫生文派の小說也

全壹冊 洋裝極美
實價金七拾錢
郵稅金八錢

東京日本橋通 春陽堂發兌 振替一六一七




クロース特製
定價金七拾錢
小包料金八錢

強烈、肺腑に徹するの筆を以て、人生の眞實を捉へ、感情の自然を描く。青果集一卷、新時代の誇りとすべき新藝術なり。

東京麹町區土手三番町廿七番地
新潮社



# 竹の木戸

國木田獨步

（上）

大庭眞藏といふ會社員は東京郊外に住んで京橋區邊の事務所に通つて居たが、電車の停留所まで半里以上もあるのを、毎朝缺かさずテク〱歩いて運動には恰度可いと言つて居た。溫厚しい性質だから會社でも受が可かつた。

家族は六十七八になる極く丈夫な老母、二十九になる細君、細君の妹のお清、七才になる娘の禮ちやん之れに五六年前から居るお德といふ女中、以上五人に主人の眞藏を加へて都合六人であつた。

細君は病身であるから餘り家事に關係しない。臺所元の事は重にお清とお德が行つて居て、それを小まめな老母が手傳て居たのである。別けても女中のお德は年こそ未だ二十三であるが私はお宅に一生奉公をしますといふ意氣込て權力が仲々强い、老母すら時々此女中の言ふことを聞かなければならぬ事も

あつた。我儘過るとお清から苦情の出る場合もあつたが、何しろお徳はお家大事と一生懸命なのだから結極はお徳の勝利に歸するのであつた。

生垣一つ隔てゝ物置同然の小屋があつた。それに植木屋夫婦が暮して居る。亭主が二十七八で、女房はお徳と同年輩位、そして此隣交際の女性二人は互に負けず劣らず喋舌り合つて居た。

初め植木屋夫婦が引越して來た時、井戸がないので何卒か水を汲まして呉れと大庭家に依頼みに來た。大庭の家では其は道理なことだと承諾してやつた。それから彼是二月ばかり經つと、今度は生垣を三尺ばかり開放さして呉れろ、そうすれば一々御門へ迂廻らんでも濟むからと頼みに來た。これには大庭家でも大分苦情があつた、殊にお徳は盗棒の入口を造へるやうなものだと主張した。が、しかし主人眞藏の平常の優しい心から遂に之を許すことになつた。其方で木戸を丈夫に造り、開閉を嚴重にするといふ條件であつたが、植木屋は其處らの藪から青竹を切つて來て、これに杉の葉など交ぜ加へて無細工の木戸を造くつて了つた。出來上つたの見てお徳は

「これが木戸だらうか、掛金は何處に在るの。こんな木戸なんか有るも無いも同じことだ」と大聲で言つた。植木屋の女房のお源は、これを聞きつけ

「それで澤山だ、どうせ私共の力で大工さんの作るやうな立派な木戸が出來るものか。」

と井戸邊で釜の底を洗ひながら言つた。

「それじやア大工さんを頼めば可い。」とお徳はお源の言葉が癪に觸り、植木屋の貧乏なことを知りなが

ら言つた。
「頼まれる位なら頼むサ。」とお源は輕く言つた。
「頼むと來るよ」とお德は猶一つ皮肉を言つた。
お源は負けぬ氣性だから、これにはむつとしたが、大庭家に於けるお德の勢力を知つて居るから、逆らつては損と虫を壓へて
「まアそれて勘辨してお呉れよ。出入りするものは重に私ばかりだから私さへ開閉に氣を附けりやア大丈夫だよ。どうせ本式の盜棒なら垣根だつて御門だつて越すから木戸なんか何にもなりやア仕ないからね。」と半分折れて出たのでお德
「そう言へばそうさ。だからお前さんさへ開閉を嚴重に仕てお呉れなら先ア安心だが、お前さんも知つてるだらう此里はコソ〳〵泥棒や屑屋の惡い奴が漂行するから油斷も間際もなりや仕ない。そら近頃來たパン屋の隣に河井樣て軍人さんがあるだらう。彼家ぢやア二三日前に買立の銅の大きな金盥をちろりと盜られたそうだからねえ。」
「まア如何して」とお源は水を汲む手を一寸と休めて振り向いた。
「井戸邊に出て居たのを、女中が屋後に干物に往つたぼつちりの間に盜られたのだとサ。矢張木戸が少しばかし開いて居たのだとサ。」
「まア、眞實に油斷がならないね。大丈夫私は氣を附けるが、お德さんも盜られそうなものは少時でも

戸外に放棄つて置かんやうになさいよ」

『私はまア其樣ことは仕ない積りだが、それでも、ツイ忘れることが有るからね、お前さんも屑屋なんかに氣を附けてお呉れよ。木戸から入るにや是非お前さん宅の前を通るのだからね。』

『えゝ氣を附けるともね。盜られる日にや薪一本だつて炭一片だつて馬鹿々々しいからね。』

『そうだとも。炭一片とお言ひだけれど、とうだらう此頃の炭の高價いことは。一俵八十五錢の佐倉が彼だよ。』とお德は井戸から臺所口へ續く軒下に並べてある炭俵の一を指して、幾干入てるものかね。ほんとに一片何錢に當くだらう。まるでお錢を涼爐で燃して居るやうなものサ。土竈だつて堅炭だつて悉な去年の倍と言つても可い位だからね、』とお德は嘆息まじりに『眞實にやりきれや仕ない』

『それに御宅は御人數が多いんだから入用ことも入用サね。私のとこなんか二人限だから幾干も入用ア仕ない。それでも三錢五錢と計量炭を毎日のやうに買うんだからね、全くやりきれや仕ない。』

『全く骨だね』とお德は優しく言つた。

以上炭の噂まで來ると二人は最初の木戸の事は最早口に出さないで何時しか元のお德お源に立還りぺちやくちやと仲善く喋舌り合つて居たところは埒も無い。

十一月の末だから日は短い盛で、主人眞藏が會社から歸つたのは最早暮れがかりてあつた。木戸が出來たと聞いて洋服のまゝ下駄を突掛け勝手元の庭へ廻はり、暫時は木戸も見てただ微笑して居たが、お德が傍から

「旦那樣大變な木戶て、御座いませう。」と言つたので

「これは植木屋さんが作らへたのか。」

「さうて御座います。」

「隨分妙な木戶だが、併し植木屋さんにしちやア良く出來てる」と手を掛けて搖振つて見て「案外丈夫さうだ。まアこれても可い、無いよりか增だらう。其內大工を賴んで本當に作らすことに仕やう。」と言つて『竹て作へても木戶は木戶だ、ハ、ハ、、、』と笑ひながら屋內へ入つた。

お源はこれを自分の宅て聞いて居て、くす〳〵と獨て笑ひながら、『眞實に能く物の解る旦那だよ。第一彼樣な心持の優い人つたらめつたに有りや仕ない。彼家じや奧樣も好い方だし御隱居樣も小まめにちよこまかなさるが人柄は極く好い方だし、お淸樣は出戾りだけに何處か執拗れてるが、然し氣質は優し方だし」と思ひつゞけて來てハタとお德の今日晝間の皮肉を回想して『水の世話にさへならなきや奴に口なんか利かしや仕ないんだけど、房州の田舍者奴が、可愛がつて頂だきや可い氣になりやアて如何だらう彼の圖々しい案梅は』とお德の先刻の言葉を思ひ出し、大變な木戶てせうだつて、あれて難癖を附ける積りが合憎と旦那がお取上に相成らんから可い氣味だ。愚態ア見やアがれだ」と又つと氣を變へて『だけど感心と言へば感心だよ。容色も惡くはなし年だつて私と同じなら未だいくらだつて嫁にいかれるのに、彼樣やつて一生懸命に奉公しているんだからね。全く普通の女にや眞似が出來ないよ。それに恐しい正直者だから大庭樣ても彼女に任かして置きや間違はないサ…………」

こんな事を思ひながらお源は洋燈を點火て、火鉢に炭を注がうとして炭が一片もないのに氣が着き、舌鼓をして古ぼけた藥鑵に手を觸つて見たが湯は冷めて居ないので安心して「お湯の熱い中に早く歸つて來れば可い。然し今日若か前借して來て呉れないと今夜も明日も火なしだ。火ぐらひ木葉を拾つて來ても間に合ふが、明日食ふお米が有りや仕ないと」今度は舌鼓の代に力のない嘆息を洩した。頭髪を亂して、血の色のない顏をして、薄暗い洋燈の陰にしよんぼり坐つて居る此時のお源の姿は隨分憐な樣であつた。

其所へのつそり歸つて來たのが亭主の磯吉である。お源は單直前借の金のことを訊いた。磯は默つて腹掛から財布を出してお源に渡した。お源は中を査めて

「たつた二圓。」

「あゝ」

「二圓ばかし仕方が無いじやアないか。どうせ前借するんだもの五圓も借りて來れば可いのに。」

「だつて貸さなきや仕方がない。」

「それや左樣だけど能く賴めば親方だつて五圓位貸して呉れさうなものだ。これを御覽、」とお源は空虛の炭籠を見せて「炭だつてこれだらう。今夜お米を買つたら幾干も殘りや仕ない。……」

磯は默つて煙草をふかして居たが、煙管をポンと強く打いて、膳を引寄せ手盛て飯を食ひ初めた。たゞ白湯を打かけてザク／＼流し込むのだか、それが如何にも美味さうであつた。

お源は亭主の此所爲に氣を呑れて默つて見て居たが山盛五六杯食つて、未だ止めそうもないので呆れもし、可笑くもなり

「お前さん其樣にお腹が空いたの。」

磯は更に一椀盛けながら「俺は今日半食を食はないのだ。」

「如何して。」

「今日彼時から往つたら親方が厭な顏をして此多忙しい中を何て遲く來ると小言を言つたから、實はこれ／＼だつて木戸の一件を話すと、そんな事は手前の勝手だつて言やアがる、糞忌々敷いから其からグン／＼仕事に掛つて二時過ぎになるとお茶飯が出たが、俺は見向も仕ないんだ。お女中が來て今日はお美味い海苔卷だから早やく來て食べろと言つたが當頭俺は往かないで仕事を仕續けてやつたのだ。そんなこんなで前借のことと親方に言ひ出すのは全く厭だつたけど、言はないじや居られんから歸りがけ圓貸して呉れろと言ふと、へん仕事は怠けて前借か、俺も手前の圖々しいのには敵はんよ、そらからうつて二圓出して與こしたのだ。仕方が無いじやアないか。」と磯は腹の空いた譯と二圓外前借來なかつた理由を一遍に話して了つた。そして話し了つたころ漸と箸を置いた。

全體磯吉は無口の男で又た口の利きやうも下手だが如何かすると啖火交りて今のやうに威勢の可い物の言ひ振をすることもある、お源にはこれが頗る嬉しがつたのである。然しお源には連添てから足掛三年にもなるが未だ磯吉は怠惰者だか働人だか判斷が着かんのである。東京女の氣まぐれ者には其て濟て

ゆくので、三日も四日も仕事を休む、どうかすると十日も休む、けれどサアとなれば人三倍も働くのが宅の磯様だと心得て居る、だからサアとなれば困りや仕ないと信じて居る。然し何處まで行つたら其「サア」だか其樣ことはお源も考へたことはない。又たお源は磯さんはイザとなれば隨分人の出來ない思切た大膽なことをする男だと賴母がつて居る。けれど左樣ばかし思へんこともある。其實案外意久地のない男かしらと思ふ場合もあるが、それは一文なしになつて困り拔た時などて、そう思ふと情なくなるから成るべく其は自分て打消して居たのてある。

實際磯吉は所謂る「解らん男」て、大庭の女連は何となく薄氣味惡く思つて居た。だからお德までが磯には憚る風がある。これがお源には言ふに言はれない得意なので、お德が此風を見せた時、お清が磯に丁寧な言葉を使つた時など嬉さが込上げて來るのてあつた。

それて結極のぺつ貧乏の仕飽をして、働き盛りてありながら世帶らしい世帶も持たず、何時も物置か古倉の隅のやうな所ばかりに住んて居る、從つてお源も何時しか植木屋の女房連から解らん女だ、つまり馬鹿だとせられて居たのだ。

磯吉の食事が濟むとお源は笊を持て駈出して出たが、やがて量炭を買て來て、火を起しながら今日お德と木戸のことて言ひあつたこと、旦那が木戸を見て言つた言葉などぺら〳〵喋舌て聞かしたが、磯は「そうか」とも言はなかつた。

其うち磯が眠そうに大欠伸をしたので、お源は垢染た煎餅蒲團を一枚敷いて一枚被けて二人一緒に一

個身體のやうになつて首を縮めて寢て了つた。壁の隙間や床下から寒い夜風が吹きこむので二人は手足も縮められるだけ縮めて居るが、それでも磯の背部は半分外に露出て居た。

《中》

十二月に入ると急に寒氣が増して霜柱は立つ、氷は張る、東京の郊外は突然に冬の特色を發揮して、流行の郊外生活にかぶれて初て郊外に住んだ連中を喫驚さした。然し大庭眞藏は慣れたもので、長靴を穿いて厚い外套を着て平氣で通勤して居たが、最初の日曜日は空青々と晴れ、日が煌々と輝やいて、そよ吹く風もなく、小春日和が又立返つたやうなので、眞藏とお清は留守居番、老母と細君は禮ちやんとお德を連て下町に買物に出掛けた。

郊外から下町へ出るのは東京へ行くと稱して出慣れぬ女連は外出の仕度に一騷するのである。それで老母を初め細君娘、お德までの着變やら何かに一しきり騷しかつたのが、出て去つた後は一時に森となつて家内は人氣が絕たやうになつた。

眞藏は銘仙の褞袍の上へ兵古帶を卷きつけたまゝ日射の可い自分の書齋に寢轉んで新聞を讀んで居たがお午時前になると退屈になり、書齋を出て椽邊をぶら〳〵歩いて居ると

「兄樣」と障子越しにお清が聲をかけた。

「何です。」

「おほゝゝ「何です」だつて。お午食は何にも有りませんよ。」

「かしこ參りました。」

「おゝ、、「かしこ參りました」だつて眞實に何にもないんですよ。」

其處で眞藏はお清の居る部室の障子を開けると、内ではお清がヽヽせつせと針仕事をして居る。

「大變勉强だね。」

「禮ちやんの被布ですよ、良い柄でせう。」

眞藏はそれには應へず、其處邊を見廻はして居たが。

「最少し日射の好い部室で縫つたら可さそうなものだな。そして火鉢もないじやないか。」

「未だ手が凍結るほどでもありませんよ。それに此節は御儉約といふことに決定たのですから。」

「何の御儉約だらう。」

「炭です。」

「炭は成程高價なつたに違ないが宅で急に其を節約するほどのことはなからう。」

眞藏は衣食臺所元のことなど一切關係しないから何も知らないのである。

「如何して兄樣、十一月でさへ一月の炭の代がお米の代よりか餘程上なんですもの。これから十二、一、二と先づ三月が炭の要る盛ですから儉約出來るだけ仕ないと大變ですよ。お鍋が朝から晩まで炭が要る炭が高價いて泣言ばかり言ふのも無理はありませんわ。」

「だつて炭を儉約して風邪でも引ちや何もなりや仕ない。」

「まさか其樣ことは有りませんわ。」

「しかし今日は好い案排に暖かいね。母上でも今日は大丈夫だらう。」と兩手を伸して大欠伸をして

「何時か知らん」。

「最早直ぐ十二時でせうよ。お午食にしませうか。」

「イヤ未だ腹が一向空かん。會社だと午食の辨當が待遠いやうだけどなア。」と言いながら其處を出て勝手の座敷から女中部屋まで覗きこんだ。女中部屋など從來入つたことも無かつたのであるが、見ると高窓が二尺ばかり開け放しになつてるので、何心なく其處から首をひよいと出すと、直ぐ眼下に隣のお源が居て、お源が我知らず見上た顏とぴたり出會つた。お源はサと顏を眞赤にして狼狽切つた聲を漸と出して

「お宅では斯いふ上等の炭をお使ひなさるんですもの、堪りませんわね。」と佐倉の切炭を手に持て居たが、それを手玉に取りだした。窓の下は炭俵が口を開けたまゝ並べてある場處で、お源が木戸から井戸邊にゆくには是非この傍を通るのである。

眞藏も一寸狼狽いて答に窮したが

「炭のことは私共に解らんで……」と莞爾微笑て其まゝ首を引込めて了つた。

眞藏は直ぐ書齋に返つてお源の行爲に就て考がへたが判斷が容易に着ない。お源は炭を盜んで居る所であつたとは先づ最初に來る判斷だけれど、眞藏は其を其儘確信することが出來ないのである。實際た

と炭を見て居たのかも知れない、通りがゝりだからツイ手に取つて見て居る所を不意に他人から瞰下されて理由もなく顔を赤らめたのかも知れない。まして自分が見たのだから狼狽へたのかも知れない。と考へれば考へられんこともないのである。眞藏は成るべく後の方に判斷したいので、遂にそう心で決定て兎も角何人にも此事は言はんことにした。

しかし萬一若し盜んで居たとすると放下つて置いては後が惡からうとも思つたが、一度見られたら、とても惡事を續行ることは得爲まいと考へたから尙ほ更ら此事は口外しない方が本當だと信じた。

どちらにしてもお德が言つた通り、彼處へ竹の木戸を植木屋に作らしたのは策の得たるものでなかつたと思つた。

午後三時過ぎて下町行の一行はぞろ〳〵歸宅つて來た。一同が茶の間に集まつてがや〳〵と今日の見聞を今一度繰返して話合ふのであつた。お淸は勿論、眞藏も引出されて相槌を打つて聞かなければならない。禮ちやんが新橋の勸工場で大きな人形を强請つて困らしたの、電車の中に泥醉者が居て衆人を苦しめたの、眞藏に向て細君が、所天は寒むがり坊だから大德で上等飛切の舶來のシャツを買つて來たの、下町へ出ると如何しても思つたよりか餘計にお金を使ふだの。それからそれと留度がない、そして聞く者よりか喋舌て居る連中の方が餘程面白そうであつた。

先づ此がや〳〵が一頻止むとお德は急に何か思ひ出したやうに起て勝手口を出たが暫時して返つて來て、妙に眞面目な顔をして眼を圓くして、

「まア驚いた！」と低い聲で言つて、人々の顔をきよろ〳〵見廻はした。人々も何事が起つたかとお徳の顔を見る。

「まア驚いた！」と今一度言つて、「お清樣は今日屋外の炭をお出しになりや仕ませんね？」と訊いた。

「否、私は炭籠の炭ほか使ないよ。」

「そうら解つた、私は去日から如何も炭の無くなりかたが變だ、如何炭屋が巧計をして底ばかし厚くするからつて斯うも急に無くなる筈がないと思つて居たので御座いますよ。それで私は想當つてる事があるから昨日お源さんの留守に障子の破目から內をちよい〳〵と覗いて見たので御座いますよ。そうすると如何てせう」と、一段聲を低めて「彼の破火鉢に佐倉が二片ちやんと埋つて灰が被けて有るじやア御座いませんか。それを見て私は最早必定そうだと決定て御隱居樣に先づ申上げて見やうかと思ひましたが、一つ係蹄をかけて此方で驗めした上と考がへましたから今日行つて試たので御座いますよ。」とお德はにやり笑つた。

「どんな係蹄をかけたの？」とお清は心配そうに訊いた。

「今日出る前に上に並んだ炭に一々符號を附けて置いたので御座います。それが如何てせう、今見る符號を附けた佐倉が四個そつくり無くなつて居るので御座います。そして土竈は大きなのを二個上に出して符號を附けて置いたら其も無いのです。」

「まア如何したと云ふのだらう。」とお清は呆れて了つた。老母と細君は顔見合して默つて居る。眞藏は

偖は愈々と思つたが今日見た事を打明けるだけは矢張見合はした。つまり眞藏には左樣まてするに忍びなかつたのてある。

「て御座いますから炭泥棒は何人だか最早解つてます。如何致しませう。」とお德は人々が此大事件を喫驚してがう〳〵と論評を初めて呉れるだらうと豫期してゐたのが、お淸が聲を出して呉れた外、旦那を初め後の人は默つて居るので少し張合が拔けた調子て斯う問ふた。暫時く誰も默つて居たが

「如何するッて、如何するの?」とお淸が問ひ返した、お德は少々焦急たくなり。

「炭をてすよ。炭を彼のまゝにして置けばこれから幾干ても取られます。」

「臺所の椽の下は如何だ」と眞藏は放擲つて置いてもお源が今後容易に盜み得ぬことを知つて居るけれど、其理由を打明けないと決心てるから、仕樣事なしに斯ふ言つた。

「充滿て御座います。」とお德は一言て拒絶した。

「そうか」と眞藏は默つて了う。

「それじや斯ふしたら如何だらう。お德の部屋の戸棚の下を明けて當分兎も角彼處へ炭を入れることにしたら。そしてお德の所有品は中の部屋の戸棚を整理けて入れたら」と細君が一案を出した。

「それじやア左樣致しませう。」とお德は直ぐ贊成した。

「お德には少し氣の毒だけれど。」と細君は附加した。

「否、私は「中の部屋」のお戸棚へ衣類を入れさして頂ければ尙ほ結構て御座ます。」

「それじや先あ左樣決定るとして、全體物置を早く作れといふのに眞蔵がぐず〳〵して居るから斯ういふことになるのです。物置さへあれば何のこともないのに。」と老母が漸と口を利たと思つたら物置の愚痴。眞蔵は頭を掻いて笑つた。

「否、斯ういふことになつたのも、竹の木戸のお蔭で御座いますよ、ですから私は彼處を開けさすのは泥棒の入口を作へるやうなものだと申したので御座います。今となれや泥棒が泥棒の出入口を作へたやうなものだ」とお德が思はず地聲の高い調子で言いたので老母は急に

「靜に、靜に、そんな大きな聲をして聽れたら如何します。私も彼處を開けさすのは厭じやッたが開けて了つた今急に如何もならん。今急に彼處を塞げば角が立て面白くない。植木屋さんも何時まで彼樣物置小屋見たやうな所にも居られんて移轉なり如何なりするだらう。そしたら彼所を塞ぐことにして今は唯だ何にも言はんて知らん顏を仕てる、お德も決してお源さんに炭の話など仕ちやなりませんぞ。現に盜んだ所を見たのではなし又高が少しばかしの炭を盜られたからつて其を荒立てゝ彼人者だちに怨恨れらたら猶ほ損になりますぞ。眞實に。」と老母は老母だけの心配を諄々と說た。

「眞實に左樣よ。お德は如何かすると譏誚を言ひ兼ないがお源さんに其樣ことでもすると大變よ、反對に物言を附けられて如何な目に遇ふかも知れんよ、私は彼の亭主の磯が氣味が惡くつて成らんのよ。體妙來な男ねえ。彼樣奴に限つて向ふ不見に人に喰つてかゝるよ。」とお淸も老母と同じ心配。老母も磯吉のことは口には出さなかつたが心には無論それが有たのである。

「何に彼男だつて唯の男サ。」と眞藏は起上がりながら「然ども先ア關係はんが可い」

眞藏は自分の書齋に引込み、炭問題も一段落着いたので、お德とお淸は大急て夕御飯の仕度に取掛つた。

お德はお源が如何な顏をして現はれるかと内々待て居たが、平常も夕方には必然水を汲みに來るのが姿も見せないので不思議に思つて居た。

日が暮て一時間も經てから磯吉が水を汲みに來た。

（下）

お源は眞藏に見られても巧く誤魔化し得たと思つた。恰度眞藏が窓から見下した時は土竈炭を袂に入れ佐倉炭を前掛に包んで左の手て壓へ、更に一個取らうとする處であつたが、元來性質の良い邪推などの無い旦那だから多分氣が附かなかつただらうと信じた。けれど夕方になつて如何しても水を汲みにゆく氣になれない。

そこで磯吉が仕事から歸る前に布團を被つて寢て了つた。寢たつて眠むられは仕ない。垢染た煎餅團布ても夜は磯吉と二人て寢るから互の體溫で寒氣も凌げるが一人では板のやうにしやちつ張つて身に着かないて起きて居るよりも一倍寒く感ずる。ぶる〳〵慄へそうになるので手足を縮められるだけ縮めて丸くなつた處を見ると人が寢てるとは承知ん位だ。

色々考へると厭惡な心地がして來た。貧乏には慣れてるがお源も未だ泥棒には慣れない。先達から、ち

、、よく〳〵盗んだ炭の高こそ多くないが確的に人目を忍んで他の物を取つたのは今度が最初てあるから一念其處へゆく〳〵と今までにない不安を覺えて來る。此不安の内には恐怖も羞恥も籠つて居た。

眼前にまざ〳〵と今日の事が浮んで來る、見下した旦那の顏が判然出て來る、そしてテレ隱しに炭を手玉に取つた時のことを思ふと顏から火が出るやうに感じた。

「眞實に如何したんだらう」とお源は思はず叫んだ。そして徐々逆上氣味になつて來た。「若しか知れたら如何する」。「知れるものか彼旦那は性質が良いもの」。「性質の良いは當にならない」。「性質の善良のは魯鈍だ」。と促急込んで獨問答をして居たが

「魯鈍だ、魯鈍だ、大魯鈍だ」と思はず又叫んで『フン何が知れるものか』と添足した。そして圍布から首を出して見ると日が暮れて入口の障子戸に月が射して居る。けれども起きて洋燈を點けやうとも仕ないで、直ぐ首を引込て又た丸くなつて了つた。そこへ磯吉が歸つて來た。

頭が割れるやうに痛むので寢たのだと聞いて磯は別に怒りもせず驚きもせず自分で燈を點け、藥罐が微温湯だから火鉢に炭を足し、水も汲みに行つた。湯の沸騰るを待つ間は煙草をパク〳〵吹してゐたが

「如何痛むんだ。」

返事がないので、磯は丸く凸起つた圍布を少時く熟と視て居たが

「オイ如何痛むんだイ。」

相變らず返事がないので磯は默つて了つた。其中湯が沸いて來たから例の通り氷のやうに冷た飯へ白

湯を注けて澤庵をバリ〳〵、待ち兼た風に食い初めた。

　團布の中でお源が啜泣する聲が聞えたが磯には香物を噛む音と飯を流し込む音と、美味いので夢中になつて居るのとで聞えなかつた、そして飯を食ひ終つたころには啜泣の聲も止んだのである。

　磯が火鉢の縁を忽々叩き初めるや團布がむく〳〵動いて居たが、やがてお源が半分團布に包纏つて其處へ坐つた。前が開て膝頭が少し出て居ても合さうとも仕ない、見ると逆上せて顔を赤くして眼は涙に潤み、頻りに泣吸を爲て居る。

「如何したと云ふのだ、え?」と磯は問ふたが、此男の持前として驚いて狼狽へた樣子は少しも見えない。

「磯さん私は最早つく〳〵厭になつた。」と言ひ出してお源は涙聲になり

「お前さんと同棲になつてから三年になるが、其間眞實に食ふや食はずで今日はと思つた日は一日だつて有りやしないよ。私だつて何も樂を仕樣とは思はんけれど、これじや餘りだと思ふわ。お前さんこれじや乞食も同然じや無いか。お前さん左樣は思はないの?」

　磯は默つて居る。

「これじや唯だ食つて生きてるだけじやないか。餓死するは者は世間に滅多にありや仕ないから、食つて生きてるだけなら誰だつてするよ。それじや餘り情ないと私は思ふわ。」涙を袖で拭て「お前さんだつて立派な職人じやないか、それに唯た二人限の生活だよ。それが如何だらう、のべつ貧乏の仕通して其貧

乏も唯の貧乏じや無いよ。滿足な家には一度だつて住まいて何時でも斯様物置か――」

「何を何時までぺら〱喋舌てるんだい。」と磯は矢張お源の方は向ないて、手荒く煙管を撃いて言つた。

「お前さん怒るなら何程でもお怒り。今夜といふ今夜は私は如何あつても言ふだけ言ふよ。」とお源は急促込んで言つた。

「貧乏が好きな者はないよ。」

「そんなら何故お前さん月の中十日は必然休むの？お前さんはお酒は呑ないし外に道樂はなし滿足に仕事に出てさへお呉なら如斯貧乏は仕ないんだよ。――」

磯は火鉢の灰を見つめて默つて居る。

「だからお前さんか最少し精出してお呉れなら此節のやうに計量炭もろくに買ないやうな情ない‥‥」

お源は圍布へ打伏して泣きだした。磯吉はふいと起つて土間に下りて草履を突掛けるや戸外へ飛び出した。戸外は月冴えて風はないが、骨身に徹へる寒さに磯は大急ぎで新開の通へ出て、七八丁もゆくと金次といふ仲間が居る、其家を訪ねて。十時過まで金次と將棊を指して遊んだが歸掛に一寸一圓貸せと頼んだ。明日なら出來るが今夜は一文もないと謝絕られた。

歸路に炭屋がある。此店は酒も薪も量炭も賣り、大庭も此店から炭薪を取り、お源も此店へ炭を買ひに來るのである。新開地は店を早く終ふので此店も最早閉つて居た。磯は少時く此店の前を迂路々々して居たが急に店の軒下に積てある炭表の一個をひよいと肩に乗て直ぐ横の田甫道に外て了つた。

大急で歸宅つて土間にどしりと俵を下した音に、泣き寢入に寢入つて居たお源は眼を覺したが聲を出さなかつた。そして今のは何の響とも氣に留めなかつた。磯も其儘お源の後から團布の中に潛り込んだ。

翌朝になつてお源は炭俵に氣が着き、喫驚して

「磯さん此は如何したの、此炭俵は？」

「買つて來たのさ。」と磯は團布を被つてるまゝ答へた。朝飯が出來るまでは磯は床を出ないのである。

「何店で買つたの？」

「何處だつて可いじやないか。」

「聞いたつて可いじやないか。」

「初公の近所の店だよ。」

「まア如何して其樣遠くで買つたの。……オヤお前さん今日お米を買ふお錢を費つて了やアしまいね。」

磯は起上つて「お前がやれ量炭も買へんだのツて八か敷しく言ふから昨夜金公の家へ往つて借りやうとして無つてやがる。其れから直ぐ初公の家へ往つたのだ。炭を買ふから少許貸せといつたら一俵位なら俺家の酒屋で取つて往けと大なこと言ふから直ぐ其家で初公の名前て持て來たのだ。それだけあれば四五日は保るだらう。」

「まア左樣」と言つてお源はよろこんだ。直ぐ口を明けて見たかつたけれど、先ア後の事と、せつせと朝飯の仕度をしながら「え、四五日どころか自宅なら十日もあるよ。」

昨夜磯吉が飛出した後でお源は色々に思ひ難んだ末が、亭主に精出せと勸める以上、自分も氣を腐らして寢て居ちや何もならない、又たお隣へも顏を出さんと却て疑がはれると斯う考へたのである。其處で平常の通り辨當持たせて磯吉を出してやり、自分も飯を食べて一通片附たところでバケツを持つて木戸を開けた。

お清とお德が外に出て居た。お清はお源を見て

「お源さん大變顏色が惡いね、如何か仕たの」

「昨日から少し風邪を引たもんですから……。」

「用心なさいよ、それは不可い」

お德は「お早う」と口早に挨拶した限り何も言はない、そしてお源が炭俵の並べてないのに氣が着き顏色を變へて眼をぎよろ／＼さして居るのを見て、にやり笑つた。お源は又た早くも之を看取りお德の顏を睨みつけた。お德は斯う睨みつけられたとなると最早喧嘩だ、何か甚い皮肉を言ひたいがお清が傍に居るので辛棒して居ると十八九になる增屋の御用聞が木戸の方から入て來た。增屋とは昨夜磯吉が炭を盜んだ店である。

「皆樣お早う御座います。」と挨拶するや、昨日まで戶外に並べてあつた炭俵が一個見えないので「オヤ炭は何處へ片附けたのですか。」

お德は待つてたといふ調子で

「あア悉皆内へ入ちやつたよ。外へ置くと如何も物騷だからね。今の高價い炭を一片だつて盜られちや馬鹿々々しいやね。」とお源を見る、お清はお德を睨む、お源は水を汲んで二步三步歩るき出したところ

であつた。

「全く物騒ですよ、私の店では昨夜當到一俵盗すまれました。」

「如何して。」とお清が問ふた。

「戸外に積んだまゝ、平時放下つて置くからです。」

「何炭を盗られたの。」とお德は執着くお源を見ながら聞いた。

「上等の佐倉炭です。」

お源は此等の問答を聞きながら、歯を喰ひしばつて、蹌踉いて木戸の外に出た。

土間に入るやバケツを投るやうに置いて大急ぎて炭俵の口を開けて見た。

「まア佐倉炭だよ！」と思はず叫んだ。

* * * * * * *

お德は老母からも細君からも、みつしり叱られた。お清は日の暮になつてもお源の姿が見えないので心配して御氣慊取りと風邪見舞とを兼ねてお源を訪ねた。内が餘り寂然して居るので「お源さん、お源さん」と呼んで見た。返事がないので可恐々々ながら障子戸を開けるとお源は炭俵を脚繼にしたらしく土間の眞中の梁へ細帶をかけて死て居た。

二日經つて竹の木戸が破壊された。そして生垣が以前の樣に復歸つた。

それから二月經過と磯吉はお源と同年輩の女を女房に持つて、澁谷村に住んて居たが、矢張豚小屋同然の住宅てあつた。（をはり）

# 引越

鈴木三重吉

床屋で上田に會ッたら、川路が近頃下宿の二階で雀を飼ッてると言ッた。暫く川路の所へ行かないから髮を刈ッた其足で千駄木へ廻ッて見た。

雀がゐる。川路が例の人懷ッこい笑ひを浮べながら、窓の障子の外から出して見せた。机の下へ置く小さな紙屑籠へ古ぼけた藁屑を布いて其中へ入れてゐる。四五日前に下谷へ用事があッて行ッた歸りに、或横町で小さな子供が二人、質屋だッたかの出格子の下へ蹈んで此雀を下駄の上へ載ッけて弄ッてゐた。立ち止ッて見てゐると一人の子が唐突、心安さうに‥これを上げやうか‥と言ふから面白半分に、‥あゝ‥と言ッて譯もなく貰ッて來たのだといふ。五六間行きかけると、後ろから‥オイ〳〵それは生きてるんだぜ‥と言ッたのは奇抜だ。生きてゐるのは最初から知ッてゐた。

「僕アかうやッて握ッて來たんだ。」

と川路は兩手で手附きをして見せる。

「さうだナ‥どうして捕まへたものだらうね。何、下駄の上でじッとしてゐた譯さ。飛べないんだもの。足をどうかしてゐるんだ。兩足がヒョロ〳〵で外へ出して見ると直にぺたりと座ッて了ふ。」

川路は話しながら、膝の上で雀の口嘴を小指で弄る。雀は口をチョキ〳〵開けて指先を嚙まうとする。

藁の中に白い小粒が絡ッてゐる。

「飯粒かいこれは、」

「あゝ。」

「入れとくと食ふかい？、」

「食ふとも午に遣ッたのがこれだけになッたんだ。三粒殘してるね。四粒か。もう一寸も怖がらない。始めの内は無性にオヅ〱慄へてばかりゐて飯粒なんか突き出したッて容易に食はなかッたんだけれどね、」

「へゝー雀の鼻の穴といふものは口嘴の兩側に附いてるものなんだなア。」

「これか？、」

「こゝん所さ。鼻だねこれが。オットこん畜生！」

自分は指をチキッと突ッつかれた。じッとして見てゐると眠むさうに目を閉る。雀といふものは外でチョコ〱飛んでる時には、小悶癪れた、人を馬鹿にしてるやうな奴だけれど、目の前に据えてからやッてる所を見ると、何だか老耄れた、田舎からッン出たやうな鳥である。暫く世話をしてやる積りだと川路が言ふ。夕方になると抑入へ入れてやるのだが、晝間は終始障子の外へ置いとくけれど五六日になるがまだ一向遁げて行かないさうである。

「大丈夫だ。足が直ッたら直ぐに遁げて了ふよ。」

「何れ其積りでゐるんだらうね。」

「知れてらア。もういゝと思ふと知らない間にツイと往ッて了ふんさ。」

「フヽヽ。」

「昼間でも眠いのかね、かうやッてると。妙に目を閉るね。オヤ一寸いとまた開けた。」

「直ぐ閉るんだ。放棄ッとくといつでもこんな具合に踞んでる。餘程弱ッてるらしい。」

川路は籠を机の上へ上げる。雀は目を開けてキヨロ／＼する。

「そしてこの部屋は向きが悪いから日向がなくてね。」

と冷たい、濁ッたやうな障子の色を見てゐた川路は、目を火鉢へ返して炭を二切れ継ぎ足した。自分は煙草の口を切りながら、

「フヽヽ。」

と言ッた。

「え？、」

「雀を飼ふなんて振ッてるね。」

「だッて飼ッてるよ、よッく。」

「雀をかい。」

「あゝ、田舎へいくとよくやッてる。チヤンと籠へ入れて門口の柱や戸袋なんかへ釣るしてるよ。」

「へゝー。」

「僕も小供の時分に飼ッてゐた。長い竹竿なんか持ッて、一人でのこ〳〵雀の子を捉りに廻ッた。宅の傍に古い造り酒屋がある。その家の酒庫の屋根の所が壁が壞れてゐてそこへ雀が巢を喰ッてゐた。僕は一度その巢から子雀を一匹捕まへて來て飼ッた事がある。二三日は椽側の隅へ味噌漉を逆さに伏せて被せて置いた。それから籠を買ッて來て入れると、終日方々へ持ち歩るいてゐたものだ。」

「へゝー。」

「七八つの頃だよ。そうしてね、そんなにしてる內或日知らないで外へ出て遊んでると雨が降り出して、歸れなくなッたんだね。仕方がないからお寺の門口へ驅けこんで、暫く待ッてゐた。すると其所へね」、

と言ふ時、入口の障子が開く。下女が白絲と針と持ッて來た。

「先ッ刻おッしやいましたんてすけれど浮ッかりしてゐまして……」

と置いていく。

「何をするんだそれて」

「何、一寸シャツの扣鈕を附けるんだ。こゝんとこが取れたんだ。ね。」

「そこは自分では附けられないじやないか。」

後(あと)てするよ。」

「貸せ、己(おれ)が一寸つけてやらう。その絲をよこせ、釦鈕は？、」

「こゝにある。」

川路は硯箱の中から釦鈕を出す。自分は着てゐるシャツの袖口を引ッ張ッて釦鈕を縫ひ附けてやる。

「何ンの話だッたかね。」

「うゝん何ンでもないのさ、他所の女が傘の下へ入れてッてくれたといふだけの話だ。」

「女が？あゝさう／＼雨が降ッたんだね。それからどうしたい。」

縫ひ附けながらの話。――だから困ッて雀の籠の紐を手頸へかけてくる／＼廻したりなんかして、立ッてゐると、十八九ばかりの綺麗な装姿(なり)をした女が通りかゝッて傘へ入れてッてやらうと言ふ。四月の頃の小雨である。上品な綺麗な女だ。勿論どこの女か知らないのである。默ッてゐたッてずん／＼こッちの歸る方角へ向けていく。途々何ンとか言ッて親しく話かける。こちらは恥かしかッたから默ッて籠を抱えていく。直(す)ぐに自分の内の前へ來た。女はこちらの這入る門口(かど)を知ッてゐた。「さ、歸りましたわね」と門口まで屆けて置いて向うへいッた。どこの女か知らと後ろを見送ッてゐたら四五軒行ッて、向ひ側の格子の嵌(はま)ッた内へ這入ッた。其内は何んにもしてゐない内である。門口(かどぐち)に入手の木の下に天水桶が据えてあッて、證券印紙かなんか賣る看板が片隅に古めかしく懸ッてゐた。

「へー。」

と自分は釦鈕を附けて了ッてナイフで絲を切る。

「や難有う。」

「それでは其所の内の娘だッたんだね?、」

と絲の附いた針を疊の上へブスと刺して置く。

「さうさね、そこん所はどういふものだッたかね。向うではこちらを知ッてたんだね」

自分は切ッた絲屑を拾ッて火の中へ落す。絲は黒くなッて縮れて赤くなッて直ぐ亡くなッて了ふ。

「それから?、」

「それきりだ。」

「どうした女か別らないのか。」

「あゝ。其内どッかへいッてしまッたらしい。其儘二度と會はなかッた。もう古い話さ。僕の少さな時の事なんだもの。」

雀がチュッ〳〵と言ふ。二人の注意は再び雀に集る。キョロ〳〵見廻しながらチュッ〳〵と言ふ。

「水が欲しいのだ。」

と川路は立ッて窓の障子を開ける。裸になッた桐の木の頭が覗き出してゐる。前は一間程で直ぐ裏隣りの炭やの物置きである。燒板の壁に腐ッた竹の雨樋が仄暗く割れ下ッてゐる。川路は障子の外から小さな醤油入れの猪口に水を入れたのを取り出して雀の屑籠の葉の中へ入れてやる。雀は早速其水を甘さう

に舐めはじめる。其日は暫く色ンな話をして歸ッた。
それから二三日經ッて學校の門口で川路に會ッた時、

「雀はどうした。」

と聞いたら、

「まだ足がいけない。あれから籠を買ッて入れてやッた。」

「それでは直ッた所で遁げる譯にいかないね。」

「うん。もう遁がさない積りだ。」

「フヽ。」

と言ッて別れた。

多忙に紛れて其後十二三日は川路の所へ行かなかッた。其内また上田に出會ッたら川路は下宿を換ると言ッて頻りに探してると言ふ。

「あの下宿屋は厭になッたのかい。」

「一體下宿屋といふものが厭になッたと言ふんだ。どこか少しは親切のある所へいきたいといふ考へなんだらう。素人の内を探してるやうだ。」

其内川路が自分の所へ話しに來た。小石川の原町へ移ッたと言ッて來た。神さんと二十三だとかの息子が一人ある内なのだが、息子の方は大抵外へ寢泊りをするので平生は神さん一人だけだ。昨日引ッ越

したばかりてまだ慥と正體は別らないが、案ずるに先づ親切らしい中婆さんだと言ふ。當り前の素人の内は何となく溫味があッていゝと色々滿足したらしく話した。歸りに紙切れへ宿の地圖を書いて行ッてくれた。圖て見ると一寸込み入ッた所てある。雀の事は其時忘れてゐた。雀も一緒に引ッ越したのか知らと跡て考へた。

川路が移ッたのは火曜の日てある。土曜の午後、自分はどんな内へ越したのか見に行ッた。小さな藥屋の橫の露路を突き當ッた所て、木目のザラ〳〵に浮き出た古い格子戶の附いた內てある。柱に御仕立物と書いてある。黑ずんだ標札に岸本と下手な、女らしい手が讀まれる。土間の下駄箱の上に靴が一足載せてあるのが外から見える。戶を明けるとヂャリン〳〵と大業に鈴がなる。其癖戶はガク〳〵して容易にスラリと開かない。揑ねくると八釜しくヂャリン〳〵言ふ。

「入らッしやいまし。」

と五十近い筒袖の絆纏を着た神さんが出て、塵埃のかゝッた頭を下げる。髮の生え際へ炭の粉のやうなものを抹くッてゐる所は氣に食はないが、何だか悠々閑々とした、性質の惡くはない人間のやうだ。

「はい〳〵入らッしやいます。どうかお上り下さいまし。」

と言ふ。

神さんが上り口の障子を閉めると同時に自分は正面の襖を開けると

「ア、川路さんはお二階てございます。」

と言はれる。内らには神さんの縫物が仕かけてある側に、夜店の藥賣かなんかのやうな男の後ろ姿が、耳へ筆を挿んで、算盤をはじいてゐた。

「こちらでございます。こゝをズッと」、

と神さんは横手の押入のやうな所を開ける。

へな〳〵の梯子段を上りながら、

「オイ」

と言ふと

「ア、」

と返事をする。上り詰めて障子を開けると、中は川路が一ト間一杯に荷物を掻き廻してゐる所だ。机や本箱が壁の根に積み上げてある。行李の兩方へ溢れた書物が本箱からバタ〳〵に落ち續いてゐる。川路は押入を明け放して蒲團の所理をしてゐる所であッた。

「大變だね。片附け直してる所かい。」

と着物の重ねてあるのを跨いで這入ると、

「散らかしてゐてすまない。すッくり束ね上る積りでね。」

と言ふ。

「え？、」

「僕はこゝの内は厭になッた。」

「引ッ越すのか。」

「うん。」

とブー／＼してゐる。

「へゝー。どうしたんだい一體。まだ越して來たといふばかりぢやないか。何か癪に障ッたのかい。」

「さうじやない。たゞ氣に喰はないから出て了うんだ。雀が死んだよ。僕は此内はいやになッた。まアそこいらへ坐ッてくれ給へ。」

雀が留守の間に死んだと言ふ。越して來てから二日の間は、こんな煤ッけた部屋だけれど何故か譯もなく嬉しくて、獨りで得意になッてゐたが、一昨日午に學校から歸ッて來ると下谷から手紙が來てゐたので早速出て行ッた。(下谷には川路の昔世話になッたとかいふ内がある。)行くと色々用事を頼まれて其晩は遲くなッたから泊ッた。昨日は朝間に歸ッて來る積りであッたが、朝から終日あの通りの雨だから、丁度金曜日は授業のない日だし、其日も序てに泊ッて遊んで先程歸ッて來た。其出てゐる間雀の事が氣になッてゐたけれど、自分が毎日水をやッたり飯をやッたりしてるのは此内に知ッてゐるし、越して來た時だッてどうした雀なのかと聞いたから、かう／＼だとわけを話すと「さうですか。可愛想に。介抱して、早く直してやりましやうね。貴方の學校の御留守なぞはわたしが氣を附けます」と親切に言ッてた程だから、あゝして置いたッて氣遣ふ事は入るまいと安心してゐたのだ。歸ッてからどうしてるか知

らと第一に床の上を見ると雀は籠の隅に倒れてゐた。

「ひどいぢやないか、何もやッてくれたんぢやないのかと下へ聞くと、オヤさうてしたわね。雀の事はわたくし浮ッかりして居りました。只今何かおやりになりますか、と遠くからさう言ふんだ。もう澤山だと言ッてやッた。死んだ跡でいつまで物を食ふ奴があるものか。飢えて死んだんだぜ君。」

「へゝー。そして其雀は？」

「放ッて了ッたさ。」

「どこへ。」

「いきなり屋根へ放り出した。こゝの内は口ばかりだよ。いやになッたこんな内は。」

と川路は縛りかけた蒲團の綴糸を指て引ッ張りながら、

「雀は冷めたくなッてグンニャリと突ッ伏してゐた。僕は厭アな氣になッたね。何アに、餌をやッてくれなかッたから癪に障ると言ふのなら我慢もするさ。だけど僕ア下宿住居といふものが忌々しくなッたんだ。忌々しいと言ッたッて仕方がないけれどね、とにかく此内は引ッ越して了ふ。僕アあの婆さんが急に厭になッた。」

出ていくと言ッた所でまだ内も目ッ附てはゐないのだけれど、矢鱈に荷物を仕まひかけたのだ。下には勿論何んにも知らない。雀に何かおやりになりますかと言た景氣でゐる。今來てゐる男が婆さんの悴なのかも知れないと言ふ。何だか變な悴である。とにかく荷物を纏めて置いて、濟んだら早速内を探しに

いくと言ふ。自分は一體人の決心したには餘り干渉なぞはしない性分である。殊に下宿なぞは厭だと言ひ出すと一日だッて落ち附いてゐられるものではない。

「てはそれがよからう。」

と言ッた。

「どッかにあらうじやないかね。」

「それは分らないね。あればあるけれどない日にはないだらう。」

「だッて當分どこでも構はないもの。どんな汚ない下宿屋だッて間さへ空いてると言へば事は足りるんだ。」

「下宿屋なら直きあるさ。フヽ、また下宿屋へいくのか。」

「だッて止むを得んぢやないか。」

と川路は例の淋しさうな笑ひを漏らした。今度は自分も手傳ッて再び荷物を片附けはじめる。表の往來で飴屋かなんかゞトコドン〳〵〳〵、コラコラアイと柏子よく太鼓を叩く。自分は荷物を片附けながら、たッた二三日前に移ッて來て譯もなく直ぐプイと出て行くといふ事が何となく面白くてならなかッた。

（終）

# 男五人

眞山青果

## 一

第一、おせんが氣に入りの唄。

男五人持ちや、五々二十五日、あとの五日は誰と寢よ、と、斯う云ふ。これをのべつ唄つてる。もう不斷、口措かずだ、よく〳〵口が馴ッこになつたものと見える。朝が、晩が、夜深け夜中でも、そんな事に遠慮は無い、帳場、湯殿、料理場、何所でも御座れ、例の高張附な調子で元氣好く唄つて居る。客膳をはこびながらも矢張りこれ、取分け大好きなは海を見晴らす四番前の廊下で、客の無い晩方なぞは、キットその欄干にもたれて、足をバタ〳〵、往還を見下ろしながら、暗らくなるのも知らずに居る。「あれ、また初めやがつた。」と通りすがりのものまでも然う云ふ位。

尤も、偶には他のはやりものなぞ唄ふ事はあるが、間拍子のないドス質の聲格ゆゑ、何うもうつりがわるい、譜がきれない。何を云つても「男五人」がこの女の身上である。一體この房州邊には餘り聞かぬ唄でもと三州邊から流れて來た導引さんに敎つたのだと云ふ事だ。

晩方、いつもの廊下へ出て、おせんがそれをやる頃は、丁度、下のつばくろ爺さんが商賣から歸る刻限だ。每年――もう三十年以上も――年の半方をこの界隈に送つて居て、秋口から翌春までの寒さ時を、つ

ばくら見たやうに、上總九十九里の方へ渡り稼ぎに出る蝙蝠傘屋の爺さんである。まことに頭の低い、語好きの、他には大層克明がられる爺さん、ますます話なぞさせては眞似手も無い程だ。商賣と云ふよりそれからそれと勝手口を喋り廻つて居るのだ。冲休の退屈しのぎに、「つばくろても來れば可いに。」と漁どもまで待構へて居る。些いとした儀式事にも明るく、料理氣もあるところから、近所に調法がられて、不幸や客事でもある時は、仕事を一日休んで、袴を穿いて大抵そこの調菜役に雇はれる。酒の上の惡い僻は泣上戸で、少し酔が廻つて來ると、聲を立てゝメソ〳〵やり出すので、緣起事には却つていやがられる。六十幾つになつて身寄身格も無く、全くの獨り者である。妙に外鰐を踏む僻のある、乾つからびた眇目の老人で、性他愛も無く眠りこけてる姿なぞ見ると、これでよく天秤にすがれたものと感心する。内々小錢を貯つて歩に廻して居ると云ふ評判もあるが、そんな樣子は素振にも見せず、いつも「あゝ根つから詰らねえ、今日もみな食べッ了つた」と、愚痴たら〳〵て歸つて來るのが、その僻。

爺さんは井戸端で、草鞋足を洗ひながら、二階を見上げて必ず話しかける。おせんとは不思議に性分が合ふと見えて、何時も爺さんが相談役にまはる。何日かおせんが口熱で難澁した時なぞは、わざ〳〵三里の山越えして、平群里樣のお水を頂いて來た程の親切がある。

「おせんさア、相變らず景氣だな、中濱まで聞えるぜ。」

「あいさ、景氣は氣のもンだわて。」

「苦勞が無さゝうだ。」

「當り前さ、毎日の事ッたもン。」
「あゝ俺等も一日て好い、そんな氣になつて見てえ、氣樂だッぺえにな。」
「また、お株だ。」
「本當の話だよ、斯う年寄つちや往生だ。樂は若い間に限つたもんだ。」と、時には溜息を吐く事もある。
「然うだらうかね。」
「然うとも」
「然うかも知れないね。人間これて死場が苦勞になるやうぢや、もう上つたりだ。年は取りたくないものさ、時に、爺さんは幾つだッけね、五十？　六十？」
「あれだ——何時てもだ。」
爺さん頰を脹まして、急に苦り切る。まるて小兒だ。もうと何云つても返事もしない。俯向いてブツ〳〵云ひながら、滿足のまゝガタゴトと自分の九番へ引込んて了ふ。ランプ部屋の直ぐ隣り、薄ッ暗らいて、赤い疊がベト〳〵と足の裏に喰付く。一日々々の目を見ず、連陰つゞきの日なぞには、壁濕が透し節が疼むと、爺さん始終こぼして居る。
おせんはクス〳〵笑ひながら、元氣よく又唄出す。
おせん、二十三、こゝ掛田屋の女中てある。安房一番の札所、那古観音さま裏坂下の商人宿て、お毘沙か本祭の外は、いつも腰高障子を閉切つてある家。井桁に三の字の置行燈が看板に出て居る。狹い裏庭先

は直ぐ田圃つゞきになつて、松原越しに波靜かな内海が見える。はだか火のなつかしい今日この頃、濱の方から見ると、青々しい青田の中に一軒、凉しさうに乘出して見える。白鷺が觀音山に巣を持つ頃には、闇にもその眞白な姿を見せると云ふ。

恐しく日に焦けやすい女で、小半日も波の子堀りに出ると、春先でも見違えるほど眞黑になつて歸つて來る。その上、暑がりの汗ッ搔きで、日にどの位生水をはかるか知れない。目の大きい、齒の大きい、そして顎の大きい女である。話するたび些と唇の上反る僻がある。ノッブリと總體が大々しい體で、骨組み、肉置き、何所から何所まで好く發育して居て、よく此邊の女子達に見るやうな見臭い胴長では無い、脛のかゝりも伸びてる。もとより食も良いが元氣も良い。その僻、酒もタントは行けないのに、何時も燥いて、笑つて、喋つて、そして唄つて一生を暮らす女である。素天氣な濱の𨻶には誠に恰好な相手で、町方の寄合事なぞ此家にある時は、先づ第一の利者にされて居る。無知の船頭共まで、「おせんさアの氣で暮らしたい。」なぞ、よく云ふ。

生れ土地は矢張りこの那古だが、今では便り便られる程の身内も無い。尤も、餘三と云ふ跛の弟が一人あつたが、四年前、十一の時、開帳に來たからくり師の後を追驅けて、姉の下駄を突ッ掛けたまゝ家を出た限り、今以つて歸つて來ない、音信も無い。上總で見かけたと云ふ者があつても、おせんは別に探さうともしなかつた。

こゝへ來るまで、おせんは野房の濱屋と云ふ飲屋に奉公して居た。漁場に是非なくてならない、髮の薄

い枯れ聲の女共の大勢居る家である。そこでは可也鳴らした女で、「男五人」の通り名は館山柏崎あたりまで知られて居た。掛田屋へ來た後でも、白地の浴衣をかぶつて昔馴染の若い衆達が、時々、裏木戸から呼出しをかける。口笛を吹いたり、小歌を唄つたり、中には雨戸へ小石などあてるものもある。取分け目張の榮太さんと云ふが一番よく來た。船形では相應の網持ちである。手閑な晩なぞにはおせんも、

「待つてお出でよ、あの目張はドッサリ持つてるんだから、いたぶつて來て御馳走するよ。」と後を朋輩共に頼んで、帳場に内所で裏口から驅出し、何を何う騙すものか、必らず若干かの小遣錢を捲上げて來ると云つても、それを身慾にするたちの女では無い、つばくろ爺さんの室に朋輩を集めて、綺麗に大番振舞して了ふ。そんな風ゆゑ、野房に居ても何時までも身上りが付かない、三年の年期、三十圓の前借金で住込み、年期だけ滿足に濟しても借錢は幾らも減らなかつたのを、こゝの御亭が何所に見込を付けてか、これから忙しい夏場の客扱ひに、前借をついて連れて來たのだ。

こゝへ來た當座のおせんは、家中の餘され者であつた。特に朋輩の氣受けが惡るい、「あの人と一緒ぢや勤らない。」とは好く聞く小言である。一體、野房女と云へば一概に貶しめられる。兎に角に那古は町續き、商業の地である。掛田屋は商人旅ながらも他所者が相手。漁師や棒手振りを客にはしないのだ。自然女中共の氣位もザラの茶屋女よりは高い。その中に來ておせんの傍若無人さと云つたら無い。幅びろ白メリンスの腰帶を伊達らしう腰ッ下りに結いて、二挺櫛が御自慢、鬼灯をブウ〳〵鳴らしながら、何の話へでも罷出る、お客も主人もあつたもので無い、何所でもかまはず家中を搔廻して歩るく。皿殘りがあれば

平氣てお客の前で頂いて了ふと云ふ風。給仕に出ても踵を揃へて坐つた事が無い。朋輩の苦情も出る筈だ。やれ客をねだつて西瓜の仕舞買ひをさしたの、帳場よりさきに湯へ入つたの、斷りなしに濱へ出たのと、それは／＼煩さいほどである。その上、寄つて集つて陰口利く、宛付は云ふ、果ては申合せの困らせ事まてする。機嫌買ひの上さんなぞは、最う肝癪筋を立つて、「おせんにも困る、野房に居て漁師の着襟を算へた氣て居やがる。家が違ふぞ、うちの商賣は旅屋だぞ。」なぞガミ／＼嚙付くやうに云ふ。云はれても平氣なもの、よくせきの事て見て、頸を縮めて舌を吐出す位の者だ。朝も他より一番晩く起きて、咬楊子で湯殿の窓から早發の客を相手に無駄を喋つて居ると云ふ始末。佛性の主人も持餘まして時々酷い折檻をする、髱を引廻はされた事も一度二度ては無い、でもおせんはケロリとしたもの、たゞの一度、「私が惡るい。」の、「堪辨して。」のと云つて謝つた事がない。打たれるなら打たせて置いて涙一つ見せない。先方が呆れて手を引くまでは野太く構えて動くものでない。嚇しに動く女ぢやないのだ。その代り煽てやうによつては隨分他の二人前も働く。いやな顏一つせず身骨を粉にして他の分まで買取つて働くが、直ぐ氣が變れば、持つて居る箒を投出してその方に飛んて行く。兎に角、厄介な女てある。

そのおせん、近頃男が出來た。長い事表二階に滯在して居る尾山と云ふ若い畫工て、おりんと云ふ前の女中とも評判のあつた男だ。髮の毛を長く分けた、小指の爪を長く延した男で、さほどにもない瓦斯大名の浴衣を、何時も見よげに着て居る。まことに物云ひの優しい、歩るくに雨の裾を踏むやうにする癖がある。一日家に居ても、コツ／＼仕事をして居て、コトリとも音を立てない。

おせんの氣分なら、男が出來ても平氣なもの、誰に遠慮の事てはない、大膽に大ぴらに喋り廻る筈だ、と、誰も然う思ふ。また、今まては實際然うだつたのだ。何も盜み兇棒はしまいし、いろ事の御法度は未だ出ない位に考へて居たのだ。處が、今度といふ今度ばかりは、何う云ふものか甚く秘し隱して、誰一人に嗅付けさせまいとする。圖を打たれてさへ知らぬと通す氣て居るらしい。

それを一番に嗅付けたのはつばくろの爺さんだ。顔さへ見ると煩さくつけ廻して彼此れと探りを入れる「ヘッ、ヘッ。」と厭な笑方をしながら妙に洗立てをする。初めの内はおせんも隱しかざんて居たが、餘りしつこいので、ツイそれを喋つて了つた。

つばくろは目を細くして、楪るやうに咽て笑つて、「ヘッ〳〵、おせんさアお樂みな、好い人に喰い付いて仕合せだよ。」

「なんのさ、馬鹿〳〵しい。」

「男前は好しよ、腕はあるしよ、些と荷が勝ち過ぎる、ギッシリ縋つて追離されねえ要愼するだね。」

「煩さい人だ、何うても好からう。」

「ヘッヘッヘッ、だが、おせんさア、お前にや過ぎもンだぜ。あんな身分のある人と係合ふなア今度が初めてだッペ、拜んてるが好いだよ。」

「馬鹿云つてらア、こんてもね野房に居た時ア、海軍の士官と寐た事もあッぞ。」と、そんな事を平氣て云つて居る。

二

盆の十三日――無論ふるい暦てある。この日はこの家の習慣て、鹽煮團子を佛へ供へ、泊合せの客へは卷織料理を出す事になつて居る、接待酒も一本づゝはお膳につく。小供どもは袖のある新しい浴衣を着て、四人が四人、切籠と束線香(たばねせんかう)をさげて、もう先刻お寺へ貰火に出掛けた。臺所へは近所出入の嬶衆や娘共が大勢集つて、それは大業らしい菜料理が初まる。赤襷の娘どもは木鉢(きばち)を取圍(とりかこ)んで團子まるめ、女房だちは刻みものに忙しい。爼(まないた)には響板まてかつて庖丁の高鳴るのを見得にして居る。客へ出して、隣近所へくばつて、自分等もたらふく喰つて飲んで、それから二階座敷へ集つて、賑かにお念佛を初めるのてある。つばくろ爺さんは生憎昨夜から風邪をひいて床の上にゴロ〳〵してたが、それても時々は料理場へ來て、

「おせんさアは未だ歸らねえな何(なん)してるだつぺい、もう六時なるのにさ。」と用ありさうに、先刻から何度も同じ事を聞いてる。おせんは今日半日の暇をもらつて買物ながら北條まで行つたのだが、今もつて歸つて來ないのてある。

「おせんさア〳〵つて、終へねえ爺さんだ。いろ男ン所さても行つたッぺよ。」と、おいちと云ふ、こまちやくれた赤ッ毛の小女が嘲り顔に云ふ。

「何んしに行つだ。」

「寢に行つたぞ。」と、ほかの一人

皆がドッと囃立てる。そして、云合はせたやうに皆爺さんの方を見返へる。つばくろは唯ニヤリしたがかり、「然うかな、何しても氣揉ませる事ッた。」

「本當だよね、いろ男も斯う内外にあつたんぢや、爺さんになつても、嫉き切れなかつぺえねよ。」

「そこがそれ、男五人だわてよ。」と、横から口を出す者もある。

「だけんど、燒くだらコンがりに頼むンだ、なア爺さん。お盆の火は焦すもんて無えつてから。」と、横町の氷屋の嚊である。

「大きに一言も無い。」と、爺さんは笑ひながらそこを立つて、今にもこぼれさうな大腹をして、袂て顏の汗を拭き〱、竈前に油を炒つて居る上さんに話かけて見たが、上さんはロクな返事もしないので、又ブラ〱自分の部屋へ歸つて來る。

　廊下の曲り角て繪師の尾山に出遇つた。湯上りを糊の強い白地に着換へて團扇を持つて、濱へ散歩に出る所らしい。

　何時になくつばくろの方から聲かけて、

「お客樣、明日は愈々お立ちてすつて、本當てすかい。」と、小腰をかゞめて、御丁寧なもの。

「えゝ直ぐ歸つて來ます。保田までゞすから。」と、畫工は眼鏡ぐせを些いと直して、肌奇麗な素足に濱下駄を突つかける。

「それはまアお結構てす。矢張りお仕事の御都合で。」と、小さな目の隅から疑深かさうに窃つと客の顏

を見上げる。

「鴨川や天津の方、外房州は未だ遊歴した事がありませんからね。」

「ぢや先づ當分はお目にかゝられませんね。外房州の方はこれからが格別です。然しお羨しい御身分て、お客樣のやうに然うして氣樂に旅をなすつたら、嘸お面白い事ばかりてせうて。」と、ニタ／＼世辭笑をする。

「なアに。」とばかり、尾山は尊大らしう身を振つて、芭蕉や龍舌や棕櫚やの植込の間を裏口から拔けて濱の方へ出て行く。こゝらに見慣れぬ白絹の帶も輕るさうて見好い。

それから一時間は經つた。夕飯をすまして、爺さんはこれから蚊燻しにかゝるところ。戸障子をピッシヤリ閉切つてムッとするほど部屋の中に汗をダク／＼、目をつぶつて、蒼朮をドシ／＼火鉢にふすべて居る。蚤より蠅より蚊が一番苦になるのだ。外はホンノリ暮れて、十三日の薄月は青葉の色を一しきり重黑く見せて居る。

「何うだらう、このまア暑苦しい事、よく我慢して居られたもんだ。」と、おせんが入つて來た。そして、そこらの障子を無遠慮にサッサと開けひろげる。涼しい沖上げがサッと座敷へ流れ込んだ。

「最少しだ閉めて置かつせい。スッカリ追出して了ふから」と、つばくろは煙の中に素ッ裸て坐つて居る。

「暑くつて／＼」と、おせんはベタリ椽際へ坐る。踵を横に投出して塗骨の小扇をバサ／＼動かし居る。

奮發て買つて來たのだらう。濃い潮染の派手な浴衣に、帶も何時になくキチンと胸高く結んで居る。頭も何番とか云ふ束髮である。

暫くの間、鬼灯をブウ／＼鳴らして居たが、「そして何んね、用ッてな。」

「大變な事が出來たんだ。俺アもう貴方の歸るのを待兼ねてた所だよ。」

「おとくさん所へ寄つて遊んで來たのさ。」

「何しろこゝじや工合が惡い、他に聞かれると面白く無え話だ。何所かお山へでも行つて話すべえかよ。」

と、爺さんは小聲である。

「厭だアよ、もう草臥れて居るから。」

「出る方が好いにな、貴方に取つちや本當の大事な事ッだよ。」

「晩くまで遊んで來たから帳場が憤つてる、その位の事だつぺえが」

「そんな所ぢやない、大事な事ッたよ――尾山さんの事ッさ。」

「煩せえな、何が何うでも可かべえにさ、他の事なぞ。默つて見てるもんだよ。」

「だかさ、だかさ。」と、爺さんは目をパチクリ、些と吃調子になつて、「何も好き好んで口を出すのぢやないがね、詰り爲打ちがあ餘りひどい、貴方が可哀さうだから云ふんだ、惡く取られて合ふもんかな。」

「尾山さん、何うしたのさ。」と、髮をグイ／＼掻上げる。

「今尾山さん居るかね。」と、爺さん要愼深かさうに二階を見上げる。

「居なかつた、船形へでも行つたッペよ。」

「那りや見かけによらないひどい人な、貴方を棄てる氣で居るぜ。」と、ヅキリ云つて、その底の光る小さな目で、凝つとおせんを見戍つたもの。

「棄てるなら棄てるて好い、それが――。」

と、おせんは何うしたと云ふ顔付。

「あれ、それだもン。」と、齒痒さうに一膝乗出して「その氣で居るから終へねえ、全體、おせんさアは明日尾山さんが立つ事ァ知つて居つぺがな。」

「厭だアよ、この人ァ。今朝荷物を會社へ頼んだり、切符を買つたり、みな俺が行つて來たんぢやないか」

「でも貴方は荷物を保田上りに頼んで來たッペが。」

「あいさ保田の松ち宿屋へさ。」

「それが手だよ、何うして〳〵そこは東京者だもの、チャンと細工してるんだ。誰が二度とこゝへ歸つて來るもんか、貴方を騙して東京へ逅る氣に決つてるだよ。」

「何うしてね。」と、おせんには何が何やらサッパリ飲み込めないのだ。

爺さんの云ふ所は斯うだ。今日の晝頃おせんの留守へ、汽船會社の人が來て、先程當人の尾山が直接濱へ行き、一旦保田行きで頼んだ荷物の荷札を直して、靈岸島上りにしたとの話を聞いた。何が何でも、

然う一時間ばかりの間に氣の變る筈は無い。何うも變だと思ふから、先刻素知らぬ振して尋ねて見ると、何所までも保田から鴨川天津の方へ行く、直ぐ歸つて來ると云ひ張る。これで見ると、今迄の關係上、この儘東京へ歸ると云つてはおせんが一苦情ならべて自分を離さないに相違ない、どの道面倒な事になる。それよりは女を騙して知らぬ顔で立ちさへすれば、それでイザコザは無いと肚を決めたに相違ない、と云ふ推量なのである。然うなつては身も蓋も無い、今夜の中に何とか一工夫をしたら好からうとの事である。

「ぢや何かね、私に追駈けられるとでも思ふんだらうか。」

「さア、そこどこは分らねえな、俺には他人だもン、お二人の仲にや又、どんな約束があるもんだか——
——。」と、つばくろはヘツヘツと厭な賤しい笑方をして、その僻狡るさうな目を離さない。

おせんはマジ〱爺さんを見て居た。

呼返しの鈴が消魂しく鳴る、何度も鳴る。そして甲走つた聲で上さんが、「おせん〱、何うさ行つるだよ、おせん。」と、表二階を我鳴り散らすのが聞える。

「煩ッせえや、また初めやがつた、河豚め。」と、立上る風も無い。

爺さんは妙に聲音を潛めて、「どうで先はおせんさアを騙す氣で居るんだ、隨分旨い嬉しがらせも云つたらうよ。男はみな然うだ。斯う爲やうて女子を釣る。そんな奴はそのまゝにして置くと地僻になる。ウンと取締めてひどい目に遇はせるが好いだよ。向ふぢや高が旅屋の飯盛風情だ。強い事を云つても數

か知れてる。騙して逃げさへすればそれで好いと高を括つて居るんだ。東京へ歸りや舌を出して笑ふ積りて居る、騙されるものは馬鹿よ。」

「もう澤山だよ、て、何うすりや好いと云ふんだね。」

「そこどこは貴方の考一つよ。」と又聲を小さくする。

「私の考たッて何も無い。」

「先にや荷札一件の弱味もある事ッた。こちの出やうで何うもなる。少し強く捩込めば貴方の身上り位は譯のない話だッぺ。」

「金に轉ろぶのか。」

「まアさ、そこは貴方の考一つよ。」

「厭だアよ〳〵、爺さんの二言目は金だ。そんなに金が難有いものかね。」

つばくろは目をパチクリさして、「金々ッて、何も俺の利益にするんぢや無い、みんな、おせんさアの身體思ふからだよ。何なら俺アから話込んで見べえかね。」

「餘計なお世話だ、私は私の思ふやうにする、これから行つて思ふやうに取締めてやるから。」と氣早に立上る。

「だから困るぞ。威張つて見て何になるだ。こゝは下手に出ても金にする所だッぺえに、なアおせんさア。」

「厭だアよ。野郎、ウンと云ふほど騙らせてやるだよ。」と早や庭下駄を穿いておせんは出る。
「あれ、その氣だもン、折角向いて來た運を逃がすと云ふもんさ。」
「關はねえだよ、馬鹿々々しい。」とおせんはサッサと出て行く。

## 三

月は良いが、海は暗かつた。盆中は地引網も休み、濱には人ッ子一人居ない。中空に立迷ふ海霧を漉して來る月光は、砂濱に落ちて、碎けて、霧のやうに打烟つて居る。好く見えるやうで、直ぐ先が見えない。丁度海はそこつて居て、黒い洲潟が遠く續いて居る。静かな夜、月夜には波も低い。海の面、藍壺でも流したやうに仄暗い中を、眞白な波頭が、時どりして南から北へ、ザヽヽと突走つて來る。

おせんは尾山を探して來たのだ。いつもの濱茶屋にも居ない、馬頭觀音にも居ない。船形へとは思ふがそこまで行くのも億劫。しばらく涼んで行つたら、大抵歸つて來て居るだらうと、おせんは浪際に下駄を脱いて、そこに舫つてある網船の小椽に腰かけ、あてもなくボンヤリ海を眺めて居た。ドブリと先の寄せるたびに、船がゆれて、足先がチョイ〳〵と水に浸る。そしてオゾオンを含んだ、爽かな海は、汗ばんだ肌をスウと冷して、襟に、小脇に、言はれぬ好い心持である。裾を取られるのも知らずに居る。

遠く河名の方から、松明が二つ、静かな夏の海を沿つて濱傳ひにやつて來る――河魚突の人達だらう。姿はハッキリしないが、聲は至つて近い。月が雲に入る毎に、松明の焔がパッと水に映つて淺い波に碎

ける。

耐らなくなつて、おせんは肌をグツトくつろげて、踞まつて長い髮を梳き初めた。船はグラ〱と大搖れに搖れ、偶もすれば體の中心を失ひさうになる。いつもと違つて、油氣がないだけ、涼しさは櫛の歯から肌に滲むやうである。

河魚突は船近く來た。腰に畚をつけた屈竟の漁士が二人。踝ほどの淺い水を盪いて、右の手に魚扠、左に松明を水近く振翳し踞んで獲物を探しながら來る。

「源吾さアだッペ。」と、おせんが聲かける。

「おうよ、おせんさアか、何んしてるだね。」

「餘程突いたゞかね。」

「駄目だよ。」と、矢張り俯向いて探してる。

「お盆の十三日だもン、今日の魚にや先祖の精靈樣が乘移つてるとよ。」

「然うかも知ンねえな、今夜は駄目だ、茂三、もう上つぺえかな。」

「然うすべえ。」

二人は松明を海に投棄てゝ、陸へ上り、サッサと家の方へ行かける。

「源吾さア、主ア家に居る尾山さんに遇はなかつたかね。」

「今夜は未だ遇はねえよ。」

「然うかね。」

二人の影は黒ろく試験所の方へ消えて行く。海冷えがしたのだらう、霧が吹晴れて、月の光は昔のやうに明るくなつた。波も一層和んて、虫の聲は降るやうだ。今投げた松明が何時までも同じ泡の所に漂ふて居る。

餘程經つてから、畵工の尾山はおせんを探しに來た。途中、漁士達に遇つてこゝに居ると聞いたのだと云ふ。土産にでもするのか、船形の貝細工や絹ハンケチに一杯さげて居る。

「尾山さん、貴方は私を騙したね、騙すなら騙すが好い。誰がそんな手に乘るもんか。些と氣を付るもんですよ。」

尾山は足を濡らすのが厭さに、濱際にしやかんて白扇をパチ〳〵さしては居るが、聲はやゝ慌てゝ居る。「何の事だらう、餘り突然で僕には分らないね。」

「分るも分らないもあるもんて、私は皆知つてますよ。保田から鴨川へ行つて、直ぐ歸つて來るなん何も他を騙す事は無いさ。」

「誰が騙すもんか、それが本當ぢやないか。」

「ぢや、何故荷物を東京上りに直したのさ、白々しいのも大概にするもんさ。」

「お前、誰かにしやくられたね。」と忙しさうに眼鏡の目を瞬く。

「餘計なお世話。嘘つきめ。」

「あれ、僕は保田へも行くんだよ。怪しけりや一緒に來て見ても好い。」

「行くさ、私は明日一緒に行くよ、かねての約束だもの。連れてかないだつて行く。」

「何うともするさ、人を疑るのも大抵といふ所がある。」と尾山はムッした樣子でグル〳〵其邊を歩いて居る。そして又、「然し斷つて置くが、行くとしても、僕は、お前の前借金など一文も拂はないからね、誰が、他を疑つてそんな事する者の金まで拂つて耐るものか。好いかね。」

「慣つたのね。」と、おせんは鼻の先で笑つて、「大丈夫だよ、着物をスッカリ置いて行けば、身體位はぬけられるから。御心配は要りまん。」

男は何とも云はない。俯向いて砂地を歩いて居る。脂を塗つた頭髮が時々キラリと光る。おせんは快さゝうにその態を凝つと見て居た。

遠くの沖合を、蟹船が一艘、艪を鳴らしながら通る。

到頭、根負けして男の方から口を切る。それは斷うてある。成程惡るかつた。東京へ歸るを保田へ行くと欺いたは惡るい。けれども、東京へ歸ると云つても、それは些いと行くだけて、師匠の用事さへ濟めば、直ぐ又那古へ來る積で居るのだ。でも然う云つてはなにかに面倒が出來る。再び戻ればそれて事は濟む。と思つたのが僕が惡るかつた。腹も立たうが勘辨して、些いとだけ東京へ中歸りさしてくれ。決して棄ても忘れもせぬ、と男は言葉をつくして云ふのてある。然し、おせんは承知しない。何所が何所まで一緒に行く。先生の名も所も知つて居るから、何なら後から追駈けてゝも行く。誰が何と云つて

も聞くものか。行かれて困るのは貴方の不運、私の知つた事てないと受付けない。果ては男も涙聲になつて頼んだが、何うしても駄目、一緒に行くと云張る。

終には尾山も決心した。眞蒼になつて唇をブル／＼さして居る。汐がズッと退いたので、尾山は下駄のまゝ女の前に立寄り、近々と顏を見合はせて。

「おや、頼まんから何うとも勝手にするさ。その代り、後で悔んでも駄目だよ。そつちが人困らせに出るなら、僕も覺悟はある。」

「あいさ、私は何うでも好いのさ。」とさげすむやうな目付て正面に尾山を見て、「食はしてさへ貰へば、それて文句は無い。」

「歸してくれと頼むな。」と、聲は低いが、鋭い。

「誰が頼むもんか、よく／＼懲りるまでは喰付いて離れない積りなの。」

「それも好からうよ。」と、尾山は聲だけて笑つて、「東京と房州ては違ふ。こんな離れ島見たいな所だからこそ、お前達も羽を伸して、そんな高慢ちきな事を云つてるに好いんだ。房州ぢやおせんても、東京へ行きア何んだ。自分て耻しく恐しくなる時が來るぞ、その時、驚くな、喫驚するな、顫え上るな。」と、疊みかけて云ふ。

「最う好いよ、何うでも。貴方に負けて居て耐るものかね。」と、小兒のやうに一手て艪をグラ／＼さして居る。

「馬鹿め、些と醜い所も見るが好い。」

「何うても好いよ。」と、もう相手にならない。さも勝誇つた態度て、眞蒼な男の顏をシゲ〳〵と見込んて居た。

やがて、二人は家へ歸る。道々も男はやたらに激昂して、せか〳〵と急足になるかと思ふと、急に萎れて溜息を吐く。寄つて來て何か話かけたい樣子も見える。おせんは後からその態を見て、默つてついて來る。

おせんだけ裏木戸へ廻つて、つばくろ爺さんの所へ行つて見ると、それても爺さんは寢ないて待つて居た。二階のお念佛も最うすんだと見えて、ヒツソリと人氣がない。供養の切籠燈籠が其所此所にかゝつて居た。灯の點いてるもあれば、中には消えて了つたのもある。

おせんは蚊帳の枕元に座つて、明日、何うあつても一緒に東京へ行く事を話して聞かせると、爺さんはムツクリ起上つて、「そりや惡るい〳〵、そんな無勘定だから俺が心配して居るんだ。先へ行つて苦勞を見せられるに決つてる。」と云ふ。

「何うだつて好いだよ、負けて居られるもんか。何所までもいぢめ拔いて困らせてやるんだ。あのまア、ビク〳〵して居る樣子を見るが好いだわて。意氣地がないたつて餘りだ。その又甲斐性なしの癖に、他を陥穽にかけやうとする所が面憎い。」

爺さんも押しては云はなかつたが、惡い顏して沈んて居た。所へ亭主が眞赤になつて我鳴込んて來

た。兎に角に客の座敷へ入るのに、尻も下ろさず、膝も入れない。手拭浴衣を着た、肥ッちよの大男だ。

「畜生！今まで何所行つて來た。用ある、此所へ來い。」と、行成來て、グイとおせんの手をしよ引く。

「何んするのさ。」と、座つたまゝだ。

「何んするも糞もない、來い、來い。」

「用があるだら行くよ、嚇したつて聞くものか。金さへ突けば俺の身體だてよ。」と、立つてサッサと自分が先きに帳場へ行く。

つばくろは別に仲裁に出やうともしない、ランプの心をグッと引籠めて、臥ながら耳をヂッと勝手の方へ澄まして居た。

何う話がついたのか、翌朝の一番でおせんは東京へ立つ事になつた。亭主も、朋輩共も、近所のものも相應に見送りはあつた。後ればせにつばくろも濱まで駈付けた。そして、おせんを片影に呼んて、これから先きの心得や、萬一男に棄てられた時の用意やら、クド〳〵と話して聞かせるのを、おせんは唯上の空て「あゝ〳〵。」と聞いて居た。

艀が出る。

尾山は帽子の庇を深く下して、蝙蝠傘を力に胴の間にしやがんで居た。おせんは荷物の間に立つて、何時までもハンカチを振つて居た。その間に蒸汽が館山から來て、お客も荷物もやがて黒塗の艙門へかくれて了つた。

船が大武の岬を曲つても、つばくろの爺さんはボンヤリ後を見送つて居た。睡が足りない所以か目も充血して、瞼が重垂れて居る。

「何時まで立つてるだよ。いろ女に遁げられたもんだから。」と、艀の船頭が後から背中を一つどやし付ける。爺さんはたゞ、「ヘッヘッ。」と笑つて居た。

## 四

東京へ歸つた當座、先づ四五日は旅屋住居として、その内に適當な家も見付け、色々の準備をしやうと云ふ約束。で、兎も角、着いたその晩は芝口のある旅屋へ泊る事にした。三間々口のしもたや掛りの家で、見世に掛並べた看板さへ無ければ、これが旅屋かと怪まれさうなところ。軒前にはニス書きの煤けた軒ランプが出て居た。

通されたは四疊半、塗籠づくりの薄ッ暗い二階座敷である。床も棚も無い、眞四ッ角な間。後に坪窓はあつても、そとが塞んでるので、風通しは素より日の目もロク／＼通さない。鞄や行李や手廻りのものを壁際へ積重ねて、狭苦しい間に二人は席取る。ヒヨロリと悪伸びした雌松を心に、二坪ばかりの小庭を距てゝ、開き前は直ぐ隣りの石藏――午後の照返しがさぞと思はれる。

「どッか最少し廣々としたとこは無いんてせうか。」と、おせんは着く早々、突立つたなり然う聞く。忙しい扇遣ひてある。

「そりや有るとも、然し、何方しても懐と勘定合の上さ。」と、尾山は別にそれを苦に疾む模様も無い。

「なんぼ東京だッて、こんな暑ッ苦しいとこばかりぢや無いでせう。」
「これ位の事て、今から然うへこたれるやうでは、この先き何うする積りだらう、困るね。」と、笑つて居る。
那古を乗出してから、尾山の様子はスッカリ變つた。女の我儘を憎む風は些とも無い。何も無い前々通り、至つて親切に物優しい、痒い所へ手の達く介抱振りてある。所詮、遁れぬ所と觀念したのだらうと、おせんは氣の毒にもなつたが、幾らか又拍子抜けの形もある。
風呂へ入つて、夕飯が出た。ムンと熱する白熱燈の下で、二人は足付の小さい膳をつき並らべた。瓦斯はシュウと音立てゝ、小さな羽蟲が煩さいほど周圍を飛ぶ。
給仕に出たは、目の細い、痩削けた、厭らしいほど銀杏返しの根を下げて結つた女――つくつては居るが三十は出てるだらう。この女、恐しいお喋りて、面白くも無い事をさも大業らしく笑立てる。二人を見物客と見くびつたものと見え、博覧會やら花火やら人形芝居の話を、獨りてペラペラ喋り立つて居る。尾山は田舎者と見られた面白さに、わざと房州辯など使つて、詰らぬ愛嬌を賣つて居る。酒もはずんて女中のお酌て三本ほど飲んだ。終には如何はしい場所の噂なぞも初つて、女中は得意さうに說立てながら、それでも時々「こんな事まて教へて上げては、後て奧様がどんなにか――ねえ、奧様。」なぞと、擽つたいやうな目付しておせんを見返る。その様子が如何にも小面憎い、他を馬鹿にして居る、些と言籠めてやらうとも思つたが、億劫なのてそれも舍した――言葉の不自由なのも幾らか氣になるので。

それに氣の所以かも知れないが、東京へ來てからの尾山は急に元氣付き、言葉まで勢付いて居るやうだ。前の因循した人らしくも無い。

おせんは壁際に小さくなつて、御飯も輕るく二膳で舍し、あとは素湯ばかり呷つて、二人が面白さうに喋るのをボンヤリ聞惚れて居る。眩しいほど明るい瓦斯も何と無くいやだつた。

「何うした、今夜は馬鹿にお人柄ぢやないか。」女中が膳を退いた後で楊子をせゝりながら寢ころんで尾山は問ふ。

「私より貴方がはしやぐんです。」

「然うかね、矢張り東京の酒は旨い、自分の家へ歸つたやうな氣がするもの。」

「よく喋る女ね、いけ好かない。」とおせんは顏を顰めた。

「東京の女は皆愛嬌がある。お前も早くあゝならなくつちや駄目だ。」

「厭な事ツた、何うで田舍者だもの。――頭が痛くなつた。」と、それでも周圍に氣兼しながら竊つと兩足を投出す。まだ足袋を穿いたまゝである。

寢るにも早い、時間があるから銀座の夜見世をひやかしに行かうと尾山は云ふが、おせんは最う草臥れたから先きに伏せる事にした。尾山は團扇を持つて一人出掛ける。

おせんは蚊帳へ入つた。些つとの風も無い、ムシ〳〵といやに蒸立てる晩であつた。瓦斯は消したが枕元の置ランプが苦になつて眠られない、ボウツと頭に火照る。日のうち一杯に吸込んだ溫氣が夜具に

籠つて、寢返りするたび氣味惡るく肌へさはる。今着たばかりの寢間着が、もう汗にしとつてヒタ〳〵と軀に粘り付き、虫にてもわたられるやうに痒さがあちこちと逃げ廻はる。蚤も可也煩さい。帶を解きたいとは思つたが流石にそれだけは遠慮して、バサ〳〵と絕間なしに團扇を動かして居た。これまでは大抵寢蓙の上へ騾身で長々と寢て居たのだ。それに、蚊帳までが狹苦しい木綿蚊帳なので、動くたびに髮の毛が觸つて心持が好くない。せめてもと、頭を擡げて闇の凉味を尋ねたが、空はドンヨリ低く曇つて、十四日と云ふに月も無い、夜の暗らさも常のやうては無く、何だか底に光を裹んて居る、今に地震ても搖りさうな晩てある。

昨日からの疲勞が出て、枕に就くと間も無くトロ〳〵と眠りかけたが、カアブに軋る電車のギユウと重い地響きに目が覺めた。惡い方の齒に愸えていやな響てある。夜が深けるほどます〳〵耳に立つ、頸筋や顏は脂が浮いて、觸る手がギタ〳〵する。そして、それから後ちと云ふものは何うしても眠られない。心がつかれて、所在ないほど手足はかつたるいのだが、枕ばかり熱つて目は段々冴えて來る。十時も聞いた、十一時も聞いた。おせんは幾度となく寢返りを打つてる。

「何うなさいましたらう。旦那樣はお晩いぢや御座いませんか。」と、例の女中、建端の惡るい急な梯子段を踏鳴らして樣子を尋ねに來て、蚊帳の外からペチヤ〳〵喋り初める。又博覽會と芝居の話だ。初めの間は好い加減にあへしらつて居たが終にはそれも煩さくなつて、眠つた振りして返辭もせず居た。

「ぢや、もう閉めますから、——好いてせう。」と、女中は念を付いて、建付の惡るい雨戸をガタゴト

と鎖め初めた。一枚、一枚、暑苦しさが身に怺える。それで下りるかと思ふと、今度は中へ入つて枕元の邪魔ものや何かを片付ける。脱棄ての着物を疊むのは好いが、襟を些いと嗅いで顏をしがめたり。帶をランプ際に持出して裏と表を檢めたりして見て居る。起きて行つて引たくツてやりたい位であつた。又睡入つたと見える。目を覺ますと、尾山が傍に寢て居る。何所かで飲足して來たものと見えて、ハア〱淺い呼吸遣ひで、流行唄を小聲に唄つて居た。

「好く眠るね。そとは賑かだよ。」と、頗るの上機嫌だ。

おせんは默つて目を冥つた。

「おい〱、眠つちやいやだよ。面白い話があるんだ。お起きよ。」と、肘を取つて搖起す。

「起きてますよ、何です。」

「憤つたね、はゝゝゝ、何もそんな憤るやうな話ぢやない。今日出た序だから、田澤ツて友人の家へ廻つて見たのさ。丁度、妻君も居てね、久し振りだツてんで、西洋料理を御馳走になつた。旨かつたよ、殆んど半年振りだからね。房州も好いが、喰べものぢや全く閉口した。」

「私は睡いから……。」と、又、寢返らうとすると、肩をスッカリ摑んで、

「まア、お聞きよ。何故然うなのさ、田澤の妻君がね——。」と、顏を近々と差寄せる。

「離して下さいッたら、暑いから、ほんとに自分で自分の軀のやうな氣がしない。」

「噓だよ。噓だよ。」と、低く笑つて、「何か憤つてるに違えない。晩く歸つて來たのが惡るいんだら

う。」

「いゝえ。」

「へん、然うさ、決つてら。お止しよ、見ッともないから。これからもある事ッた。それよかね、今も田澤と相談したんだが——家を持つ事さ、何うも然う急に探しちや好い所が見付かるまいと云ふんだ。少し氣に入つた家だと高い事を云ふしね。矢張り當分は間借りの方が好からうッて然う云ふのだが、何うしたもんだらうね、何れにしても一家の主婦たるお前の意見次第による事だが。」

「私は何方でも好御座んす。」

「まア然う憤らないでさ眞面目な相談だよ。」

「誰も憤りやしません。暑いから最少し距れて居て下さい。」

「何うしたのさ、本當に。」と、氣遣しさうに顔をのしかけるやうにする。

「暑い、暑い。」と、突然大きな聲をして、蚊帳をスッと拔出して縁端へ出る。

「馬鹿だね、お前は。」と、男は後を見やつて、妙な低い笑ひ方をして居る。

おせんはその晩幾度となく目が覺めた。今まで一度も覺えのない事で、枕にさへ就けば翌朝までグッスリ寢込む僻なのに、今夜に限つて何うも眠られない。暑苦しいので、息の塞る夢を見ては、キット目覺める。汗てグッショリになつて居る。尾山はと見ると、これは傍に小さい足をちゞめて、クン／＼と眠つて居る。そして、時々目を覺ましては、おせんを見て小さくニッと笑つて、又スヤ／＼と眠りつゞ

ける。コトリと音させてもキッと目を覺ます。おせんはその度、男の腕を邪慳に突除けてやる。汗がランプにひかる所以か、男の顏が小さく皺んで見える。眼鏡ぐせに目瞼がはじけて居る。全るて疲れ果てゝ力ない人の寢姿だ。賤しく媚びるやうな笑方も氣になつてならぬ。撲られても蹴られても憤らぬ人の笑ひ方である。些いとの安心も油斷もなく、始終心をコセ付かせて居る人の笑ひ方である。終には、顏を見ても腹が立つ。おせんは譯も無く向ッ腹を立てゝ、クルリと後向きになつたものだ。

翌日からは市中の見物。博覽會を見て、勸工場を見て、停車場を見て、公園や三越を見て、ニコライ堂も淺草も見た。芝居には行かないが、寄席なら落語と義太夫と二晩づゝけて行つた。すべて、田舍の人、女の目に喜ばれさうな所なら、端から〳〵見て行く。これは何、あれは何と親切に說明されながら、おせんはキヨトンとして跡に喰ッ付いて行く。淺草の仲見世に行つた時、男は冗談顏に、

「おい、こゝで僕に突つ放されたらお前何んとする。」と聞く。

「歸れますよ、獨りても。」

「方角がつくか。」

「つきますとも。」と、笑ひながら口には云つたものゝ、おせんは不安さうな目色であつた。

初めの內は自分からせびつても、無理に男を誘出したものだが、段々氣不勝になつて、外に出るのを億劫がるやうになつた。「家を持つてからは滅多に出られない、今の內に見物して置くさ。」と、男がすゝめ立てゝも、可成なら家に居るやうな工夫をして、餘り外へは出ない。そして、一日も早く家を持ち

たいと迫る、どんな所でも好いから貸間を探してくれと迫る。
「何うしたんだ、恐しく元氣が無いね。」と、男も氣にして時偶は尋ねる。
「東京ッて所は厭な所ですね、ツク／＼厭になつた。」
「もう房州に歸りたいか。」と、笑ふ。
「誰が房州になんか歸るもンで、お迷惑でも喰ッ付いて放れませんよ。」
「恐しい執念だ。」
「當り前でさ、今歸つたら貴方に負けた事になります。」
「ぢや好いさ。夫婦だもの一生一所に居るが好い。」
然う云ふ口の下から、おせんは又、早く家を持ちたいと迫る。男は何時も、「最少し／＼。」と遁を張つて居た。
おせんはもとのおせんぢやない。日一日元氣が悄げて、顔の色も引立たぬ。いつもボンやり鬱ぎ込で居て、お喋りするのも大儀さう。第一、ひどくもの忘れするやうになつた。
「困るぜ、今からそんな事では、些と元氣を出してハキ／＼しないか。例の男五人でも唄ふ氣分になるさ。」と引立てゝ見ても、「えゝ」と生返事ばかりして煮切らない風だ。
それでも、「もう里心がついたらう。房州が戀しくなつたと見えるね。」と、冷かされる時だけは、妙に氣立つて。反抗もするが、それも何時まで續かう、相變らず浮かぬ顔でブラ／＼して居た。これも畢竟、

窮屈な旅屋住居をして居る所以と、尾山はこの頃になつて急に身を入れて貸家貸間を探し初めた、そんな事が五日ばかり續いた。

それは然しおせん自身にも分らない。日頃念願して居た東京へ來て、何が然う氣になつて氣が重いのかテンて當りが付かない。那古にも、船形にも然う心を引付けられる絆が殘つてやうとは思はぬ。たゞ東京がいやだ。この家もいやなら。そとに出て他に顔を見られるのもいやだ。群集や電車の中は猶いやだ。人の力の限りを盡して建連ねた壯大な建築や、榮華の極みを盡して寄集めた見物見世物を見ると妙に心が焦ついて、居ても立つても居られぬほど辛らい。それなら、世の榮を羨み嫉むのかと思ふに、必らずしも然うでは無い。他は他、自分は自分、と、チャンと境の埒は心にある。世の女心を擾し惑はすと聞く三越の陳列場に立つた時でも、紅、紫、黄、青、色さま〴〵の綺羅を見るとだけて、他に何の慾も起らなかつた。無駄の多い、見え透くやうなお世辭や、强いて出燒つた、せゝこましい、煩瑣な應對振りや東京の暮らし向きも、こちさへ相手にならねば別に苦になる筈もない。無論、それでは無い。

おせんは近頃になつて初めて身の行末と云ふ事を考へた。毎晩〳〵それが苦になる。何うなる身體だらうと云ふ事が妙に苦になり初めた。そして、それを考へる毎に妙に氣が塞いで心細くなる。忘れて居た弟餘三の事まで氣にかゝる。無論、考へても〳〵、これはと思ふ結局も豫想も付かない事は解り切つて居る。居て、それて、氣になつてならぬ。ひどい時には乳の下が重苦しくなつて、咽喉佛から胸先まで軟かな羽毛てスウとなでられるやうに氣がそゝる。こんな事は今まで覺えもない事て、頼まれてもこん

な苦勞をした事はなかつた。

もし、強いて云はゞ、都會の威壓とでも云ふものか、おせんはこの忙しない、派手な、そして限りなく大きな都會に壓倒されたのだ。今まで自由自在に振動かして居た自分の手足も、こゝでは思ふやうに動かない。窃つと周圍を見圍はす氣にもなる。歩るくに自分の足音が氣になる。右から、左から、前から後から自分の姿を他に見詰められると思ふと、己が身ながら思ふやうにはならない。それに、宏壯な建物のうちに住んで、些の秩目もなく、縱横に飛廻り切つて廻はる人を見ると、如何にも自分の小さいのが顧られる。些いと表に出て、賣出し樂隊や電車の警鈴(ベル)を聞いても、何となく後から追駈られるやうに氣は騷いてならぬ。歩るく足まで浮いて來る。賑かな所から暗い闇へ段々追除けられるやうに心細くなるのだ。

「あゝ、矢張り來るんぢや無つた。」と、口へは出さぬが然う思はぬ日がない。

着いて九日目、やつと貸間見付つた、牛込の矢來と云ふ所で、女隱居の間を借りる事に決つた。兎に角一緒に來て見ろとの事ゆゑ、行つてみると間は八疊に六疊の二つ、狹いながら些いとして庭もある。隱居は六十近い、白痘(しろい)のある、切髮の老女で、黑絽の被布を折目高かく着て居た。活花の指南もして居るとの事だ。

「これは奥樣で、はい、お初めて御目に掛ります。御覽の通り私共は下女と二人暮して、到つて無人で困ります。何かと御面倒になる事で御座います。」と、些と國訛はあるがハッキリした口上。

おせんは蒼い顔して頭を下げた。そして、歸途の電車の中でも、ボンヤリ何か考へ込んで居た樣子である。

諸道具の買求めや何かで、尾山は終日奔走して宿へ歸つて見ると、おせんは何日になく夜食膳に酒をあつらひて、獨りで飮んで居る、もう可也醉つてるらしい。

「何うしたんだ、この態は。」と、尾山が不興氣にそこへ坐る。

「何うしたもないさ、私は到頭貴方に負けた、惜しいけど仕方がない。」と、眼は醉はずに凝つと尾山を見詰める。

「何を突然に。」

「私は今日スッカリ肚をきめました。とても貴方にや勝てない、今夜の夜航で房州へ歸ります。あとでさんざ馬鹿を笑ふが好いのさ。」

「借りた家は何うする。」

「何うするとも御勝手。こんな東京なんて所に、一時だつて居られるもんか、矢張り房州に限ります。」と、又がぶりと呷る。

「何うして又、急にそんな氣になつたのさ。歸ると云ふなら止めもしないが、その譯が分らんぢやないか。」

「あれは何時だつた、然うさ、東京へ來る前の晩、貴方斯う云つたわね。こんな離れ島見たいな所だか

ら羽を伸して高慢ちきな事も云ふが、東京へ行たら歸してくれと頼むな、と然う云つた。」

「云つた。したら、死ぬまで喰付いて居て見せると、お前は云つた。」

「その事なの、私も言つた口があるから意地にも面あてにも居通したいのだけど、もう駄目、もう〳〵こんなシチ煩さい、みゝつちい所に居るのはいや、負けるのは殘念だけど、もう歸ります。御縁があつたらだ。」

「けれども、僕も色々準備までしたのだから、せめて……。」

「もう〳〵、お免です。私はもう歸ります。」と、何うしても聞かない。

おせんは獨りで昂氣付いて、女中やら番頭やらを集めて、汽船の出るまでの間を、賑かに飲んだり騒いだりして居たが、尾山のすゝめるまゝに、例の「男五人」の唄まで高々と唄つた。

愈々出發と云ふ間際になつた、尾山はもう一度、「然し折角出て來たんだ、酒を醒して今一度考直して見たら何うだ。」と、止めて見たが、おせんは勿論聞入れもしない。

店先まで送出して、尾山が、「では左樣なら。」と、名殘惜しさう。

「左樣なら。」とおせんは俥の上。

「掛田屋の皆へよろしく、つばくろにも。」

「左樣なら。」と、おせんの俥は勢よく靈岸島へ駈出す。

（完）

# 土手の家

田山花袋

茅葺、瓦葺、トタン屋根の不整な疎らな田舎町の家並の角に、際立つて大きな二階屋が一軒、これは此町に遊廓があつた頃、屈指な貸座敷であつたといふ。今は土地での唯一の旅店兼業の料理店で、夜は裏座敷に三味線の音が絶えたことがなく、酌婦のだらしなく騷ぐ聲は、暗く淋しい街道を一ところ賑かにした。

　行田から館林に通ずる街道、利根川の長い舟橋をとゞろに渡ると、橋畔の渡小屋、カンテラの煤けた光、爺の禿頭、暗い土手の上から見ると、坂東太郎の溶々たる流は處々黒く光つて、半里ほど下流の渡場の燈火がぼつちり一箇見えるばかり、晝間往來した船舶の氣勢も無く、街道には日が暮てから客を一人乘せた馬車が一臺通つて、機廻りの荷車が二臺通つて、あとはさびしい闇。其土手の闇を破つて明るく見えるのが此料理店の勝手である。晝ならば、中庭に松樹の緑、樫の並樹、疎らな柴垣の外に車井戸があつて、婦が野菜を洗ひながら、ねんねこで子を負つた子守女と話をして居るのを見得るであらう。いや、土地の馴染客が自轉車などで通らうものなら、其庭越し垣越しに、けたゝましい呼聲を女から掛けらるゝに相違ない。

　酌婦共は其中庭の前の六疊に集つて居るのだ。今居るのは三人、一人は髮の縮れた、耳の遠い色の生

白いお花といふ女、一人は肥つた背の低い胸の出たお鉄といふ女、一人は一番年の若い此家での呼物のお貞といふ女、それに内藝妓が一人此間から殖えて、用事さへないと、三味線の復習、鼓の復習、それも難かしい高尚なのではなく、俗に入り易いサノサ節、喇叭節。倦きると、だらしない色男の話、衣服の話、食物の話。

此室から店に行く處は、欄干のついた、折曲つた廊下で、其奥に廁がある。廊下の前には、昔泉水でもあつたらしい跡が殘つて居て、その凹所には、木綿糸や、鼻紙や、毛の丸めたのがだらしなく捨てられてあつて、いかにも汚い。貸座敷であつた頃の一種の厭な臭が何處となく人に迫る。奥の座敷の間の切り方を見ても、其頃のさまがすぐ思はれる。此土地が榮えて居た頃には、此家など特に立派であつた相だが、今日のやうに衰へて了つては、——古びて了つては、一層其腐つた臭が強くなつて、何となく胸の惡いやうな感がする。家も、室も、其處に住む人々も何だか腐つた氣の中にあるやうにしか思へぬ。

實際一種の臭が此家に充ちて居た。

旅客は暗い闇の道から、其家の大和障子を明けると、其處に、帳場に、五分心の洋燈を釣つた下に顔の長い、色の白い、背のすらりとした三十五六の女が長い煙管を立てゝ居るのを見るであらう。これは此家の女主人で、男あるじは居ない。でも、子供が三人、總領が九歳の男兒、次が七歳の女の兒、其次が三歳の女の兒、それに今六月といふ腹を爲て居る。總領は前の亭主の種で、其亭主と謂ふのは一年

ほど居て出て行つて了つた。町では誰も知らぬ者は無い、此女主人は此貸座敷の本家の娘で、此母親の情夫に十六の時から通じて居た。で、亭主を早く失つた母親と此娘との衝突は甚しかつた。親子孛剌は田舎でも餘り多くはない。で、娘の十九の時貰つた婿は五日居て吃驚して逃げて了ひ、二十四の時、其事を承知で養子に來た男も、懷姙すると間も無く出て行つて了つた。其時出來た兒も其亭主の子であるか、情夫の子であるか、よく解らなかつた。で、いつそ情夫を家に入れたらといふ說も度々起つたが、いつも母親が泣いたり叫んだりするので破れた。母親にも其情夫に出來た女の子が二人あつて、今歲十八と十六になる。

母親は少なからぬ財產を持つて居るので、其二人の娘と此町に住んで居た。五十五で今も達者で居る。今でも其情夫は母親と此の女主人とに同じやうな關係をつけて居るのだ。

情夫と謂ふのは、今年四十五六で、矢張此の近鄕の者であつた。此町に遊廓が榮へた頃よく遊びに來たので、深間に陷つた女郎も少くなかつたといふ。色の白い、丈の高い、男らしい男で、土地でもこの不始末を除いては、多少の信用も持つて居るし、勢力にもなつて居る。種々の事業にも手を出して、相當な財產をも作つた。今では、東京に出て、支那學生の大規模の寄宿舍を引受けて、立派に暮して居る。東京の宅にも妻ともつかず妾ともつかぬものがある相だ。そして一月に一度は必ず此町に來て、母親の本家とこの女主人の料理店とに一晩づゝ泊つて行く。

二三年前までは、泊つて居ることが知れると、母親が夜中でも遣つて來て、怒鳴つたり叫喚いたり泣

いたりして、果ては娘の髮を切るの何のと大騒を遣つたものだが、此頃は斷念めてか、そんなことも無いとの話。

それに、母親が其情夫に生ませた娘も、かういふ家庭に育つて、かういふ空氣を吸つて居るので、二人とももう情夫が出來て、姉のは村の收入役、妹のは村役場の書記。此家の抱藝妓がこの正月にとある料理店に聘ばれて行くと、其姉妹が其男達と平氣で戯れて居たといふので、商賣人も跣足ですねと言つて呆れて居た。

「けふはお神さん、これね」

と言つて、酌婦の一人が髮を結ふ眞似をした。

「さうさ、當り前サ。旦那が來るんですもの」

「誰に見しよとて、紅かねつけて――といふことがあるぢやないかね、……ちつとも可笑しくありやしない」

と今一人の女がわざと眞面目て上つ調子に言つた。

「あれでも嬉しいんだね、乾度。旦那の來る日は機嫌が違ふもの」

「それァさうさ、お前さんだツて左樣でせう。これの（と親指を出して見せて）來る時は、顏色たらありやしない。」

「本當よ。お貞さん、お看んなさいよ。今日は屹度來てよ」

とお錢が傍から口を挿んだ。

「駄目よ」

「何うして？」

お貞は默つて居た。

「けどもね、錢さん」とお花は言葉を續いて、「あの年になつても同じかね、平生はあんなに無性にして置く癖に、來るとなると、紅をさして、白粉をあんなにつけてさ‥‥よく氣恥しくないね」

「矢張、嫌はれると大變だと思ふんでせう‥‥大事の人だから。」

「それは左樣ね、母さんとさへそれ程競走したッて言ふんだから」

「可笑しくなるよ」

とお錢は笑つたが、傍に三歲の兒の泣くのを負つて、ぼんやり立つて居る子守のお源といふのに向つて、

「源ちやん、よく泣く子ね」

「本當にこの餓鬼ッたら、困つちやう。母ア母ッてすぐ泣出すんだもの」

「今夜ぁ土手の家に留守番に行くのかえ」

「何アに行かねえでも好いだがね――」

「淋しいだらう、彼處は？」
「あゝ」
「源ちやんも情夫でも拵へれば好いんだ」
「厭なこつた。」と少し顔を赧くして、舌をぺろりと出して、「男なんか厭なこつた。此間も來やがつたから擲つて遣つた。」
「何日？」
「三日ばかし前さ。そら、二階に泊ッた奴、壯士見たやうな、書籍を澤山持つて賣りに歩いて居る——」
「あゝ、あれ、あれが何うしたの？」
「あの晩、この子をお神さんに渡して、寢たのは十時頃。未だ奥に貞やんのお客が居たね。ぐつすり寐て、ふと目があくと、もう皆な寢ちやつた樣子だから、寢反りを打つて、又寢やうとすると。誰か階子をトン〳〵と下りて來た。手水場に行くんだんべいと思つてるとばつたり足音が止る。己ア前にもさういふ眼に逢つてるて知つてるて、來たナと思つたのよ。と、其の通こつそり遣つて來るぢやねえかね。小面憎くなつたから、默つて、寢た振をして、傍へ來た處を、木枕でうんといふほど擲つて遣つた」
「まア……」
と女共は皆笑つた。
「と……ね……可笑いぢやねえか、頭をかゝへて、すこし其處にぐず〳〵して居やがつたけが、すごす

ごと這つて歸つて行きやがつた。次の朝。發つ時に家の前で、ぢッと見詰めて遣つたら、變な顏をしてやがつた。馬鹿な野郎さ」

「源ちやん、本當に氣が強いね……それよりも情人の一人も拵へる方が好いぢやないかね」

「厭なこつた。」と。投げるやうに言つて向ふに行つた。

この子守は女主人の從妹の子で、秩父の大宮で生れたのだが、家が貧乏なので、十四の時から此家に來て世話になつて居た。肥つて色が白いが、純然たる田舍娘で、朝、子供を負ふと、終日其背を離さない。鎭守の社、土手の上の日あたり、理髮肆の店などが其遊場で、二年前までは汚れた手拭を額に幅廣に卷いて、團栗を拾つたり御手玉を取つたり土手の枯草に火をつけたりして遊んで居たが、昨年あたりから少し態度が變つて、簪も挿し紅も點け髮も結ふやうになつた。此頃では理髮肆の店に行つて居ることが多い。

お源は酌婦共の集つて居る室から、庭を拔けて戶外へ出た。冬の午前の霜解で路が惡い。軒には雀がぺちやくくと百囀を遣つて居る。いつもの理髮肆に行かうと思つたが、ふとあることを思出して土手に登つた。土手の上は淺間おろしが寒く吹いて、秩父連山の雪が美しく日に光つた。川はところぐくに洲を顯はして、其洲は濃い鼠色に、水は銹銕納戶の色に流れて居る。長い長い舟橋の上を車の通る音がところに響き渡つた。

「厭なこつた」と言つたことを思出して、ぺろりと單獨で舌を出した。舌を出すのは此女の癖である。

「まだ知らねえて居やがる、ざまを見やがれ！」

不圖月經のとまつて居ることを思出した。懷妊であるか無いか經驗がないからそれは解らぬが、現に角月經は先月から無い。構ふもんか止つたらとまつたて何うにもなれ！と續いて思つた。今の場合夫よりも其男に逢ひたいといふのが其願である。お源は土手際の暖い枯草に身を埋めて、日に光る川を見ながら、茫然と下流を望んだ。其船の繋つて居た川端の楊樹、其樹の下には漣が寒く寄せて居て、枯薄の叢がざわ／＼と河風に靡く。氣候こそ違へ、其時のさまと總て同じてある。生洲船、河楊、舟に仕懸けた水車、運漕店の瓦屋根、少しも違はぬ。其時は土手の上て二語三語冗談を言ひ合つた。兼ねて泊りに來てよく知つて居た。關宿の舟宿の息子て、年は二十三、上流の赤岩に肥料を積んて來るので、一月に二度位は缺さず見る顏てあつた。黑いしやくれた顏て、別に好いたらしいとも思なかつた。其日は六月の蒸暑い晩、お神さんに叱られて、むしやくしやして、いつそのこと遁げて秩父に歸らうかと思つて居た。旦那が今夜お神さんの處に泊るので、酌婦の情夫が表座敷に飮んで騷いで居るのを裏座敷の二階に移した。旦那は表座敷て絹布の蒲團を重ねて寢るのだ。お源は今、其時のことを明かに頭に浮べた。其若い船頭が冗談半分にお源の袂を引張つて崖に繋つた舟の中に連れて行かうとする。お源は其時は不思議にも「此野郎」とも「いけ好かぬ奴」とも思はなかつた。引張られ、押され、きやつ／＼と騷ぎながら、落ちるやうにして、船の中に無理に伴られて入つた。爺も陸で飮んで居ると見えて、船の中には誰も居ない。暗い六疊位の一間、低い神棚に舟玉神が祭つてあつて、傍に木綿布の卷いたのが夕闇に薄白

く見えて居た。背の子が喧しく泣くのを、船頭が菓子を遣つてなだめ賺した……。

お源は此處まで思つて、獨て厭な薄笑をした。變な氣になつて枯草から身を起した。そして菜の青い畑道を靜かに廻つて、其河の岸の楊樹の傍に行つた。此の楊樹の向ふに、一軒の二階屋が、雨戸を閉めたまゝ、空屋になつて、暖かい冬の日に照されて居る。此二階屋は、此町のもので横濱の貿易商をして居る人の別莊だが、二階は一間、下は二間の鳥渡凝つた家作である。建てた二三年は、夏になると必ず其家族が避暑に來るのが例であつたが、いくら故郷でもこんな田舍では萬事につけて不便なので、三年目に平塚に別莊を買つてからは、主人も細君も更に遣つて來ない。家財道具、蒲團夜着まで一切整つて藏つてあるのだが、これを遠い親類つゞきの土手下の料理店に監督を頼んだまゝ、幾年か過ぎた。秋、水の出る度に、床の上まで浸るのを始末するのが厄介だと女主人は絶えず滴して居るが、しかもお客の望みて、一月二月と貸して遣つたり、春先時候の好い節に、鮎子狩の大連の宴會を此樓上に開いたことなどもあつた。平生は家の男の子かお源が行つて留守番をして遣ることになつて居る。お源は今寒い河風を避けて、其二階屋の南向きの庭のところに來た。庭には萩や山吹の枯枝が寒さうに立つて居て、厠の傍に糸檜と珊瑚樹とが青く繁つて居る。一隅には水仙が暖い日を受けて、早くも黄ろい花の芽を出して居た。

お源は戸を一枚繰つて、縁側に腰を懸けた。子供が眼を覺して泣出したので、一しきり子守唄を唄つたが、もう眼を大きく明いて了つた。子供を賺しながらも、お源の胸には種々のことが往來した。其時

からの二人の關係、此の二階屋の下の六疊を媾曳の室としての快樂、二分心の暗い洋燈、汚い汗と油とに塗れた蒲團のにほひ――ぽかぽかと暖かい冬の日に催されて、お源は今男戀ひしい情に燃えた。

少時經つた。

ふと見ると、前なる楊樹のそよぎ、岸の芦荻のうら枯の間から、船の舳先が一尺ほど顯はれて、水馴竿の先から水球が日に光るのがちらちらと見えた。お源は歡喜の聲を擧げた。船には戀しい若い船頭!

其夜、土手下の料理店は殊に賑かであつた。三味線の音が彼方此方に起つて、霄の內から喧しいドンチャン騷ぎ、臺所の忙しさは非常なもので、鉤に吊した仙臺鮪も大方皆無になつて了つた。銅壺の德利は羽翼が生えて飛ぶやうで、座敷では三味線と鼓とが自暴に鳴つた。てお源も遲くまでいろ〳〵と手傳つた。お貞の情夫が一組、お鐵の情夫が一組、それに足利の機場の旦那で、抱藝妓に思召があるといふのが金びらを切つての大酒宴、これが十時になつても中々止みさうにも無い。女主人の旦那は九時頃から帳場に來て、酒を飮みながら、にや〳〵といやに艶めかしい話をして居た。女主人は衣服を着更へて髮を美しく結つて、夜目にもそれと解るほど白粉をつけて、何うしても卅五とは思へぬ若さ!十時が鳴ると、奥の騷ぎに頓着なく、跡始末を料理番の女中に賴んで、二階の表座敷にトン〳〵と登つて行つて了つた。

十一時になると、流石に四邊がしんとした。醉へるものは醉ひ、欲するものは其欲するものを得て滿

足した。料理場では猶一時間ほど混雜して居たが、これもやがて靜かになつた。此時表口の戸をソッと明けて、そッと閉めて、其まゝ街道に出た黒い姿があつたが、二三歩家と離れると、すぐ驅け出して、道も無い土手を一目散に上つた。闇を透して見ると、それは子守のお源で、其姿は土手からすぐ向ふに下りて、河端の二階の空屋に入つて了つた。誰もこれを知るものはなかつた。

田舍の街道を凩が唯吹暴れた。

# 歪力

小栗風葉

## 一

佐川と吉田とは同じ學校を出て、同じ文學て身を立てる目的である。吉田は在校當時から學長の片山先生に愛されて、先生の門下生のやうな關係になつて居た。而して書生とも客とも付かずに先生の家の世話になつて居る。學校を出たからとて、外の連中のやうに明日から直ぐ食ふ道を搜さねば成らぬと云ふ忙ない境遇ても無い。小説が目的なら、まあ心靜に處女作ても書いて、少しは名前ても賣れてから自活したら可からうと先生の方でも言つてくれる、吉田も其意りて居る。

所が、佐川の方は那樣暢氣な體ては無い、學校の方も半分苦學生のやうな事をして漸と卒業したのてあるから、學校を出ると盛んに書き出した。小説が目的てはあるが、評論も書く、新聞の雜報記者も兼ねる、其精力だけも恐しいものだ。尤も、新進の事てあるから、小説ばかり書いて居ては下宿料にも足らぬ、食ふ爲めには厭な事も我慢して遣らねばならぬ。少々の不見識や無責任は大目に見て貰ふのだ、と佐川自身吉田にも言つて居る。

吉田も其れは同情して居る。けれど、外の事は左に右く、佐川が其の目的の小説までも、食ふ爲めの犧牲にするのは慊らなく思つた。是までの佐川は、今の作家の不眞面目と云ふ事を常に卑んで居た。作

物が何れも〳〵粗雜で薄片だと言つて罵つて居た。所が佐川自身の今日の態度なり作物なりが、何れだけ其等と違ふだらう。新しいもの好、珍しいもの好の一部の批評家に、甘口なお世辭を言はれるのを可い事にして、書くも書く。月に三篇四篇、多い時は五篇以上も書く――尤も、短篇ではあるが――吉田は其れを苦々しく思つた。佐川も終に文壇の弊風に感染したらしい、自分だけは決して那はなるまい。自重して、設ひ三年と五年懸らうが、何でも文壇の風潮を一變さすやうな傑れた物を書かう。處女作の一篇で直ちに第一流の名聲を得る物で無ければ出すまい、と常に思つた。而うして何にも書かずに毎日唯冥想に耽つて居た。吉田には「自滅」と題する長篇物の得意な趣向がある。片山先生の玄關脇の薄暗い三疊の部屋で、毎も机に頰杖突きながら其趣向を考へてのみ日を暮らした。

佐川から手紙が來た。今度新聞社を舍して、斷然最う小說專門で立つて行く覺悟だと書いてある。吉田はフヽンと獨りで冷笑した。それから、下宿は騷しくて書くのに邪魔だから、今度表記の所へ家を持つたと書いてある。吉田は些つと厭な顏をして自分の薄暗い三疊の部屋を見廻した。それから、最後に君に報ずる、僕は戀に落ちた！とエツキスクラメーションを附きて書いてある。吉田は呆れて、且つ噴出した。

一體佐川と云ふ男は、東北出身の剛健を以て誇つて居る男で、吉田よりは三歲上の三十である。體の大きな男で、髮毛が薄くて髭ばかり濃い、身扮に由つては三十五六、四十と云つても人は疑はぬ。自分でも言つて居る、僕には青春と云ふものが無い、少年から直ぐ中年になつて了つた、と然う言つて居る。

それが今更[illegible]！吉田は好奇心に驅かれて直ぐ家を出た。

家を出る時に、片山先生の令嬢の今年十六になる君江と云ふ子が、お下げに赤いリボン、海老茶の袴を穿いて女學校から歸つて來たのに會つた。門で擦違ふ時に、君江さんは大袈裟な聲を出して、

「あら、肩の所が眞白よ！」と然う言つて、背後からバタ〳〵拂いてくれた。「ほら、這麼に……壁土だわ。貴方壁に凭懸つたんでせう。」

「えゝ。何うも……」と色の惡い吉田の顔は赤くなつた。

拂いて置いて、君江さんは其儘臺所口の方へ驅けて行つた。畜犬のポチを對手にキヤツキアと最う戯けて居る。

吉田は其背後影を見送りながら、自分で密と自分の肩の所へ手を遣つて見た。而して獨りで又赤くなつた。

二

佐川の新宅は、借家ではあるが一軒立て、普請も然ほど古くは無い。玄關と茶間と座敷の三間あつて、些いとした庭もあるし、小ヂンマリした好い住居だ。吉田は玄關の格子を入つた時に、土間の三和土に牡丹色の鼻緒の立つた若い女の穿物が目に付いた。耳の遠い雇婆さんが取次に出て、座敷へ通されたが、座敷には穿物の主らしい者も居らなかつた。八疊の片偶に机や本棚を据ゑて、机の上の派出な色取りの肱突が目に立つた。佐川は机の前の座布團に大きな足座を掻いて、傍にヰスキーの罎と燒海苔と

林檎とが置いてある。少し隔つた所に、白の絹ハンケチを四つに疊んで、其上へ皮の剝懸けの林檎とペンナイフとが載せてあつた。吉田は見ぬ振をして座に就いた。「丁度好い所へ來た。さあ、一つまあ……」と言ひながら、佐川は飲半しのコップを干して吉田に献した。

佐川の髭だらけの顔は、仄り微薫を帶んで居る。

吉田はコップを受けて、「僕には到底も混麼生では……水を割つてくれ給へ」

「然う〳〵、君は那の、ピッパーメントリキュー、那れが好だつたね。西洋の私窩子が飲むやうな那合物を飲んでるから小説が書けんのだ。水を割るなんて那樣意氣地の無い事を言ふなよ、此の芳烈な所を味ひ給へ。」と佐川は笑つた。

吉田は濃い太い眉を蹙めて、迷惑さうにコップを嘗めながら、ジロ〳〵部屋の内を見廻した。

「好い家だね。」

「何うだい羨しいかい。是で最う細君さへ出來りや不足は無い。」と大きな聲で言つて、又笑つた。

毎も元氣の好い佐川だが、今日は格別上機嫌である。吉田は何だか妬しいやうな氣がして、先方が上機嫌であるだけ其れだけ自分の方は惡固く片付けて居る。

「君は新聞社を舍すと云ふのは本當の事かね。」

「本當とも、手紙に書いて遣つた通りさ。」

「ぢや、一層又創作が劇しくなる譯だね。」

吉田の癖で、皮肉や惡口を言ふ時でも聲や調子を變へない、少し俯き加減になつて緩くりと言ふ。佐川はグッと癪に障つたらしい。

「亂作するとも！僕は君のやうに頭でばかり作つて滿足してる譯には行かんからな、書いて賣つて飯を食はなきや成らん。おい吉田、一つの書かない傑作よりは、書いた十の亂作の方が價値が多いぜ。」

「窮り零と十との差さ。其れは價値ぢや無い、數さ。」と吉田は落付いて答へる。

「數でも可い！」と益々躍起となる、「數でも何でも、ナッシングよりは意義がある。」

「ナッシングにも意義は有るさ、書くのも事業なら、考へるのも事業だからね。僕のナッシングは唯物質上のナッシングだ。」

「ぢや、可い加減に精神上のサムシングでも見せ給へな！」と突放すやうに言つて、其限口を噤む。

此上言爭つたら自分は激するばかりだ。毎議論しても然うだが這方が激すれば激するほど吉田は落付いて、而して捉へ所の無い抽象的の理窟を然も最もらしく並べる。捉へ所が無いから這方は憤れる、憤れて惱れば惱つた方が如何にも負らしいから、佐川も可い加減に口を噤んだのだ。

「精神上のサムシング。」佐川は自分の言つた其辭で思出して、「何うしたい、御自慢の「自滅」は？」と聞く。

「何うも爲ない。」

「未だ那のまゝか。可い加減に書いたら何うだ、皆期待してるよ。」

「君が可い加減な事を言つて吹聽するからさ。」と言つて吉田は何故か稍やりとして、「君の吹聽を通し期待してるんだから、僕自身の「自滅」とは無關係かも知れない。」

「うん、そりや僕は吹聽もしたさ。」と佐川は濃い頬髭を逆手に撫上けて、「けれど、此の前の文學會て君の「自滅」の梗概と、それから君の人物や主張なぞ委しく談したら、皆非常に感心して居たよ。何うだい、今度一度僕等の會へ君も出て見ないか。」

「舍さう。僕は未だ然ういふ會へ出るべき資格は無いからね、文士としては君の所謂ナッシングだから。」

「那樣事は無い、匿名ても飜案ても書けば書いたのだ。那れを資格の條件にするさ。」と擽つたいやうな顏をする。

吉田は厭な顏をして、卷煙草を吹かした。

佐川も氣毒に思つたか、今度は眞面目になつて、

「笑談で無しに、一度まあ出て見給へ。持てるよ、皆が天才を以て迎へるから。」

吉田が厭な顏をしたのは恁ういふ理由てある。其れは或る廣告雜誌に頼まれて、商品を材料に使つて匿名の小說を書いた。それから、最う一つ外國の小說を飜案して、其れに自分の名を署して、佐川の入つて居た新聞の日曜附錄に掲載した。佐川は其の二つを譚つたのてあつた。

此節は然うても無いが、一時佐川は盛んに吉田の事を吹聽したものだ。文學會の連中が吉田の創作を期待して居るとか、吉田を迎へるに天才を以てするとか言ふのは、決して出任せのお世辭ては無い、事

實である。と共に、佐川の吹聽を通して期待して居るのだと言つた、吉田の其餘も事實である。佐川が二言目には吉田を天才だ〳〵と褒めるし、誰にも彼にも然う言つて聞かせる所から、天才の吉田といふ名が今では作家批評家の仲間に知れ渡つて居る。滿足な小品一つ書かぬのに、新進作家として或る文學雜誌へ寫眞まで出された。

佐川が自分の事を天才だ〳〵と云つて吹聽して廻るのを、吉田は始め不快に思つた。何を見ても罵倒する、負嫌ひな、競爭心の強い那の男が、然かも競爭者の自分を天才と許す筈が無い。那麽事を吹聽し廻つて、間接に自分を愚弄するのだと思つた。が、惡口を言つて廻はれるよりは有繋に心持が可い。佐川の吹聽のお蔭て、何一つ書かぬ自分が、同じグループの文學者仲間からは、相應の期待と尊敬とを以て迎へられる。有繋に惡い心持は爲ない。けれど、それほど努めて自分の事を吹聽してくれる佐川の本心は今だに分らない。佐川は蔭へ廻つてこそ大袈裟に褒めるが、會つて差向ひになつては決して褒めない。怠け者だとか、意氣地無しだとか、隨分齒に衣着せぬ事を言つて罵倒する。けれど、其所へ誰か第三者が交ると、直ぐ態度を變へて吉田を持揚げる。那樣時には吉田は面食つて返事に迷々する。殊に其第三者が同じ文學者仲間とか批評家だとかなると、一層甚しい。

（四）先達ても還麽例があつた。佐川が例の一夜漬の短篇を或る文學雜誌へ出した。隨分亂暴な物で、批評家は口を揃へて惡口した。然かも其れを掲載した雜誌でまで思切つた惡評をしたので、佐川は躍起となつて、其れほど迷惑な物を何故載せたと云つて編輯者へ詰問狀を送つた。編輯者は其批評に就いては無

關係であつたが、左に右く自分から依頼して書いて貰つて、其れを自分の雜誌で惡口したのだから、濟まぬと思つて早速詫びに來た。其時丁度吉田も來合せて居たので。

「いや、故々其爲めに來て下すつては濟みませんてした。無論那れは僕自身でも拙かつたと恥入つてるのてすから、まあ其話は是限に爲ませうよ。」編輯者の詫言を遮つて佐川は言つた。「だが、僕のも拙いが、今月出た物に陸なものは有りませんてしたな。殊に先輩だとか大家だとか威張つてる連中の物なんか何うてす、一つだつて見られた物は無いぢや有りませんか。それから、恐しい評判だつたが、此前の君の所の雜誌へ出た「戀の女」、那れだつて僕は些とも感服しない。そりや新しい作家の割に形式は些つと調つてる、けれど、内容が如何にも貧弱な充らんものだ。唯是までの小説とは幾らか毛色が變つてると云ふので、珍しいもの好の世間が彼是言つて騒ぐんだけれど……僕は寧ろ那れと一緒に出た「露時雨」の方を取る！」

「妙てすな、「露時雨」をお褒めになるのは。」と編輯者は眞面目に取つて、「お褒めになつたのは貴方ばかりて。那時は實は原稿が足りなかつたものてすから、埋合せに那麼物を入れたのてすが、何所へ伺つても那の攻撃ばかりて……」

「文壇の雜誌共に何が分るもんて。そりや完全な作とは言へまいが、那の女主人公の心理的描寫なんぞ、何うしても女て無けりや那は書けない。」

「所が貴方、青年雜誌か何かへ、一度那りあ出た事が有ると云ふ讀者からの注意で閉口して居ますてす

より第一、那の女名前も嘘らしいです。」

「嘘にしても、餘程何うも女性的の頭を持つた者が書いたに違無い。」と力任せに腭髭を撫上げて「何と云ふ男です。」

「何と云ひますか、何分投書ですから……」

「投書ですか。」と言つて、佐川はグッと詰つたが、傍に居た吉田の方を顧みて「何うだい、那いふ隱れたる天才が有るんだからな、油斷は出來んねえ。」と言つて、直ぐ又編輯者に「隱れたる天才と云や——君に御紹介します。是は僕の親友で吉田と云ふんです。」

「然やうですか。手前は……」と編輯者は吉田に初對面の挨拶をしてから「矢張貴方も小說の方を？」

「然うです。」と佐川が傍から代つて答へた。「僕と違つて名を惜しんでるから、未だ何にも世の中には出さんが、其中何れ文壇の雜輩共がアッと云つて驚くやうな物が出るでせう。僕なんか金が欲しいから無暗に書くけれど、這麼團栗の脊比べ見たやうな今の文壇の雜輩共と一緒に、巧いの拙いのと云はれるのは寧ろ心外さ。ねえ吉田、早く君も出ろよ、君が出りや僕も張合があつて大いに奮起する。」

「何かそれでは、只今お書きになつてお居でゝすか。」と編輯者は尊敬の目を向けて吉田に訊ねる。

「えゝ、少し長篇物を……」と吉田は目映しさうな目をする。

「自滅」と云つて、餘程の長篇だから。」と佐川が又引取つて、

「出たら讀んで御覽なさい、吉田君の前でお世辭を言ふやうだが「戀の女」なんか那麼隔し物とは違つ

て、慥に天才的のオリヂナリチーに富んだ物だから。僕等の文學會の連中なんか、皆刮目して待つて居る。ねえ吉田、何位最う出來てるの？最うそれでも半分の餘は出來たらう。」

「うむ……まあ那樣ものだ。」と吉田も答へぬ譯には行かなかつた。

恁う云つた風で、竟り負惜しみの強い佐川は、自分の亂作を攻撃される度びに、自分で其れを辯護するのも卑怯らしい所から、敢て辯護は爲ない代りに、他の作家なり作品なりを片端から罵倒する。罵倒した後て、未だ何一つ書かない無名の吉田を然も〳〵天才らしく吹聽する。

「僕なんか亂作ばかりして居て駄目だけれど、僕の友人の吉田、那の男は今に素晴しい物を書くから見給へ。」と毎も決つて然う言ふ。

然う言ふ辭の裏には、一人の吉田を措いては、今の文壇の先輩と後進と總てを通じて、佐川の恐るゝ者は他に無いと云ふ意味が含まれて居るやうにも取れる。何に感心して自分を那樣に天才だと佐川が言ふのか、吉田自身にも分らぬ。或ひは自分の談した「自滅」の趣向を蔭でも激賞して居るやうだから、其れに感心して自分を天才視するやうになつたかとも思はれる。けれど、佐川の口から吹聽されて居る「自滅」の趣向は、大分自分の談したとは違つて了つて居る。

吉田も始めは其程に思はなかつた「自滅」の趣向が、恁うなると自分でも大事になつて來る。大事になつて、仍更輕々しくは筆が付けられない。而して佐川の顏を見る度び、

「君、那の「自滅」の趣向を人に談してくれるのも可いけれど、前に書かれて了ふと困るがね、據めてくれ

を警戒して置いてくれ給へな。」と言つたものだが、近頃では又、「君にも頼んで置くが、那の「自滅」と云ふ題だけは使はずに置いてくれ給へな。」と題名まで警戒するやうになつた。

「吉田、僕は今度君の「自滅」と反對に、「反抗」と云ふのを書くよ。」と佐川は手酌でウヰスキーを呷りながら言つた。

「長い物かね。」

「うん、矢張君の「自滅」ぐらゐになるだらう。」

「甚麽趣向だね。」と吉田は最う氣遣しさうな目をする。

其れを見て取つた佐川は、「大丈夫、君の趣向なんか盗みや爲ないから安心し給へ。一口に言ふと、究り僕のやうな恁ういふ自尊心の強い、矯飾の人間の戀を書くのさ。」

「最う書出したの？」

「五十枚ばかり書いた。」と言つて、机の抽出を開けて見せる。

吉田は妬しさうに見遣つて「君の精力には實に驚く！」

「豪いだらう。」

「さあ……其精力だけは豪いと言つても可いね。」

「何うだい、一方には是で戀をしながら遣つてる仕事だよ。」と言つて、大聲に笑つて、「手紙に書いて遣つたが讀んだかい？」

「うむ。」と頷いた吉田は、邊を見廻して和やりとした。

「君に紹介しやうか。」

吉田は又和やりとした。

佐川が薄笑をしながら、頤から頬へ眞黒に生へた濃い髭を二三度ザラ〳〵と手暴く擦り廻して、「照子さん！照子さん！」と大きな聲で呼ぶ。「僕の親友だから管ひません、出てお出でなさい、紹介するから。」

返事が無い、二三度追懸けて呼んで見たが矢張返事が無い。佐川は行成立つて行つて、隔ての紙門を開けると、茶間でクス〳〵と忍笑ひをする女の聲が聞える。吉田は獨りゴクリと喉を鳴らした。

佐川はムヅと女の手首を摑んで、無理に座敷へ引張つて來て坐らせた。女は眞赤になつて吉田に挨拶する。照子と云ふ名は前から佐川に聞いて吉田も知つて居る。何處か地方の女學校の出身で、一時佐川が教へに出た或る語學の塾の生徒で、其塾での才媛ださうだ。年は二十二三、縹致も十人並勝れて居る。言ふ事も爲す事も瞭々して、何樣才氣の溢れた利口さうな娘だ。

「近付きの印に、さあ照子さん、一杯コップを空けて吉田に獻して下さい。」

「あら、私は那樣‥‥至つて不調法ですから、では貴方に。」と照子は佐川に獻されたコップを其儘吉田に廻さうとする。

「いや、僕も駄目なんです。疾から最う飲過ぎて、目がチラクラしますから、」

「ぢや、僕が引受けやう、面倒臭い！」と佐川は行成照子の手からコップを取つて、「其代り酌をして下さい。」

「最う大分喫つて被居るぢや有りませんか。」

「酔つたら貴方に介抱させるのさね。え吉田。」

「吉田は唯苦笑をして居た。而して間も無く暇を告げた。一緒に飯でも食はうと言つて佐川も留めれば、まあお宜しいでせうと照子も辭を添へたが、吉田は强ひて辭して外へ出た。今まで努めて何氣無く裝つて居たが、外へ出ると急に何とも言へぬ厭な顏をして、而して忌々しさうに振返つて舌打をした。

「處女の前で酒を飮むさへ苦々しいに、酌をさして謳ふ——何と云ふ不法な男だらう！女も女だ、那の態見たやうな佐川が何所が好くて、那麼傍若無人な眞似されて喜んでるんだらう。」

「那れが究り那の男の力だ！」と又考へた。「那の男は自分の周圍の物一切、何も彼も力で以て壓服して了ふ！現に那の戀も矢張壓服して勝利を得てるのだ。」

　佐川が戀人に對する勝ち誇つた態度に比べて、吉田は自分の戀——片山先生の令孃に對する戀——の餘りに賴無さを思つた。

　それから、愈々佐川も長篇物に筆を付けた、恐らく今度は全力を注ぐだらう。自分は後れて未だに名を出さぬけれど、佐川が充らぬ短篇物の亂作に追はれて居る中に、例の「自滅」の一篇を完成させて、而して一擧に勝利を得る意りであつた。所が、其れも今では氣遣しくなつて來た。佐川は既に其長篇を五十枚からも書いて居る、那の精力で續けたらば脫稿も間はあるまい。自分の「自滅」はと云ふと未だ一枚も筆が付けて無い、何時脫稿するか其れも當が付かぬ。吉田は到底佐川の精力の前には爭ふ事が出來ないやうに自分で感じた。

「恁うして段々俺は那の男に壓服されて行きさうだ！當分最う佐川には近付くまい。」と吉田は道々思つた。

（完）

# 鼻

與謝野寛

圓に矮き
鼻なりき。
あどけなき。

さてしもあらじ、
鼻あるじ
これを怨じ、

かの馬にだも
象にだも
若かじやも。

かくは歎かひ、
たかぶらひ、
さて、祝ひ、

---

高まれ、高まれ、
反りかへれ、
鼻よ、やれ、

おのれは一の
表象よの。
天骨の。

きと抓み出て、
間なく撫て、
湯もて茹て、

苦患の繋ぎ
刹那過ぎ、
あら、不思議、

撫てける程に、
ふとやかに、

はた、紅に、
鼻はのつそり
つんてたり
尺ばかり。

粒だつ膚は
柚子、さては
海豚の皮。

中に、すぶすぶ
洞並ぶ、
風遊ぶ。

目隠しによし、
喇叭とし
吹くによし。

額にのけぞる、
肩に乘る、
自在なる。

主人うれしく、
我猛く
告れありく。

象に似る人、
二なき人、
半獸と。

## 慵き鳥

北原白秋

明けぬれどものうし。濕き土の香を
軟風ゆたにただ懈く搖り吹くなべに、
あかがねの淫の夢ゆのろのろと

寝恍れて醒むるさざめ言、起つも者うし。
眺むれどものうし、まぼろしのかげも、
大海原の空燃えて今日もゆるゆる
縦にのみ湧くなる雲の火のはしら
重げに色もかはらねば見るもものうし
行きぬれどものうし、波のたくりも、
懈たき砂もわが惱ものうければぞ、
信天翁もそろもそろの吐息して
終日うたふ挽歌きくもものうし。
[illegible]べれどものうし、圃に屯して
正覺坊の痴心地、日を嗅きながら
女らとなすこともなきたはれごと、
かくて抛けど飽きぬれば吸ふも者うし。
貪れどものうし、椰子の實の酒も

あか裸なる身の倦るさ、酌めども、あはれ、
懶怠の心の欲のものうげさ。
遠雷のとどろきも晝はものうし。
暮れぬれどものうし、甘き髮の香も、
詮なし、あるは木を擦りて火ともすわざも、
空腹げの心は暗きあなぐらに
青大將のうからなし、在れどものうし。
ああなべてものうし、夜はくらやみの
濁れる空に、熟みつはり落つる實のごと
流星血を引き消ゆるなやましさ。
一人ならねど、とろにとろ、寢れどものうし。

# 和歌

咏舟選

〇　大津照水

静かなる心の湖に思出の波の輪たちぬ君おもふ時

心の木かつてゐりたる君が名の年ふるまゝにおぼろとなりぬ

丘の上の花の千草に琴ひきて秋を讃ずるこほろぎがとも

丘の上の小草よなれも吾が如き憂かもてるしほれても見ゆ

我小さき心の國は君見ると見ざるによりてあけくれすなり

よろこびの潮ぞみちくなつかしき君と逢ふ日の心の海は

うつくしき天地にある心地してうたふる日うれし詩に酔ゑるわれ

梢ふく風にもさめず落葉着て永劫ねむる森の石かな

〇　小川眞清

はるばると天の通ひ路かざりつつ雪の花ふり臘月來る

冬木立中に藁屋の四五ありて炊煙のぼり月いでにけり

菊畑や發句(はく)につどへる四五人の酔ゑるが上にさむう月しぬ

歸りみればうれし昔の銀杏樹も枯れずしてあら人の心も

ゆく秋やほこりし色のことごとを海に流すとはふも雨降る

よろこびのうま酒かもし君とわが胸の甕(もたひ)に盛らむ日を待つ

稚子おひて來まさむ人をおもひてはわれに悲しき秋まつりの日

〇　金城順

百千々の城にもかへじ君にえし胸の筥なるらのしら玉

執着といふ鬼君とわが中に糸引きはへぬいかに斷たむや

あゝかなし君は他所見るわが紅き心の色は瞳にうつらずや

幼な日の扉なさおもひなつかしき人を思ひてわが心生く

胸の戸はかたくとざせり中にある眞珠欲りせば火の鍵をとれ

胸のうみ一波おこらず漫々と月もやどしぬ星もやどしぬ

心の海君をのせんと夜も晝も艎艣として浪立ち狂ふ

光ある年立つ今日の八街は雪しろ銀の道つくりけり

君は見る甕もつ少女われは見る甕よりいづるうつくしき酒

あかく\と月こそのぼれ風荒み穂薄狂ふ大野のはてに

幾萬の白鳥天の使して地に舞ひくだる吹雪する宵

○　　　　進　半　醉

初日かげはやしも山も野も川もみなうつくしき瞳ひらきぬ

---

夕燒の雲みなうごく姫千人にしき飾りて舞たしげにも

幸うすき我を怨ぜぬ人ありと時雨の雲のなか月見る

村老等念佛となふる聲かともはやしよりする木枯の音

函館やしろき布して寢し樣の雪のちまたに晝の月見る

はりつめし氷の中もいさゝかのねつありと聞き我よみがへる

沈默の二人がなかにともしびは涙あふるゝ美しひとのさま

○　　　　西　井　金　羽

うるはしきひとみの底に死を誓ふ人の影ありなつかしきかな

われと云ふ蠟の身ひとつ君と云ふ心もち夜毎もえさかるかな

わが胸のその琊玕を切り得るは工心の君とこそおもへ

秋の雨きみを思へとこほろぎは茅野の末に泣きこそぬるれ

こほろぎはすだく磯邊の破れ船にわれ泣き伏して君おもふ時

きみと我が間に根ざす戀の木の實を熟むを待ちうつらに眠る

○　梶原白花

うら悲し吾が前をゆく時の子は皆黝色の旗かづきけり

木犀の花の下なる通路や月ほのめけば妹の領巾

舟の路青きが裡に一と筋の素絹を曳きて海あくるかな

路もせに花咲くが故おん胸へ迷ひて入りぬこゝろの車

國原はみな落葉して故郷のあをき海みゆ岡ごえのみち

○　橋田濤人

君みれば死なん日おもひわたつみに塵とたゞよふ身を喜びぬ

眼とづれば我に悲しき鐵の扉の鍵もつ人の面影のみゆ

女山羊なく櫟の柵の丘の上に秋を驕らふ白き野の花

紫に白に撓れる野のおもて草笛渡り夕となりぬ

柔肌に血汐張るおん君は似たり灯をよぶ白蠟のさま

○　佐藤茂

壓ふべく力あらざる大灘の波のごとくに胸どよむかな

喜びの瞳は空仰ぐ物の慾去りし心に神思ふとき

枝はみな神にあこがれ根は地の君こそ戀ふれ心と云ふ木

をのゝきぬ大日輪のまへに立つ君とわれとの黑き影見て

○　小林狂霞

秋風は穗向の家の灯を戀ひて萱野を遠く來るらしき哉

誘惑の忍ぬび足してよるさまと秋雨の夜をおそれつゝゐぬ

われとわが胸の牢屋にとらへなむこの身うとまう夕あきの風

○　中野紫葉

あゝ魂よふたゝびめぐれ頬は消う胸の小草に氷雨やむ日は

天（あめ）も消え地も去れひとりたゞひとり君と住はん
否君も死ね
あひあはんかゝる夜かゝる空なれと三步の道を
君想ふかな

○　村田愛美

あゝさはれ思ふにつらき二人なりせめて小草よ
呪ひに萌えよ
春風は黑髮ながき弱肩の人より吹きぬ低き歌と
て
鬚ながき蟋蟀秋を餌にやせて夕うす月夜ひくう
歌ひぬ

○　加藤忠治

ひともとの榛の木寒う葉ふるひて門に立つなる
ふるさとの家
秋逝くや怨女ぶりなる機織の夜すがら來鳴く破
れ琴のうへ

○　小川薄村

われ君に强てみ手よりはなれけり一日靜けき心
みばやと
面かざる人にも似たり白き花赤き夕日に頰をそ
めて居ぬ

---

○　足立愁人

淀川や薄紫の朝霧のなかに浮きけり君が舟の帆
小春凪大龜浮び浦島の歸るとやうに海見てあり
ぬ

○　門脇橘郎

ものなべて甦る日の前にしてなぞもやかくは淋
しき除夜ぞ
母君が五年前とおなじさに砧うちます故鄕を見
ぬ

○　志氣風美

わたつみの沖の白雲さゞれ雲晴間をぬうて黑鳥
とぶも
末黑（すぐろ）なる大海原の白穗波消えゆくがごと失せむ
日おもふ

○　安達白浪子

朝ぎりや遠野にうごくものゝ影あゝなりはひの
寒くもあるかな

○　中日向欲

クリスマス贈物美（よ）き宵の間（ま）に笑顏して寢る稚き
妹よ

○　木津螢雪

風白き夜半は切なるわがおもひ虫となるらし家をめぐり啼く

○　　鴨川千鳥

日頃より君も憂れたし世も憂れたし妻と云ふ名も酒に與へぬ

○　　本間鐵伯

三千の星怪訝なる瞳して罪に泣くなる我を瞰しかな

○　　謝花海鳥

追懷はなみとより來てくだけゝりつたの香さむき夕月の城

○　　菅原喜代藏

あざやかに萬象うつる美き目して此の世やおくるうつくし人よ




# 初空

初空や洛陽城の凧の數　へき生
初空や臺に登れば東風動く　同
初空に淺間ヶ嶽の煙かな　同
初空の霞み心や不二遠し　同
初空や馬上野に出つ朝心　同
初空を飛ぶ江南の鴉かな　同
初空や人東皐に二三人　同
初空や東海の水平らかに　同
初空や天主の鯱に東風光る　同
初空や野に出て町の煙見る　同
初空の凧三つ四つや朝日和　同
山見れば山初空に聳えけり　同
初空や鏡の如き琵琶の水　同

初空や鳶を仰いで丘の人　同
朝朗不盡の初空仰ぎけり　同
初空や猶ほ海々と墨一つ　同
初空に連る水の光かな　同
初空に起きよの喇叭營所かな　酒骨
初空や堅田の沖のかゝり船　乃公
初空や人住まはざる沖の島　螢雪
初空や大戸を開くる寺男　流石
初空はひんがし富士の根に明けぬ　呦々子
初空や神の社の人稀に　松濤
初御空船千艘の港かな　紫唊
初空や紫の雲紅き雲　魯斧
初空にたなびく戸々の煙かな　縦横
初空や浮島遠く海青し　静浪
初空の風や戸毎の松に立つ　殘月
茜さす初の空窓開きけり　花瓢
初空になびく煙や五戸の里　南若
初空や火の見櫓に輪のかざり　犀星
初空や亂峰すでに雲はるゝ　十湖
初空や江の南の松ばやし　華星
初空に響く太鼓や島社　散木庵

---

初空に赤き風船飛ばしけり　夜色
初空を鐘樓に高く仰ぎけり　刀川
初空や潮を湛へて海晴るゝ　牛叟
初空や羽衣松の風をよぶ　柳子
初空の厨の窓に明けにけり　朱郎
初空や鳩の舞ひ飛ぶ藏の屋根　京杜
初空や船の煙の雲に入る　渭南
村一の松に初空晴れにけり　青奴
そゝり立つ杉の梢や初御空　方外
初空や鷄のぼり啼く塀の上　骨童
初空に五山の鐘の冴えにけり　夜光
初空や大河を前に一草廬　董哉
初空の明け行く丘の疎林かな　鹿村
初空や鹽田廣く海見ゆる　同
初空の句にて始まる日記かな　羽川
初空や雪にならんず雲動く　同
初空や西へ東へ飛ぶ鳥　奇溪
初空や大紙鳶上る町はづれ　同
初空や鷄犬早き村の丘　草童
初空に高鳴る屋根の時計哉　同
初空や詣でゝ戻る宮の道　初聲

初空を映して蒼し五十鈴川　同
初空や仰ぎつくゞる大鳥居　青城
初空や千木に居並ぶ白き鳩　同
初空や曉早き山の家　四緑
初空や初日や湖の竹生島　同
初空や浪静まりて濱ハ葦　啞鳥郎
初空や南天赤き庵の庭　同
初空や雪尺に町静かなり　同
初空や海向く家の磯並木　沐雨
初空の大寺に古りし銀杏哉　同
初空や雪掻く門に峰はるゝ　同
初空の社頭に響く拍手かな　濛雨生
初空の星仰ぎけり煤障子　同
初空や衛士の焚く火のまだ燃えて　同
長白山西に伸びたり初御空　紫圖江
初空を仰ぐ小窓の國旗かな　同
苫はねて初空に船皆祝ふ　同
寒梅の香に初空の晴るゝなり　小魚
高欄や初空仰ぐ楊氏の女　同
初空や門田に下りる鷺一羽　同
待つとしもなく初空の明けにけり　同

---

初空や島影珊瑚樹の如し　釜村
初空の雲紫や阿房宮　同
初空の雪の山々静かさよ　同
初空や風見鴉の知らぬ顔　同
初空やはや起出てゝ清淨身　活林
初空や峽中の天明け初むる　同
初空や明滅として七つ星　同
初空やねそびれて母起出る　同
初空や明星消えて湖の風　李王
初空や里の小橋の新たなり　同
初空や牧場の中の流れ川　同
初空や牧守る家の群鴉　同
初空の山に對する草廬哉　同
君在ます南拜すや初御空　石鏑
初空や村の三社の三つの岡　同
初空に無事を倦怠や火見番　同
船本國に入る頃明けぬ初御空　同
七浦の眞砂白けれ初御空　同
須臾にして日に染む波や今朝の空　總子
初空や日本晴ぢやと船の人　同
初空や海まだ暗き須磨の家　同

鬼が島もかすみにけりな今年空　同
今朝の空野寺山寺鐘が鳴る　同
初鶏にはるゝ戸嬉し今朝の空　同
庵を出て見上ぐる峯や今朝の空　同
煙立つ磯の小家や今朝の空　同
初空の北や筑波の二柱　鬼洗
初空や伊豆七島の眼もはるに　同
初空は寒し汐田の朝千鳥　同
初空に鶴放たんの思ひかな　同
初空や雪少しある笹の凹　同
初空や曳き上げ船の苫の霜　同
初空や甲斐が嶺をろし雪誘ふ　同
初空や島二つ波平らなり　同
初空の雲かしこしや九重の　同
初空や橙の黄に旭の映ゆる　同

募集課題

蜆　一月十五日締切
蜂巣　二月十五日締切

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事。

本號前號選句中

羅生門乾鮭提て通りけり　春洋

の句は日本及日本人に樹碗子の句として所載のものなる由、樹碗子と春洋氏と異名同人ならざる限り余の選句を抹殺す。上述の事實を報道せられたる岡山の濛雨生君には茲に御好意を感謝す。なほ濛雨生君に白す。御質問の句は、骨の方頭よりも適切と感じて貴句を捨てゝ彼の句を採りたる次第なり。

千葉の南泉君、丸龜の宵城君、富山の錦紗君、其他の諸君に白す。郵券封入の上にて御投句の訂正を御依賴相なるものに對しては可成は御依賴に應ずることとなし居れど、選者多忙の爲め往々御返稿の甚しく遲るゝことあるべきにつき其旨御承知置きを乞ふ。




# 反省記者に問ふ

（合して大方諸子に問ふ）

志賀重昂

歳の初めに當り、謹みて反省記者足下及び大方諸君子に質疑せんと欲す所は、

何故に我國に於て形而上の事を言說する者に下卑たる人物多く、形而下の學問を習ふ者に下卑たる言動する者の殊に少きやの一事なり。金錢の喜捨寄附を當り前の如く考へ、阿堵物を得るか然らざれば阿堵物を得る目的にあらずんば、說教もせず講義もせず、甚しきは揮毫料の引札さへ印刷せしものを豫め發する者は坊主若くは坊主出身者なり。武士道々々と呼號する聲の下より收賄を以て下獄したる者は、日本に於ける武士道講釋の大オーソリテーたりし人なり、師の婦を姦して廣座に武士道を語る浪華節語りの出づるもの必ずしも咎むべからず。所謂教科書事件にて最多く收賄者を出しゝは、平生師道を最も多く講義する某學校にあらずや、予は這般の實例を一々列擧せんとするも、目出度歳の初めなれば、語と筆とを愼み、能ふ丈ケ露骨の措辭を避けん爲め、之れを此所に止むべしと雖も、要するに形而上の事を言說する者に嘔吐を催ほすが如き人物の多々存在するは全くの事實なり。

之れに反し、物理學、數學、化學、星學、動物學、植物學など形而下の學問を習ふ者は、些の衒氣なく些の矯飾なく、磊々落々、淡白無色、胸中は光風霽月の如くして、道德先生を氣取らず、「自己」を有りの儘に打開き、我が欲する所に言動し、所謂收賄沙汰とか、金錢に關する批評など此間に發せざるは、彼の口を開

けば輙ち宗教とか倫理とかが説く道德先生と天地雲泥の大差あるは抑も何の故ぞや。

予は千思萬考するも以上何の故たるを解釋する能はず、而かも事實は全くの事實なれば、歳の初めに當り、之れを諸君子に質さんとする者なり。

# 最近一年間の政治外交、社會

烏山

## 一　政治運動單純化の主張

去年の此頃。進歩黨のツラデコメヂイ。(進歩黨論)郡制問題。大同倶樂部の天才發揮。大浦派の闇中飛躍。朋從黨の狼狽。西、桂、兩系の大立廻り。演劇的政治運動。

上

◎試に一年前の此の月この頃を憶ひ見よ。

吾が同胞は、日本學童問題の圓滿なる解決を以て、自家の尊き天職と信ずと宣言したる高明遒勁なる大統領の教書に、少からざる感謝と嘆美とを拂ひつゝも、偉大なる渠の勢力人格は、克く斯問題の上を掩へる忌はしき暗黒雲を一掃するに足るものあるべく、此際寧ろ余問題を擧げて渠の鐵腕に一任し、拱手して其の成を仰ぐを上策となす可しと迄に、幾分偉人崇拜風の閑心事を以て、多大の信頼を繋ぎつゝ、暮れ行く年は靜かに最後の幕を卸して、軈てめでたき新春の曙光は、陽々として、めでたき國民の樂天觀を照したるにあらずや。

◎而も一月早々より、甚だ目出度からざりし者は、大隈伯と、伯が年來の參謀長犬養毅氏、並に渠を中心としたる一部の進歩黨員、所謂幹部派が身の上なりき。渠等は改革派と稱する謀反好きの一部黨友の爲に、機會主義。便宜主義、と呼ばれたる新黨是の犧牲となりて、四十年政界の初舞臺に、氣の毒なる滑稽的悲劇の受身役たらざるを得ざるの窮地に立ちたればなり。

◎一月十九日、大隈伯は悲壯なる一場の告別演舌に、少からざる感動を一部の舊黨員に與へたる後、伯が半生の政治的生命を托したる進歩黨總理を辭して、落暉靜かなる早稻田の閑栖に、多方面の趣味と、不拔の勢力、とを有する偉大なる一私人として歸れり、凱歌は改革派の驍將、鳩山、西村、加藤、等の口に擧げられ、幹部派は一時城を明け渡すの已むを得ざるに到りて、茶劇の一幕は幾分氣の毒なる感を看者に與へつゝも、案外無事平凡に演了せられたりき。

◎吾輩は玆に詳しく進歩黨の過去を說きて、渠等の歷史を弔ふ程の餘裕を有する者にあらずと雖も、捨てられたる進歩黨の古き黨是が、喪はれたる古き時代の代表者犬養毅君の風貌性格に照して、頗る興味あるコントラストたるを感ずるが故に、試に少しく之を說かんと欲す。

◎帝國議會の開會式に臨める者は、ぬばたまの闇より黑きシルクハットに燕尾服と云ふ黑裝束したる下院三百の群鷄叢中に、吾が身の一鶴を誇りげなる金光燦爛たる大禮服に、卓然として前文部大臣の威儀を裝ひ、寸分の隙なき風貌五體を稍々俛首形に步み來る淸癯痩面の一政客に目を欹つるなるべし。這は云ふ迄もなく進步黨の黑田如水たり、竹中成治たる犬養毅その人とす。

◎犬養君の風丰は在來の批評家によりて、屢々鳶肩犀眼と云ふ形容詞の用ゐられたるを見たれど、漢文の人相學に通ぜざる吾輩には、聊か印象不明の嫌ありて、當否の判斷に苦む所なるが、兎に角犬養君が淸楚たる肺病質の瘦骨、淸峭削れるが如き長顏は頗る故陸奥福堂に酷似したる所ありて、烱々直ちに對手の肺肝を貫かんとする眼光、きりゝと締りて力ある口元と、一癖も二癖もあるべく感ぜしむる頸下の疎髯とは、故福堂伯と駢びて、渠が氷上利刃を立するが如き性格の人たるを遺憾なく表はし、縱橫の機變、深刻の透察、奇峭の辣腕も、總て其の內に潛めるやを感ぜしむるに足るもるあり。渠は疑もなく日本男子中、最も克明の風神を具へたる者の一人なりと謂はざるべからず。

◎渠は斯の如き性格を以て、決すれば遽かるゝ處を知らざる放言長廣舌に、內に向ては常に少からず藩閥政治家の安眠を妨げつゝ、外に對しては堂々たる世界的政治家の美名を贏ち得て、得意愈々加はり、高論愈々昂じたる大隈總理を輔けて、戰國策、三國誌等の飽かざる嗜好者と、奇怪なる揚當り術や、一時の人氣取り法や、農民眩目術等を主題とし、兼て增稅反對原理、軍備縮少原論等を重なる綱目としたる不審議なる新學問、（强て名くれば進步黨學）の熱心なる研究者の上に、靈活なる敎授、有爲なる指導者として臨みたるなり。

◎斯の如き領袖と、黨員と、を有したる進步黨の政治運動は、當然の結果として、常に奇峭奔放の風狀と、巧妙なる演劇的の變化に富み、渠等の演ずる政治劇は、常に道樂なる政事批評家の目に多大の興味を與へたりき。

◎政治的の經路を同うしたる自由黨が、正直と云ふ外に他奇なき板垣伯の風貌と、上野より電車に乘りて坦々たる大道を西南に走らば、必ず新橋停車場に達すべし、吾は能く之を知れりと云ひ顏なる堂々たる河野廣中氏の風采と、運轉手なくして機關車の一ダースを飛ばす如き無法なる馬力の權化、故星亨の性格によりて代表せられたる單純と、武骨と、立ち後れに比すれば、渠等の動活は遙かに機敏に、峻辣に、又陰險なりき。

◎閥族政府に向て放ちたる自由黨の矢は、彪大なる鐵鏃を穿てるに過ぎざるに、渠等は銳き毒矢を揮ぶの智を有したりき。渠等の首領は板垣伯

が草鞋がけの遊説に、營々田舍漢の歡心を購ひつゝある時、悠々首府の一隅に閑座して、靈妙なる磁引力に、ジスラエリーの私淑者と、蘇秦張儀の信仰者との續々たる吸收を誇りつゝありき。

◎閥族攻撃の懸敵なる口實を作ることに於て、下民眩迷の好題目を提ふることに於て、渠等は常に自由黨の機先を制したりき。帝國議會の演壇に立てる渠等の代表者は、少くとも當時の政治屋連中中、拔群の逸材なりき。渠等は又一時都下の新聞紙の殆ど總てを自黨の機關紙、若くは同情者たらしめたるの概を示したりき。地方遊説、政務調査、等には毫も熱誠を示したることなき所謂懶惰黨の渠等が得たる斯の如き器用なる成功は、到底武骨なる自由黨輩の企及し得る處にあらざりしなり。

◎而て渠等が成功の絕項、巧妙の極致に達したる黃金時代は、疑もなく民黨大合同と云ふ政局十八番の龍卷風を煽起し、星の失勢と不在とに乘じて、巧に板垣伯の與黨を煙に卷き込めて憲政黨の新構成の許に、幾分が窒狹きの嫌はありたれど、兎にも角にも政黨內閣を組織し、其の首領を總理大臣たらしめたる時なりとす。

◎間もなくして星亭は歸り來れり。尨大なる閣中の巨影は、一步一步疑懼と不安との念に滿てる渠等の眼前に迫りぬ。政治劇の批評家は一齊に鋒を揃えて、星と犬養との陰謀戰の興味あるべきを言ひ、神出鬼沒の活劇を豫想したりき。而も此の勝負は豫期に反して案外に簡單なりき。軍配團扇の引かるゝや否や、巧慧なる王様は、靈力絕倫の駒ヶ嶽が一鐵砲に、脆くも土俵外に飛び出したればなり。

◎かくの如くにして梟雄星亭は、何の苦もなく再び自由黨の樞機を握り、何の苦もなく伊藤侯を捉え來て又、何の苦もなく今日政友會の基礎を定め得たるに反し、敗れたる進步黨は敗れたる領袖と共に、再び十年苦節の孤城落月に復らざるを得ざるの已むなきに到れり。爾來渠等は犬養君の風丰が稍餓狼に類したるものあるが如く、全黨を舉げて餓狼の如く空しく野に吼えたるなり。

◎一時の勢に乘じて天下の大勢を定めんとしたる渠等の機變は、斯の如くにして敗れたりき。極めて單純に敗れたりき。而も權變を好むこと飯よりも甚しき渠等は、窮して濫するの喩に漏れず、猛烈なる燃當り根性の獸慾に煽られて、餓莩腐の食を求むるが如く、何かの好題目を捉へんが爲めに、直に閣中に探りの手を突き入れたり、而も噫々盲の握り當てたるものは魚にあらずして蛇なりき何等の不運ぞ渠等は日露戰爭の脚下に迫れるの時に當り、賢明なる消極主義を唱へ、賢明なる軍備縮少論を前提として、題目それ自身の絕叫反覆が總ての論理、總ての理由たりしかとよりは想はれざる單純嗤ふべき非增稅說の百萬遍を唱へて、以て克く天下の人衆に媚ぶる所以、下民の目を眩すに足るものと信じたりしなり。

◎夏の夜は明け易くして、既に三竿の空に赫灼たりし文明の旭は、閣を蔽ふ胡廝化し黨、懶惰黨が朝寢の夢を以て、左右し得べきものにては有らざりき。明治四十年の日本社會は不幸にして、既に渠等の百

万還に闔喜の涙をこぼすべき老婆の多くを喪ひ、三國誌と戰國策に、牛白の眉を揚ぐる老翁の多くを喪ひたりしなり。

◎假りに日露戰役と云ふ森嚴なる事實が渠等の短見を暴露し盡して餘りありし不幸なる出來事なしとするも、渠等の如く世界大勢に通ずる所尠く、渠等の如く國家百年の（否十年さへもの、五年さへもの）大計を度外視し、誠意なく、眞面目なく、お先眞暗らの小機變小術數を弄して、只管ら一時の場當りを博せんとする近視眼的私黨の繁榮を許すべきや否やは、渠等が須らく先づ文明の大勢に容はざるべからざりし至重至要の先決問題なるにあらずして何ぞや。

◎文明の大勢に逆行し、國家の長計を度外視しながら、漠然天を仰いでその日その日の天氣模樣を揣摩して、けふは雨傘を持ち行くべきか、ステッキを携ふべきかに首を捻りて腐心し、若くはしつゝあるものは、疑もなく憲政本黨と云ふ尨大なる一私黨の態度なりと謂はざるべからず。若し此處に人ありて、達すべきの地を定めず、漠然百歩或は千歩の途を疾驅し、顧て其の捷脚を誇るあらんか、傍人は只だ渠の狂を疑ひ、醉興に呆るゝ外はなかるべし。吾輩は進歩黨の態度を目して、遺憾ながら之に類するものあることを惜まざるを得ざるなり。渠等は常に國家の大計と自黨の主張との調和を計るべき誠實を缺きたりしのみならず、單に自黨の利害より打算するも、多くの場合に於ては權變の齎すべき當然の結果を豫想したることなきが如し、豫想したりとせんも、的中したることは甚だ罕なりと云はざるべからず。斯の如くば渠等は權變の爲めに權變を用ゐたる者なりと云ふとも、毫も臆評にあらず權變は寧ろ渠等の道樂たりしなり。

◎本を忘れて末に奔らんとしたるは、疑もなく進歩黨が多年の痼弊なりき。渠等にして若し斯の如き無責任なる態度を改めざらんか百の晴天に雨傘持ちて日比谷の附近を彷徨し、百の郡制案にエース、と、ノー、との二枚舌を使ひ、百の政綱を起草して、看板の懸け替えに忙殺せられぱとて、そは涯しなき明日の翼を捉へんとするが如く、到底及ぶこと無かるべきなり。

◎時勢は日々に渠等に背けり、天下の物笑は愈々加はり、苦節の地盤は益々深固の度を加えたり。空は朗かなれども、煩悶の暗雲は進歩黨の上を掩はざること無かりき、進懐!!!、活路!!!、新黨出!!!、の叫びは樂屋の一隅に於て先づ鳩山、西村、神崎等の唇頭を洩りて、速かに四面に擴れり。渠等が投げ出したる賽の目は抑々鬼なりしか、菩薩なりしか、あらず、皆あらず、韓國先帝的の血脈を包める策士の成したる所が、飽くまでも先帝的なりしこそ、寧ろおもしろからずや。賽の日の御詫宣は、軈て猛烈なる內訌の形を取りて、一擧に舊勢力の牙營を陷れたるなりいり。

◎改革派は美事に成功し、廿三議會の一半は殆ど鳩山派の獨舞臺なりき當時の批評家は渠等の改革を評して、稍々意義らしき意義を有するものと云へり。稍々意義らしき意義と云へりしは、言ふまでも無く渠等が政界の繼子見たる大隈伯の配下を離れて、姑らくは曖昧なる態度

を持しつゝ、機を見て政權の參與に近かんとたくみたる一種の實春嬌的策略を指したるなり。

◎かくの如くにして、曩時には下民に媚びんとして得たる所は天下の物笑ひに過ぎざりし近歩黨は、今や茫漠たる政治天體の一星(其名をハルハアと云ふ)に媚びんとするの新黨是に立てり得る所の者は、衝の如き閥族が歡話の虚なるべきか。はた鍋を破りし功狗にも似たる被操縱、破買收の實なるべきか。抑々又捉え難き明日の夢に描かれたる明從黨の名なるべきか。吾が黨は總て之を知るものにあらずと雖も、只だ玆に滑稽劇の脇師たりし大石正巳が、故兒玉子の袖を引きて美事肘鐵を喰ひ、山本伯に秋波を送りて、知らぬ顏の半兵衛を以て酬ゐられしと云ふ愛嬌ある事實を指摘すると同時に、當日の大立物、鳩山博士がツラデコメツイの序幕に於ては、美事馬上の大限伯を引ずり卸し、喜劇役者には天品とも云ふべき御面相の相貌崩して、愛嬌笑ひを笑ひつゝも、舞臺廻れば、忽ち野武士の如き廓清派の合田謹が鐵拳に、危くも除名處分を喰はんとし、蒼くなつて縮み上りし滑稽さ加減を追憶して、渠か政治家たらんとするは、尙平維盛が武將たらんとするが如く、渠が故居亭の故智に倣ひて、自黨の骨を拔き去り、元老の或る者に獻ぜんとする政界の大手術を試みんとするは、維盛が富士川の一戰に、左馬頭の大軍を擊退せんとしたるにも似たるを惑ぜざる能はず。三位中將は鮨屋のお里に惚れられてゐるが過ち少き能事なりとせば、鳩山博士は依然訴訟事件に熱心なるべきを、處世の得策とすべし。閑話休題。

◎要するに吾輩は憲政本黨の過去現在を評して、總て演劇的の一句を以て之を掩はんと欲す。知らず渠等は未來に於て如何なる背き劇を作りて政治劇の道樂なる看客を樂ましめんとするが、犬養、大石、鳩山、の諸策士、幸に健在なれ。

## 下

◎憲政本黨のトラデコメツイ漸く幕切れを告ぐるや、大浦兼武、關清英等、所謂警視廳派の人氣役者は、早くも舞臺に表はれたり。渠等に大同倶樂部と云ふ穢多村の若者を使嗾し、郡制ヶ原の、闇はあやなき並木の蔭に潛めて、不意打ちの利刄一口を吞みつゝ、敵役原敬が頬冠りに千鳥脚の出顯を待ちたりき。

◎生酔本性にたがはざりし原敬は、此の態を見て狼狽の目を睜りぬ。西園寺侯も周章へ、閣員一統も周章へて、意外なる事變に意外なる政界の風波を生じぬ。原敬は大肌脫ぎ、向ふ鉢卷の姿となりて、極力大同派の一角を崩さんとし、陶庵侯は親類政略、公卿の權復古說、などの猫撫で聲に、上院の浮萍連を口說き落さんと試み、さはさせじと爭ふ大浦、陽に、小松原も加はり、平田も加はり、清浦も加はり、喜劇役者の大立者芳川伯も加はりて、此處に近來になき面白き闇中の大立ち廻を演出するに到れり。

◎最初の頃はよせばいゝにと云ひ顏に傍觀しつゝも、つい活劇の餘りに面白きに見惚れて、いつしか禁止の發聲を忘れたり―桂侯も、敵が猛烈

に貴族院に手を廻せるを視ては、スワ自家根據地の一大事！捨て置き難しと素面の儘にて、舞臺の一隅に飛び出し來り、目白の老公までも餘りの騒々しさに、一寸樂屋より顏出して舞臺の光景を覗きたるなど、頗る舞臺面の賑々しき芝居なりしが、之も結句は桂、西園寺兩侯の間柄を截然切離するに到らず、進歩大同の二黨を渾然融和するにも到らず内閣の動搖はおろか、原内相の椅子さへ搖かすに到らずして、得たる處は大浦、關が露骨なる本能の發露と、大同倶樂部が穢多は穢多らしき天才發揮とを示したるに止りしが如し。

◎吾輩は茲に計らずも眞面目なる一國の公事たるべき政治運動を捉えて、演劇茶番と同一視し、元勳先輩を揶揄して稍々奇矯の言を弄したるの責を、我が讀者諸君に負はざるべからざるの次第となれり。されど吾輩一片の赤誠は、手を空うして無爲に晏如たる所謂温良謙讓の君子たらんよりも、寧ろ羅馬の腐敗に對して猛烈なる筆誅を加へたるの記者たるを選ぶに存するが故に、姑らく吾輩の言はんと欲する處をして、忌憚なく言はしめよ。

◎吾輩は敢て大浦、關の諸氏が往年鹿鳴館樓上に、政治探偵を指揮したるが如き劣等の趣味より、故なくして國家大政の撹亂を企つるが如き人たるを信ずるものにあらず、又敢て政權獲得の野心を遮二無二推し通す外、眼中國家なく、文明なきの人なりと評するものにあらずと雖も、吾輩は苟くも政界の巨擘たるものなるが、一度び起て政權の移轉を爭ふに當りてや、經ふる所の問題は必ず常に國家の長計、文明の鑑識に照らして、重大なる意義を有するものたらざるべからざる事を信ずる、切なるものあり。

◎郡制問題は果して克く斯の如き意義を有したりとなすか。吾輩は郡制問題を以て必しも當時新聞記者の徒が一犬『馬鹿らしき問題』と唱へて、万犬之れに和したる程のつまらぬ小問題と認むるものにあらず、地方自治の得失上大に研究を假したる重大問題たりしを失はずと信ずるものなるが故に、桂派の人々が斯問題を擧げて、現内閣と輸贏を爭ひしは、穴勝ち無意味なる政爭に過ぎざりしと斷ずる者にはあらずと雖も、渠等が起ちたるの動氣、採りたるの手段に就ては、全々敬服の意を表すること能はざるなり。何となれば苟もく廿世紀文明の白晝、日東帝國に於ける政界の巨擘が、一國の政機を左右すべき以所のものは、單に盲的感情に支配せられたる提題と、情縁、密議、買收、等の醜穢極まる私運動とのみに由りて決すべきものゝ信ずること能はざればなり。

◎郡制問題の討論が衆議院に於て一も見るべき者無かりしは、深く遺憾とするに足らず、何ゝなれば吾輩は文藝倶樂部と、日本外史とを唯一の愛讀書とせる多數の田五作議員と、吹けば飛ぶべきアメリカ歸りの輕薄なる少數ハイカラ連とを頭なる相員(メンバア)としたる下院の言論などに、さまでの注意を拂ふ要を認めざれど、只だ渠等とは自ら選を異にする大浦、關、清浦、等の諸家が、僅かに一木、小松原、の二氏を代表者として上院貴族の人たらしめたるを除きて、渠等自身は、全々山

なき政治家の如く、無學文盲なる成り上りの素封家の如く、只だ高利貸使喚の浮名を流して、韓國老帝的の醜魂膽に、しかく熱心なりし以外、斯問題に對して果して如何なる研究を積み、如何なる責任を有し、如何なる定見を吐露して、國家の輿論を導きたりとするか、總ては零なりき、然り總ては零にして反對の一聲は總ての理由、總ての發表なりしにあらずや。

◎隈潤英氏は嘗て太陽誌上に於て、矯激なる口吻を以て、政黨者流の無責任、腐敗、墮落、を痛罵したることありき。知らず隈氏たるものの内に顧て自ら完全なる政治家の態度を得たるとなすか。吾輩は先きに進歩黨の紛糾を評して、一場の演劇と評したるが如く、渠等の流したる高利貸使喚の浮名と、穢多村の煽動とを評して、決して眞面目なる政治運動の名を與ふること能はざるなり。

◎かく言はゞ老猾なる狐狸の徒は、定めて吾輩が意見の單純なるを哂ふならん。然れども見よ！、出發早々償金は出さずと揚言したるウヰッテの單純は、克く小村の權數を制し得て餘りありしにあらずや。吾輩は到底エスキモー人種の小刀細工に進歩したる趣味を見出すこと能はず。グラッドストンの政治は、我が警視廳の探偵より遙かに單純なりき。ルーズヴェルトの經綸は、韓國宮庭の雜猥に比して遙かに高明に、チエンバレイン氏の胸襟は待合の奧座敷に較べて、遙かに開放なるにあらずや。吾輩は廿二議會の劈頭、行政整理の打ち切りを喝破したる陶庵侯の恬淡を崇乃愛せんと欲す。小なる複雜は、到底大なる單純に比すべくもあらざるなり。

◎吾輩は由來、東洋特有の陰謀的、密議的政治と、北米合衆國の恐民的、氣兼的政治とか、其の裏面に潜める魂膽の餘りに複雜に失したる事を、重大なる病弊なりとすべしと感ずるものなるが故に、單純と云ふ語にして若し國家の長計より出でたる眞摯なる政見を意味し、責任ある研究を意味し、國民に對する親切なる說明を意味し、招かずして輿論の歸趨を定め得るものなりとせば、吾輩は政治運動の單純化を以て、疑もなく最も大なる文明の進歩なりと信ぜんと欲す。時は有力なる總ての改革者なり。狐狸も化物も最早や過去の傳說となれる今日、吾輩は早晩時と云ふ絕好の下腹劑が、牛李兩黨の遺習と、外戚官々者流の血脈とを葬り去りて餘りあるべしと、信ぜんと欲する者なり。

◎吾輩は茲に廿三議會に於ける名譽ある鹽問題、砂糖問題、取引所問題、留萠築港問題、さては議員瀆職問題、等の醜魂膽を發露して新年早々、讀者諸君の不快なる記憶を喚起することを爲さゞるべし。愛嬌ある渠等の評論は姑らく之を次號に讓りて、今日は更らに重要なる他の問題に移らんと欲す。

## 二

## 亞米利加問題の眞相

來れるの日に來りしにあらず
去れるの日に去りしにあらず

(附、日佛、日露、両協商の成功。――日米協商問題の提出)

◎神聖なる大統領の教書に於て、ローゼヴエルトが日本國民に約したる所のものは、疑もなく公明正大なりき。當時多くの我が批評家は、渠の心臓がリンコーンの遺靈によりて鼓動しつゝあるかの如く、コンコード聖人が抱きたる人道主義(ヒユマニズム)の天火を抱きて生命の血を温感しつゝあるかの如く感じたりき。渠の鐵腕に一任し、待ちて海路の日和に遭ふべきを此の場合の上策とすと教へたりき。遮莫、來らんとするものはリンコーンの遺靈か、圓滿なる解決か、はたエメルソンの天火か、事實(ファクト)は抑々如何の賽の目をか投げんとする。間もなくして『時』は判決の玉手箱を啓きぬ。見よ！あけて悔しつゝの叫聲は、先づ霞ヶ關の不齊整なる密室裡に擧げられて、猛り立つ／＼寝ぼけ眼の寝床から起エメルソンの信仰者、天下の大記者間に響應して、海路の水は冷たかりけん、渠等は俄に甘寢の枕を蹴て、鎮守様の大太鼓を革も破れよと敲きたるにあらずや。

◎渠等は攻撃の安賣りを始めぬ。麺麭を與へんと云ひて石を渡したる大統領の悖徳を怒れり。學童問題を復して、渡航の制限を強ゆるは、恰も盗みたる器物を返して、謂はれなき現金を強請る居直り強盗の言ひ分なりとまで痛罵したりき。されど霞ヶ關の大臣と、駐米大使とは、常に天下の大記者の如く賢明ならざるを奈何せん。吾儕は事實(ファクト)か與へたる氷の如き一篇の判決文が、冷々淡々として、天下の大記者が吐きかけたる唾に毫も消ゆる處なかりしを見て、深く惜まざるを得ざるなり。

◎閑話休題。吾儕は茲に少しく麺麭と、石と、エメルソンの天火と、鎮守様の太鼓との表裏矛盾せるものを解て、亞米利加問題の眞相を窺はんと欲す。

◎吾儕の見る所に據れば、ローゼヴエルトは大統領なり、政治家なり、コンコードの森蔭、ヤスヤナポリナの野邊に、理想を夢むるの人たるが如きは、固より渠の能はざる處。時は西暦一千〇七年、奴隷問題に純人道主義の旗幟を揭げて、能事了れりとするが如く、しかく單純なること能はざりしは又言ふまでもなし。されど吾儕は渠が高潮の理想を抱けるの人たるに於ては、恐らくはリンコーン、グラッドストンに比して、多く讓る所なかるべしと信ず、渠は神聖なる大統領の教書に於て、隣邦を擯くが如き人格の人には決してあらず、その偶々然らざるを得ざりものは、人事多くは意の如くならざるものありしに由るなり。

◎人事多くは意の如くならざるが中に、殊更ら政事、特に合衆國の如き愚民主權の國柄に有りては、高潮なる理想は、常に陋劣なる感情、我儘勝手なる利害と衝突し、背馳し、愈々意の如くなるを得難きものなり。喬木は風に惱まる。見よ！、ローゼヴエルトの理想は、今や頻りに七千万の愚民と、數百の黄色紙に惱まされつゝあり、日本學童問題の如き、蓋し其の一たりしならん。

◎されどローゼヴエルトは北米合衆國の大統領なり、政治家なり。渠は一面に於ては、隣國に對する正義の宣言を憚らざるの人たると同時に、

又正義の名を借り、名を利用して、常に何物をか爲さんとする近世文明の便利なる特色を理解し、使用する事に於ては、决して疎き人と云ふべからず。果然渠は建國百年の長計を决せんが爲に、日本學童問題を提げて、州權削減の高壓策に、渠の鐵腕を下したりき。州權抑壓は即ち渠の眞意にして、又理想なりしなり。而も渠の反對黨は猶陳腐の古き黨是に據りて、ルーゼヴエルト氏が新進の理想を彈き返すに足る丈けの彈力は、未だ毀はざりき。加之、紀綱敗壞なる愚民は、狂暴なる勞働者に結合して、總て目前の小私利と、十八世紀式の舊信條と、黨人本位の我利盲動とは、下水の合するが如く合して、大統領の鐵腕を挫きぬ。憫むべし渠は此處にも亦た儘ならぬ浮世を見たるなりけり。

◎理想に破れたる大統領は悄然として、暫時ホワイホールに沈默の人となれり。世界は渠の鐵腕だに如何ともすべからざる難問に眉を蹙めぬ。日本の大記者連も亦眉を蹙めぬ。而も决すべき學童問題は、飽くまでも决せざるべからず。速かに决せざるべからず。之に於てか渠は突然如何はしき替玉（合衆國の利害より見るも如何はしき替玉、——我が國民に取りては、そは明かに鋼鐵に代へたる石なりき）を握りて、如何はしき頭を捻りつゝ、再び大路の喧嘩場に表はれぬ。渡航制限案則ち之れ也。

◎渡航制限の契約が、我が外交の一大失態たりしは、今更ら言ふまでもなけれど、抑々外國勞働者の拒絶若くは制限が、合衆國其れ自身の利害に照らし、國是に鑑みて、果して如何の意義得失を有すべきか、斯の問題の解釋如何は、直ちに對岸の火災に借屋を有する日本殖民政策の直途、日米和否の决定に、重大なる關係を有するものなるが故に、苟くも至誠憂國の士、膨脹的日本の將來に興味を有する人に取りては、最も必要にして且つ趣味ある好研究題目の一たるべしと信ず。

◎吾輩は今かゝる國家の重大問題を、輕々しくも六號評論の末節に於て云謂することを潔しとするものにあらずと雖も、譲るべきは之を他日に譲りて、少しく所見の要點を擧げんに、吾輩の見る所を以てせば、元來合衆國に於ける外國勞働者の拒否利害に關しては、自ら二流の想脈四個の解釋あるが如し。

◎想脈の一は純然たる國家哲學的、社會學的立脚地に立てる學者經世家の近時頻りに論唱する所にして、無制限なる白色、有色、諸人種の滔々として止まる所を知らざる渡航來住は、今や其の數實に數百千万の傳くべき大數に達して、到る處に本國人の生業を蠶食しつゝ、到る處に自個の言語を談し、自個の風俗を發揮し、自個の權利を主張しつゝあり、加之海外出稼ぎ人なるものゝ中には、多くの浮浪人、無妻者、又は無賴漢を混ずるが故に、其の風俗を紊し、道德を破りて、合衆國の社會に荼毒を流すの大なるは、渠等が獲たる參政權の行使によりて、國家統一上の妨害たるの少からざると相駢びて、頗る寒心すべきものありと論ずる者、その一なり。

◎爲れども人種風俗を異にするの度、極めて少き白人種の渡航來住は畏るゝに足らず、合衆國國民の偉大なる同化力は、克く少數の渠等を同化

し盡して餘りあるべしとするもの、其の二なり。
◎然らば、吾人黃人種の來住に就ては、如何なる解釋を下しつゝあるか。吾敵は遺憾ながら渠等の兩派が、黃色勞働者は、合衆國の風俗道德を害すること更らに甚しく、のみならず其の奇異なる言語、風俗、思想、感情、は到底吾等の同化に堪ゆる所にあらずと結論することに於て、遺憾なる一致をなしつゝあることを認めざるを得ざるを悲む者なり。
◎次に、想脉の第二は純然たる經濟的見地に立てるもの、即ち合衆國資本家、勞働者、が我等黃色勞働者に對して、抱きつゝある感想にして、その前者が敏活にして勞銀低き日本勞働者を歡迎し、後者が是れに反對しつゝあるは、言ふまでも無き所にして、問題は只だ兩者勢力の强弱如何に因りて決すべきや論なし。然らば合衆國に於ては資本家勞働の勢力孰れか强大なる？。吾輩は容易に是れに答ふること能はず。恐くは何人と雖も（米國に於ける何人と雖も）明快なる答解に窮する所なるべし。遮莫、吾輩は唯茲に今日合衆國の勞働者が、强大なる團統力を利用して、（或は濫用して）勞銀の値上げ、就業時間の短縮等に干しては着々成功しつゝ、既に世界第一の評ある英國勞働者の得たる待遇に比して、少しも劣らざる（或はそれ以上の）勝利を贏ち得たる過去の趨勢に照らして、今後渠等が無法にも到る處に「我が同盟員は黃色勞働者を用ゐつゝある工場に就業することを謝絕すべし」と云ふが如き狂暴なる脅迫的宣言を發して或は少くとも鐵道業、海運業、大農園、等の大規模なる産業界より、本邦人を驅逐せんとするが如きは、隨分あり兼ねまじき事たるを畏るゝものなり。
◎さて此の兩想脉の解釋が相合して、一の合力的方向を採りたる最も明白なる表示は、かの支那人勞働者の排斥なりとす。支那勞働者の排斥に就ては、識者も無識も共に異議なかりき。否寧ろ渠等は厄介なる多年の宿題を解き得たるやに感じて、幾分の愉快を覺えたるが如し。此の時に際して渠等の多數が克く自國勞働者の『默したる利害上の反感』を制して、日本勞働者は白人勞働者と同等の待遇を受くべきものなりと宣言したるは、本邦勞働者が支那勞働者に比して、幾分か品位の高きもの有るに因りしは勿論なるも、而も日本が支那より强く、その强き日本は恰かも子煩惱の老人が隣家の子供を可愛かりて、種々の面倒を見てやりしに、今や漸く成人し、怜悧なる一人立ちの男と成りしも、猶常に感謝の義理を忘れたることなしと云ふに類したる國民的愛情、國民的自負心が、重なる決定力たりし事は明かなる事實なりとす
◎然るに日露戰爭に於ける日本の捷利は、殆ど訂盟國全數の對日本感情を動かしたるが中にも、合衆國は殊に太平洋の制海權に干して（之れ
利害感情衝突の一）、不律賓の危險なる（合衆國より見て）孤
干して（其の二）、支那貿易特に滿韓方面の通商に對する日本の獨
位置に干して（其の三）、はた亞細亞七億の未開民に向て、絕好の[illegible]
位置を占めたる我が日本が、戰捷の餘澤を受けて、當に成さんとしつゝある商工業上の一大飛躍に干して（其の四）、最も痛切なる利害を感ぜ

ざるを得ざりしなり。随て背は腹に代へられぬ喩の如く、渠等が日本に對して抱きたゝ感情は、今や俄然として『可愛さ』より『恐ろしさ』に變ぜざるを得ざりしなり。

◎かくて今更らの如く利害の衝突と、幾分畏怖の感情を新たに感じたる渠等は、先づ其の眼を脚下に注ぎて、勉勤恰悧なる日本勞働者が、彼等の本國に於て驚くべき（石井通商局長の眼より見るも、亦愕くべき）速力を以て、到る處に渠等の生業を蠶食しつゝあることを、今更らの如く、瞠目し、自覺したるなりき。日本學童問題は、實に斯くの如き自覺と感情との表現なりしなり。渡航制限の契約は又實に大統領が自らは如何はしき頭を捻りつゝも、幾分か已むを得ざるの勢に駈られて、斯の如き如何はしき國民の感情輿論を代表せんとしたるなりき。

◎曩きには支那勞働者の排斥を斷行して、自尊的國民の劇烈なる米品不賣の復讐を受けし經驗を有したる渠等は、今や少からず日本國民の惡感情が畏れたりき、好戰民族（渠等より見たる）の爲すべき復讎を畏れたりき。果然『日米戰爭不可避論』は合衆國民の恐怖心に乗じて、場當り術には抜け目なき黄色紙が絶好の題目となりて、熾んに論ぜられ、熾んに誇張せられて、今や殆んど彼の國の上下を風靡し盡さんとするの概を示せり。かゝる時に際して、ローゼヴエルトの政府は自國海軍の主力を擧げて、太平洋岸の廻航を促し、布哇不律賓の沿岸防備を嚴にせんとし、海軍擴張案の提出を計り陸相タフトを急派して露國を訪はしめたるなりき。

◎吾輩は此の場合に當りて、冷然として合衆國の神經過敏を嗤ふべきか抑又最近國際間の趨勢が、必ずや兩國間の根本に横はれる經濟的利害の衝突によりて基ゐせらるべきの（今後の形勢は益々然らざるを得ざるの）趨勢に鑑みて、幾分か眞面目に日米の將來に對して寒心すべきか。吾輩は此處に之を決定し、斷言することを欲せざる者なりと雖も、少くとも日米問題が將來渡航者の方面に於ても（林外相の言明に照らし見よ）、政治上の方面に於ても、淺薄皮想なる樂天觀を抱くが如きは、斷じて吾輩の與すること能はざる所なりとす。

◎吾輩は茲に輿論の急先鋒として、新たなる一問題を提出すべし。日米協商の訂結、之れなり。

◎吾輩は今此の忙はしき綜評に於ては、到底詳しく日米協商の主張を論ずるの餘裕を有するなど能はざるが故に、此處には單に問題の提出を試むるに止めて、暫らく時勢の推移を俟たんと欲す。知らず、日佛、日露の兩協商に成功したる現内閣の諸公は、日米協商を以て無用の長物となすか。抑々米國民の杞憂を解き、兩國永遠の和睦を全うするの途、自ら他に存するとなすか。林外相は危險なる政治問題を伴はざる移民の遣り場は獨り南米あるのみと云ふが如き弱音を吹きて、以て克く戰捷國の外交を辱むる所なしとなすか。若し夫れ斯の如くんば、吾輩は此際斷乎として軍備半減説を唱ふるの、財政上外交上寧ろ機宜に適したるやを感ぜざるを得ざるなり。内閣諸公の胸算抑々如何。

## 三 社會問題研究の急務

### 來るべきものは當に來れり（足尾別子の暴動）

◎二月足尾銅山の暴動ありて、一時少からず人心を悸動せしめたりしが、餘燼未だ冷却せざるに、六月又々別子銅山の大罷工あり、夕張炭山の不隱、三菱造船所の恐慌等相次て傳へられ、暗朧たる怪雲、今にも全國の大小工場を呑まんとするやに見えて、少からず企業家の心膽を寒からしめしが、之も足尾別子に軍隊を動かし、人命を損傷し、巨額の損耗を與へたる稀有の大騷動を生ぜし外は、甚しき大事に到らずして止みたるは、先づ〳〵不幸中の幸福と云はざるべからず。而て之等暴動の裏面には、社會主義の煽動が潜みし事、又は潜めるが如く傳へられしは頗る注目すべき現象なりとす。

◎當時某家の某有力者は吾儕に語りて、足尾別子の暴動は單に古川住友等が企業上の過失に基ゐすと云はんよりも、寧ろ社會大體の趨勢――工業發達の程度が最早や此種の必然惡（ネセッサリーイビル）を伴ふに到りしもの――と見るの當れるを信ずと言ひしが、若し夫れ一段の高處に立ちて、這般の出來事を瞰んか、吾儕は勞働者の大罷工も、社會主義者煽動の有無も、皆是を廿世紀文明の潮流と共に推行しつゝある必然事と見るの妥當なるを認む、是非善惡の評は兎に角、事實を事實とし、大勢を大勢として、觀る時は單に來るべきものゝ當に來れりと云ふに過ぎざるが如し。

◎社會問題の研究は、實に目下の我國に在りては急中の急な感ぜしむる活題目なり。雨到らざる前に傘を買ふことの必要なるが如く、必要なるなり。吾儕はエドワードベラミーの見後録（ルッキングバックワード）や、エリーの社會主義論を離有かれる斯問題研究の小學校より、早くベルンスタインに進み、ヴアグネル、ブレンタノー、シユモラー、シユルツエゲーフアニッツに進みて、今少しく研究らしき研究を公にすべき時代に入らんことを望む。吾儕此處に聊か從來の斯問題研究が殆ど兒戲に類したることを述べて、一場の怪氣焔を揚げたる後、更に筆を轉じて韓國に於ける伊藤公の大成功を謳歌し、めでたく新年號の評論を了らんと期したりしが、紙面の窮給は吾儕の長廣舌を縱にせしむるに便ならざるもの有りて、暫く玆に擱筆す。愛讀者諸君萬歳。

## 丁未の宗教界

松 逕 子

丙午の宗教界の、見神井に自稱神佛問題等にて囂々たりしに比し、恰も暴颶一過の跡、怒濤も狂奔に疲れて暫し閑げに靜まるが如く、歳の丁未

に入りてより格別注目すべき新問題の生出したるものあるを見ず、左れど最も傾聽すべき一種の論爭の、金子筑水氏と、綱島梁川氏との間に開かれたるは、決して輕々に看過するを許さずとなす、丙午の宗教界や、極めて多事なりきといはゞ言はん、活動の氣に富めりといはゞ言はん、更に又從來奔人の越人を見るの觀ありし宗教なるものが、吾人の意識に甚く近邇せしめられたりといはゞいはん、左れどそは唯多事なりしのみ、活動の氣に富めりしのみ、宗教なるものが吾人の意識に近邇せしめられしのみ、謂はゞ唯諸問題の雜然として吾人の目前に提供せられしのみにて、猶ほ之に對して十分なる批判の首肯し得べきものありしを知らず、多くは漫然傳習的思想に泥み、新奇なる材料に對して駭心瞠目し、輕浮なる、淺劣なる雷同附和的の批評を試みたるものその多きに居る、見神といひ、自稱耶佛といへば、輙ち狂者ならずは病者となし、僭越にも專門醫迄が壇上に上りて、直に臨床講義的説法をなすものありたる如き之なり、此の如き浮薄なる態度と冒説とを以てして如何にして能く宗教そのもの信仰そのものゝ本質、さてはそれ等の眞妄正邪を判定し得べけん唯玆に端なく兩氏の論爭あり、その參操し磨礪せらるゝの間に於て、甚だ有用なる眞理の闡明せられ、閃々たる光輝の能く隱微のものを照したりし効果は拒むべからず。事は早稻田文學の明治三十九年の十一號誌上に收められたる、筑水氏の「宗教的眞理」の一文に胚胎し、同誌の同年十二號に收められたる梁川氏の「金子筑水氏の宗教的眞理を讀む」に成長し、越えて四十年の一、二、三の三月に亘れる論爭にて終る、左れば一半は丙午に屬すべきも一半は丁未に屬すると共に尙ほその重要の諸點の論爭は、專ら後者に屬するを以て、敢て丁未に於ける宗教問題の序開きとなすを得べしと信ず、

筑水氏は世の論者の宗教的眞理を説くに、多く千篇一律、只直覺に待つの他なし、冷暖は自ら知るの他に道あるべからずとなすを以て慊らずとし、斯かる論法以外に別に情意の經驗的事實に立脚せる證明を試みられしものなるが、その所説中「宗教的眞理は（中略）人類が經驗せる一切價値の上に自然に又必然的に築かれたる最後の眞理（中略）情意の經驗的事實そのものゝ裡におのづからに又必至的に含まれたる最終の内在的事實（中略）比喩を借りて言はゞ經驗的事實其ものより必然的に推理せらるべき最後の判斷なり」とありしに對し、梁川氏は之に不滿を感じ、經驗的事實は唯經驗的事實のみ、經驗的事實が絕對の宗教的眞理に對し、何等積極的關係なしとせざるも、その關係は唯所緣のみ、例へば雪折れ竹の爆聲に古の大德の豁然大悟の眼を開きたる、その爆聲の如きはそれのみ、宗教的眞理は所詮は天才の直覺自證に待つべきのみとして反駁したり、斯くて數回の論爭を重ねしことは既說の如くなるが、要するに、筑水氏の所説は左の點に盡くべし、「最高の宗教的直覺の決してたゞの主觀の空想にあらずして、個々の眞の直覺（事實）を根據とせるもの、隨つて個々の直覺の裸に同く直覺的にその確實性の證明せらる云々」、筑水氏の經驗的事實を旨といへるを見て直に唯物的色彩を帶べりとなすは淺し普通に經驗的事實といへば多く知的のみにいふも、こは唯吾人の慣習が

調致したるのみにて吾人の心象に同着したるもの何ものか能く言ひ得ざらん、既に冠するに情意の文字を以てす、その普通の語義とは内容を異にし、梁川氏の直覺といひ自證といふもの丶却て之に恰當することは改めて言ふ迄もあらじ、唯梁川氏の之を言ふは筑水氏の最高の宗教的眞理の悟得にのみ用ひんとし、筑水氏は之を廣く箇々の經驗的事實にまで用ひんとするに於て、僅にその徑庭を見るのみ、斯く論じ來れば、要は、筑水氏の所論たる絶對なるものと箇々物との間には常に相即不離の關係ありて存す、箇々の情意的經驗裡に最高の宗教的眞理も内在すとなすもの、梁川氏の所論は、箇々の情意的經驗の如きは謂はゞ階子の如し、既に高處に達し了れば階子は敢て棄つるも可となすものなり、予の此處に用ひん說の強ちに妥當なりや否や斷ぜざれど、普通の用語によつて明瞭に言明せんには、個々の經驗的事實を以て一は「因」となすと、一は「緣」となすとの差と見るべからざるか、想ふに梁川氏の如き熱烈燃ゆるが如き信仰家に至つては直に一躍超入の底に大覺者となるを以て滿足を得べく、零碎の經驗に催されて除々に神界に接するを以て、何となく溫味の足らざる權威の乏き條件ふべく、此已もなき心的要求に驅られて一篇の反駁文となりたらん、吾人は元より筑水氏の論旨明晰なるに服するものたり、蓋し斯の如くならざれば、以て神を認むるの前のみならず、既に認めたる後に於ても、絶えず神を憧憬して、一度は已が腦裡に映じたる神體の色彩を愈が上に濃厚ならしむべき努力も、その說明には幾多の困難生ずべければなり、想ふに知的の努力は部分より部分に移りて全分を獲得せんとするの努力なり、信的の努力は、初より全分を見るも、その色彩を淡より濃に進めんとするの努力なり、筑水氏が最後に於て知信の關渉を說かれたるなど、能く此般の消息を解するに便り多かるべしと信ず、

丁未の宗教界は多事ならず、問題の物議を引起したるものなきに於て多事ならずといふべし、而かも多忙なりといふの點に於ては近古未だ曾て有らざるものとなすべきなり、干戈の氣全く銷して春風花を吹くの時、東叡山上博覽會の開かるゝを機として、曰く萬國基督教青年大會、曰くブース大將歡迎會、曰くメソヂスト三派合同會、之に頡頏して曰く全國佛教家大會、曰く全國神道家大會と、有らゆる宗教的大會合は四月より五月に至りて開催せられ、同時に東都は元より延いて横濱名古屋、神戸、大阪、或は福島、仙臺と、餘波の浸すところ遠く諸地方に及ぶ、此等は唯の會合のみ、演說のみ、別に宗教的眞理の之によつて磨礪せられ闡明せられたりとはいはざるも、英、佛、獨、露、伊、米等は元より和蘭、那威、瑞典、瑞西、加奈太、南亞弗利加、印度、錫蘭、布哇、濠洲、丁抹、芬蘭、暹羅、比列賓、清、韓、等、殆んど坤輿球上の國といふ國を擧つて悉く此一小島國に集り、互に握手し、互に觀晤したりしこと、客觀的にも如何に宗教なるものゝ勢力の人類に重きをなすかを知らしむると同時に科學萬能の頑夢、猶ほ頭腦の一角に覺めざる一部の邦人をして、初めて祗敬なる態度をそれに向つて取らしむるもあるべく、更に又四海同胞的人道主義を直接に印象したる効果もあるべく、特に全國佛教家大會よ

り萬國基督敎青年大會に對し、歡迎の辭を與へ、彼よりも亦答禮を致したるが如き、之を前に、一が偶像敎なりとして排すれば、他が又國賊呼ばはりして反目擱嚙したりし往時の記憶ある吾人には、一種異樣の觀ありといへど、而かも不快を伴はざる感觸を與へたるものとなす、更に五月に於て西本願寺法主大谷光瑞伯が、日露戰役に於ける隱れたる功勞に對し、辱くも聖勅を賜はり、寵渥の御語に接せられたるが如き、申すも畏けれど、啻に有形のみならず、その無形の方面に於ける人心救濟の宗敎的感化が、如何に大なる結果を齎すかの知らるゝ一小契機たるを疑はず、左れどもこは唯丁未に於ける宗敎界が順潮を逭ひて向上的方面にありといふのみ、直に之を以て一躍我國民の宗敎的意識が一大進歩をなせりとは斷ずべからず、大瀾の上に小波あり、小波の上に更に細瀾なあり更に細々漣あり、斯くて推しつ推されつ時潮前程を辿るものなるに、我現時の如きに在つては未だ此大瀾なるものも十分には認むべからず、宛ら蕩漾せらるゝ盥の水の如く、往く波返る波相打つて進み煩うと迄も見らるべき態度あり、丁酉倫理、講演集に於ける井上哲次郎氏の「倫理と宗敎」との如きを見ても知らるべく、氏は猶ほ宗敎を以て人類に永久に必須なるものとは見ず　否な宗敎的意識を以て人心に已むなき要求より成るとはせず、人類進歩の或る階段にのみ必要なりとするものゝ如し、最も之には論旨の模稜なるものなり、或る時は宗敎の本質を云々するかと思へば、或る時は宗敎の敎條を言ふ、若し前者を知るならば宗敎の決して一時的性質の物ならざるを會得すべき筈なるに、「佛敎では西洋人

が滿足しない、クリスト敎では東洋人が滿足しない、けれども倫論といふものは西洋であらうか東洋であらうか、何處であらうか必要である、今後倫理といふものが廢るといふ事は無い、倫理は永遠に無かるべからざるものであるから、此者に十分効力を持たせるといふ事は大變に重大な事である云々」といふは抑も何の意ぞ、クリスト敎佛敎を以て今日の吾人に滿足せられずといはんは、事實は暫く擱き論理の上あり之を許す、而かも斯かる既成宗敎の利不利並に起滅あるを以て、眞に宗敎の本質を迄一槪して危み去り反け斥るに至つては妄といはざるべからず、井上氏は更に孔子祭典會に於ても亦曰ふ、「佛敎と基督敎とは酒と餅との如く儒敎は飯の如し」と蓋し一は有りも有らずも關せず焉にて濟まし得れど、一は造次にも顚沛にも離れ得べからず忘れ得べからざるものとなすなり、とはいへこれ尙ほその論調に於て未だ積極的に宗敎を拒否するものにはあらざれど、更に時代が宗敎に繆ひつゝあると逆行して、唯物的利己的所見なり放膽なる盲說を敢てするものあり、「我國體と基督敎」なる小冊子を草せる加藤弘之氏之なりとす、氏は知識と信仰との關係を說いては、「どうしても信即ち正信といふものは、必ず先づ知といふものから始めて生ずると云ふ道理を取らなければならぬ、知を待たずして起る所の信なるものは決して正信でない、必ず迷信であるといふ道理を知らなければならぬ」、民族敎と世界敎とを說いては、「國家は至高至尊のものでなければならぬ、それでなければ眞の統一の出來るものでない、ところが國家の外に世界敎といふものがあつて、國家の人民が國家より支配を

受ける外に、又此世界教の支配をも受けねばならぬ、それが甚だ國家の害となるのである、」といひ、更に「佛教と我國體」「基督教と吾が國體」に就いては佛教の我國體に大害ありし歴史を叙し、扨て「本地垂跡といふが如きことを唱へて日本の神々をば悉く佛の權化である抔にいふ、無稽千萬なることを言ひ出したけれども、併しそれで以て日本の人心を籠絡して佛法に引き入れやうとしたのである、（中略）佛教は尚ほ其力の及ばざる所のあるを自ら看破して多少日本に同化したのであるが、それと同時に日本人も佛教に同化した、（中略）此同化は非常なるもので大に日本の害となつたのであるけれども基督教の害毒に至つては更に大なるものと思ふ」、「基督教は天父なる唯一神なるものを立てゝあらゆる信仰を此唯一眞神にのみ向け、その他一切の崇拜物を悉く偶像として痛く排斥するのである、それ故佛教の如く本地垂跡だの權化だの云ふやうなことを唱ふべき餘地のない性質のものである（中略）して見れば督基教が日本の國體に同化するなどいふことは到底出來ぬことである（中略）日本は世界無比の族父統治であるから皇祖皇宗と天皇の外に、至尊として崇拜すべき筈のものは一もない」といひ最後に科學的證明に就いては、「科學的研究によれば、宇宙を支配するものは唯一の自然法といふ大勢力より外には何もない、此自然法なるものは又一に因果法とも稱するものであつて、全く原因結果の連鎖で自然天然に働く大勢力である、」「天父だの唯一眞神だのと稱するものは爪の垢ほどの證據もない、お化とするより外に致し方はないではない乎、科學的研究の上に證據の現れぬものに、信

を置くことは決して出來ぬことである」といひぬ、之に對して幾多の反駁説現れたるが、就中海老名彈正氏の太陽に掲げたるもの先づその要を得たる節あり、氏は加藤博士が科學者にして唯物的進化論者たるを提ひ、眞面目に科學的研究態度を持し、進化論の學説に遵據して我民族の如何なるものかを研めなば、突然高千穗山上に人種の天降りたりとは信ずべからず、南よりか、北よりか、兎に角他民族の移住したるを知るべく、更に又窮めなば日本民族の祖先も下等動物よりの進化たるを知るべし、然らば日本の古傳説が教うる我國體なるものは何處にある、加藤博士が科學者にして更に進化論者たる以上は如何にして兩者を調和せんとするかと論じ、又伊勢大廟を云々するも學者の科學的研究の結果は、之を傳説に作られたもの◎のみとなす、然らば加藤博士か之を實有としてその威德を追尊することは科學者の取るべき當然の徑路なるかと說き、更に又族父統治といふ事に就いても言を挾み、日本民族中にも馬來人種もありアイヌ人種もあり、支那人種もあり、韃靼人種もあり、此等が渾然融和の結果生じたるものが現今の吾人なり、今の日本人を以て一人種の國民と思ふが如きは大なる誤謬なり、國家は他を包養して同化し行くところに大をなす、偏狹なる民族的觀念を以て將來の世界に立たんことは繁榮を望むの道にあらずとし、更に進化の理法には國家とて宗教とて等しく洩るべからず、昔は民族教によりて維持したるが故に今も尚ほ世界教を入るべからずとか、或は昔は民族的態度を以て外に處したるが故に今も猶ほ世界的態度を取るべからずとするは、偶ま如上の理法を無視したる

の姿に出づ　と駁し、又敬神と忠君とは兩立すべし、神とてお化けにあらず、眞善の根元なり、依つて出づるところあり、眞善に依る吾人の行動が君主に不忠となるとは考へられず、而かるを加藤博士が兩者の間に衝突ありしが如くいふは、是れ信仰と教會との混同說に本づくと辨じぬ、山路愛山氏も亦六合雜誌紙上に於て、その國體論に就き爭ふところあり、要旨を約すれば、國體論は如何に變るも國體は決して亡ぶものにあらず、國體を身體とせば國體論は猶ほ衣服の如きのみ、年齡の長ずるに從つて衣服は改め行くべきが如く、國體論も亦變へ行かざるべからず、神、佛、耶、と順次に取り入れ變態し行きて可なりとなし、更に國體論には解脫を要す、主義の價値は反對論によつて、增すものなれば、加何なる國體論にても取入るゝ寬容の態度を取るべしとなし、又國家の健全なるを要するも議論の健全なることは必ずしも望まずして可なり、健全なる國家は、如何なる議論の横生すとも榮ゆればなりと述べぬ、此等兩氏の所說未だ肯綮を穿ち得て遺憾なしとはいふべからず、知識と信仰との關涉世界教と國家的觀念とに契合ある所以基督教は何が故に汎神論と調和し得ざるか、神と自然法との脈絡如何等、此等は最も重大なる問題大に論及せらるべき問題にして、而かも今日尙ほ閑却し居らるゝを遺憾とす、吾人聊か前々號の本誌に於て述べたるところあるも、又簡略に失して盡さゞるところあり、思想界の多くの問題は每々此の如く、唯だ提供者のみありて一時囂々を極むるの他、十分なる解決の與へらるゝともなく、幽靈的にドロンと消ゆるを常とすること、吾人の常に慊焉たらざるところなり、歲序茲に改まりて生々の氣天地に滿つ、吾人は刮目して戊申の新界を觀んと欲す。

# 丁未文壇概觀

樗陰生

一、はしがき――二、新年の文壇、漱石の「野分」、三重吉の「山彥」、花袋の「隣室」、花袋の作物、其他の佳作――三、正宗白鳥、眞山靑果、靑果の「第一人者」――四、佐藤紅綠、高濱虛子――五、新聞小說一斑、小杉天外の「コブシ」、德田秋聲の短篇、小栗風葉、其短篇と長篇、「天才」「戀ざめ」、天外と風葉――六、夏目漱石、其「虞美人草」、二葉亭、其「平凡」、二葉亭、風葉、天外の序文――七、島崎藤村、國木田獨步、幸田露伴其他の作家――八、自然主義の論爭――九、無責任なる評家の跋扈――十、結論

## 一

一年間にあらはれた、あらゆる創作評論に一通り目を通すといふことが已に可なりの難事である。之を精讀して其善惡可否を分つに至ては、更らに一層の難事である。況んや之れを過去の潮流と對比し、未來の發展と關聯して論評するに至ては實に難事中の至難事である。僕は出來ることなら、先づ第一の事丈けでもやつて見たいと思つたが、俗事身邊に

野染し來て、志を果し得なかつた。のみならず有名な人の有名な作でも遂に讀み得なかつたものさへある。それに丁未文壇概觀もすばらしい！大膽な事だ！と自分でも呆れる位である。併し書きませうと一旦請合つた以上、今更ら逃げる譯にも行くまい。仕方がないから筆を執て見た。執て見ても固より卓見も達觀も出る筈がない。只、今迄讀んだ僅かの智識で兎に角當て見る積りだ。讀まぬものには世間の評判を挾んで置く。概觀も概觀、粗漏な、杜撰な、且又淺薄な概觀である。固より文壇諸君子の淸覽を仰がんが爲めではない、寧ろ文壇に緣遠い人々の多少の參考にもとて書くのである。此點を豫めお斷り申して置く。

## 二

新年の文壇は何時でも賑かである。賑かであるから之を期待する情も常よりは一層盛んである。殊に日露戰爭以後殆んど空前の勢を以て勃興し、飛躍し來つた文壇が、年新たなると共に如何なる新たなる作物を產み出すべきか？文學好きの總ての人は非常なる熱心を以て新年の作物を讀み初めた。僕も其一人である。讀んで見て僕の最も感服したのは夏目漱石氏の「野分」（ホトトギス）鈴木三重吉氏の「山彦」（仝上）及び田山花袋氏の「隣室」（新古文林）であつた。「野分」は其內容も文章も堂々として力あり勢あり、世上の紛々たる外に超脫した白井道也なる文學者をして、現代の浮薄輕佻なる風を警醒せしめた文句、殆んど懦夫をした起たしむるの槪がある。氏の前作「猫」と「坊ちやん」には輕妙飄逸に於て劣り、「草枕」には幽雅縹渺に於て劣るかも知れぬが、偉大且壯烈なる點に於ては氏の作中の第一である。此篇に於て氏は其手腕の一層の高處にあるを示し得なかつたとするも、少くも其才能の甚だ多方面なるを示したといふ事が出來やう。兎に角丁未文壇を通じて力ある作物の隨一であつて、男性的作物の代表といつても差支あるまい。「山彦」は羅（うすもの）を隔て丶朧月を見るやうな幽艷な感情と兎毛彫のやうな精緻微妙な筆致とピッタリとよく調和して渾然たる藝術品、何處に一點の批を打つべき所がない。人或は餘りに夢幻的にして人生の實相に觸れずといひ、又コッテリとして細物式なりといひ、又或は小規模にして根付式也といふものもあるが、小說の範圍、藝術の範圍を餘り狹苦しく限る必要はあるまい。兎に角「山彦」は「山彦」として——一種の藝術品として、明治の作物中、最も永き生命を有するものゝ一つと信ずる。「隣室」は新年の作物中のみならず、花袋氏の去年書いたものゝ中、僕の最も佳作と考ふるものである。花袋氏自身は何んだか少し拵へ物のやうな氣がするといひ、世間一般にも、「蒲團」（新小說九月號）を大喝采したやうであるが、「蒲團」の長所は感情を詐らずに大膽に正直に書いたといふ點にあるので、作物としては「隣室」の方が確かに一段上だらうと思ふ。肺病患者が歸郷の途次、田舍の旅屋で悶死する光景、死後旅屋の主人が死人の袍を探す狀態、凄い程よく書けて居る處がある。一體花袋氏の作物は內容のある割合に、書き方がゾンザイて、具體的に目に浮ぶ所が少く、「戀一束」（中央公論六月號）の如く筋書風になつて了ふか、「マウカ」（趣味五月號）の如く散漫にならんとせるものが多いに反し、此「隣室」は其弊を脫して藝術としての小說

(小說といへば藝術なることが疑ないのであるから一寸矛盾な言葉のやうに聞えるが藝術ならざる小說も隨分多い世の中であるから態と斷つて置く)として最も傑れたものとなつて居る。尤も十二月の「趣味」に出た「田舍ゆき」の如きも、あつさりと具體的によく描けて居るが、此「隣室」の方が彼よりも勝つて居るやうに思ふ。尤も先にもいつた通り「蒲團」は自己の經歷を正直に大膽に書いたといふ點に於て、文壇に少からざる功勞のある作ではあるが、佳作としては僕は矢張り此「隣室」の方を取る。國木田獨步氏の「戀を戀する人」(中央公論)は世の期待に反して失敗に畢り、其他の作にも又大した者はなかつた。只德田秋聲氏の「發奮」(中央公論)と佐藤紅綠氏の「地藏ッ子」(文章世界)と小栗風葉氏の(實は別人也との評あり)「別れ際」(新小說)とは先づ佳作といつてよからう。

三

五六の顯評小說を出したのと、無頓着な風變りの評論を書くので、文壇の變物位に考へられて居た正宗白鳥氏は二月の「趣味」に「塵埃」といふ短篇を出した。新聞の校正係の老人を書いたものだ。飾りのない、卒直な、そして何處となく、シンミリした趣があつて、確かに味ひのあるよい作であつた。尤も其前にも二三の作もあつたやうであるが—現に正月の「新小說」にも「醜婦」といふ作を出して居るが—一體にウッチヤリ放してゾンザイな筆附きであつたので左程世間の注意も惹かなかつたが、此作一度出でゝ、白鳥氏は頓に新進作家の白眉—自然主義の寵兒となつた。尤も「安心」(趣味六月號)「妖怪畫」(趣味の「早稻田號」)などには慊らぬ點もあるが、「寢間」(早稻田文學三月號)「久さん」(中央公論八月號)などは可なりに見所があり、殊に「好人物」(早稻田文學七月號)は「塵埃」と相竝ぶべき佳作であつた。氏の長所は其感情、思想、構案を世間構はず卒直に書いて行く所にあるので、氏の作に他人の眞似の出來ぬ所のあるのは全く其故である。且つ近來段々と書き方も巧みになつて、ゾンザイな所も次第になくなり、筋書風の所も追々に少くなつて行くのは喜ぶべきことといつてよい。只氏の作全體を通じて、執拗な、シニカルな、陰鬱な、自暴的な消極的な、空氣に滿ちて、偉大、光明、熱烈、奔放などいふ積極的の趣味の缺けて居るので、大いなる作物を出し得るや否や疑問だが、假令大作が出來なくても、矢張り自己の特色を守つて、小さければ小さなりに佳作傑作を出した方が氏の爲め、又文壇の爲めだらうと信ずる。白鳥氏を書いた序に同じく新進作家の白眉たる眞山青果氏を論じて見やう。代作家眞山青果氏の名は三十九年頃からなか／＼矢釜しい名であつた。小栗風葉氏が其大作「青春」を書いて居る二年半の間に出した短篇の半ば以上は青果氏の筆なりと噂され、德田秋聲氏の「佐十爺」も亦然りと傳へられ、眞果氏なる名は餘程の好奇心を以て文壇に見られて居た。其青果氏は「新潮」の五月號に於て、初めて自名を署して「南小泉村」といふ短篇を出した。當時は左程世間一般の注目を惹かずに終つたが、眼のある讀者は、其キビ／＼して力ある筆、其精細にして緻密なる觀察、其ローカル、カラーを充分に出してある手腕に、此人の將來の恐るべきを感ぜずには居られなかつた。果然

彼は非常なる精力を以て、其作物を連發し、八月には「蠅の歌」（中央公論「小春日」（新潮）九月には「敗北者」（上）（新潮）十月には脚本「第一人者」（中央公論）「敗北者」（中）（新潮）（敗北者の下は先きに舉げたる「蠅の歌」也）「久本氏」（趣味）を出し、十一月には「茗荷畠」（中央公論）「男性」（早稻田文學）を出し、十二月には「卓上」（中央公論）を出し、且つ十一月からは長篇小說「彗星」を「東亞新報」に揭載し初めた。此中「小春日」の如きは大したものでもないが、然し駄作といふべきは一つもない。何れも皆ハキ〳〵して力が籠り、讀んで見て心地がよい。此中最も傑れたるは脚本「第一人者」である。此脚本其物の人生觀、及び根本觀念には何れ程の價値があるか、人によつて隨分異議もあらう。又會話も少し露骨て、概念が概念として出て居る處もある。諸いくの會話の如き）。然し夫等の缺點は缺點として、偉大な壯烈な調子が全篇にあふれ、北極探險家、楢崎理學博士の思想が非常に強く出て居る。男性的偉大なる作物として夏目漱石氏の「野分」と並ぶべきもの、今年の文壇に於て只此一つてある。而して此主人公の偉大なる人格の外に、勝氣なる姉娘、柔順なる妹娘、無邪氣なる孫を配合して何れも其性格を書き分けて居る手際、主人公の心中の葛藤苦悶と暢氣なる測量師の測量とを反襯せしめた手際、博士の舞臺外の動作を孫をして語らしめた手際、氏は確かに作劇家（ドラマチスト）として成功すべき資質あるをあらはして居ると思ふ。世間では此作と佐野天聲氏の「大農」（都新聞懸賞脚本單行本）とを同じ口ていふものもあるが、其れは大きな間違てあらう。文學的價値からいふと、天聲氏のは青果氏の足下にも及ばぬ。「大農」は悪口すれば主義の化石である。血もない、肉もない。「第一人者」は主義があつても人間の主義である。血もあり、肉もあり、涙もあり、熱もある。舞臺に掛けての功果如何は知らず、讀む（レーゼ）べき脚本（ドラマ）としては、現代を材料としたもの丶中第一等の成功であらう。世間一般ではイプセン氣り也といひ、「早稻田文學」などでは其ボルクマンと類似點まで比較してあつたが、ボルクマンなどには餘り似て居らぬやうだ。全體としてはイプセン式也とはいへやうが、傑れた作の出る毎に何時も外國物を引合ひに出さなければ氣が濟まぬやうな風のあるのはつまらぬことだ。それから「茗荷畠」も事件の叙述の釣合—繁簡の宜しきを得ざる所あるを除いては極めてよい作である。末段などの揮つて居る事はすばらしいものだ。兎に角青果氏は其活動的なるに於て、積極的なるに於て、大柄なるに於て、多才なるに於て、最も望みある、最も恐るべき作家である。若し今日の氏に於て慊らぬ所ありとすれば、描寫が餘りハツキリして風葉氏の如き潤ひと澤（つや）がなく、餘りキビ〳〵して秋聲氏の如きシツトリとした落附と書いた事以外の背後の物—奥行—のないのにあるが、これは年と共に加はることてあらうし、一人に—殊に年まだ若き青果氏の如き人に—すべてを求むるのは求むるもの無理といつてよからう。兎に角、今年の最も目覺しき活動をなしたる一人として、前途の最も有望なる作家として、僕は青果氏を見んことを欲する。氏の長篇「彗星」は自分は全部讀んで居らぬので兎角の評を下し得ぬのを遺憾とする。

## 四

青果氏を論ずれば、同じく新進作家の一人たる佐藤紅綠氏を論ずるのが順序と思ふ。紅綠氏は三十九月十一年の「中央公論」に「行火」を掲げて非常の好評を博したが、年、丁未に入つてからは一月の「文章世界」に「地獄ッ子」を書き、四月、六月、九月、十月の「中央公論」に「人と犬」「鴨」「死人」「復讐」等の作を公けにした。氏は多く男女の情交又は肉情に關することを材料とするので、世間では——氏自身も——「春情文學」といひ、之に向て攻撃の矢を放つ人もあるが、氏がかゝる名を附けて取材の範圍を自ら限る必要なきと同時に、何にも春情を書いたからとて之を彼是れいふの必要もあるまい。此所謂「春情文學」については別に議論もして見たいが、今は餘裕がないから茲にはいはぬ。兎に角、僕は紅綠氏の作物に於て、非常なる才氣と筆力と詩的感情とを認める。時に輕浮と見え、淺薄と見えることのあるのは寧ろ其才氣と筆力餘りあつて、氏を邪徑に導かんとするが爲めと思ふ。趣味のある、色彩のある文字を使て場景を躍然と描き來る手腕に至ては兎ても今の駈出しの若手などの及ぶ所でない。何時でも人を惹き附ける力のある處は一寸他人の眞似が出來ぬ所である。今の文壇の所謂批評家などは彼等の所謂内容一點張りて、理窟を捏れつたやうなものばかりをよいと思ひ、肉附のふつくりした、調子の整ふた作物の藝術的旨味を解する能はざる手合ばかりであるから、氏のものなどを淺薄だとか、馬鹿げたものだとか罵り去て了ふのである。彼等は「鴨」の如く渾然たる——整うた作物を見ても只股がすれて乳に手をやつたから猥褻だといひ、「死人」の如き、大阪の空氣と。死人に集つた見物人の光景があり〱と出た作物に對しても、死に對する哲理が淺薄だといひ、「人と犬」の如き陰深沈欝な作物に對しても何處となく空想的だなどゝいつて居る。氏の作の缺點は少しくお芝居的——本郷座式(例へば「復讐」の最後の如き)なる處にあるが、只無味な、平板な茶飯事のみを小説だと心得て居るらしき一派の人に對する反動とも見れば見られやう。兎に角僅か一年の間に、必らず何處かに見所のある作物を五六も出したのは目覺ましい事で、僕は矢張り白鳥、青果二氏と同じく今日の新進中最も注目すべき一人と深く信じて居る。紅綠氏と同じ俳人から出た高濱虚子氏も今年の小説壇にあつて最も活動した一人である。氏が一月の「ホトヽギス」に出した「欠び」、三月の同誌に出した「樂屋」の如きは從來の寫生文に一寸毛を生やしたやうなものであつたが、四月、五月、八月の同誌に出た「風流懺法」「斑鳩物語」「大内旅館」に至ては世上の所謂小説と一風變つた一體を開いて、其垢拔けした清雅な筆致、其洒落にして脱俗的な觀察、實にシャキ〱して心地のよい讀物であつた。八月と十月の同誌に出た「同窓會」と「勝負」とは又一寸寫生趣味に逆戻りしたやうな氣味があつたが、氏の小説的手腕は今後益々發展するであらうと思ふ。此頃の「ホトヽギス」は氏の作が無ければなんだか淋しいやうに感ずる。最も氏の小説の外に坂本四方太氏の老練な寫生文あり(四方太氏は小説も書いたが矢張り寫生文の方がよい)又小説にも六月に出た野上八重子の「七夕樣」の如き一寸見所のある作、十二月の佐瀬蘭舟氏の「蛇」の如き佳作も出たが、概して氏の出ない時は淋しい思がす

ろ。今後益々氏の奮闘を望む。

## 五

最近三四年の我文壇は一般に短篇小說持切りの姿であつて、長篇は新聞の續き物丈け。而して新聞小說とは只其日〳〵を面白く讀ましてゆく丈けのものだ。といふやうな觀念が何時からとなく、誰れ唱へたとなく擴まつて居たやうである。尤も小杉天外氏の如きは數年來殆んど短篇物を書かず、「魔風戀風」を初め「にせ紫」「絲不絲」等悉く新聞にばかり書いて居たし、又小栗風葉氏の「青春」の如きも新聞に揭げたものだが、新聞小說といへば其中に何となく、俗受け場當りといふやうな分子が含んで徹頭徹尾嚴粛(シーリアス)なものとしては見なかつたやうな傾があつた。然し文壇の大家が其力を籠めた作物を直ちに單行本とせずして、一度は新聞のお勤をさせ、新聞に揭げ終ると直ちに單行本となつてあらはるゝに至て新聞小說にはなか〳〵價値あるものが出て來たのである。「浮雲」以來久しく創作に筆を絕ち飜譯と一回讀切の短篇とを少しつゝ發表して居つた長谷川二葉亭氏は三十九年十月より十二月三十一日に亘て「其面影」を「東京朝日」に載せ其滋味ある文句、其老練な筆致其酸いも鹹いも嚙み分けた人情通に少からず世間を驚がせた。(丁未八月單行本として出て、早稻田文學誌上て其合評まてあつたが世に出てたのは三十九年のことてあるから抜には評をしない) 又小杉天外氏は三十九年三月より「コブシ」といふ長大篇を「讀賣」に揭載し初め三十九年中に、前篇、中篇を終り、後篇の最初の方を出しかけたが、其續きが丁未一年間に亘ても未だに完結せぬ。(最も隨分休戰の日もあつたが) 又小栗風葉氏は丁未三月より「天才」を「萬朝報」に(之れは九月頃までかゝつて、やつと五十何回しか出てず、其後今日迄中斷)十一月より「戀ざめ」を「日本」に揭げ、夏目漱石氏は六月より十月に亘つて百二十七回の長篇「虞美人草」を「東京朝日」に揭げ、德田秋聲氏は「婿」を「國民」に「凋落」を「讀賣」に揭げ、長谷川二葉亭氏は「平凡」を「東京朝日」に揭げて居る。(十二月三十一日て終る積り)。國木田獨步氏の如き熱心なる短篇主張者も亦、「暴風」なる長篇を「日本」に載せかけ(中絕)、今春には夏目漱石、島崎藤村の二氏亦「東京朝日」に執筆せんといへば、新聞小說の活氣附けることは拒むべからざる現象である。僕は丁未文壇の主もなる新聞小說を評するに當て先づ、天外氏の「コブシ」から初めやうと思ふ。「コブシ」の前、中の二編は精讀したが、後篇は飛び〳〵にしか讀んて居ない。だから大膽な評論をする譯には行かぬが、讀んだ丈けて評しても、氏は實に堂々たる大家てある。新聞小說は是非共面白く書かれればならぬ、讀者を喜ばせればならぬといふことは氏の深く考へて居る處らしく、其結果として僕等から見て、少し甘過ぎるやうな所がないてはないが、一事件、一物象を目に見ゆるやうに描寫する手腕、殊に會話を以て場景、心理悉く活躍せしむる技術、人物に熱あり情ありて時に腕鳴り肉躍らんとし、時に涙落ち腱滿はんとすの結構、此點に於ては確かに今の文壇に獨步して居る。只氏が今日の如き技術を以て新聞小說のみに立籠り、「初姿」「女夫星」等を出した時の如く、單行本として世に問はず、「みだれ髮」「仇

情け」を出した時の如く雑誌などに少も書かぬのは、多少其餘を讀者受けにのみ偏さしむるやうな事がないかと氣遣はれるのである。今日新聞小說家として天外氏と對立して居るのは疑もなく小栗風葉氏である。徳田秋聲氏の新聞小說もジミなシットリとした落附いた面白味は充分にあるが、秋聲氏は寧ろ短篇を得意とするが如く、又今日は短篇に力を入れて居る如く見ゆる、氏の「犠牲」(中央公論十月號)などは丁未文壇短篇中の白眉であつて、「廢れもの」(趣味六月、七月號)「絶望」(趣味十二月號)及び先きに擧げた「發奮」なども佳作たるを失はず。風葉氏などの篇に比すれば、調子も整はず、磨きも足らない處はあるが、其整はざる所に一種の調子あり、磨きを掛けざる所に一種の光ありて他人の學び難い獨得の趣がある。たゞ「夫戀し」(早稻田文學九月號)などは餘り俗書風で少し慊らないやうな氣がするが、兎に角氏の短篇は甘いものだ。殊に書いてある事以外に—其奥にこう何かあるやうに見せる所は他人の出來ない腕と思ふ。風葉氏の短篇も決して惡くはないが、其長篇に比すれば遜かに見劣りする。例へば「女髪結」(中央公論四月號)の如きは殆んど渾然たるもので「好奇心」(文章世界六月號)「弟娵」(趣味九月號)の如きも決してわるくはなく、又「生みの母」(早稻田八月號)の田舍家の光景、「未亡人」(中央公論十月號)の鎌倉の月夜なども他人の出來ない筆致である。艶のある、潤ひのある、調子のある、ふるひつきたいやうな巧みな文章はどんな短篇を書いても必らず出る。然し氏の長所はどうしても長篇にある。「青春」に畢生の力を籠めて苦心してから、氏の力量は俄かに數段上に飛躍した。氏の三月廿三日から「萬朝」に掲載した「天才」は「青春」の絢爛艶麗、令孃の盛裝したるが如きに對して、平淡、素朴、紅も白粉もつけぬ年増美人のやうである。人を迷はす力は却つて後者にある。前者はピカピカ光る。後者は澤消してある。ムダがなく、引緊つて、落付いて垢拔のして居ること天下の絶品である。若し「青春」をアートの作品とすれば「天才」はアートレス、アート(若しかゝる語を許さば)である。一段上のアートである。十一月から出初めた「戀ざめ」に至ては氏の最も特色たる南方的の、情のある、香のある、色のある、艶のある、光のある、ツルゲネフとダンヌンチオを一所にしたやうな文章、で「天才」の淋しく、暗く、陰欝な空氣のものと好個の對照をなして居る。何れを何れといはれぬ出來榮、獨り丁未の文壇のみならず我明治文壇の最も誇りとすべき名文章である。師匠の紅葉氏なども風葉氏のに比べると、コンヴエンショナルの處多く、一體の調子も戯作者めいた、古くさい處がある、風葉氏は今や師匠の上、數段の所にある。今日の處風葉氏と相對峙すべき作家は矢張り天外氏であらう。勿論天外氏の人物は風葉氏の程現代的でない、個性的でない。どうしても類性的で又必らずしも明治四十年の人間と見なくとも濟むやうである。此點に於ては風葉氏の方は遙かに近代的で又進歩して居る。然し天外氏のは直ちに人心の靈火を捉へて人の胸奥に迫るやうな美所がある。意氣あり、熱烈あり一氣熱し來れば、教育もなく地位もなく名譽もなく、直ちに情熱の動く所によつて驀進するやうな痛快な所がある。風葉氏のはどうしても、智識と推理との

絡まつた情熱で、其處が即ち近代的なる長所なると共に又作物の人を動かす點に於ては時に意氣の壯なるものに及ばざる事もある。天外氏のゝを讀めば情緒激越する。風葉氏のを進めば内觀沈思する。前者は本能の戀愛をなし、後者は本能主義の戀愛をする。前者は多く人物の會話で以て事件を發展せしめ、後者は多く作者の叙事で以て人物をあらはして行く。事其事、物其物を見せることは前者の特意で、事の意味と物の趣とを出して行くことは後者の特意である。前者の缺點は新思潮に觸るゝ後者より少きにあつて、後者の缺點は感情の高潮に達すること前者よりも稀なるにある。前者には人間の小說的なる方面を見、後者には人間の實生活の方面を見る。前者面白く後者味ある。會話は天外が上手で地の文は風葉氏が甘い。此二人は何といつても僕は現代小說家の大家と信ずる。

## 六

夏目漱石氏が大學、高等學校等の敎師を廢め、「朝日」に入て純然たる文士となつたことは丁未文壇に於ける注意すべき一事實であつた。氏は五月三日に「入社の辭」を書き、全四日より廿七回に亘て「文藝の哲學的基礎」といふ論文を書き、六月二十三日より十月二十九日迄、百二十七に亘る「虞美人草」を書いた。論文に書いた事も非常な大問題で充分論議すべき價値あるものと信ずるが、今こゝにはいはぬ。扨「虞美人草」は全體として失敗の作と僕は信じて居る。尤も新聞で三分の二許り讀み、其後切抜きを借りて一寸目を通した丈けで全篇を精讀して居らぬから大膽にはいはれぬが、全體としては確かに氏の失敗の作と思ふ。一體氏の文

事は、何時か氏がステヸンソンの文を評した如く鮎が川を上るやうな趣に長所がある。サツと水を切て、スウと上る。又スウと上る。如何にも活りがよく、簡勁で、鋭快で、而して豪健である。讀んで胸が透く、溜飲が下がる。キビ〳〵して、力があつて、くどい所がない。此れが氏の得意である。然るに「虞美人草」の文は處々には氏の特長も出たが、全體は寧ろ蝸を卷いて、ぐる〳〵と迷宮を廻つてそれから明るみへ出るやうな處が多かつた。其爲めに可なりに讀み惡い。味へれば哲理もあり敎訓もあつても、味へる前に一寸ウンザリするやうな所もあつた。これは氏の新聞小說の手初めて、一日〳〵を餘り眼中に置かうとして筆端を大に脊束された爲めもあるだらうが、何れにしても氏の得意のものとはいへまい。尤も流石に大趣向で氏の最大長篇である丈け中には非常によい所もある。氏で無ければ書けないと思ふ所は澤山ある。人生哲學の中に入れたいやうな文句も隨分ある。然し作全體としては、どうも感興の横溢せず、如何にも作者も苦しんで書いて居るだらーと思はるゝやーな筆致であつた。此精評は一册の本になつて精讀してからに讓ることにしてこゝには只傑作とは思はなかつた事丈げを記して置く。「虞美人草」の終ると同時に、同じ新聞に揭げられたのが、二葉亭氏の「平凡」である。「平凡」は或男の自叙體のもので、自分の少年、中年、初老時代とてもいふべきものを書いたものだ。文句のこなれた味ひ、精緻微妙な描寫、流石に老練の大家である。紅葉の言葉に更らにいぶしをかけたやうな、純粋人向の言葉使は僕等年少者は生れ更つて來なければ眞似が出來ぬやうに思ふ。

が、しかし慊らぬ點も亦少くはない。全體の調子はシーリアスでなくしてユーモアも時に却て悪洒落に聞ゆるやうな時もある。又作者其人の人格と作物とは別々になつて居て、なアにあれは作物さ、小説さ、といつたやうな調子があるやうに見えるのは僕等には感心出來ぬ。又作者の立脚點が定まつて居ない爲めに、子供の時代を書いて居ても小供が小供を書くのと、大人が子供を書くのと、ごつたになつて、時には大人とも小供ともつかぬものが大人でも小供でもないものを書いてるやうな處も出る。一體日本の文壇にユーモアの缺けて居るのは事實だから、ユーモアを出すことなら、初めからユーモアを目的としたらよからうと思ふのに、此作にあるユーモアは其以外のものと丸で調和せずに書かれてあるので、何だか全體を戯作じみた感じを起させる。風葉氏などは何處までも自然派流のシーリアスな態度で作をして居る。彼は「天才」を揭載する時には「世紀末と謂ひ過渡時代と謂ふ、是我等が生存し呼吸する周圍の空氣也。神經過敏と謂ひ自意識病と謂ふ。是我等が思考し行動する自己の朝夕也。吁、墮落乎、不健全乎、我等の知る處に非ず、唯我等靑年の如斯きものあるを奈何。著者は我及び我友の活きたる歴史を忠實に錄せんとする耳」といひ、「解脱」(趣味十一月號第一回)を書く時の序(趣味十一月號)には「我等は現在の此の煩瑣なる生活に堪へず。親子と云ひ夫婦と云ひ、家庭と云ひ社會と云ふ、其等幾多の瑣瑣なる覊絆や、繫累や我の自由を縛し我の本眞を制して、徒らに虛僞の生を營ましむ。何故に我は孤獨ならざるぞ。あゝ、一切の羈絆を斷ち、一切の繫累を脫して、直ちに人間の自然に復らんと欲する一念の常に切なるを覺ゆ。然かも我自ら既に孤獨を許さゞるの生を享け、生れながらに本眞を過られて人となる。强ひて自然に復らんとすれば我は滅びざるべからず。あゝ、死して我を全うせんか、生きて己を欺かんか、」「解脱」の一篇、說いて未だ其歸着に達せざるを憾む。」といつて居る。天外氏が「コブシ」中編の序に「一生一代の作と云ふのは稿を起す時の作者の覺悟をさらけ出したものだ。我が技術の此上に出ないか否かは、今後の作が證據立てる筈だ」といつたのともコントラストをなして居るが「平凡」の序に「題は平凡、書き方は牛の涎云々」といつたサチリカルな態度とは一層のコントラストをなして居る。僕は二葉亭氏の文字の豐富、手腕の老實、描寫の精緻等には充分に敬服するが、作物に對する態度は今少し嚴重であつて欲しいやうな氣がする。

## 七

三十八年の秋、「破戒」を出版して一躍文壇の寵兒となれる島崎藤村氏は例によつて自重、濫りに作せず、四十年には僅かに「黃昏」(文章世界六月號)「並木」(文藝倶樂部「ふた昔」)の二短篇を草した許りである。「並木」は孤蝶、秋骨二氏をモデルに使たといふことから、所謂「モデル問題」を惹起し、孤蝶氏は九月の「趣味」に「並木の主人公について」を書いて正面から不平拒否の聲を擧げ、秋骨氏は同月の「中央公論」に「金魚」といふ短篇を書いて、裏面から自己の性格の「並木」にあらはれたると必ずしも同一にあらざるを示さうとした。其他種々の方面に於て此事が論

議されつゝあるのに、又花袋氏の「蒲團」も作者の家に宿りたりし女弟子をモデルとしたるもの也とて、これも世論に上り、一時囂々たる有樣であつた。思ふに自然派の立物からいへば自己及び友人又は知人の如き自己の最もよく知り拔て居るものをモデルにするのは當然の事で、性格の眞、世相の誠を描かんとするものにとつては蓋し止むを得ぬことであらうが、然し其モデルに使はれたものが其爲めに不利益を蒙るか、迷惑をするが如き場合には、假令(よし)モデルに使ても、之れは何某を書いたものだと公言することを避けるのが、當然の義務だらうと信ずる。扨、左程問題になつた「並木」其物の價値は如何といふに、僕は世の多くの人とは異つて、甚だ文學的價値の多からざるものと思ふ。或人は明治四十年頃の中年の人の思想がよく出て居るといつたが、あーいふ風の說明的の出し方なら、何にも藝術家や小說家を待たなくても出來やうと思ふ、或は論文か、叙事文にてもした方が却てよく出るかも知れぬ。「黃昏」の如きも僕にはどーも感服が出來ぬ。具體的に描かれずして、抽象的に、描寫式に行かずして說明式に行くのが、どーも藝術としての要作に慊はざるが如くに思ふ。けれども藤村氏の作に望む態度に至つては僕の常に嘆美する所を禁じ得ない處で、自重自强、急がず燥らず、而かも着々として、其目的に向て進み行く眞實の態度は實に羨むべきものである。只其文章が未だ新體詩人流の空想、誇張の弊を脫せず、又時にだら〳〵と齒切れのわるい所あり、又作全體が前述の如く、抽象的、說明式になつて居るなどは僕の偽らず思ふ所である。而し今春「朝日」に出づべき「春」といふ長篇の如き如何なる新機軸を出し來るものか、窃かに刮目して待つて居る次第である。且つ氏は嘗て僕に語て、吾々の活動は今後十年にあるといつた。氏已に此希望と此抱負あり、今日の出來榮のみを以て氏を酷評し去るのは愚と信ずるが故に、これで止める。藤村氏を論ずれば、氏と並び稱せらるゝ國木田獨步氏を評せねばならぬ。一言にしていへば丁未文壇に於ける獨步氏は懷疑の人であつた、煩悶の人であつた、過渡の人であつた、迷路に立てる人であつた。二叉路の分れ目に立てる人であつた。從來の傾向より、一轉せんとして未だ適當の途を見出さず、暫らく躊躇逡巡せる態度であつた。凡そ進步向上を忘れぬものには何人にも煩悶もある、疑問もある。けれども夫れは或階段から階段に移る時の現象で已に或階段の中に入れば次の階段に移るまでは、興が乘り、油が乘り、氣が乘て非常に活動的になるものだ。獨步氏の「獨步集」「運命」などは確かに一定の見解と自信とあつて、大膽に、着實に、思ふがまゝを書いて居るが如く見ゆる。然るに三十九年頃から四十年にかけての氏には、確かに從來の傾向其まゝを踏襲するのに厭いて、別に一新機軸を出さんと煩悶して居るやーな樣が見える。丁未第一月に出した「戀を戀する人」は前にもいつた通り失敗に歸り、「波の音」(文章世界一月號)も「都の友よりB生へ」(趣味の早稻田號)も「都の友よりS生へ」(中央公論八月號)も「節操」(太陽九月號)も決して見所のない作ではなかつたが、どーしても完璧を以ては許されなかつた。只「疲勞」(趣味六月號)と「窮死」(文藝俱樂部「ふた昔」)の二つ丈けは斷片的ながらも非常によい所があつ

て、此人は煩悶の中にも時々金塊を掴み出す人ぢやと嘆服せしめた。僕は今委しく一々の作家を論評して居る餘裕もないが、一寸藤村氏と獨歩氏との比較をして見やーなら、前者は勉强を以て書き、後者は天才を以て書く。前者は柄が大きいが鈍く、後者は小さいが鋭い。前者は大理石の殿堂を建てんと志し、後者は金剛石の一塊を探らうとする。大いなるものと長篇とは前者の得意で、深いものと短篇とは後者の得意である。獨歩氏身に病ありて、體弱し、切に自愛自重せられんことを望む。以上ざつと主もなる作家の主もなる作物を列擧紹介して來た積りであるが、此外に見落して居るものも少からざることであらー。幸田露伴氏は其大作「空うつ浪」の稿を繼ぐことも速かならず、僅かに出したる二つの短篇「一條路」(中央公論四月號)「横鎗」(文藝倶樂部「ふた昔」)の如きも共に失敗に畢て、こゝ暫らく沈靜を守り、柳浪、眉山、水蔭諸氏又舊に依て作すれども漸く時代の趣味に遠ざかり、孤雁、葉舟、薫の諸氏、又未だ世を驚かすの大作名作なく、春葉氏努力して新潮に躍り入らんとするも未だ光明に接せざるの觀あり、三重吉氏「お三ッ津さん」(中央公論五月號)「桐の雨」(東亞の光八月號)を草して共に佳作たるも、未だ「山彦」の精細幽沭なるに及ばず、霜川氏、葵山氏又甚だ見るべきの作なく先づ大體は以上に述べたるが如きものと思ふ。

## 八

こゝ迄一氣に筆を呵し來て、紙數を數へ來れば、早や已に豫定の頁數を超過すること夥しい。初め此文章の半分を創作の紹介、半分を評論の紹介に宛てやーとの計畫であつたが、到底駄目になつた。仕方がないから評論の方はウンと端折つて、只申譯的に附けて置く。評論といつても固より殆んど其總ては自然主義に關する論爭であつた。凡そ丁未の年程論爭の盛んな年はなかつた。創作も盛んであつたが、論爭の方は一層目覺ましかつた。獨り評論家、批評家のみならず、作者皆出馬陣頭に立て是非賛否の叫びを擧げた。寫生文派の人は寫生文の主張する、自然派はケナス。自然派の人は自然主義の主張をする。自然派ならざる人は之をケナス。年の初めより年の終りに至るまで、殆んど絶間なき論爭であつた。然し全體からいふ時は自然派といふ本流に寫生派といふ支派を入れて丁未の潮流が出來上つたもののやーに見える。凡そ物極に至れば必ず弊を生ず弊を生ずれば必らず反る。自然派に對する批難の大體は自然派其物の攻擊よりは多くは自然派の極端に流れた弊害に向て放された攻擊であつた。假へば所謂無技巧は無技術になり、自然は小問題、小事實、無味平板、特殊例外、變人奇物に限るやーに末派のものが思ひ違ひをしたのに對して起つたのであつた。此問題に對する諸家の見、並べ見た丈けでも面白かるべく、論評すれば更らに面白からーが、無暗に長くなるから何れ其中にゆる〳〵やることにしやう。

## 九

小說に對する批評の丁未ほど盛んなこともなかつたが、又無責任な、亂暴な、盲目な、お門違ひな批評も丁未ほど盛んなことはなかつた。文學雜誌は素より、「讀賣」「國民」等の新聞にも毎月の小說が批評せられ

た。然かも其叮嚀懇切にして肯綮に中り、作者も讀者も共に合點するやうなものは甚だ稀れであつた。これは一部は時代の趣味の動搖にもある。各人個々思ひ〱の思想趣味を以て見るからにもある。然し大分の理由は評家自身の無責任、亂暴、沒眼識なるにあることゝ思ふ。例へば一篇の趣意を取違へたり、技術の巧拙が分らなかつたりするやうな評家も太だ少くはなかつた。恐らく電車の中で拾讀みをして直ぐ筆を下したやうなものも稀ではなかつたらう。又一般に其短所缺點をのみ指摘する批評——あら探しばかり多くて、長所美點を賞揚するが如き批評が少かつた。僕は一般の讀者には却て見えざる妙味、隱れたる趣味を敎へることが必要でなからうかと思ふ。何れにしても無責任な、亂暴な、沒眼識な批評家を我儘に振舞はせておくのは文壇に益なきのみならず、非常に有害な事と思ふ。此價値なき批評家の跋扈といふことが丁未文壇に於ける唯一の惡事、恨事であつたらうと思ふ。

十

要するに丁未文壇は多事なる、花々しき、進取の氣に溢れたる、活動の風に充ち滿ちたる、文學繁昌の一年であつた。此潮流は戊申の年に入つて更らに〱活動發展すべき充分の氣運を示して居る。僕は非常なる文壇の樂觀者である。

（完）



## 我輩も猫である（十一）

白や

板塀の下を潜つて、竹墻の間を拔けて、糸の縫目のやうに石塔の間を廻つて、鐘樓の下に來た、鐘はスパラシク大きなもので我輩の眼玉位の大きさな疵が、ぐちや〱と出來て居る、何處の鐘にもあるやうだが、何故鐘に疵が入用なのか解らぬ、それでも撞木の當る處だけは、圓く平らになつて居る、撞木の當る處は圓く平らに出來て居るが、奈何云ふ解か此所の鐘には撞木の要意がない、其結果としてこの寺では鐘を突かぬ、昔から坊主は鐘を突く爲めに、大に世人の同情を失し

て居る、鐘に恨が數々とは、正に坊主を呪つた言葉て、人には木のはしのやうに思はるゝとは、撞木から思ひ就いて、鐘突坊主を嘲つたのかも知れない、坊主丸まうけと聞くと、三日したら止められさうもないやうだが、其身になつたら厭な事も少くはあるまい。

鐘樓の南の、日當りの好い處をトして、暫時休憩して居ると、向ふから見馴れぬ猫が來る、誰か烏の雌雄を知らんやて、人間などには遠見て猫の男性と女性とを認別する程の能力はあるまいが、我輩には痴愚なる犬などの樣に、陰部にある腺の分泌液の臭を嗅がんでも一見明亮正確に男女を認識する事が出來る、向ふから來る猫は正に女性てあつて、而かも毛並凡ならざる淑女てある、人間同士に云はせれば、沈魚落雁などゝ、駄菓子の名の樣な形容をする所だが、猫類はそんな冗長な文句は用ひない、頗る美女てあると云へば足りる、頗るとは非常の意味てある、非常とは常てない事だ、常の美女を知つて居る者は、頗る美女の美しさを想像する事が出來る筈だ、如何に多くの形容詞を冠らせた處て、想像の力を借りずには其美しさを知る事は出來まい、我輩は今この美女を見て、唯美しいと感じたばかりてはない、更に慾望の念が起つた、人間の所謂戀にして、自然派の所謂性慾てある、食ひたい見たい金持ちになりたいなどは、皆性慾であるべきのに、自然派の人は色慾ばかりを性慾と云つて居る、然してこれが人生の根本的要素のやうに云ふ、何と云はうか御勝手てあるが、それ程の重大な事を、何故人間は隠れて行ふかゞ不可解てある、何故に姦通强姦等の文字が卑まれて、貞操處女などゝ云ふ字が尊敬されるのであらうか、若し幾千年來の道德が間違つて居つたものだと悟り得たものとすれば、悟り得た人々は白晝公然子孫の繁榮策を講ずるが可いてはないか、斯う云ふ人に向つては、勿論現時の社會は迫害を加ふるに相違ない、けれども迫害を恐るゝやうでは熱心と勇氣との缺乏せる點に於て未だ主義を標示する資格はない、けれども一方に於ては男女學生の墮落を罵り乍ら、一方では姦通文學を讃美する世の中だから、奈何せまとまつた考

を持つて居やうとは思つて居らぬ、従つて人倫系爪の道を講じながら、笑ひ本を書くのも一興であらうし、色情文學を草しながら、子供の夜遊びを叱るのも妙でげしよう、鎌倉あたりて女學生の後をつけ回す文豪や、にきびの取れぬ先生がたに、色慾に飽きた話をした處て解りやう筈もなく、四十を越えて下女を口說く、巣鴨のお客様方には、眞面目になる丈けこつちが阿呆、大分御盛てとても云つて置くより外に、當分御挨拶の文句もない、

話が飛んだ處へ迷ひ込んだ、美女を前に控へながらこんな考を起すなどは、我れながら餘裕があり過ぎる、其内美女は我輩の前に來て「お寒う」と云つた、佳い聲だ、こんな美聲で話されては、我輩のやうな惡聲では返事が出來ぬ、が默つても居られないから「お寒う」と同じ事を云つた、文句は同じだから善惡醜美の別はない筈だが、何んだか我輩の云つた事は非常に拙劣のやうに感じた、文章とてもこれと同様で、例へ同じ事を云ふのであつても、其云ひ回し方が巧みでないと甚だしく感興を減ずる、自然派の文にこの嫌ひがある、尤も聽力の乏しい者には、音聲の善惡もたいした相違がないと同様に、文章を見る力のない讀者に向つては、字句の功拙も固より多分の差別はない、

扨て我輩は婦女に對する歐米式の禮を以て、「こゝは溫てすよ」と坐を讓つた、然して我輩はこの美形と共に、日光に浴する光榮を擅にした、斯うして互に柔かい毛を接觸して、互に喉を鳴し合つて居る間、我輩は一種美妙の快感に滿されて、假令平々凡々な會話であつても、一々それが云ふ可からざる味を有して、唯このまゝに二人とも、動くことが以來なくなつて見れば可いと思つた、所謂性慾を擅にして見やうかとも思はぬではなかつたが、眞の快美は決して肉交そのものではないと信じて、詩人的の戀を續くる事にした、曾て人の客人が斯う云ふ事を云つた、初めて花柳の地につた時には、更に面白味を感じなかつた、一年程經つたら女を眼下に見下す樣になつた、これが半可通の時代だ、又一年程經つたら女を遊ばせる樣になつた、初

めは性慾が目的だつた、中途は自惚で持つて居た、終りは性慾も自惚も取れて、唯酒中の趣を限りなく樂んだと、若い文士には知れないだらう、我輩と雖ども若年者だが、性慾に夢中にならぬだけに、多少大通の趣を窺ふ事が出來る、暫くすると、美女はすや／＼と眠り出した、誠に樂しさうである、夢に現はるゝものは花か蝶か、我輩は更に彼女の夢を夢みて、深い迷想に陷つた、

## 丁未の暮

狂太郎

○「お正月だつて、フム最う十日か、」困るなあとは言はぬが、昔は付きの白シャツの手で氣無性氣に頭の隅を掻く、浮垢がチラ／＼落ちる、之は我輩の新年に對する態度である、「お母さんお正月はいつ最う十五寢て、可いなあ、お餅搗くのは何時」などゝ、はや餅搗の時に熱心に霰玉を着けることなどを夢想して得たものだそんなことを思ふて今の我輩とは妙な對照である、除夜に鬼が來るといふ恐れもないが、元旦にお屠蘇を飲まうといふ希望も亦ない、之は如何した事であらう、寄る年波、などは少々老爺むさいが、確に年は人の感覺を鈍痲させる、

或る學者は人に少壯老死といふ樣な抛物線形の經路を許さぬ、オギヤアとお母の腹を破つて穩婆の手に渡つたら最後、最う人は衰へ初めるのだ、でも太るつて、我々の胃嚢だつて弱れば太る、胃擴張なるものがそれでないか、柔い骨が硬くなるつて、蝦蟇だつて電車往生やれば鰐口と間違はれる程に乾固まる、身體の太り、骨節の硬くなるのを見て、直に人間の成長の發達のなどゝ言へるものが、太るのと硬くなるのを強ち成長發達にあらずとはいはぬが、其樣な方面に着目するものぢやない、物は何でも割合で行くもんだ、ポチリと胚種が母胎に宿つてそれが大きくなる、愈よ進んでお玉杓子の眞似をする、手が足が出て尾が取れて、忽ち縱目横鼻の人間樣となる、その間の成長發達の割合と、臍の緒フツヽリ青竹の切つ殺がして、母胎と緣は久離

結局、今度は乳房に縋つて温い膝の上を塒とする樣になつてからの、その生長發達の割合とを比較すると十に三だか二だか一だか算盤が彈けぬわい、之れじや唯物論者めくか、二十世紀だから唯心的方面も述べて見樣か、用語の適不適などは暫く擱く、小供の時の智惠の付き方と大供の時の智惠の付き方とは非常に違う、日本語は、不規則だ、世界一に六かしいなど、羅馬字論者などは言ひめさるが、その破格の多い難國語を、覺えるとなつたら二月三月で通辯だけは出來る、一年もやつたら最うスッカリ及第だ、大供の奴が親の脊脛に喰ひ付いて、大枚幾千といふ膏汗の固結物をせしめ、黒髭から赤髯にまで縋つて幾數年、それで最も規則的だといふ獨逸語さへ手に入らぬぢやないか、之を以ても我々が年と共に老い込むことが分ると、

理屈は羽織の紐だ、付け樣と思へば何處へても付くものか、それは知らぬが我輩聊か今の身に於て尤もと思ふね、三十近い身空に於て早や老い込むなどいふ事は、一般にいふ人の說が本當ならば決して有るべき筈じや無いのだ、然しデッセント、オブ、マンといふダーウヰンの本に對してはアッセント、オブ、マンといふ本もある、同一事實に對しても人によつて見方は樣々である、蝙蝠が高い枝からブラ下つて往來の人を見ると人が皆逆立ちして歩くと見るそうだ、天の橋立へ行つたら兩股の間へ首を屈め込んで見るもんだといふ、何も天の橋立には限らぬ、おいらも餓鬼の時代に、隨分街道でやつたものだ、光景一變して快趣を增すことは妙だね、いや人間ばかりでもない犬畜生でも左樣とやらいふ、犬に吠えられたら四つん這ひして見せろと善く敎はつたものだ、同じ人間でも忽ち獅子王か何ぞの樣に見えて犬畜生肝膽碎くる相だ、

理屈は付け樣なら矢張り我々は壯年時代であると、御多分に從ひ得べきであるが、如何やら僕には左う考へられぬとは、何たる因果であらうぞ、蒲生重章の新春の句に「不同士偶破歸地欲與紙鳶飛戾天」といふのがある、僕もそんなドエライ事の一つも言つて元氣付けて見樣かと思ふが、イーヤ糸目が切れたら大變なこつた、

紙鳶と共に飛んで天に戻らずとも、土偶と同く破れて地に歸せんと欲すだ、地に歸せんと欲すだつて、左樣無雜作に歸せられるものぢやない、

こりや縁喜でもないハックショ又風邪か一杯自然に合ひ、三杯大道に通ずだ、酒だ々々と早速の玉子酒の注文、破れ窓を風が吹いて洋灯の火が一寸亂れる。思ふと歳末の感は何時も同じだ、と思へば矢つ張り春にして見たいわい。

その事となく春を待つ桐火桶

# やまがらす漫筆

風南山

⦿醉李白師走の市に見たりけり。　几董

吾輩は師走が好きだ。

⦿鼻下には既に、パックのモデルにならば、進て御用達をしても恥かしからぬ程の鬚が出來た。無論お正月を待つ程の齡ではない。三十にして未だに家も成さぬ。可愛い人などは固よりおいてに成らぬ。従て掛け取りの聲に動悸りとして、今や喉元にさし迫つた咳を危く呑み殺すとか、雪隱攻め苦境に陷て、寒風に長々とお臀を晒らすの餘儀なき次第に立ち到るとか、あてもなく上野の山をぶらつき廻らればならぬとか云ふ心配は毫も無い。無いからでも有らう、掛取り君の『今日は』が勝手口の障子からぬッと頭を出す所は、俳的でなか〱振つてゐると想ふ、只なら一寸出逢つて見たい感じがする。

⦿實際吾輩は妙に年の暮の光景をおもしろく感じる、正月が來ると急につまらなく成る。

正月だ正月だと騒ぐ周圍の聲が、吾輩にも人並に正月の氣に成れと促すやうに聞える。吾輩も少しは成る。しかし折角正月の氣に成つて居る出鼻を、雜煮餅と云ふぐちや〱した元始時代の料理法が御見舞申す。氣の利かぬ話だ。數の子とゴマメの御肴て、藥臭い酒を呑めと云ふ。大の男をまゝごと趣味に引き入れやうとするゝ感じは、一寸おもしろいが、之もほんの笑談に一日呑て見るまでの事だ。手持無沙汰て、居間に退却する。机の近邊が馬鹿に奇麗に片づいて、小ぼけな一輪挿に水仙か何かゞ挿してある。床の間を見る、平常は古新聞、古雜誌の山を築いてゐたのが、急にがらんとして例の海舟の贋造物がぶら下つて居る。お正月奴、ふざけた眞似をして、吾輩をして群書堆中に逸樂然と臀を据えしむるの妙趣を奪つて仕舞つた。此處にも亦手持無沙汰を感ずる。

⦿しかたが無いから七つ降りの背廣に、劣らず古ぼうけた中折帽を被つて、てくり〱年始廻りを始める。大通りに出る。シルクハットの二人曳きが幾つも幾つも威勢よくやつて來る。中には二三年前、同じ學校で同じ講義を聽いた先生もやつて來る。かうなるとお恥かし事だが、古洋

服の胸の底には、いつしか消極主義の氷がとざす。面白くない。歩きたくない。さりとて往復九錢を奮發して、一驅け驅けて見るやうなあてもない。どうもお正月は當分の所吾輩によい顏を向けて與れぬと見える。

◉吾輩はどうしても師走が好きだ。年の暮になると、世の中の奴が多忙しさうに馳ずり廻つてゐる街を、吾輩はよく馬鹿な顏を夜風ひる風に吹かれて、ぶらり〳〵散歩する。宛然糸瓜が秋風に吹かれて、ぶらり〳〵するやうなものだ。しかし之が當人にはなか〳〵面白いのだ。誰か糸瓜の心を知らんやては有るが、秋風にぶらり〳〵揺られてゐる所は、定めし糸瓜にも面白からうと想ふ。

◉我が親愛なるぶらり〳〵先生が棕櫚竹のステッキを引きずり廻る屈竟の河岸は、根津の八重垣町だ。カンテラの油煙を熾ンに立てゝ、兩側にはずらりと大地に露店を出して居る。おでんやの屋臺、稻荷鮨の屋臺、大福に牛の味噌煮の屋臺、印袢纒の背が處々立て居る。それから古着古足袋賣り、シャツに手袋屋の前、カラリコロリの下駄の音が一寸立ち止まる。岩見武勇傳、さのさ節、新門辰五郎をひつくり返してゐる若い衆の後には、鳥打帽廿一二の書生さんが、腕組みをして佇んで、右端の枕草紙にザロザロ目尻を流しつゝあることを屢々見受ける。四ッ角では銀ながし、何とかの名藥が、頻りに雄辯を揮ふ。

◉吾輩が今一つの目星しい河岸は、白山上の古ぼうけた穢ない家でよくやる植木のセリ賣りである。暮れの廿六七日頃になると毎晩やる。セリに掛けるのは梅に水仙に福壽草、松もあれば竹もある、櫻の盆栽もある、セリの音頭を取る親爺が鯉口の外套を羽織つて、ヌーと禿げの大藥罐頭をふり立てゝ、サア和尚だ、拳固だ、とわめく處は、なか〳〵に振つた俳趣だ。見てゐるといつも買たくはなるが、ついぞ買つた事はない。師走はどうも吾輩の性質に適すると見える。

## 新刊批評及び紹介

### ▲故事成語大辭典

簡野道明著
明治書院發行

著者七年間の苦心を以て大成したるものにして吉田東伍氏の「大日本地名辭書」に亞ぐの好著也。十三經、二十四史、諸子百家を初め、あらゆる詩集及び隨筆雜著に渉りて、一切の成語、一切の故事及び人口に膾炙せる格言詩句等を網羅し、錄する所の語句殆んど二万に及ぶ。而して部門を以ていへば天文、歲時、地輿、職官、政治、禮制、音樂、人倫、文學、學術、武功、兵器、人品形體、人事、門閥、交際、技藝、釋道、飲食、衣服其他花木竹石禽獸蟲魚等、支那文學に關係あるものは一切之を收集し、且つ主要なる經史子集の解題と、傑出せる文人學者の事略とを載せたり。語句の排列は五十音順にして、卷末には頭字の畫數によつて引くべき字畫索引を添へたり。學者、操觚者、學生其他苟くも書籍を手にするものには缺くべからざるの良書にして、從來同種の著作に比して、斷然として傑出す。只望蜀の念をいへば卷末に今一つ五十音順の索引を附することにして、我日本人には漢字の字畫によつて引くよりは五

十音順によること遙かに便利也。今後版を重ぬる際には是非之を附加せられんことを望む。兎に角重野博士等の「漢和大辭典」と並ぶべき良辭書なることを信ず。（定價金五圓）

▲稿本石田三成　渡邊世祐發行

柴屋朝吹英二氏が「三成が英雄の本質と。忠勵の志氣とを有せしに拘らず、從來多く直解されずして、一般に誤り傳へられ、久しく其眞面目を掩はれたるを悼み、一片同情の念に堪へずして」文學士渡邊世祐氏をして史料を編纂せしめ、三上博士の校閲を經て、世間同好の士に頒ちたるもの也。其學や美、其志や嘉すべし。只三成が果して忠誠の志氣のみより徳川に反抗したるや否や、尚異論なきにあらざるべきも、此書が三成に對する研究を促したるの功績のみにても尠少にあらず。本號又松井柏軒氏の評論あり。今玆に詳論せず。（非賣品）

▲青果集　眞山青果著　新潮社發行

眞山青果氏の作を集めたるもの也。小說七篇、脚本一篇を載す。何れも皆讀むべし。殊に篇中の作悉く昨年五月以來のものにして僅々半年の間にかゝる數多き佳作を公にしたるを思へば氏の勢力と筆力と寔に驚くべし。氏の作は我誌上の讀者の熟知せらるゝ處、且つ本號評論欄「丁未文壇概觀」中に論評しあれば玆に重ねていはず。兎に角丁未文壇の產み出したる最も價値ある短篇集たることを一言し置くのみ。（定價七十錢）

▲人性の研究　神田左京著　岡崎屋書店發行

曾て「六合雜誌」上に「戀愛哲學」として連載せられたるものを修正增補し、元良博士の序文を添へて出版したるもの也。主として進化論の立物より戀愛を研究し、交ふるに小說戲曲等の引例を以てし、堅實にして且つ興味ある著也。凡そ生物にして戀愛に興味を有せざるなきことショーペンハウエルの所說の如く、而して戀愛の研究といへば多くは浮薄淫猥に流れんとするものある今日に於てかゝる眞面目なる著書の出でたるは喜ぶべし。（定價七十錢）

▲西郷南州言行錄　臼田石楠編　鼎立社發行

南洲翁の人格の偉なるは人皆之を知る。此篇、行篇、言篇と分ち、前者は多く編者の叙事により、後者は多く翁の書簡又は談話による。前者固より面白きも後者更らに面白きを覺ふ。（定價六十錢）

▲バイロン詩集　兒玉花外譯　大學館發行

バイロンの短詩を四十篇譯したるもの也。餘り放膽流の譯し方にて調子などはメチヤ〳〵なるもの多し。譯者の今一層愼重の態度をとらんことを望む。（定價三十錢）

▲人道主義　小田頼造譯述　隆文館發行

トルストイの著 "What shall we do?" を飜譯したるものにて、故綱

島梁川氏の序文を添へたり。梁川氏の序文、文章もよく意見もよし、本書の內容、亦堂々として流石に世界の偉人、哲人の意見たるに背かず、只譯文餘りに原文に忠實ならんとしたる爲めか、稍々平板軟弱に陷り、翁の直截勁健なる面影を傳へざるの趣あるは惜しむべし。されど荀も人生問題に興味を有するもの丶一讀すべき書也。（定價九十五錢）

▲ほのほ（上）　德田秋聲著　今古堂發行

德田秋聲氏の苦心の作「ほのほ」の前編也。「國民」紙上に連載せられし當時より好評嘖々たりしが、一冊の書に纏め見れば更らによき心地す。一體氏の作風はジミな行き方にて、花々しき處は少きも、なか／＼に味のある書き振り、他の眞似のならぬ特長あり、何れ後編の出づるを俟て細評すべし。（定價五十錢）

▲家庭小說もつれ綠　吉野臥城著　大學館發行

新體詩も作り、俳句も作る氏は更らに又小說を作れり。あはれに、しとやかなる筆致、家庭の讀物として穩全なるもの丶一つ也。（定價廿五錢）

▲法華經物語　山崎紫紅著　昭文社發行

「法華經を讀まんと欲する人に資せんが爲め」、法華經を通俗に解說したるもの也。著者は流石に脚本家丈けあつて、面白く分り易く書きなしたり。之によつて法華經を讀まんと欲する人の數多く出でなんことを望む。卷末の索引は便利也。（定價五十錢）

▲宗教小說自覺　村山鳥逕著　昭文館發行

未だ上篇丈け也。下編の出づるを俟て精讀細評せん。（定價六十五錢）

▲女子學生ふところ鏡　巖谷小波著　大倉書店發行

女子に無くてはならぬといふ、その意味からふところ鏡と名を負うせたとはしがきにあるが、手ふき紙、時の女、女子と文章以下十四篇、孰れも著者が多年親しく家庭に於て經驗し、感觸したところを、瀟洒なる筆致で精細に寫したもの、成る程と首肯かれる着眼が多くある、決してその名に負かぬことが知れる、附錄として收められた小說一篇、題して看護婦試驗といふ、清麗な筆で一女性の美しい性格を寫したもの、家庭的の好箇の讀物である。（定價金五十錢）

# 中央公論の讀者に告ぐ

中央公論が非常なる勢を以て發展向上の路を辿りつゝあること、全く以て愛讀者諸彥の御眷遇の厚きによること〻感謝罷在り候。扨、毎月原稿の蒐集するもの益々多きを加へ、頁數の制限より絶好の材料を空しく逸し去るが如き遺憾も少からず候につき、此際**定價**を**廿錢**に引上げ、頁數を増大して、益々好材料の網羅に勉め、益々發展向上に勉むべき計畫に御座候へば右御了承下され度、此段謹告致し候也

反省社庶務部

尙近來、雜誌中、落丁あるものも度々見當り候が、嚴に製本屋の取締りも致すべく候へ共、多數の事故若し萬一左樣のもの有之候節には、本社直接の購讀者は申すに及はず、何れの賣捌店にて御買上げ相成候仁にも本社に御郵送あれば御取換申上べく候

# 中央公論第廿二年總目錄

自四十年一月
至同年十二月



## 社論



## 公論

## 海外新潮

所載頁數

# 說苑

## 海內思潮

所載號數



## 小說

所載號數

# 新體詩、和歌、俳句



# 評論

# 文藝時觀



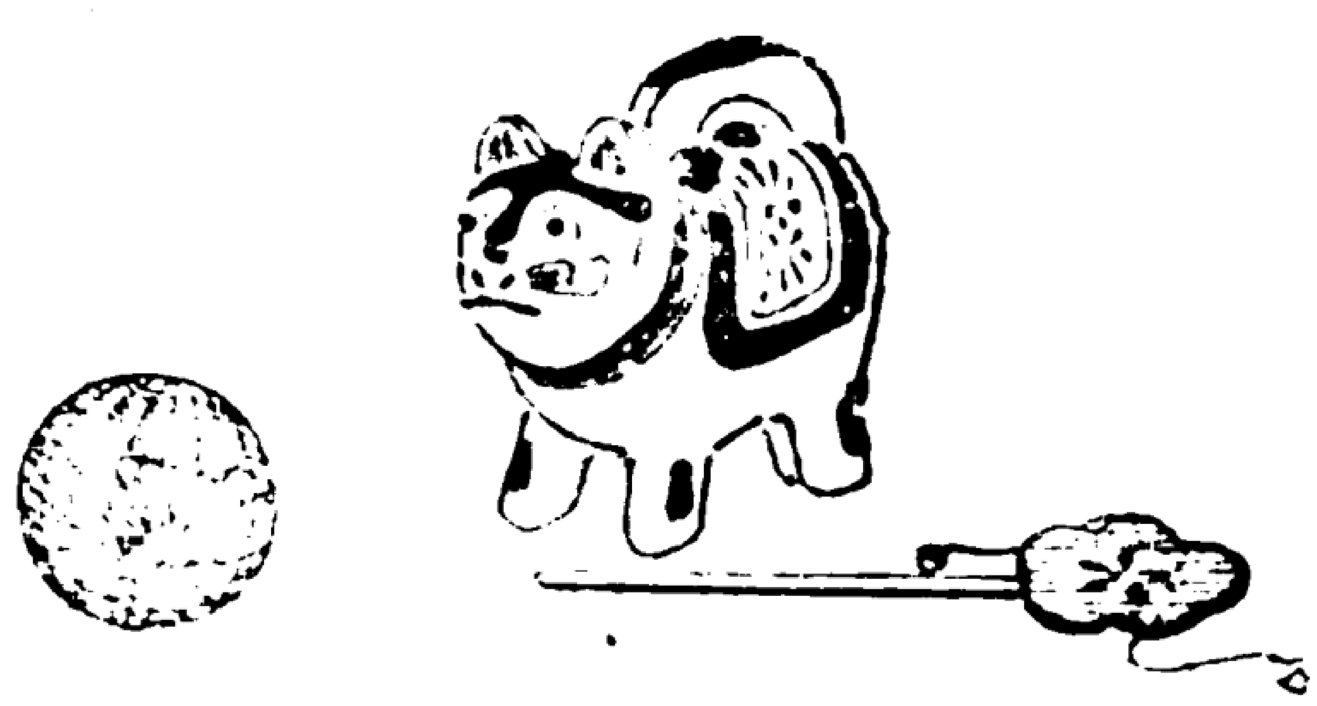
# 雜俎



# 新刊批評







◎壹冊定價金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅八錢）

| 冊數／國別 | 內國 | 外國 |
|---|---|---|
| 六冊 | 金壹圓貳拾錢 | 金壹圓貳拾錢 |
| 十二冊 | 金貳圓貳拾五錢 | 金貳圓三拾五錢 |
| 以上郵稅共 | | |

## 送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割增の事

一、前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へられたし


明治四十年十二月廿八日印刷
明治四十一年一月一日發行
（禁轉載）

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

發行所（電話下谷九一九）　反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

市川町茅舎

牛尾

梅月
孤舟
孤村
眉峰
南甫